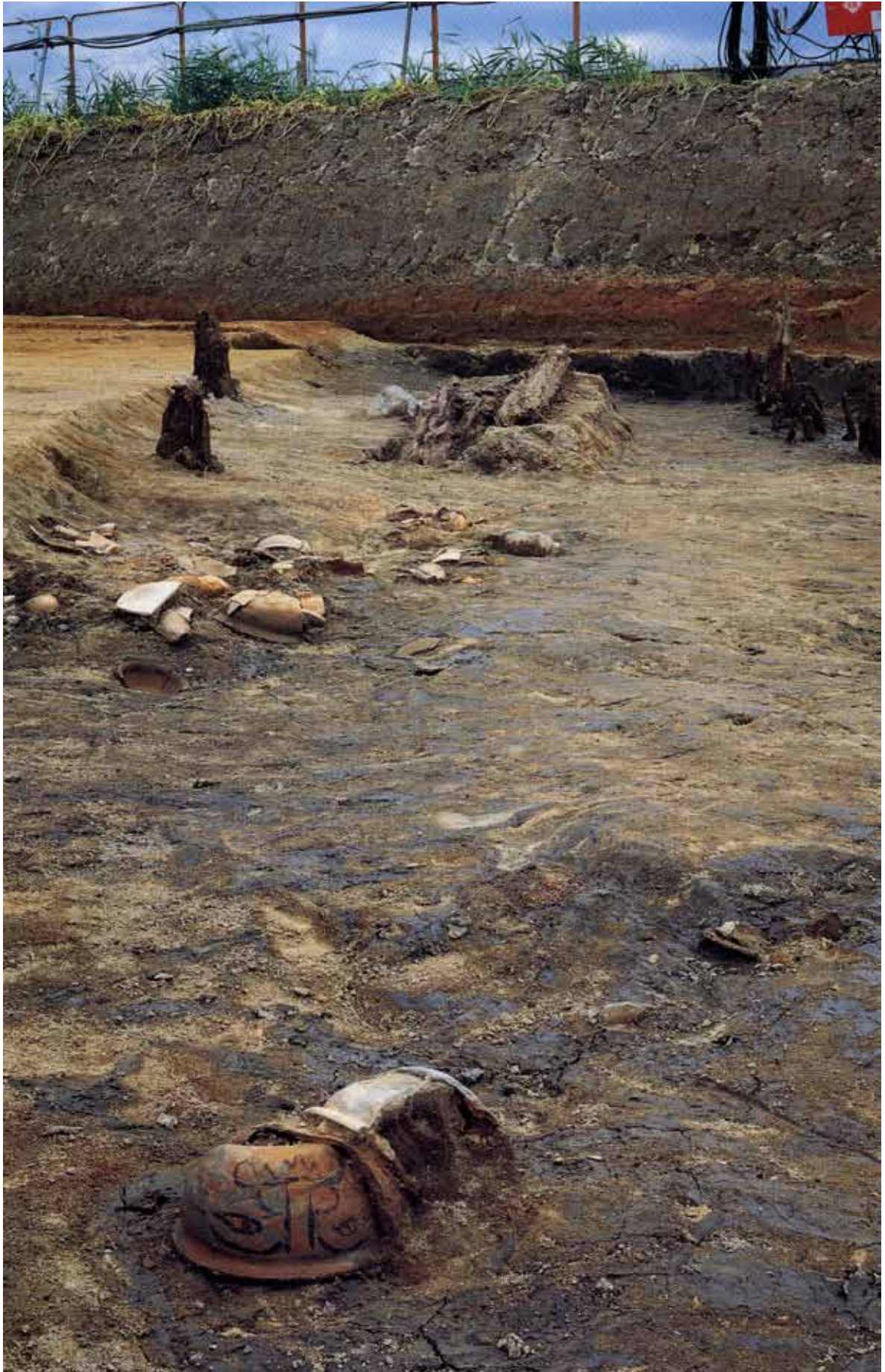


平成2年度

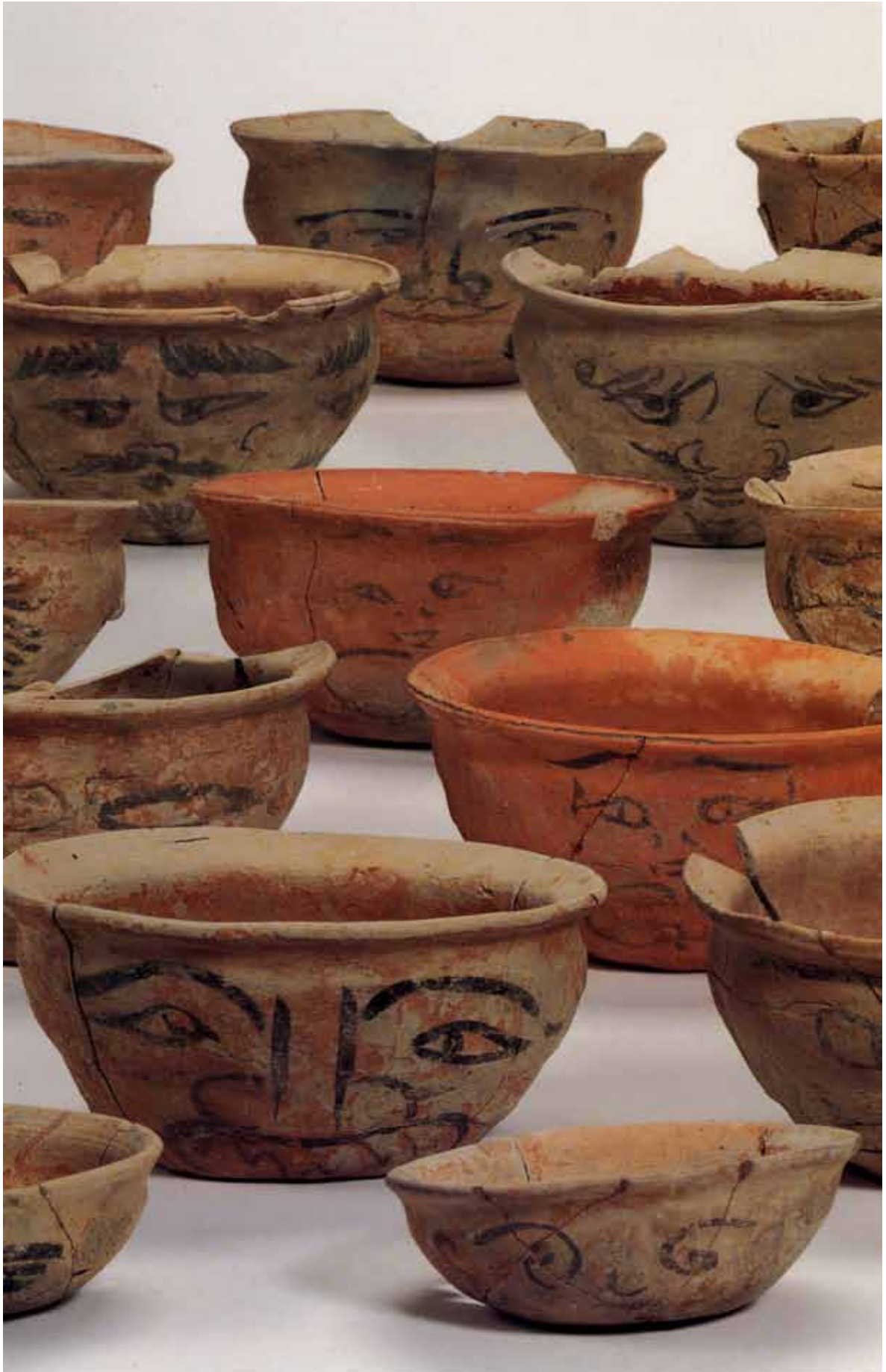
京都市埋蔵文化財調査概要

1994年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所



人面墨描土器出土状況（長岡京左京六条二・三坊・七条二・三坊・水垂遺跡G1区河川）



人面墨描土器（長岡京左京六条二・三坊・七条二・三坊・水垂遺跡G1区河川出土）

序

京都市内には平安京跡を始めとして、長岡京跡、六勝寺跡、鳥羽離宮跡など多くの重要な遺跡があります。京都は歴史都市として著名ですが、地上の文化財に比べて、地下の文化財が理解されるには、まだまだ調査しなければならないことが多く、その責務を日頃痛感しているところがあります。

当研究所は昭和51年発足以来、鋭意埋蔵文化財の調査、研究、普及啓発活動に努めてまいりました。本概要報告はその一環として定期的に発刊しているものでありまして、平成2年度に実施しました平安京跡、長岡京跡など41件の埋蔵文化財の調査事例の概要を報告しております。平安京跡関係では神泉苑に関連する遺構が発見され注目されました。長岡京跡では研究所発足以来最大の調査対象面積となり、長岡京の街路や祭祀遺跡、古墳時代の水田など貴重な発見が相次ぎました。また北白川廃寺の下層からは京都市内では初めて縄文時代早期の竪穴住居が発見されました。この竪穴住居は型取りをし、実物大のレプリカを京都市考古資料館で展示しております。この他にも調査によって得られた成果をわかりやすく、簡潔にまとめたつもりであります。

今後とも本概要報告が学術研究の資料として、また、埋蔵文化財への関心と理解を深める上で何がしかの役に立てば幸いと考えております。

おわりに、埋蔵文化財調査を依頼された原因者の方々、京都市をはじめ関係諸機関の方々に厚くお礼申し上げますと同時に、広く市民の方々にも、研究所の活動にご理解をいただけますようお願いいたします。

平成6年11月

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

所 長 川 上 貢

凡 例

- 1 本書は、財団法人京都市埋蔵文化財研究所が平成2年度に実施した、事業の年次報告である。発掘調査（第1章）、試掘・立会調査（第2章）、資料整理（第3章）、普及啓発事業等報告（第4章）とした。
- 2 調査継続のため昨年度に報告を終了したもの、次年度に報告するものについては表3・4に示した。
- 3 本書中に示した方位・座標値は、平面直角座標系Ⅵによった。ただし座標値は、単位（m）を省略している。座標は、京都市遺跡測量基準点と京都市水準点を使用した。
- 4 本書中の地図は、京都市長の承認を得て同市発行の都市計画基本図（縮尺：1/2,500）、都市計画図（縮尺：1/10,000）、市街図（縮尺：1/30,000）を複製して調整した。
- 5 長岡京の条坊呼称は、長岡京市教育委員会と向日市教育委員会の成果によった。
- 6 遺構表示のうち、表示記号で示したものは、奈良国立文化財研究所の用例に従った。
- 7 調査位置図の方位は、北を上配置し、縮尺は付記した。各調査位置図に示した黒塗り部分が、本年度実施した調査地点である。
- 8 図版1・2の調査地点番号のⅠは発掘調査、Ⅱは試掘・立会調査を表す。表3・4の番号を用いており各章の報告番号とは必ずしも一致しない。
- 9 平成2年度発掘調査のうち、文化庁国庫補助事業による調査は、平成2年4月から12月実施分は平成2年度の各発掘調査概報に、平成3年1月から3月実施分は平成3年度の各発掘調査概報に報告している。
- 10 本年度の調査ならびに本書の作成にあたっては、研究所全員の協力と参加があった。また本年度の調査のうち、平安京調査会の協力によって実施した調査については表3・4に記した。
- 11 写真は、遺物写真および一部を除く発掘調査の遺構写真は村井伸也・幸明綾子が、試掘・立会調査の写真とその他の写真は、各調査担当者が撮影した。
- 12 各報告は、文末に記した各調査担当者が執筆（連名の場合は初出の者が主として報告）した。
- 13 本書の作成にあたっては、編集と調整は資料課が行った。

目 次

第 1 章 発掘調査

I 平成 2 年度の発掘調査概要	1
II 平安宮・京跡	
1 平安宮朝堂院跡	3
2 平安宮中務省跡 1	5
3 平安宮中務省跡 2	6
4 平安宮西限跡 1	7
5 平安宮西限跡 2	8
6 平安京左京三条一～四坊	9
7 平安京左京四条四坊	19
8 平安京左京五条三坊	22
9 平安京左京五条四坊	26
10 平安京左京六条一坊	29
11 平安京左京六条三坊 1	32
12 平安京左京六条三坊 2	34
13 平安京左京六条三坊 3	36
14 平安京左京七条三坊	40
15 平安京左京八条三坊 1	43
16 平安京左京八条三坊 2	45
17 平安京左京九条二坊	48
18 平安京右京五条二坊 1	50
19 平安京右京五条二坊 2	53
20 平安京右京六条一坊	55
21 平安京右京六条三坊	57
22 平安京右京七条二坊	59
23 平安京右京九条一坊	61
III 鳥羽離宮跡	
24 鳥羽離宮跡第 136 次調査	63

IV 長岡京跡	
25 長岡京左京一条四坊	64
26 長岡京左京六条二・三坊・ 七条二・三坊・水垂遺跡	66
V その他の遺跡	
27 植物園北遺跡	71
28 特別史跡特別名勝 鹿苑寺庭園	74
29 北白川麩寺 1	75
30 北白川麩寺 2	76
31 南春日町遺跡 第 20・21 次調査	80
32 六波羅政庁跡	85
33 史跡醍醐寺境内	89

第 2 章 試掘・立会調査

I 平成 2 年度の試掘・ 立会調査概要	91
II 平安宮・京跡	
1 平安宮朝堂院・豊楽院跡	92
2 平安京左京六・七条二坊	93
3 平安京右京一条三・四坊	94
4 平安京右京三条一坊	97
III その他の遺跡	
5 京都大学構内遺跡	98
6 中臣遺跡第 70 - 3 次調査	99
7 長岡京左京南一条四坊・ 東土川遺跡	100
8 植物園北遺跡	102

第3章 資料整理

1 遺跡測量	103
2 コンピュータ	104
3 保存処理	105
4 復原	107

第4章 普及啓発事業等報告

1 普及啓発および 技術者養成事業	109
2 京都市考古資料館状況	111
3 役職員名簿	114

図 版 目 次

図版 1	調査地点位置図 1	平安京・白河街区・洛北・洛東地区調査位置図
図版 2	調査地点位置図 2	1 鳥羽離宮・中臣遺跡・伏見醍醐地区調査位置図 2 長岡京・南桂地区調査位置図
図版 3	平安宮朝堂院跡	1 全景（北西から） 2 全景（南から）
図版 4	平安京左京三条一～四坊	1 No.3 トレンチ全景（東から） 2 No.3 トレンチ瓦敷2・溝2（北東から）
図版 5	平安京左京三条一～四坊	1 No.5 トレンチ全景（東から） 2 No.5 トレンチ置板・流路（南西から）
図版 6	平安京左京三条一～四坊	1 No.19 トレンチ全景（西から） 2 No.19 トレンチ溝4（南西から）
図版 7	平安京左京四条四坊	1 平安時代全景（東から） 2 流路375（西から）
図版 8	平安京左京五条三坊	1 桃山時代から江戸時代前期全景（東から） 2 室町時代全景（東から）
図版 9	平安京左京五条三坊	1 最終面全景（東から） 2 S D 443（北西から）
図版 10	平安京左京五条三坊	1 S D 166（北東から） 2 S K 125（東から） 3 S K 154（東から） 4 S K 429（東から）
図版 11	平安京左京五条四坊	1 プラン3全景（北から） 2 プラン4全景（北から）
図版 12	平安京左京六条一坊	1 鎌倉時代全景（北から） 2 平安時代全景（北から）
図版 13	平安京左京六条三坊 1	1 全景（北から）

	2 土壙 124 土器出土状況（北西から）
図版 14 平安京左京六条三坊 2	1 平安時代全景（北から）
	2 平安時代六条坊門小路路面と北側溝（東から）
図版 15 平安京左京六条三坊 3	1 1区室町時代全景（東から）
	2 6区平安時代後期付け替え道路路面（北西から）
図版 16 平安京左京六条三坊 3	1 6区鎌倉時代付け替え道路路面（南から）
	2 3区平安時代後期六条坊門小路路面（北西から）
図版 17 平安京左京六条三坊 3	1 1区平安時代中期池 500（西から）
	2 1・6区平安時代中期池 500（北西から）
図版 18 平安京左京七条三坊	1 室町時代前期全景（北から）
	2 平安時代全景（北から）
図版 19 平安京左京八条三坊 1	1 平安時代全景（南から）
	2 七条大路南側溝（西から）
図版 20 平安京左京八条三坊 2	1 平安時代全景（南から）
	2 調査区南半全景（北東から）
図版 21 平安京左京九条二坊	1 1区全景（東から）
	2 2区全景（北から）
図版 22 平安京左京九条二坊	1 3区全景（東から）
	2 3区溝・柵列（東から）
図版 23 平安京右京五条二坊 1	1 全景（北から）
	2 S K 55（北西から）
図版 24 平安京右京五条二坊 2	1 平安時代全景（北東から）
	2 建物 1（西から）
図版 25 平安京右京六条一坊	1 全景（東から）
	2 S E 13（北から）
図版 26 平安京右京六条三坊	1 全景（西から）
	2 建物 1・2（北から）
図版 27 平安京右京七条二坊	1 全景（西から）
	2 井戸（北から）
図版 28 平安京右京九条一坊	1 2区全景（西から）
	2 S B 5（南東から）
図版 29 長岡京左京一条四坊	1 長岡京期全景（西から）
	2 流木出土状況（北東から）
図版 30 長岡京左京六条二・三坊・ 七条二・三坊・水垂遺跡	1 G 3区古墳時代全景（北から）

	2	G 3 区古墳時代の水田に残る足跡群（北から）
	3	G 2 区古墳時代の溝と堰（北西から）
図版 31 長岡京左京六条二・三坊・七条二・三坊・水垂遺跡	1	G 1 区长岡京期全景（北から）
	2	G 1 区河川にかかる橋の状況（南東から）
図版 32 長岡京左京六条二・三坊・七条二・三坊・水垂遺跡	1	1 トレンチ平安時代水田と畦（東から）
	2	2 トレンチ平安時代水田と畦（北から）
図版 33 植物園北遺跡	1	平安時代後期から鎌倉時代全景（北から）
	2	S B 20（西から）
図版 34 植物園北遺跡	1	古墳時代前期全景（北から）
	2	S B 13（北から）
図版 35 特別史跡特別名勝鹿苑寺庭園	1	W 2 区東半（北西から）
	2	W 4 区東半（西から）
図版 36 北白川廃寺 2	1	全景（北から）
	2	S A 10、S D 7・8（東から）
	3	S K 23（東から）
図版 37 北白川廃寺 2	1	縄文時代早期全景（北から）
	2	S B 61（北から）
図版 38 北白川廃寺 2		押型文土器
図版 39 南春日町遺跡第 20・21 次調査	1	第 20 次調査下西代 2 号墳全景（西から）
	2	石室（南東から）
	3	石室（北西から）
図版 40 南春日町遺跡第 20・21 次調査	1	第 21 次調査全景（北から）
	2	調査区南半全景（北西から）
図版 41 六波羅政庁跡	1	全景（北から）
	2	S E 211（東から）
図版 42 史跡醍醐寺境内	1	全景（北から）
	2	S D 1（北西から）
図版 43 平安宮朝堂院・豊楽院跡	1	3 区全景（北から）
	2	6 区全景（東から）
図版 44 平安京右京一条三・四坊	1	1・2 区全景（東から）
	2	4 区全景（東から）
図版 45 平安京右京一条三・四坊	1	1 区 S D 3・5（西から）
	2	2 区 S D 3・20（西から）

	3	4区SD4・5（西から）
	4	4区西側（東から）
図版 46 平安京右京三条一坊	1	5区全景（南から）
	2	7区全景（北から）
図版 47 中臣遺跡第70 - 3次調査・ 植物園北遺跡	1	中臣遺跡70次Ⅸ区全景（西から）
	2	植物園北遺跡全景（南西から）

表 目 次

表 1 各遺構出土土器群の形式（平安京右京五条二坊1）	51
2 平成2年度月別観覧者一覧表	113
3 平成2年度発掘調査一覧表	116
4 平成2年度試掘・立会調査一覧表	118

図 目 次

図 1 平安宮朝堂院跡	調査位置図	3
2 〃	SD 10 遺物出土状況	4
3 平安宮中務省跡 1	調査位置図	5
4 平安宮中務省跡 2	調査位置図	6
5 平安宮西限跡 1	調査位置図	7
6 平安宮西限跡 2	調査位置図	8
7 平安京左京三条一～四坊	調査位置図	9
8 〃	遺構平面図	11
9 〃	遺構平面図	12
10 〃	遺構平面図	14
11 〃	神泉苑跡出土瓦	16
12 〃	調査位置図	17
13 〃	遺構平面図	18
14 平安京左京四条四坊	調査位置図	19
15 〃	遺構平面図	20
16 〃	遺構平面図	21
17 平安京左京五条三坊	調査位置図	22
18 〃	遺構平面図	23

図19	〃	遺物実測図	24
20	〃	S E 167 出土元文小判拓影	25
21	平安京左京五条四坊	調査位置図	26
22	〃	遺構平面図	27
23	平安京左京五条四坊	土壌 31 出土一分金	28
24	〃	全景	28
25	平安京左京六条一坊	調査位置図	29
26	〃	遺構平面図	30
27	平安京左京六条三坊 1	調査位置図	32
28	〃	遺構平面図	33
29	平安京左京六条三坊 2	調査位置図	34
30	〃	遺構平面図	35
31	平安京左京六条三坊 3	調査位置図	36
32	〃	6 区断面図	36
33	〃	主要遺構の変遷概念図	38
34	平安京左京七条三坊	調査位置図	40
35	〃	甕 821・822 断面図	41
36	〃	遺構平面図	41
37	〃	遺物実測図	42
38	平安京左京八条三坊 1	調査位置図	43
39	〃	遺構平面図	43
40	〃	S D 300 出土土器実測図	44
41	平安京左京八条三坊 2	調査位置図	45
42	〃	断面図	45
43	〃	遺構実測図	46
44	平安京左京九条二坊	調査位置図	48
45	〃	遺構平面図	49
46	平安京右京五条二坊 1	調査位置図	50
47	〃	遺構実測図	51
48	〃	S K 55 出土遺物実測図	52
49	平安京右京五条二坊 2	調査位置図	53
50	〃	遺構平面図	54
51	平安京右京六条一坊	調査位置図	55
52	〃	遺構平面図	55
53	〃	S E 13 部材刻印	56

図54	平安京右京六条三坊	調査位置図	57
55	〃	遺構平面図	57
56	〃	調査区配置図	58
57	平安京右京七条二坊	調査位置図	59
58	平安京右京七条二坊	遺構平面図	60
59	平安京右京九条一坊	調査位置図	61
60	〃	遺構平面図	62
61	鳥羽離宮跡第136次調査	調査位置図	63
62	長岡京左京一条四坊	調査位置図	64
63	〃	遺構平面図	65
64	長岡京左京六条二・三坊・ 七条二・三坊・水垂遺跡	調査位置図	66
65	〃	調査区配置図	67
66	〃	古墳時代遺構配置図	68
67	〃	長岡京期遺構配置図	68
68	〃	平安時代遺構配置図	69
69	植物園北遺跡	調査位置図	71
70	〃	遺構平面図	72
71	〃	S B 9・13 出土土器実測図	73
72	特別史跡特別名勝鹿苑寺庭園	調査位置図	74
73	北白川廃寺1	調査位置図	75
74	北白川廃寺2	調査位置図	76
75	〃	遺構平面図	77
76	〃	S B 61 出土土器実測図	78
77	〃	出土土器実測図	78
78	〃	S K 23 出土灰釉陶器浄瓶	79
79	南春日町遺跡第20・21次調査	調査位置図	80
80	〃	墳丘測量図	80
81	〃	石室実測図	81
82	〃	石室出土須恵器実測図	82
83	〃	遺構平面図	83
84	六波羅政庁跡	調査位置図	85
85	〃	遺構実測図	86
86	〃	軒瓦実測図	87
87	史跡醍醐寺境内	調査位置図	89

図88	〃	遺構平面図	90
89	平成2年度の試掘・立会調査概要	ボーリング調査風景	91
90	〃	コア採取	91
91	平安宮朝堂院・豊楽院跡	調査位置図	92
92	〃	遺構平面図	92
93	〃	遺構実測図	92
94	平安京左京六・七条二坊	調査位置図	93
95	平安京右京一条三・四坊	調査位置図	94
96	〃	遺構平面図	95
97	〃	遺構実測図	96
98	平安京右京三条一坊	調査位置図	97
99	〃	遺構平面図	97
100	〃	断面図	97
101	京都大学構内遺跡	調査位置図	98
102	中臣遺跡第70 - 3次調査	調査位置図	99
103	長岡京左京南一条四坊・ 東土川遺跡	調査位置図	100
104	〃	断面図	100
105	〃	遺跡分布図	101
106	植物園北遺跡	調査位置図	102
107	保存処理	保存処理終了した木簡	106
108	〃	保存処理終了した削屑	106
109	復原	外枠を固定	107
110	〃	シリコン樹脂を流す	107
111	〃	シリコン樹脂を塗布	107
112	〃	ウレタン樹脂を柱穴に充填	108
113	〃	木組みを入れて充填	108
114	〃	樹脂型をはずす	108
115	〃	反転したシリコン樹脂型	108

第1章 発掘調査

I 平成2年度の発掘調査概要

本年度の発掘調査は33件と昨年度の50件から17件減少している。委託件数の減少を反映しているが、長岡京左京の調査(26)のように15,000㎡を越える大規模な発掘調査が加わったことも影響している。主な調査件数は平安宮・京跡関係23件、長岡京跡2件、北白川廃寺2件、南春日町遺跡1件、鳥羽離宮跡、植物園北遺跡、特別史跡特別名勝鹿苑寺庭園、六波羅政庁跡、史跡醍醐寺境内、各1件である。鳥羽離宮跡の調査件数は昨年度2件から1件に減少した。従前と比較して昨年度以来件数の減少が続いている。

平安宮・京跡 平安宮では、主として国庫補助事業による発掘調査として実施し、朝堂院跡(1)では東回廊と北回廊のコーナー部を検出した。中務省跡(2・3)では宮外の中御門大路の延長線上で道路と側溝が確認され(2)、中務省の敷地北半分を東西に区画する築垣を検出している(3)。また宮の西限を示す溝を2箇所(4・5)で確認した。これらの調査事例は宮を復原するうえで確実な定点を得たことになる。

平安京跡では左京域を12件、右京域を6件、発掘調査している。左京域でまず注目されるのは、地下鉄東西線建設に伴う発掘調査(6)である。神泉苑の園池の北縁部が検出され、クヌギの厚板を水平に固定した船着場の足がかりを検出している。また神泉苑の西限である壬生大路の築地もみつまっている。東京極大路の路面と東側溝が検出できたことも大きな成果であった。東京極大路が発掘調査によって確かめられたのはこれが初例である。

街路の調査で他に注目されたのは六条坊門小路の調査である。左京六条三坊2(12)の調査では路面および北側溝が確認され、左京六条三坊3(13)の調査では、小六条院の造営に伴い六条坊門小路が移動されたことが判明した。街路の変遷を知る好例と言える。その他、七条大路の路面や側溝が2箇所(15・16)で発見されている。

左京域では平安時代以降、江戸時代まで各時代の遺構、遺物が検出されるのが一般的であるが、本年度も変わりなく、各種の遺構、遺物が検出されている。ただ本年度は、平安時代以前の遺物の発見例が多いという特徴がある。左京域ではほとんどの調査で、自然流路や遺物包含層から平安京以前の遺物の検出をみており、左京五条三坊(8)の調査では弥生時代中期の集落の西を限る溝が発見されている。その他、遺物では元文小判や後藤家が統括した金座で铸造された一分金が発見され、京都での江戸時代の貨幣の流通を知る好資料となった。

右京域では平安時代前期・中期の建物、井戸、土壙などが検出されているが、比較的まとまって検出されたのが、右京六条三坊(21)の調査である。3期に分かれる建物群が発見され、2期の段階では1町を占有する邸宅が想定できた。右京六条一坊(20)の調査では既存施設のため攪乱され、遺構の残存は良くなかったが、既存施設の影響がない部分もかなりあり、今後の調査に

期待がもてる。

鳥羽離宮跡 研究所発足以来、鳥羽離宮跡の調査は毎年度継続して数件は実施してきたが本年度は1件となった。鳥羽離宮跡第136次調査(24)は、直接鳥羽離宮跡に結び付く遺構は検出されなかった。

長岡京跡 調査件数は2件ではあるが、その内1件は研究所発足以来最大の調査対象面積となった。試掘調査の結果を受け、本年度より本格的な発掘調査にとりかかったが、調査対象地が13万㎡あり、7ブロックに分けて七年間の計画を立て調査することとし、本年度はその一つであるGブロックから開始した。このブロックは長岡京左京六条二・三坊、七条二・三坊、水垂遺跡(26)にあたる。東二坊大路、六条大路をほぼ推定位置から検出したが、両大路とも東二坊大路は南側で、六条大路は東側で途絶えていた。注目されるのは東二坊大路と六条大路の交差点を横切る河川である。この河川には橋が架かり、水量調節のためのしがらみや護岸の杭が設けられていた。またこの河川からは、多量の人面墨描土器・土馬・人形などの祭祀遺物が出土し、長岡京の祭祀の実態を知る貴重な発掘調査となった。さらに6世紀後半以前の水田が検出されたことも乙訓の古墳時代を理解するための事例と言えよう。

その他の遺跡 上記の遺跡以外で発掘調査した件数は7件である。その他の遺跡としてここでは取り上げているが、重要な発掘事例となったものが多い。まず植物園北遺跡(27)では古墳時代前期の竪穴住居9棟を検出した。これらの住居から布留式土器の古相に位置づけられる一括性の高い土器群がまとまって出土している。特別史跡特別名勝鹿苑寺庭園(28)は昭和63年度からの継続の調査であり、今年度はピットや遺物包含層がみつき、遺跡が平安時代中期までさかのぼることが明らかになった。北白川廃寺は2件(29・30)調査しているが、伽藍配置を推定する上で有効な資料が得られると同時に、縄文時代早期の竪穴住居が発見されたことは注目に値する。京都市内では初めてのことで、全国的にみても例は少ない。南春日町遺跡第20・21次調査(31)では、両袖式の横穴式石室内に小石室がある円墳を検出した。下西代古墳群2号墳である。石室玄室内に小石室が敷設されており、特殊な古墳時代後期の古墳である。第21次調査では大原野神社の社家跡と推定できる集落跡を検出している。六波羅政庁跡(32)では、各時代の遺物と遺構があり、直接六波羅政庁と関係ある遺構と断定できるものはないが、政庁と同時代の遺物と遺構が発見されており、政庁と関連する遺構がこの中に含まれている可能性がある。史跡醍醐寺境内(33)では円筒埴輪1点が出土している。未確認の古墳がこの付近にある可能性があり、今後埴輪を伴う古墳が発見されることも想定される。今年度は、その他の遺跡として扱った発掘調査に、従来みられなかった重要で示唆的な発掘例が多いのが特徴になっている。

(永田信一)

II 平安宮・京跡

1 平安宮朝堂院跡 (図版1・3)

経過 千本通から丸太町を東に入った南側の、上京区丸太町通土屋町西入中務町で試掘調査を経て発掘調査を行った。調査で平安時代前期の朝堂院東回廊・北回廊に関する雨落溝を検出し、朝堂院回廊の東北隅を確定することができた。

遺構 奈良時代の遺構は北で東に約27度傾く溝を1条検出した。平安時代は前期の朝堂院東回廊・北回廊の雨落溝、溝状遺構、土壌を検出した。東回廊雨落溝(SD10)は幅約2.0mの

溝で、コーナー部の南肩から約1.0m北で検出し、出入りがある。東回廊雨落溝は3期の変遷をたどることができ、最終段階の第3期東溝には多量の瓦が投棄され、一部焼損したものも含まれていた。

遺物 古墳時代後期の須恵器、奈良時代前期の須恵器・土師器、平安時代前期から中期の土師器・黒色土器・須恵器・緑釉陶器・灰釉陶器、輸入陶磁器、近世の土師器・国産陶磁器などが出土した。大半が近世の土器で平安時代・古墳時代・奈良時代は少量である。瓦類はSD10から平安時代初期の瓦が多量に出土した。その他の遺構出土分を加えると、軒丸瓦・軒平瓦、丸・平瓦、鬼瓦、甎などがあり、大半は無釉であるが軒丸瓦と丸瓦の一部に緑釉瓦がある。瓦当は平安時代初期のものが大半で、平安時代中期のものが数点、室町時代の軒平瓦が1点ある。

小結 朝堂院の東回廊と北回廊のコーナー部の遺構を検出したが、延石・地覆石など回廊の基壇は検出できず、調査地点がかなり削平を受けていることが分かった。

朝堂院東回廊は、ガス立会調査の成果などから基壇規模が11.6m前後に復原でき、大極殿院北回廊と同一規模になる。したがって、平城宮・長岡宮と異なって、平安宮の大極殿・朝堂院の外郭施設は、いずれも回廊であることが判明し、その規模は平城宮の内裏内郭回廊に近い。

文献では朝堂院北部から大極殿にかけての火災は3回確認できる。①貞観18年(876)4月10日『日本三代実録』、②天喜6年(1058)2月26日『扶桑略記』、③安元3年(1177)4月28日『方丈記』。貞観18年の火災は、『日本三代実録』によると「子時。大極殿火。延焼小安殿。蒼龍白虎両楼。延休堂及北門北東西三面廊百余間。火数日不滅 内裏并中和院。大極殿。東西楼。回廊。朝集堂等皆悉焼亡」とあり、焼亡の範囲がわかる。

SD10の出土土器や瓦の製作年代、出土状態からみて火災に関係した遺物を貞観18年4月10日の火災にあてることができ、第3期の瓦を中心とした遺物は火災後の整理に伴うものであ

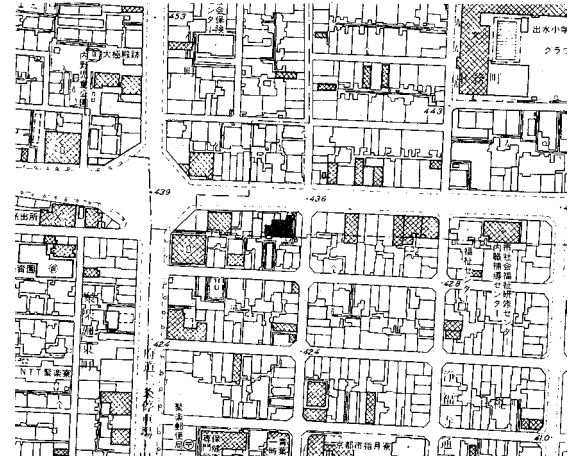


図1 調査位置図 (1:5,000)

る。また、焼失した瓦が概略1%以下であること、完形に近い瓦当・丸・平瓦の多いことなどから、蒼龍楼までは焼失したが、調査地点までは火災が及ばず、朝堂院回廊の復旧時に調査地点の未焼失の部分を含めて復旧のために取り壊し、整理したと考えられる。

また、S D 10の第3期の瓦に平安時代初頭の瓦類しか含まれていないのは、調査地点が朝堂院の龍尾壇の北部にあたり、基壇が高く溝も深かったものが後世の削平で、平安時代前期の瓦だけが残ったと推定できる。調査地内の近世の遺構からは平安時代中期以降の瓦が出土し、これを裏付ける。

S D 10(東溝)出土の第3期の瓦は、胎土・調整による分類を行い、その量的関係をつかむため重量を測った。瓦の胎土は3群に分かれ、A.胎土中に石英・長石・金雲母などを均質に多く含み色調は茶褐色である。B.胎土中に長石・金雲母など砂粒を少量含む。色調は灰色である。C.胎土中に大粒の砂粒を含むが、胎土は粘質である。色調はBと同じ灰色である。A群は吉志部瓦窯の瓦。C群は西賀茂瓦窯跡群の瓦。B群は両窯の製品を含むと考えられる。S D 10東溝出土の瓦は、軒丸瓦26.3kg、軒平瓦10.7kg、丸瓦144.1kg、平瓦194.0kgの合計375.1kgであった。丸瓦の分類別重量比はA.42%、B.35%、C.23%、平瓦はA.33%、B.49%、C.17%で吉志部窯と西賀茂窯の重量比は、丸瓦42:23、平瓦は33:17になり、不明分を双方に振り分けでも吉志部窯産が過半数を越える。同様のことは軒瓦にもみられ、S D 10からは軒丸・軒平瓦が合計28点出土し、この内26点は吉志部瓦窯である。同様のことは北70m地点で検出した大極殿院東回廊註に係した瓦当にも共通し、朝堂院の北東部回廊から大極殿院東回廊の瓦が吉志部窯の瓦を中心に、西賀茂瓦窯の瓦を加えて葺かれたことがわかる。(百瀬正恒)

『京都市内遺跡試掘立会調査概報』平成2年度 1991年報告

註 家崎孝治「平安宮大極殿院跡(HQ12)」『京都市内遺跡試掘立会調査概報』

昭和63年度 京都市文化観光局 1989



図2 S D 10 遺物出土状況

2 平安宮中務省跡1 (図版1)

経過 当地に住宅兼事務所が建築される事になり、試掘調査を実施したところ、平安時代前期の遺物が出土したため発掘調査に移行した。調査地は平安宮中務省北限築地が推定される所にあたり、中務省についての調査は、南側の丸太町通に面したところで多数実施され、多大な成果を上げている。調査区は築地が検出できると推定した敷地の南寄りに設定した。調査は近現代層を重機によって除去した後に遺構の検出を開始した。

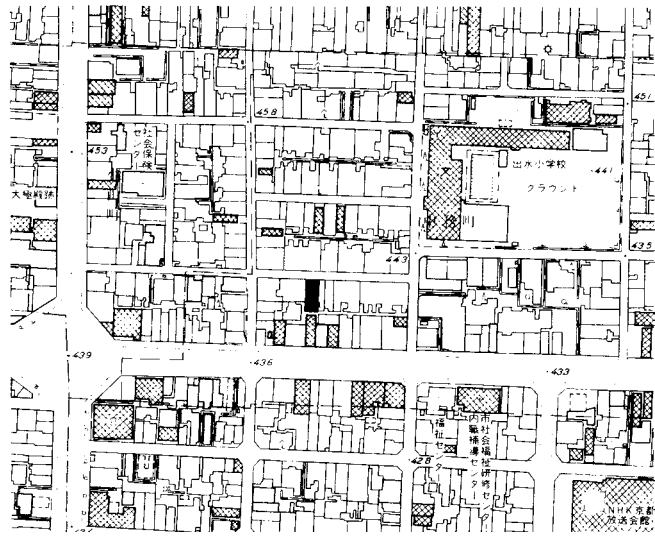


図3 調査位置図 (1:5,000)

遺構 検出した遺構には、古墳時代後期・平安時代前期・江戸時代後期の各時期がある。平安時代と江戸時代の遺構を第1遺構面、古墳時代の遺構を第2遺構面で検出した。古墳時代の遺構は木の根跡、江戸時代は素掘井戸である。

平安時代前期の溝は、調査区南端で検出し東西方向である。幅2m、深さ0.8mを測り、底部は南半が深く北に段が付き浅くなる。上層には瓦が多く、下層は黒褐色砂泥層で土器の出土がみられた。溝内の堆積は北側から埋まった状況を示している。溝の北側の道路敷きは調査区の北側に礫と砂が多く敷かれ、硬い路面をなしている。側溝の南側に中務省北限築地を想定していたが、後世の削平によって消滅したと思われる、築地本体の痕跡は認められなかった。

遺物 遺物は整理箱で31箱、古墳時代後期から江戸時代後期まで及ぶ。平安時代の瓦類・土器類が主で、古墳時代と江戸時代の土器が少量みられる。

平安時代の瓦は調査区の各遺構から出土しているが、ほとんどの軒丸瓦は江戸時代後期の井戸に放り込まれた状態で出土している。軒平瓦は1点もない。平城宮式の単弁軒丸瓦や一本造りの複弁四弁軒丸瓦、外区に唐草文のめぐる単弁八弁蓮華文軒丸瓦、讃岐系の軒丸瓦などがある。

平安時代前期の土器には土師器と須恵器がみられ、土師器には皿・杯・蓋がある。皿はいずれも外面をヘラケズリによって調整。杯は高台の付かない杯Aと高台の付く杯Bがあり、杯Aは外面ヘラケズリで調整、杯Bはヘラミガキを施す。須恵器は高台の付かない杯Aがある。

小結 今調査では中務省北限の築地は明確でなかったが、道路と側溝を検出でき、重要な成果を得ることができた。中務省北限築地はこれまで中御門大路の南築地心の延長線上に推定されてきたが、今回の調査でそれを実証することができた。道路と側溝は宮外の中御門大路の延長上にあたるため、中御門大路から平安宮待賢門に入って、大極殿まで通じる道路と考えることができる。この道路は初めての検出例である。

(前田義明)

3 平安宮中務省跡 2 (図版1)

経過 当調査地は、中務省敷地内の北辺中央からやや西寄りの部分に該当する。調査地の周辺では、いままでの調査で平安時代の建物や築地などが良好に検出されており、中務省の被官に関係する遺構と推定している。工事に先だつてまず試掘調査が実施された結果、平安時代の遺構が良好に遺存していることが判明したため、発掘調査を行うこととなった。

遺構 調査区の基本層序は、盛土が0.1～0.2mと浅く、盛土下はすぐ平安時代の遺構面となる。

検出した遺構は、版築基壇を持つ南北方向の築垣とそれに伴う側溝、礫敷通路、暗渠状遺構などである。築垣(SA1)は、少なくとも新旧2時期(a・b)に分けられる。SA1aは下層に部分的に残った掘立柱から推定できる古い段階の築垣である。SA1bは、基壇に伴う新しい段階の築垣である。柱跡の残りはあまりよくないが、柱間は2.55m(8.5尺)等間と推定できる。基壇は幅約1.8mで当時の生活面から約0.2mの高さを持つ。基壇の西側には幅1.6mと推定できる側溝(SD4)が走り、東側では礫敷通路(SF5)とその北と南に東側溝(SD2・3)を検出している。また、基壇内では瓦を並べた暗渠状の遺構(SX6)を検出している。遺構の重複状況から2時期に分けられる。上層遺構は基壇上面の直下で検出したもので、平瓦3枚と丸瓦1枚を、凸面を上にしてやや蛇行させながら並べている。下層遺構は丸瓦・平瓦・軒平瓦・甃で構築されている。まず、東側溝北溝(SD2)から築垣基壇に沿って丸瓦による導水管を設ける。この部分は礫敷通路(SF5)を横断しており、丸瓦の上に平瓦を被せて固定し、埋め戻した後から礫を敷いている。この導水管は、基壇内で凸面を上にして並べた軒平瓦に連続し二股に分かれる。東へは軒平瓦を1枚並べて東側溝南溝(SD3)に繋げ、西へは甃1枚を挟んで軒平瓦4枚を重ねて並べているが、直接に西側溝(SD4)には繋がっていない。東側溝北溝(SD2)の上澄みの水だけが導水管に入り、基壇内で湿気を抜くように処理されたものと考えられる。この他、基壇下層で平安時代以前の掘立柱建物などを検出している。

遺物 遺物は整理箱にして154箱で、そのほとんどが両側溝から出土した瓦類である。各遺構から少量ながら土器片も出土しており、遺構の年代を決定するのに有効な資料となっている。

小結 今回の調査で検出した南北方向の築垣は、中務省の敷地北半分を東西に区画する施設である。宮城古図などに描かれた中務省の占地では、正庁域から北門へ小径が延び、小径の東西に中務省の被官が配されている。築垣の東は被官の敷地内で、礫敷通路は小径から敷地に入る通路であったと考えられる。

(網 伸也)

『平安京跡発掘調査概報』平成2年度 1991年報告

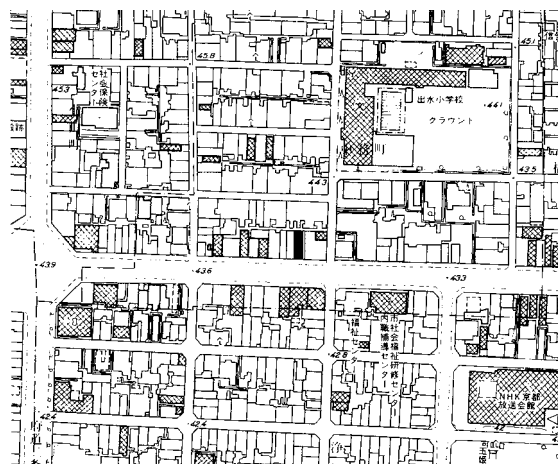


図4 調査位置図(1:5,000)

4 平安宮西限跡1 (図版1)

経過 当該地に鉄骨住宅が建設されることになり事前に試掘調査が行われ、現地表下20cmで平安時代に属する遺構・遺物が検出されたことから発掘調査を実施する運びとなった。調査区は、西大宮大路東築地(宮西限垣)心の想定南北線を含むように設定した。

調査の結果、溝(隍)群と築地想定線付近では溝状遺構を検出した。

なお、調査地点に南接する箇所では昭和60年(1985)に発掘調査が実施されており、平安時代前期から後期にいたる西大宮大路東側溝(宮西限の隍)の変遷が明らかにされている。

遺構 調査区内の基本的な層序は、江戸時代以降現代までの整地層を合わせて厚さ11～23cmあり、整地層下は無遺物層(黒色砂泥層・礫含む)となる。調査区内の現況は、中央から東側にかけて大規模な攪乱が多くなる傾向にあり、東端部は相当削平を受けている。

溝(隍)は4条検出したが、重複状況や出土遺物から溝65→溝62と変遷することが判明した。また、溝の深さも同様に溝65→溝62へと深くなる傾向にある。溝状遺構は2条以上検出した。いずれも溝底は浅く平坦である。平安時代中期(10世紀前半から11世紀)の土器類のほか、完形に近い軒平瓦などが出土した。柱穴は溝状遺構上面で5基検出した。

遺物 各遺構から出土した土器類はいずれも小破片が大半で、復原できるものは少ない。平安時代前期から中期の遺物には、土師器・須恵器・黒色土器・緑釉陶器・灰釉陶器・白色土器・輸入陶磁器・瓦などがあり、中には須恵器円面硯、黒色土器風字硯、輸入陶磁器では越州窯青磁・長沙窯黄釉褐彩水注、墨書土器などがある。室町時代後期から江戸時代の遺物には土師器・陶器・染付・瓦・銭貨などがある。

平安時代の瓦類には、丸・平瓦のほか、軒丸・軒平瓦、刻印瓦、ヘラ記号瓦などがある。

小結 以上、今回の調査概要を述べてきたが、ほぼ前回調査と同様の成果を得る事ができた。西大宮大路東築地(宮西限大垣)心想事成線は調査区中央で $Y=-23,815.40$ mを通る。延喜式では、その地点から西へ3尺5寸で垣西端、以西が墺地で2丈6尺5寸、隍は8尺と記されており、それに従えば隍の中心線はほぼ $Y=-29,825.60$ mとなり、今回検出した最も新しい溝62内を通ることになる。平安時代前期に属する溝は検出していないものの、溝は想定位置から順次墺地空間内へ位置をずらしながら構築され、平安時代後期に再度延喜式記載の規定位置に戻されたと想定できる。なお、西大宮大路東築地の想定位置の遺構面は調査区内では最も高い標高を示しているが築地痕跡は検出していない。

(辻 裕司)

『平安京跡発掘調査概報』平成2年度 1991年報告

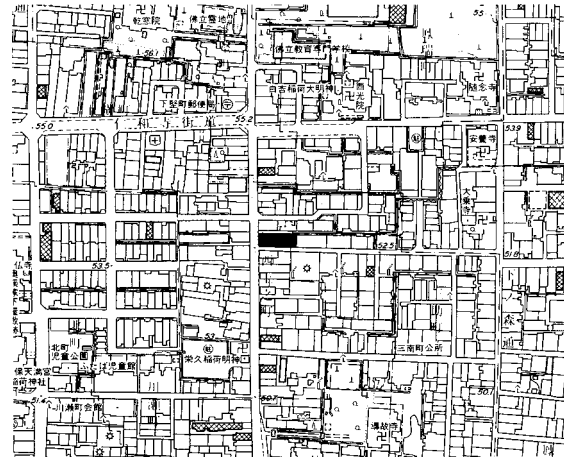


図5 調査位置図(1:5,000)

5 平安宮西限跡 2 (図版1)

経過 当該地に鉄骨住宅が建設されることになり、事前に試掘調査が行われた。その結果、調査対象地の東半は既存の工場基礎のため大半が攪乱を受けていたが、西半は現地地表下 20cm で平安時代の遺構が良好な状態で遺存していることが判明し、改めて発掘調査を実施することとなった。調査地点に北接する箇所ではこれまでに昭和 60 年 (1985) と平成 2 年 (1990) (平安宮西限跡 1) の 2 例の発掘調査が実施され、宮西限の調査は当該地付近では今回で 3 例目となる。

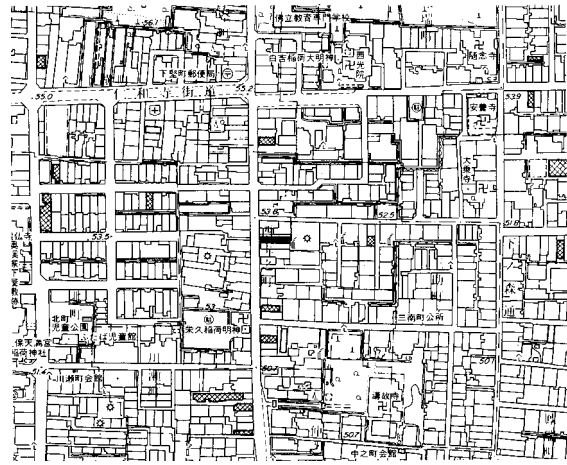


図6 調査位置図 (1:5,000)

調査区は調査対象地のうち攪乱の激しい東半を避け西半に設定した。調査区の範囲は西大宮大路東築地 (宮西限大垣) の堀地・隍に該当する。調査の結果、溝 (隍) 群・柱穴・土壌などを検出した。

遺構 調査区内の基本層序は北接する調査例とほぼ同様であり、現地地表下 20 ~ 32cm で無遺物層の黒色砂泥層となる。検出した遺構には、平安時代の溝 (隍) 5 条・土壌 1 基・柱穴 2 基、江戸時代の土壌がある。

平安時代の溝 (隍) は北接する調査例とほぼ同様の位置にあるが、東端に位置する 1 条の溝 (隍) だけは溝心々で約 1.0 m 西大宮大路側へ張り出すことが判明している。土壌は土取穴の可能性があり、柱穴からは遺物が出土せず時代は不明であるが、形状からここに示した。

江戸時代の土壌のうち、平面形が円形ないしそれに類するものでは土師器皿が数枚出土するもの、多量の灰や微細な骨片が出土するものがあり、墓塚の可能性もある。

遺物 遺物は整理箱で 25 箱、大半が平安時代の瓦である。土器類は土師器・須恵器・黒色土器・灰釉陶器・白色土器・輸入陶磁器があり、中には黒色土器の風字硯、「大道」・「上天」などの墨書土器がある。瓦類では、丸・平瓦、軒丸・軒平瓦、ヘラ記号瓦などがある。

小結 今回の調査を含め近接した箇所で 3 件の発掘調査を実施し、平安宮西限の状況をより補強できたが、各調査地点により瓦の出土傾向に顕著な差異がみられることや、遺構では溝が南北方向へ連続しないものもあるなどの課題もあり、さらなる周辺の調査が待たれる。

江戸時代以降、当該地周辺には各所から寺院が移転、大規模な開発が進められるようになり、大規模な土取りによって遺構が削平を受けるが、今回の調査地点を含む御前通沿いの一連の地区では、遺構の遺存状態はいずれも良好であることが明らかになっている。

なお、『平安京跡発掘調査概報』に図示した主要遺構配置図内の西大宮大路東築地心の位置が約 5.5 m 東にずれて復原してあり、この場を借りて訂正したい。 (辻 裕司)

『平安京跡発掘調査概報』平成 2 年度 1991 年報告

6 平安京左京三条一～四坊（図版1・4～6）

地下鉄東西線建設に伴う平安京跡関係の発掘調査は、昭和63年度中の1989年1月から開始している。今年で3年度目に入り、第4次調査となる。地下鉄東西線の一期工事分の予定路線部は西端のJR二条駅から東へ延び山科へ至る。平安京に関連する調査の対象範囲は鴨川西岸以西で、今年度の調査は、烏丸通から鴨川間の御池通東ブロックと、二条駅構内、千本通から堀川通間の押小路通の西ブロックに分かれる。

以下、西ブロックと東ブロックに分けて調査成果の概括を記述する。

西ブロックの調査

経過 堀川通押小路以西の西ブロックは、今年度から調査を開始した地域で、平安京左京三条一坊一・八・九・十五町、同二坊二・七町にまたがる。また、朱雀大路、坊城小路、壬生大路、大宮大路、猪熊小路などの平安京の南北街路と交差する。平安宮の前面で朱雀大路の東側に位置する左京三条一・二坊は、平安宮内と同様な、諸官司やその関連施設、高級貴族の邸宅が建ち並ぶ地域の一角を占める。一坊七・八町には大学寮、一坊九～十六町の8町は禁苑である神泉苑、二坊一・二町は木工町である。また両坊には西三条殿、御子左、堀川院、閑院などの、1～2町規模の大邸宅が林立している。当地域における既発掘調査は少なく、特に神泉苑の本格的な調査は、今回が初例となる。小池を含む苑の一部は、押小路通と御池通間の大宮通西側（中京区御池通神泉苑東入）に遺存して、往時の名残をとどめており、現在は国の史跡指定地となっている。

また二条城は、旧二条離宮として外濠外周の道路部分を含む範囲が国の史跡指定地となっている。美福通から堀川通間の押小路通はこの史跡の南辺に入る。

西ブロックでは、重要な対象遺跡である神泉苑が池を伴うため、発掘調査の掘削深度が表土下3mをこえることが予想され、対象地の際を二条城の外濠が走るため調査区内の湧水や掘削壁の倒壊などが考えられた。このため、水対策が発掘調査の必要条件との判断から、先行して本工事と共有するかたちの土留め壁を構築する杭打ち工事が行われた。この杭打ち工事に伴う布掘り掘削とその関連工事の掘削へ立会調査を実施することから開始している。JR二条駅構内の対象地の調査に関しては、試掘調査の位置付けでトレンチ調査を実施した。

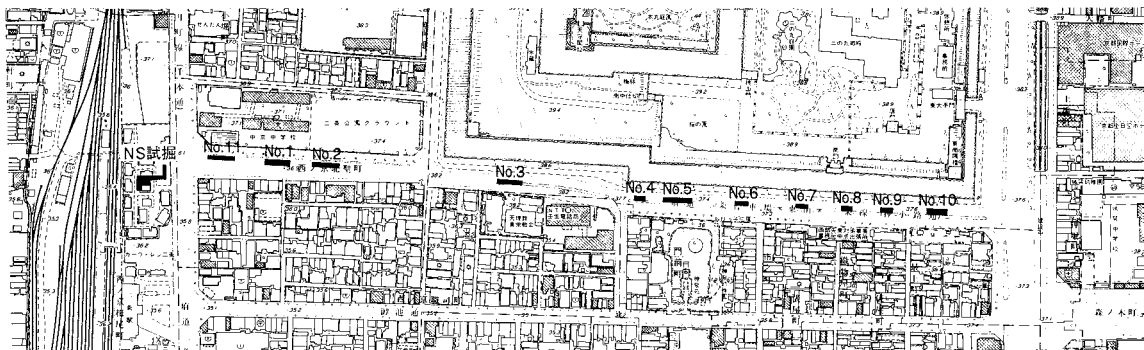


図7 調査位置図（西ブロック 1:7,500）

遺構・遺物 立会調査では、原地形とその上に堆積した遺物包含層の状況と遺構の遺存状態の概要を把握することができた。

原地形は、東西方向では大宮通付近で変化する。地山上面は、猪熊通付近が最も高く現地地表下50cm前後である。この付近を境に以西が、全体に低くなる。以東との比高差は、1.5～2.0 m程度とみられるが、西方の壬生大路推定地付近では、地山面は逆に東方に下るとみられる。このため大宮通と壬生大路推定地間は、大宮通付近以西の低みのなかでも、更に低い凹地形を呈している。この凹地形の底部は、工事掘削深度では確認できなかった。

原地形の比較的高い大宮通以東の堆積層は比較的薄く、平安時代から中世に比定できる土層や遺構を確認している。大宮通以西では、遺物包含層が厚く、二条城築造時に地形の低い部分を埋めた埋土か、二条城の濠外周の築堤土（積土）ともみられよう。この土層の厚さは、1 mをこえる地区もあり、下面を未確認の地区もある。

二条城の南辺では、全域でアスファルト道路基礎の碎石層直下で、近世から近代の押小路通の道路敷を数枚確認している。最も古い段階の路面は、二条城築造時の築堤土の上面に形成されている。なお、美福通以西の積土とみられる比較的厚い土層は近代層で、近世の路面も美福通以西へは延びていない。

トレンチ調査は、史跡旧二条離宮内では、押小路通道路上に8箇所の調査区（西からNo.3～10）を設定し、発掘調査を実施した。調査の結果、江戸時代の二条城関連の遺構や平安時代の神泉苑園池などの遺構を検出することができた。

二条城に関連する遺構は、No.3～10の各調査区で、押小路通の江戸時代から近代にわたる数枚の路面を検出し、加えてNo.7～10では、押小路通北側溝、またNo.8～10では、押小路通北側を走る柵列の柱穴列を検出している。押小路通と柵列は、二条城の外濠南肩ラインに平行して設定され、最下層の路面や1枚上層の路面には、化粧のためとみられる白砂が薄く敷かれている。これら江戸時代の押小路通や柵列などの遺存状態は良好であり、路面や側溝の検出状況や攪乱層がほとんどないことから、江戸時代を通じて管理された地区であったことがうかがえる。

江戸時代の押小路通路面より下層の遺構は、大宮通付近を境として異なる。No.3～6が以西に位置し、No.7～10が以東に位置する。平安時代の遺構面は、No.3～6では主に砂礫層、No.7～10では黄褐色系の色調を呈する泥砂層（いわゆる聚楽土）によって形成されている。両者とも、自然堆積層である地山を基本とした遺構面である。大宮通をはさみ隣接するNo.6とNo.7間で1 m強の比高差があり、東側のNo.7側が高い。東側で最も高いNo.9と西側で最も低いNo.5では、比高差1.5 m程を測る。西方への傾斜は、No.7の西側で急となる。

最も西に位置するNo.3では、壬生大路の路面東辺、東側溝、築地などを検出した。その築地ラインより東側部分の神泉苑敷地内では、築地に沿い苑内西端辺を走る排水を目的とした溝とその東側で瓦敷き列、庭苑を構成するとみられる石群遺構などを検出した。

No.5では、同遺構面において園池の北縁部分と縁部に沿って設置されたクヌギ材の厚板、池へ流れ込む流路などを検出した。厚板は自然木の上面を平坦にし、下に別の木をかませ上面を水平

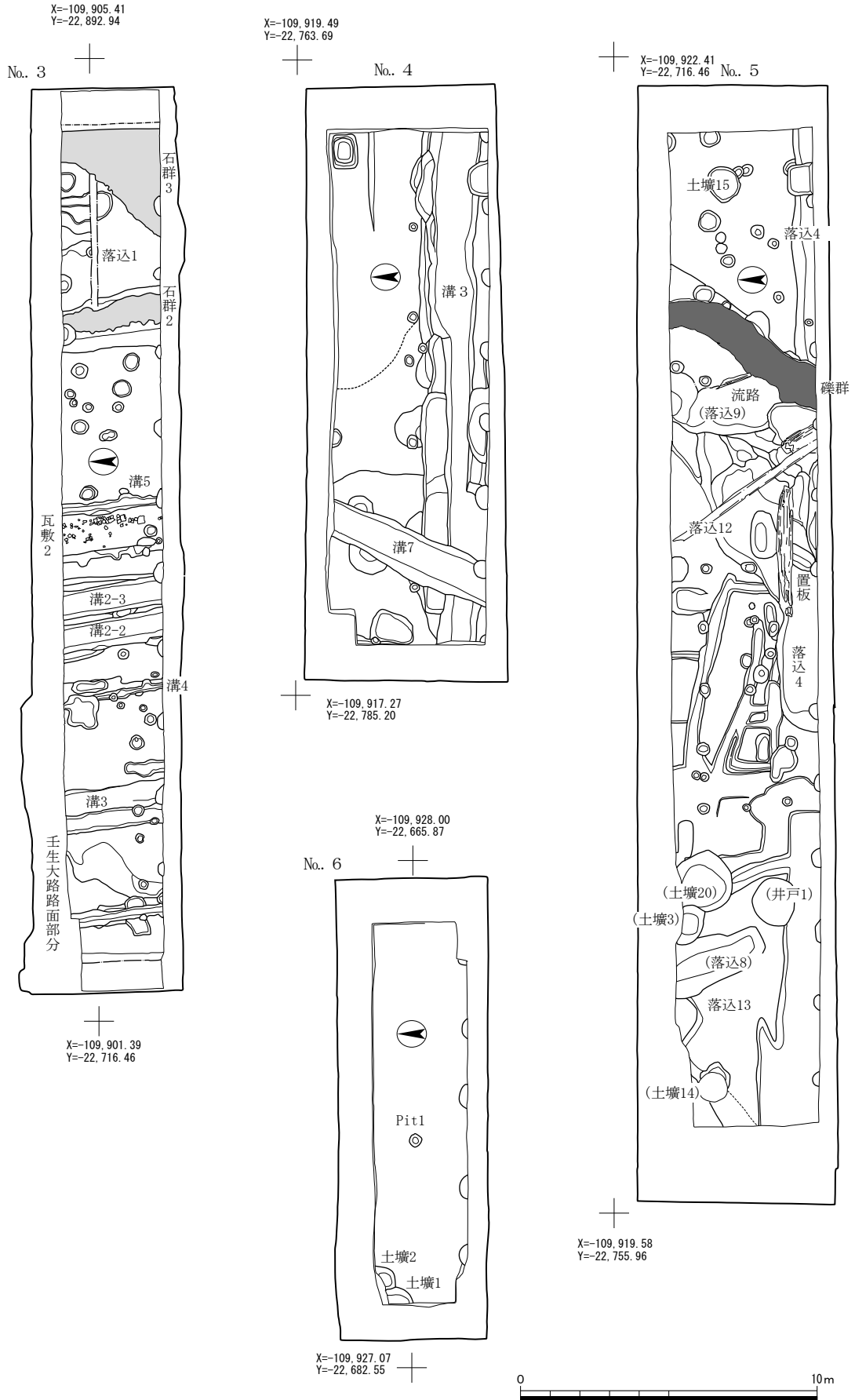


図8 遺構平面図 (No. 3~6) (1:200)

にして設置され、船着場での足がかりとみている。流路は幅4 m、深さ0.6 mを測る規模で、池に入る河口部では大きな流木などが埋没していた。この河口部西側から流路西肩部は礫を含む

泥砂土で造りなおされており、古い段階では西側へ広がった状態で池へ流れ込んでいた。また流路底部の中央近くには、橋脚とみられる径0.4 m前後、深さ0.3 m程の心々間1.05 mを測る2基の柱穴を検出しており、小規模な橋とみられる。この流路の東側4 mの位置で、根石とみられる拳大の礫が残る土壌を一基検出している。

No. 4・6ではNo. 5の陸部に連続する遺構面を検出しているが、明確な遺構は検出できなかった。No. 3～6で検出した平安時代の遺構面は、攪乱を受けずに桃山時代まで遺存する。

No. 4・5において、中世の遺構を検出しているが性格は明らかでない。

桃山時代に入ると厚さ10数cm程度の整地層とみられる土層が各トレンチで確認できる。その上面に、桃山時代から江戸時代初頭の町屋跡とみられる遺構群が点在する。この遺構面の上に、No. 7以

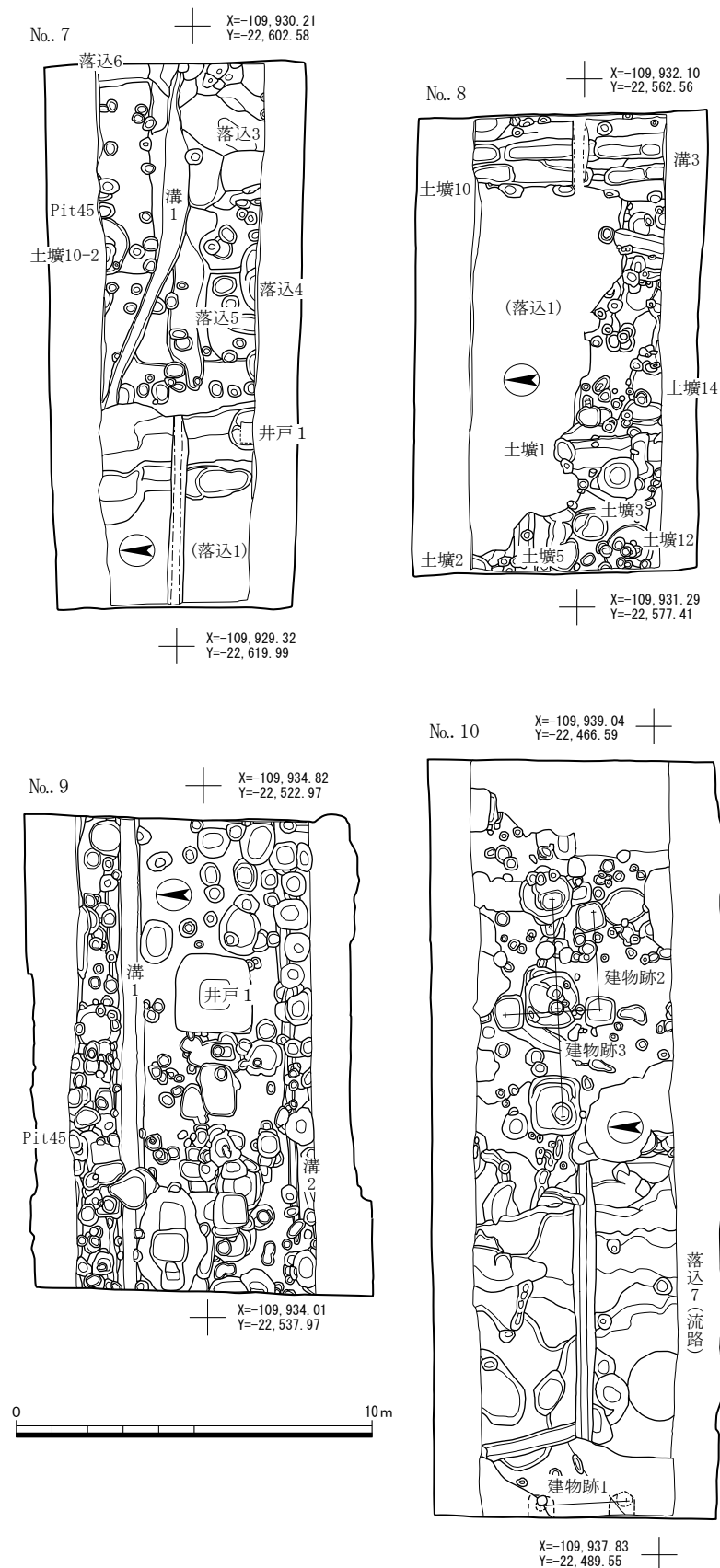


図9 遺構平面図 (No. 7～10) (1:200)

東との比高差を埋めるように積土が行われ、江戸時代の押小路通がその積土層の上面に形成される。

大宮通以東のNo.7～10では、柱穴を含むピット群や、土壙、井戸、落込など、平安時代から桃山時代の各種の遺構を多数検出した。粗密の変遷はみとめられるが、各時代に宅地として利用されていたものとみられる。

出土遺物も遺構同様に、大宮通付近を境に異なった様相を示す。以西のNo.3～6では、平安時代から室町時代の出土遺物は、混入して出土したものを含めても緑釉瓦を中心とした平安時代の瓦類が多い。土器、陶磁器などで、平安時代に比定できるものは混入品を含めても少なく、鎌倉時代から室町時代のものほとんど出土していない。土器、陶磁器類がまとまって出土するのは、桃山時代から江戸時代初頭の一時期に限られる。江戸時代以降は、道路化するため出土遺物も少量である。以東のNo.7～10からは、平安時代の瓦類も多く出土するが、平安時代から江戸時代初頭の各時代の椀、皿、鉢、甕、壺、鍋、釜など、日常雑器が数多く出土する。まとまった良好な資料も含まれる。

美福通と千本通間では西からNo.11・1・2の調査を実施し、JR二条駅構内ではNSと略号を付して鍵形のトレンチを設定して試掘調査を行い、試掘調査終了段階で調査区西辺部を拡張し追跡調査を行っている。その他、発掘調査の前後で行われた工事掘削の立会調査も実施している。

NS試掘と、No.11は朱雀大路諸施設を主な調査対象とした調査区である。朱雀大路西側溝推定ラインは、NS試掘調査区の西端辺に位置し、東側溝、東築地の推定ラインはNo.11の中央付近に位置する。両調査区間は主に路面部となる。

No.11では、ほぼ推定位置で溝16とした南北方向の溝を検出した。出土遺物からみて平安時代中期後半代には埋没し、その機能は失われている。肩部は、後代に削平を受けており、成立期は確定できないが、平安時代の前半代に機能していた朱雀大路東側溝と判断して良いだろう。しかし、路面は調査区内では残存しておらず、削平されたものとみられる。調査区中央付近を境として、地山面に東西で0.4 m程度の比高差があり、西半が低い。この西半の低い部分では側溝のベースをなす平安時代の整地層とみられる褐灰色泥砂粘質土層、灰黒色砂泥粘質土層が堆積している。褐灰色泥砂粘質土層は側溝の東側の狭い範囲にみられた土層であり、側溝東肩部を形成し、犬行、築地の基礎土層の可能性もある。側溝西側に堆積する灰黒色砂泥粘質土層は路面の基礎土とみられるが、側溝西肩部と共に上面を削平されている。西半では、この整地土層上面に黒褐色シルト層2が0.2～0.3 mの厚さで堆積しており、地山がやや高い東半では地山直上にはほぼ同質の黒褐色シルト層1が0.2 m弱の厚さで堆積している。両層の上面は水平に近く、現表土下1 m弱である。両層の出土遺物は少ないが、最新時期の遺物は室町時代末期に比定できる。上面には、数条の小溝も検出しており土質などから水田の耕作土とみられる。黒褐色シルト層1・2より上の堆積層は、近世から近代の積土層であり各層上面での成立遺構は近世後半以降の瓦礫処理穴とみられるものが中心である。他に、地山上面で平安時代、中世の溝、土壙なども検出しているが出土遺物も少なく、近世以降の遺構に削平されて全形をとどめない例が多い。

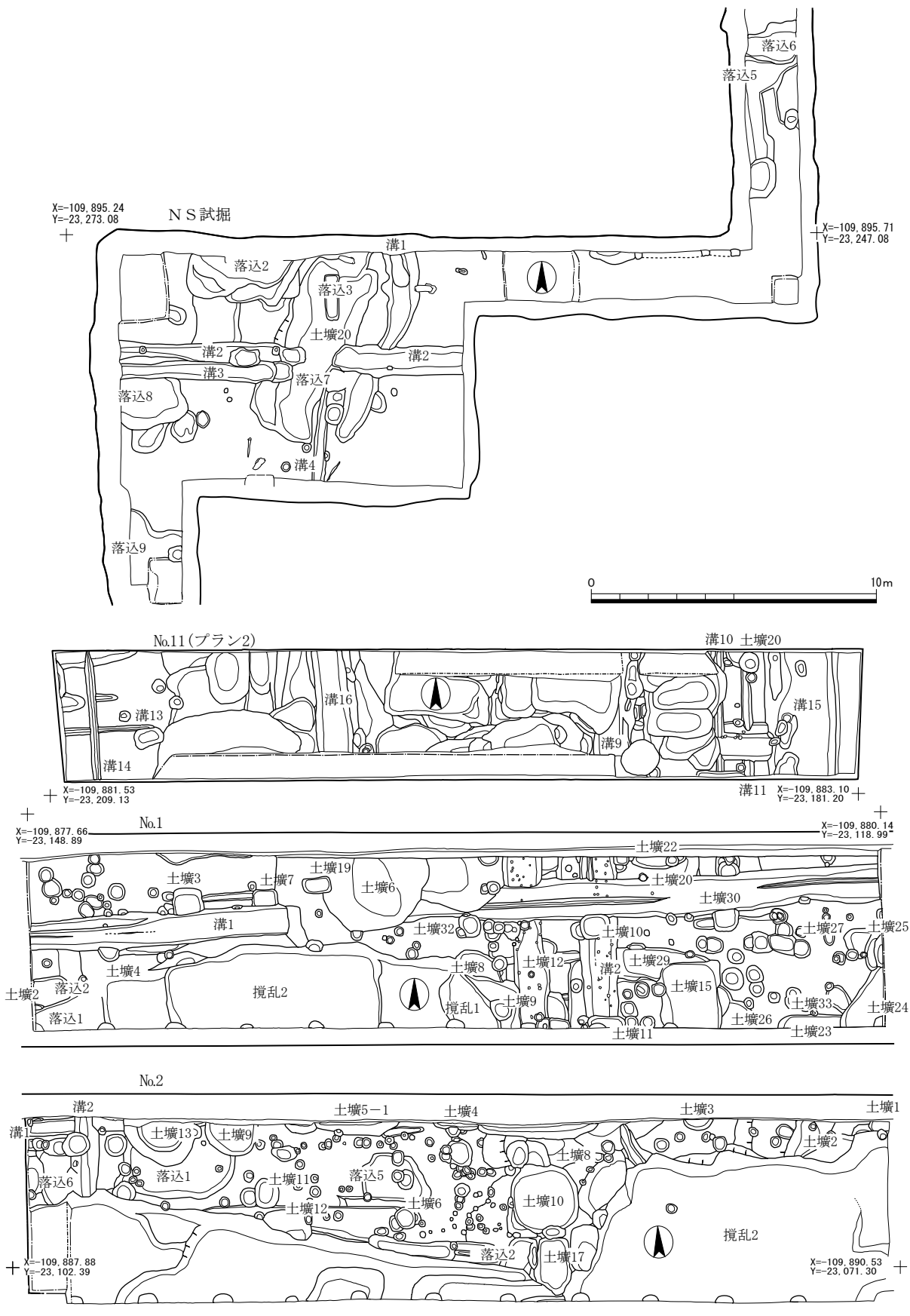


図10 遺構平面図 (No.1・2・11、NS試掘) (1:200)

N S 試掘調査区では、西側溝、路面共に確認できなかった。調査区全域で地山の直上に、No. 11 の黒褐色シルト層 1・2 と同質で類似した黒褐色シルト土層が 20cm 前後の厚さで堆積している。同シルト層上面までは、表土下 1.5 m 以上を測る。上面は平坦で水平に近く、このシルト層も、No. 11 と同様に水田などの耕作土層とみている。しかし、出土遺物は近世初頭のもものが中心であり、二条駅に関連する近代積土層とみられるものもある。

地山直上の遺構面では、平安時代から近世初頭の土壌、落込、溝などの遺構を検出している。平安時代の遺構は、中期のもものが最も古い遺構で、この内、溝 1 と落込 3 とした遺構は西側溝の推定ラインに近く、南北に延びる溝状遺構とされた。このため南側へ調査区を拡張し追跡調査を行ったが、溝 1、落込 3 とともに南方へは延びず、側溝に比定できなかった。この付近では、朱雀大路の路面や西側溝は基礎土まで含め後代に削平を受けてほぼ消滅したものとみられる。

No. 1・2 は、No. 11 東半と同様、左京三条一坊一町内に位置する。両トレンチ共に中世以前の遺構は検出することはできなかった。確認できた土層と遺構はすべて近世以降のものであり、近世土層は地山面に直接堆積している。両トレンチの東端である No. 2 東壁部分の南側では、地山面が表土下 2.5 m 強を測る（標高 34.5 m）。同壁北側ではやや高くなるが表土下 2 m 強（標高 35 m 程）と深い。南北方向の比高差は、土取りなどで細かい原地形は失われているものの、本来の北高南低の傾斜地あるいは段差部分にみられる基本的な地形を反映したものと理解される。東西方向では No. 11 東部の地山面（標高 35.3 m 程）に比べると、東側に位置する No. 1・2 の地山面が低くなっている。No. 11 東半との比高差に関しても原地形を反映したものとみている。No. 1・2 部分ではこの比高差の解消は、近世に入ってから始まり、西下がり傾斜する現在の状態に近くなるのは近代に厚い積土が行われて以降である。このような一町南東辺部の状況が、五町南辺部にも連続していることを立会調査によって確認しており、五町側の方が地山面は更に低くなっている。

小結 史跡旧二条離宮（二条城）内の南側は、桃山時代末から江戸時代初頭の二条城築城に伴い押小路通が移築され、通りと外濠の間には柵が設置されており、現在の状態とほぼ同様に整備されたと理解できる。

神泉苑は、平安京造営期に整備され造営された 8 町の規模をもつ禁苑である。現在小規模になった園池の一部が史跡神泉苑とされ、調査対象地の南側に遺存している。今回の調査では、神泉苑敷地内とその東側の宅地地域とは遺跡の様相が大きく異なっており、敷地内には園池が遺存していることが明らかとなった。園池の北縁と北東から池へ流れこむとみられる流路を検出した No. 5 は、現存する神泉苑の池の北側に位置している。平安時代の園池が縮小され現在に残存していること、その園池が自然地形をほぼそのまま取り込んで造苑されたことを、発掘資料から立証できるだろう。また神泉苑敷地内のトレンチを中心に、緑釉瓦を含む多数の瓦類が出土している。これらの瓦類は、苑内の北側にあったとされる乾臨閣などの建物に使用されていたと考えられる。

上述した他にも、今回実施したトレンチ調査によって調査対象地内では、平安時代から江戸時代の遺構が良好な状態で残存していることが明らかとなった。

美福通以西では、No. 11 と N S 試掘調査区の遺構の様相などから、朱雀大路は平安時代中期に

は削平を受け、本来の姿と機能は失われていたと考えられる。今回の調査では中世から近世の初頭には耕作地となっていたことが明らかとなった。

この地域の原地形を押小路ラインで推定復原すると、朱雀大路付近より東側の一・五町側が相対的に低くなっている。北方との比高差も大きく、北側の扇状地の高みに対して五町付近を中心として北北東へ入り込む谷地形を形成していたと考えられる。この低みは、神泉苑の園池のある低みへ連なるものとみられる。朱雀大路はその西側の南方へ延びる微高地上に形成されたとみられる。押小路通ラインでこの低みの整地（高低差の解消）は近世に入ってから本格化するようである。これは二条城築城に伴う周辺町（この付近には町奉行所が作られている）の整備に直接関連しており、町が形成された以降も継続して行われたと理解される。

東ブロックの調査

経過 東ブロックとなる烏丸通以东の内、烏丸通から御幸町通までは、本調査にあたるトレンチ調査を完了しており、本工事やその前段で行われた街路樹のケヤキ移植工事などに対する立会調査を実施した。御幸町通から鴨川西岸までに関しては、平安京の東限推定ラインが、寺町通付近に位置するため、周知の遺跡外となる。しかし、鴨川を含めた当地域の歴史的重要性は言をまたない。このため関係機関と協議し、御幸町通と寺町通間では、平安京東限である東京極大路を主目的としたNo.19の調査を、寺町通から鴨川西岸間では平安京東隣接地で8箇所（N1～5、



図 11 神泉苑跡出土瓦

S1～3) 試掘調査を実施し、また街路樹移植工事に対する立会調査も併せて実施した。

No.19は平安京東限である東京極大路を主な調査対象とした発掘調査である。東京極大路は二条通南側で1箇所、市域立会調査で平安時代後期の道路や東

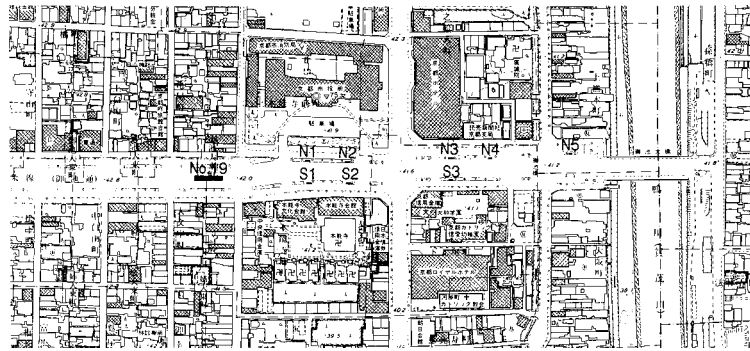


図12 調査位置図(東ブロック 1:7,500)

側溝が確認されている。このため大路両サイドの施設が検出可能なように、No.19の位置と規模を設定したが、設定した調査区は寺町通の交差点に東辺部が入り込む形となるため、交通事情から許可されなかった。結局調査区東端は、交差点西側横断歩道西端際までに修正し発掘調査を実施することとなった。

遺構・遺物 調査によって平安時代前期の路面残欠、東側溝などを検出することができた。

路面は多くを後世の遺構により削平されていたが、部分的に4箇所で検出した。路面は標高40.50mで面をなしており、現表土下2m強の深さに位置する。基礎土層の上に小礫と泥砂土で3～4cmの厚さの路面が形成されている。多いところで4枚残存していた。基礎土層からは平安時代初頭の遺物(I期)が出土しているが、最下層の路面の直下から平安時代前期後葉(II期新か)に比定できる灰釉陶器片が出土している。最下層の路面は、平安時代前期には改修(あるいは部分修築)された可能性がある。

東側溝(溝4)はトレンチ東端部で検出し、東肩部は東壁外にあるとみられる。西肩部も新しい時代の遺構に削平されており、溝の下半部を検出した。底部の断面形状は皿状を呈する。検出幅は2mを測り、深さは古期の底部で0.7m、浅くなった新期の底部で0.4mを測る。底部形状や残存側壁の傾斜などから復原すると幅約3m、深さ1.2～3.0mの規模を持つと推測される。古い段階の底部には、暗褐色のシルト土層が堆積しており、その上に黄褐色の砂礫層が堆積し、その上面で新期の溝底部が形成される。古い段階の堆積土からは平安時代最初頭のI期中、新しい溝底部の堆積土からはやや新しいI期新からII期古段階に比定できる土器類が出土している。溝4は平安建都時に形成された東側溝と判断しており、埋没時は平安時代後期と推定される。なお、西側溝や西築地推定ラインも、調査区西辺部に位置するが、側溝と断定できる遺構は検出できなかった。しかし土壇82とした遺構は、四方ともに新しい時代の遺構に削平されており全形を推測し難いが、位置や底部状況から側溝残欠の可能性も残されている。東側溝に関しても溝4の西側に3条分の南北方向の溝の残欠とみられる遺構(土壇73・79、溝2)を検出している。出土遺物からこれらの遺構は平安時代後期から近世初頭に順次埋没した遺構とみられる。これらの遺構は各時期に造り替えられた東側溝とみられる。

No.19の調査では上述した東京極大路関連以外にも、平安時代以降、中世から近世の各時代の井戸、土壇、柱穴、溝など、生活と居住に直接関連する遺構を数多く検出している。これらの遺

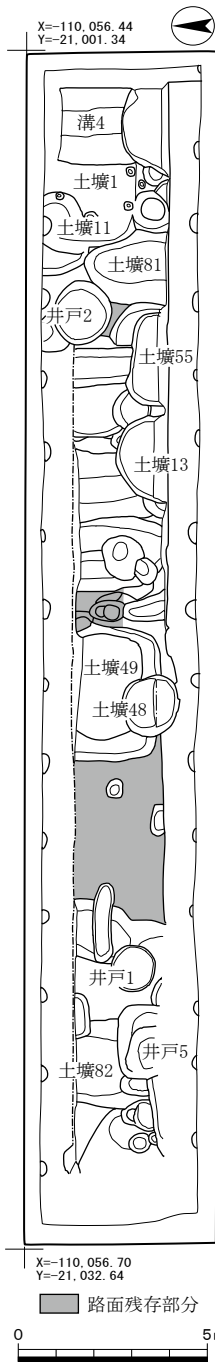


図13 遺構平面図 (No.19)
(1:200)

構は、公的なスペースである大路の路面や側溝を削平する形で形成されている。

小結 No.19 トレンチの調査によって東京極大路の平安時代後期の路面と、東側溝を検出できたことは大きな成果であった。推定復原規模（幅3m = 1丈、深さ1.2～3.0m）は文献が示している東京極大路の東（外側）側溝と同規模で、濠の規模を有している。東側溝は、道路側溝というよりは、防御的性格がみられ、京域と京外を分けることを第一義とする溝と理解される。東側溝の東肩部や東隣接地は繁華街の交差点内であり調査できなかったことは残念であるが、覆工板下での調査に期待したい。

(小森俊寛・上村憲章・長戸満男・原山充志)

7 平安京左京四条四坊（図版1・7）

経過 調査地は、平安京左京四条四坊二町の北西部、烏丸御池遺跡の南東部にあたる。左京四条四坊の周辺には、高倉宮や三条東殿などの邸宅が営まれていたことが記録に残っており、その後も中世・近世の下京の市街地が広がっていたと推定できる。また、烏丸御池遺跡は縄文時代から古墳時代にわたる遺跡で、今回の調査により平安遷都以前の景観を復原の手がかりが得られることも期待された。

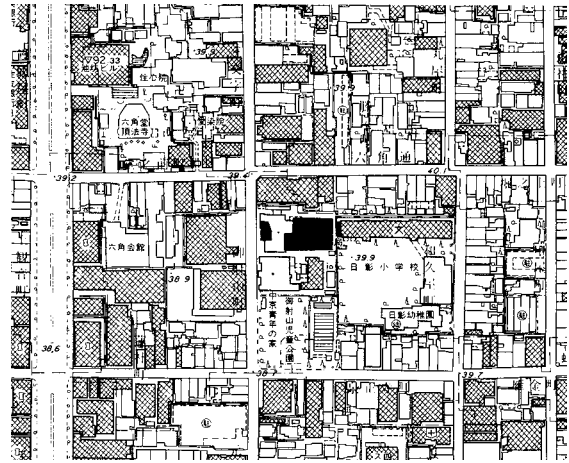


図14 調査位置図（1：5,000）

調査は2つの調査区に分けて実施した。I区の調査終了後、側溝や築地塀の確認を主な目的として東洞院通沿いのII区の調査を実施している。

遺構 江戸時代中期から後期にかけての遺構は井戸・土壙など大規模なものしか認めていない。江戸時代前期の遺構も溝・井戸・土壙などが中心である。I区では規模の大きな溝を検出している。南北溝252は幅約2.7m、深さ約1.3mあり青灰色の粘土が分厚く堆積し、部分的に護岸の杭もあることから、水が流れていたことがわかる。これに対して、L字形の溝123は空堀であった。幅約2.0m、深さ約1.3mある。溝の成立時期は江戸時代前期をさかのぼる可能性がある。土壙119からはこの時期の遺物がまとまって出土している。II区では井戸や土壙の他に調査区の西端と南端で礎石を備えた柱列を検出した。建替えの痕跡も確認した。しかし、調査区が狭小なため建物の復原には至っていない。

室町時代から桃山時代は、江戸時代以降に比べて遺構数が少なく、土器類を廃棄した土壙や柱穴が散見するのみでまとまりを持たない。II区の南側では中央を円形に掘り窪めた自然石が据えてあった。この石の南東には平たい石が据えてあり、前者を「手水鉢」、後者を「前石」とするとこれらが一体となって「つくばい」を構成していたと考えることができる。鎌倉時代の遺構は室町時代よりも更に少なく、土器類を廃棄した土壙や柱穴を認めただけである。

平安時代後期の溝326は、後世の遺構に寸断されながらもI区を南北に横断している。四行八門制の西一行と西二行の境界近くにあたる。井戸359は方形縦板組みで下から2段目までの棧と側板の一部が残り、底に曲物が据えられていた。他には土壙と柱穴がある。平安時代中期の東西溝320はI区の東端から延び、II区の中ほどで途切れる。土師器の皿類を中心に多量の土器類が廃棄してあった。井戸357・360は両方とも方形縦板組みで、部材は底の部分しか残っていない。土壙には土器類が廃棄してあるものが多い。特にII区では東洞院大路側にこうした土壙が並んでいた。平安時代前期の遺構はほとんど確認していない。I区の東端の整地層中から土馬と馬の歯が共に出土しており、これらが祭祀に伴っていた可能性がある。II区では条坊に関連する側溝や

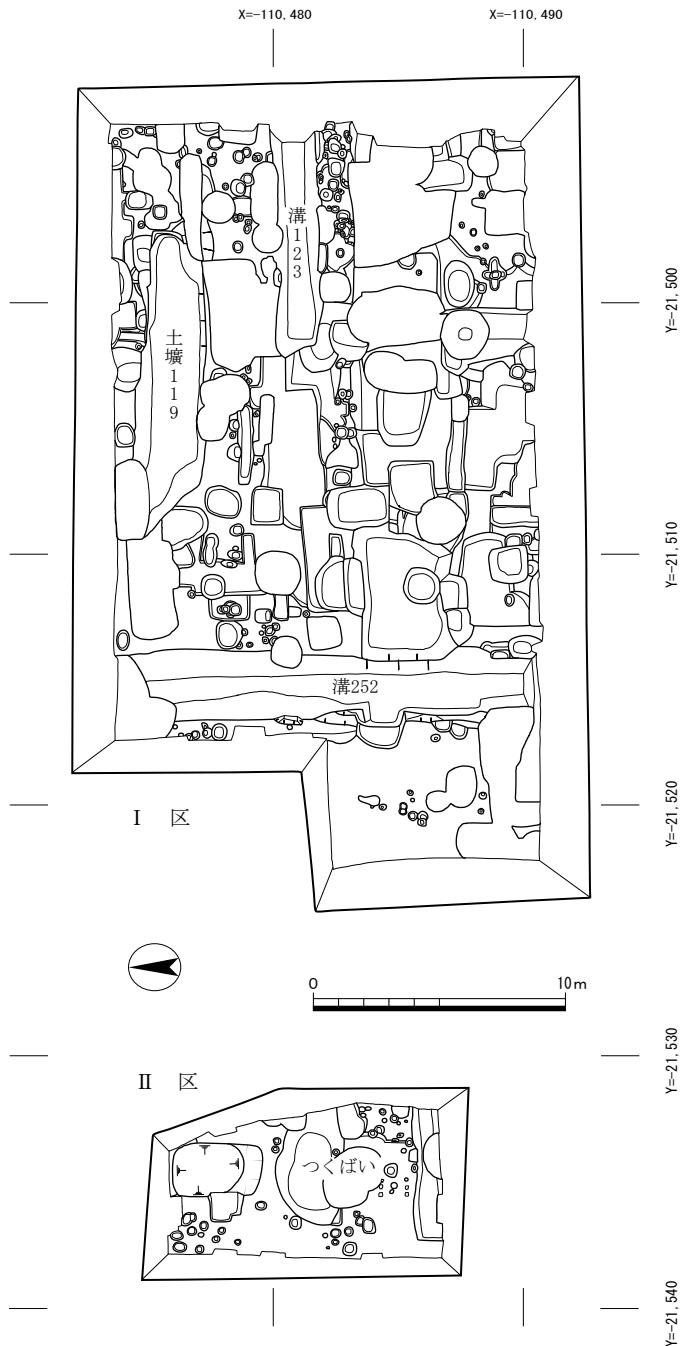


図15 遺構平面図（室町時代から江戸時代）(1:300)

築地塀の痕跡は確認することができなかった。

平安時代の下層で北東から南西方向に流れる大規模な流路375を検出した。I区で南東側の肩を検出しているが、北西肩はII区でも検出できなかったので川幅は20mを超えることになる。埋土は礫・砂・砂泥・粘土などが交互層に堆積しており、縄文時代晩期から古墳時代後期の土器などが出土した。また、流路375の南東側でも浅い落込から飛鳥時代の土器が少量出土しており、流路が複雑に切り合っていた景観を想定することができる。このため住居などの遺構は今回の調査では検出することができなかった。

遺物 江戸時代の出土遺物には土器類・瓦類・木製品・石製品・金属製品などがあり、その多くを土器類と瓦類が占める。土器類は土師器・瓦器・焼締陶器・施釉陶器・磁器などで江戸時代前期のものも多い。逆に瓦類は江戸時代中期から後期の瓦溜からまとまって出土した。二次焼成を受けており、火災によるものとみられる。木製品は溝252から出土

した椀や箸・下駄がある。椀には黒・赤2色の漆で鶴亀の模様を描いたものもある。溝252からは骨や貝殻も出土した。石製品には茶の挽き臼がある。江戸時代前期の土器類の中には少量ながら日本各地で生産された茶の湯の流行を示す陶器も含まれている。

鎌倉時代から桃山時代にかけての遺物には土器類・瓦類・石製品・金属製品がある。遺構が少ないこともあって全体の中での量は少ない。土器類には土師器・瓦器・焼締陶器・施釉陶器・磁器がある。瓦類は非常に少ない。石製品の中には滑石製の鍋もある。

平安時代の出土遺物には土器類・瓦類・木製品・石製品・金属製品がある。土器類には土師器・須恵器・灰釉陶器・緑釉陶器・磁器などがあり、ほとんどを土師器の皿類が占めている。瓦類は

量が少なく、小破片が多い。木製品には蓋と折敷がある。平安時代前期にさかのぼる遺物には土馬と瓦があるが、いずれも遺構には伴っていない。

縄文時代から飛鳥時代の遺物には土器類と石製品がある。土器類には縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器がある。細かく割れた破片が多いが、表面の損傷は少ない。他に土製品では土錘が出土している。また、流路375の底に近い礫層中から石刀が出土した。基部が折損しているものの、塩基性結晶片岩製で刃部を丁寧に研ぎ出した優品である。

小結 今回の調査で出土した最も古い遺物は、縄文時代晩期に属する。平安時代の整地層の下に埋もれていた流路からは飛鳥時代までの土器類が出土しており、調査地から遠くないところに集落があったことが推定できる。

平安時代の溝320・326は区画の溝と考えてよい。3基の井戸や多量の土器を廃棄した土壌から生活痕跡をうかがうことができる。しかし、柱穴から建物を復原することはできなかった。

鎌倉時代から江戸時代にかけても、複雑に溝・井戸・土壇・柱穴が切り合い、多量の遺物が出土することから、人々の盛んな活動があったことが推定できる。溝252・123は発展してきた町組みの地割り・排水・防御などの機能を担った堀と考えてよい。また、「つくばい」と推定できる遺構や出土した土器・茶臼から中世・近世の京都での茶の湯の隆盛の一端を知ることができよう。

(山本雅和)

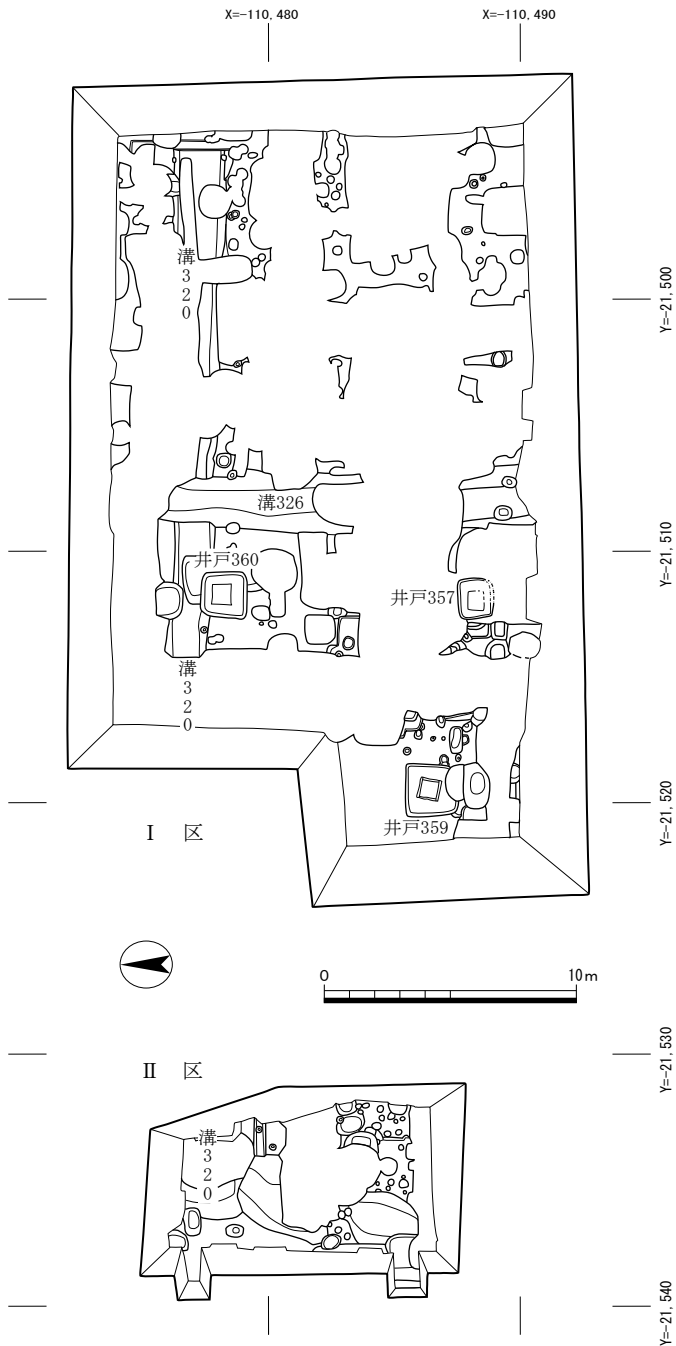


図16 遺構平面図 (平安時代) (1:300)

8 平安京左京五条三坊

経過 京都市下京区室町通四条下る鶏鉾町で発掘調査を実施した。調査地点は、室町通に西面し、平安京の左京五条三坊八町の西四行北二・三門に推定され、室町小路の西築地・側溝が検出可能であった。また、中世から近世にかけては下京の中心地域で、「洛中洛外図」にも描かれている。調査は近世前期の遺構面から開始し、弥生時代中期までの4面の遺構を調査し、最終的に約1mの掘り下げを行い終了した。

遺構 弥生時代中期から近世までの遺構を、総数445基検出した。弥生時代から古墳時代は、溝・土壇が中心で数が少ない。平安時代も、井戸・土壇・柱穴など少数で、鎌倉時代になると遺構数が増加する。室町時代は、井戸・土壇・溝・柱穴などがあり、数が最も多い。近世の遺構は井戸・土壇・柱穴・建物などで、土壇が中心である。以下特徴的な遺構について時代別に述べる。

室町時代後半から近世の遺構で目立つのは、近世前半の集石土壇、室町時代の土取穴である。集石土壇の形態は方形と楕円形で、規模は径1.3～2.3mまで各種がある。深さも0.2～1.0m前後まで様々で、0.5mを超えるものは、排水の機能が考えられるが、浅いものは用途が不明である。掘形の周囲に杭穴がある土壇を2基（SK 125・145）検出した。部分的な検出で規模を確定できないが、長辺1.5m以上、短辺1m前後、深さ0.15m前後で、床面は平坦で堅く、掘形の周囲に杭を打ち込む。杭の径は5～10cmで、検出面から30cm以上打ち込んだ痕跡がある。機能・用途は不明であるが、屋根を掛けた簡易な構造物が考えられる。

石室を7基検出した。規模は大小あり、形態は長方形（SK 41・90）、円形（SK 128）と多様である。泥土が堆積するもの（SK 128）があり、一部は水溜として使用しているが、用途不明なものが多い。SK 154は、室町通沿いで検出した石室で、全容は不明であるが、東西4.5m、南北2.1m以上の規模がある。構造は周囲に径0.3～0.5mの石を3段積む。埋土は大きく2層、上層は灰色泥砂層、下層は暗灰色泥土層で1～5cmの礫を多量に含む。下層の堆積の下には幅10cmの小溝が4本あり、径1～3cm前後の小石が詰まる。この小溝は石組みの下にも延びていることから、掘形を掘った直後に掘られた溝で、その後に石組みを行っている。この石室は室町小路西側溝に近く、側溝の水溜とも考えられるが、埋土に砂などの流入がなく、直接側溝と繋がっていたとは考えられないが、機能としては道路に近接する水溜であろう。

鎌倉時代の遺構には土壇・井戸・溝・柱穴などがある。SE 143の井戸は石組みで径70cmの円形、遺物が少量出土した。

平安時代の遺構は、井戸・土壇がある。室町小路西築地はY=-21,824.59m付近に推定され、敷

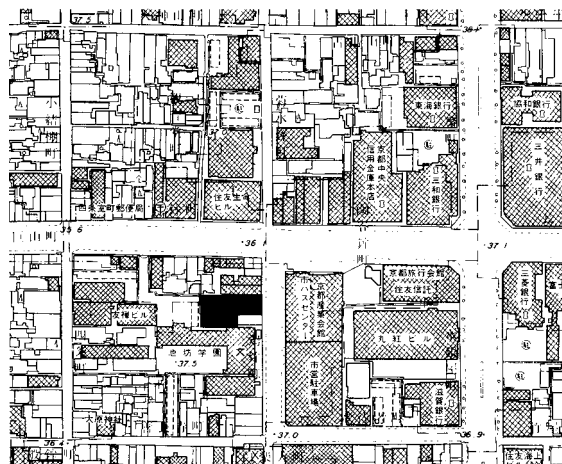


図17 調査位置図 (1:5,000)

地東端までトレンチを広げたが、検出できなかった。SE 377は掘形が一辺3mある井戸で、一辺1.5m前後の方形の木枠痕跡が検出でき、蒸籠組みであった可能性がある。前期から中期後半の遺物が出土した。土壌は祭祀土壌を3基検出した。掘形は径60cm前後で浅く、SK 391は土師器皿を5～6枚重ねて伏せ、その上に須恵器瓶子を正位置で置く。SK 429は須恵器瓶子を正位置で据え、土師器皿で蓋をし、瓶子の傍らにも皿を5～6枚重ねて置き、最上部の1枚だけを反対向けにする。

弥生時代の遺構は溝・土壇・柱穴などを検出し、古墳時代は斜行する小規模な溝、SD 420を検出した。弥生時代は人工の溝、SD 285・400と自然流路SD 443がある。SD 285は幅2.1m、深さ1.0m、延長15m検出し、南北方向で、南端でわずかに東に曲がる。上層から土器が多量に出土した。SD 400は幅2.2m、

深さ0.8m、18m検出した。北西から南東に流れ、SD 285を北部で破壊している。遺物は下層は少なく、上層から完形に近い畿内第V様式の土器が出土した。この溝は自然堆積した土層が底部にあるが、上層は人工的に埋め戻す。SD 285・400とも断面はV字状をする。SD 443は自然流路、規模は幅5m、深さ1mで南北方向、下層からほぼ完形の畿内第II様式の壺が出土した。

遺物 各時代の遺物が371箱出土した。弥生土器・石器、古墳時代土師器・須恵器、平安時代土師器・須恵器・陶磁器・木器・石製品、中世から近世の土師器・陶磁器・金属製品・木製品・

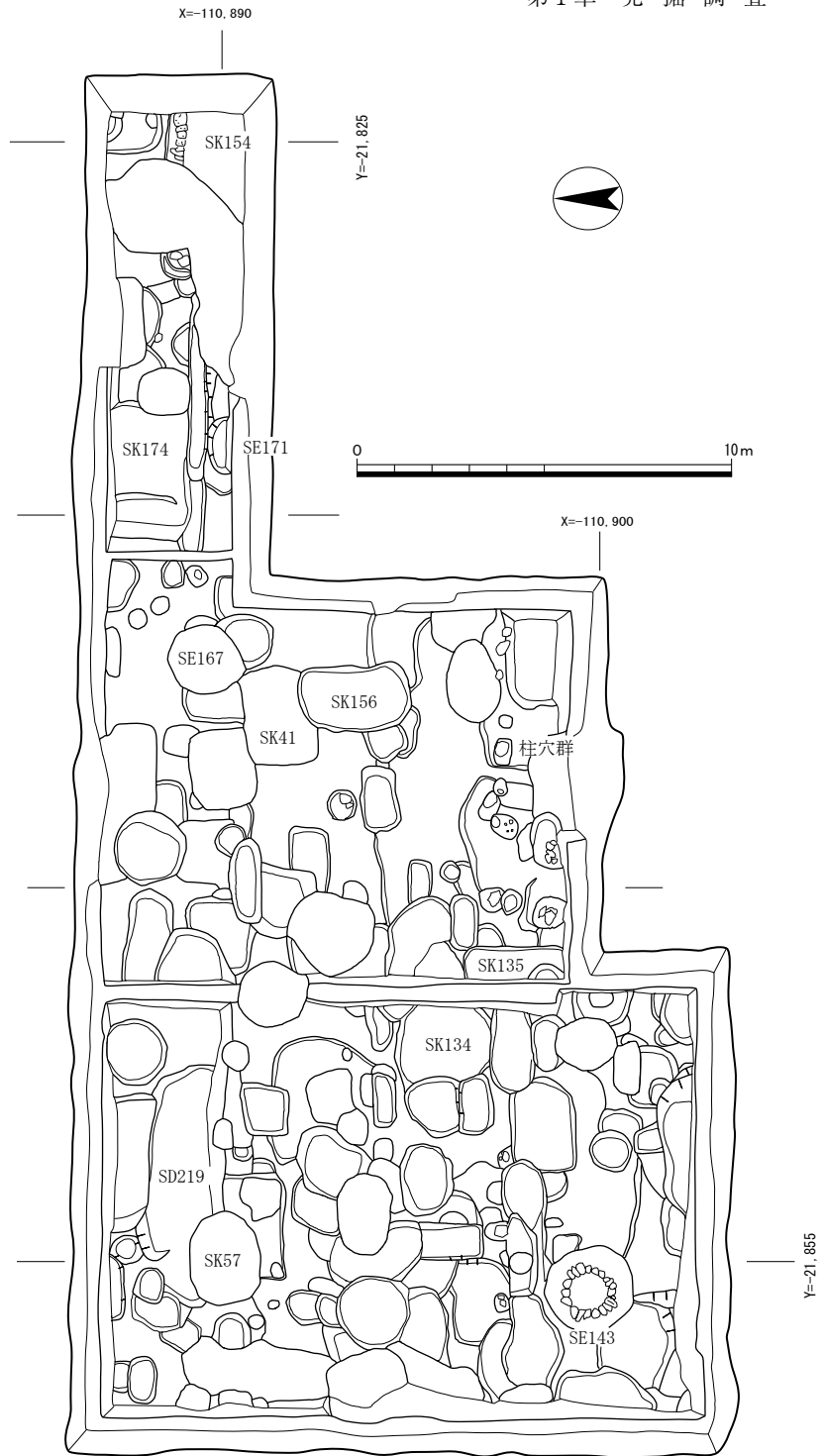


図18 遺構平面図（鎌倉時代から室町時代前期）(1:200)

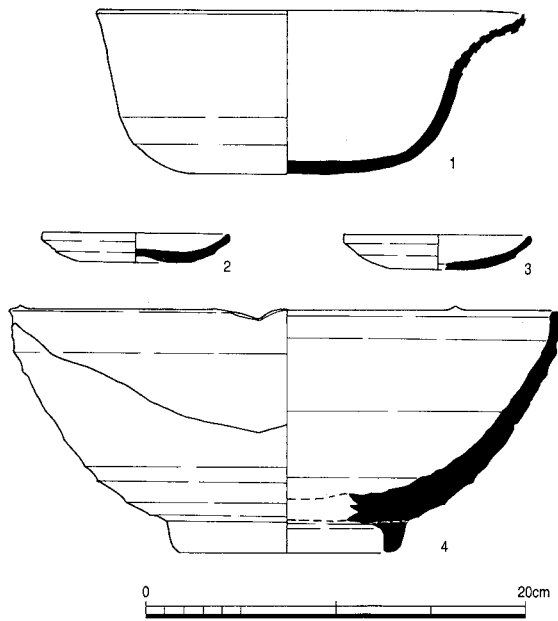


図19 遺物実測図 (S D 219 : 1 鉄製品鍋
S K 269 : 2・3 土師器 4 緑釉陶器)
(1 : 4)

土器以外には、木製品、石製品、金属製品、土製品、自然遺物がある。木製品は、室町時代後期の S K 57 から漆器椀・篋・刷毛・櫛・味噌篋・折敷・蒸籠・灯火台・箸・栓などが出土し、篋の多いのが目立つ。石製品には弥生時代の石包丁・石鏃、平安時代から近世の硯・砥石・碁石・石臼などがあり、近世の砥石が 141 点と多い。金属製品は釘・鎌・包丁・鉾・鉄鍋・銅椀・銭貨・吸口・銅箱などがあり、量的には釘が主体で約 442 本ある。鉄鍋は平安時代後期の溝状遺構 S D 219 から出土し、ほぼ完形である。銭貨は、北宋銭・寛永通寶などが 44 点出土し、元文小判も 1 枚ある。その他、焼けた荒壁土が多量にあり、白い上塗り壁も少量含まれる。壁の厚さは通常 5 cm 前後であるが、10～15cm を越えるものも多く、土蔵の壁と推定できる。自然遺物は雲母が S K 134 を中心に、室町時代の後半期の各遺構から出土した。その他、布、紙などが少量ある。遺物の時代別の出土量は、大まかに桃山時代から近世前半が多く、平安時代前期・中期は少量、後期から室町時代の遺物は一定量あり、遺構数と対応関係がある。

小結 特徴的な遺構と遺物について概説し、まとめとする。平安時代の遺構は井戸と祭祀土壇を検出した。祭祀土壇内には須恵器瓶子 1 個と土師器皿 5～6 枚が埋められ、S K 391・S K 429 は 10 世紀後半、S K 444 は 11 世紀中葉である。土壇は東西ないし南北に並び、ある距離を隔て点在することから、宅地の再配置に係る地鎮に伴う遺構である。

S K 125 など掘形内の周囲に杭穴を持つ土壇は、鎌倉の類例^{註1}に比べ規模が小さく、本格的な建物の想定はできないが、屋根をかけた簡易な小屋(建物)が考えられる。

焼壁土を出土する遺構を多数検出したが、これらは方形か楕円形の掘形で、地山が粘土質の部分で検出し、埋土に礫を多量に含むものが多い。これらは、火災の復旧に伴う壁土の採取と火災の後片づけを兼用したものと考えられる。また、厚い壁土の出土が多いことから土蔵、倉などの存在が確認される。なお、焼瓦はほとんど出土しないことから、建物は板屋根である。

土製品・石製品がある。弥生土器は中期(畿内第Ⅱ様式から第Ⅳ様式)の壺・甕・鉢・水差・器台・高杯がある。古墳時代の土器には、後期の須恵器杯身・蓋・壺、土師器甕がある。平安時代の土器には、土師器、黒色土器、白色土器、須恵器、灰釉陶器、緑釉陶器、中国陶磁器がある。中世から近世前半の遺物には、土師器、瓦器、瓦質土器、須恵器、焼締陶器、国産施釉陶器、国産陶磁器、中国陶磁器がある。

中国陶磁器は越州窯の青磁椀・合子・壺、五代の蛇の目高台白磁椀、北宋から南宋の白磁玉縁椀、青磁椀・小壺、白磁椀・皿、青白磁皿・小壺・小壺蓋・梅瓶、緑釉陶器鉢、三彩陶器鉢、陶器鉢、明の青花椀・皿、李朝鉄絵壺などがある。

布掘内に礎石を伴う塀の基礎と考えられる東西方向の宅地割りの溝を2条（S D 166・173）検出した。溝の間隔は8mで、同様の遺構は草戸千軒町遺跡・博多遺跡など、中世の都市遺跡で検出されており、「洛中洛外図屏風」に描かれる長屋の宅地割りの遺構と判断される。草戸千軒町遺跡では中心部の縁辺に広範囲に同様の区画が広がっている。

弥生時代の遺構の内、S D 285は西端で検出した南北溝で、周辺の地形、規模・形態から弥生中期（畿内第Ⅲ様式末から第Ⅳ様式）の環濠集落の西を限る濠と推定できる。烏丸綾小路遺跡は既調査で数本の自然流路が知られるが、明確なV字溝は未検出である。集落の範囲は確定できなかったが、S D 285で中期後半の西端が確定できた。

遺物では12世紀の遺物が出土するS K 269から出土した緑釉陶器鉢が注目される。この鉢は口径が28cm、器高が12cmあり、体部外面には波状の沈線を施し、口縁の端部には対応して輪花がある。高台は三日月状をしており、張り付け高台である。緑釉陶器の供膳形態は11世紀代に終了し、施釉技術は土塔作製などで後代に残るが、この鉢に関しては更に生産地・系譜などを検討する必要がある。

S K 134などから雲母が出土した。雲母は『続日本紀』に大和・三河・陸奥から和銅六年（713）に献上したことが記され、室町時代には恵聖院を本所とした雲母座があり、公事銭を徴収している。雲母（キララ）は室町後期から近世にかけて各種の工芸品、紙・扇子・調度品・着物などに多量に使われた。S K 134から整理箱に5箱以上が出土し、同時期の遺構からも少なからずみられること、また、S K 57から漆塗用の刷毛・篋と雲母が出土したことから、当地が室町時代後半から近世初期にかけて雲母を使用した工芸製品の製作地であったことが想定される。

元文小判（初鑄1736年）は天明の大火を整理したS E 167の中層から出土した。小判の表裏に刻印が「山」「五」「三」「一」「田」など24前後あり、刻印の研究が進めば流通の過程を復原することができる。同じ小判が三条通東洞院東入曇華院前之町の曇華院註2の溝から出土したが、同一の刻印はない。

なお、概要報告までに、同志社大学鈴木重治氏、京都大学西山良平氏、京都文化財団植山茂氏、祇園祭山鉾連合会大杉隆一氏、中国景德鎮考古研究所の劉新園氏から教示を受けた。

（百瀬正恒・辻 裕司・南 孝雄）

註1 宗薹秀明「方形竪穴建築址の理解に向けて」『中世都市研究』第1号 中世都市研究会 1991

註2 『高倉宮・曇華院跡第4次調査』平安京跡研究調査報告第18輯（財）古代学協会 1987

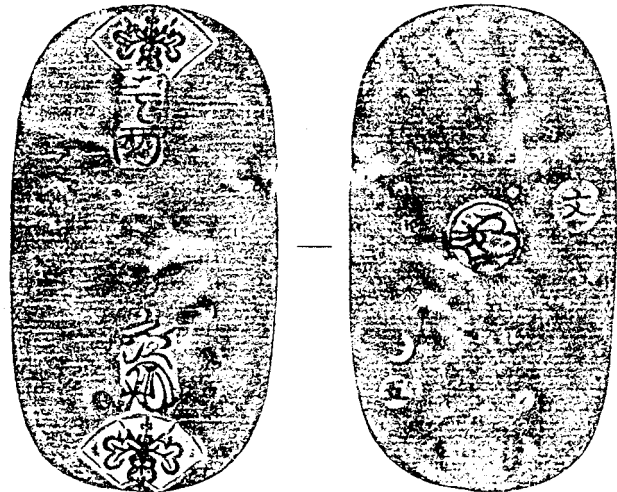


図20 S E 167出土元文小判拓影

9 平安京左京五条四坊（図版1・11）

経過 調査対象地は、現四条通と富小路通交差点の南西に位置する。平安京では、左京五条四坊九町の北半の中央部付近に推定される。文献史料では、平安時代を通じて著名な邸宅などは知られていないが、焼亡関係の資料から平安時代後期には町屋地となっていたことがわかる。中世に入ると当地近辺に酒屋があったとされるが、下京が明確となる中世の後半には、下京の町域から外れる。近世には再び、町屋地となり、都市域の一角を占めるようになるとされる。

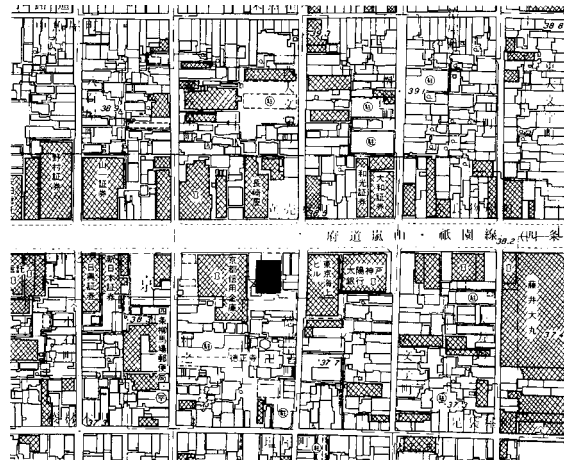


図 21 調査位置図（1：5,000）

当町での発掘調査は今回が初例であり、今回の発掘調査によって当町の歴史の一端を明らかにしたい。

本調査に先立ち、平成2年（1990）3月30日に試掘調査が実施された。その結果、当地には平安時代前期の遺物包含層や後期の遺構、中世の遺構が遺存していることが明らかとなった。これに基づいて、対象地に南北22m、東西17mの調査区を設定し、発掘調査を実施した。調査開始当初に調査区東壁ぞいに、大規模なコンクリートの地下施設（建物基礎か）を検出した。東壁から幅3m、深さは現地地表下4.4mを超えており、東壁沿いの大部の調査を放棄した。しかし、その他では、平安時代以降の各時代の土層、遺構、遺物を多数検出することができ、下層からは、少量ではあるが弥生時代から古墳時代の遺物を検出するなどの調査成果が得られた。その成果を以下で報告する。

遺構 平安時代前期の遺構は、プラン4とした遺構面で土壙、ピットを少数検出したにとどまる。この遺構面は、自然堆積層をベースとし、自然地形を残している。幅広い流路状の浅い窪地が北北西から南南東方向に延び、この窪地の北東部の微高地面で井戸の可能性のある土壙124、ピット173などを検出した。また窪地内の堆積土からは、平安時代前期の土器、陶器、瓦類などが多数出土しており、前期の段階にすでに窪地は埋まり調査区全域が平坦化している。この堆積土は整地層とみられる。

平安時代中期後半に入ると、前期から続く遺構面に、整地層とみている堆積層が積み上がりその上面に新たな遺構面（プラン3）が形成される。同遺構面では、平安時代中期後半から後期、鎌倉時代の遺構を多数検出した。平安時代中期後半から後期のピット群は、柱穴とみられるものが中心であり、小規模な建物が密集し、何度も建替えられた痕跡と理解される。また、井戸、土壙など、人々の生活痕跡を重複して多数検出しており、居住密度が高かったとみられる。鎌倉時代に入ると、検出遺構数は急激に少なくなり、ピットが検出されない点には注意すべきである。

室町時代の遺構は、プラン2とした遺構面で主に検出した。前半代の遺構は、井戸、土壙など

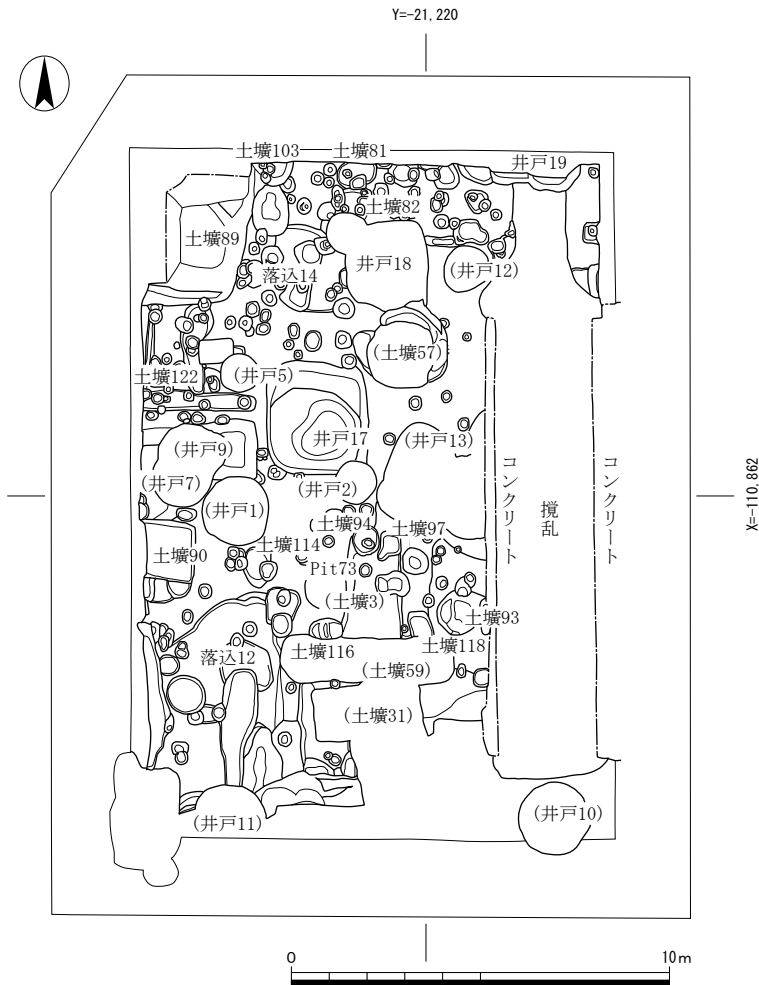


図22 遺構平面図 (プラン3) (1:200)

がみられるが、検出数は鎌倉時代に引き続き少ない。後半代に入ると井戸、土壇、ピットなど各遺構とも増加傾向を示し、調査区南半では、土壇、落込などに大型のものがみられるようになる。

近世には桃山時代から江戸時代を通じ、室町時代後半代の遺構密度を継承した状態が続く。井戸、土壇、掘込など、各時代の遺構を多数検出している。この中には、桃山時代末期から江戸時代前期の南北方向の2条の堀と、その間の幅約3mの路地を含んでおり、近世には当地が現代と同様の稠密な町屋地となっていたことが判かる。

遺物 弥生時代から古墳時代の遺物は、砂礫層、後世の土層、

遺構への混入として出土している。出土量は少なく、器面の磨滅したものが主であり、いわゆる流れ堆積の遺物といえる。北方周辺に比定される遺跡に関連するものであろう。

平安時代以降は、平安時代中期前半（主に10世紀）と、検出遺構数の少ない鎌倉時代から室町時代初頭を除いた各時代の土器、陶磁器、瓦類が多数出土している。出土遺物の内容は、各時代を通じて、椀、皿、鉢などの供膳具（食器類）、壺、甕など貯蔵具、搗鉢、鍋、釜などの調理、煮沸用具などが中心である。これらには各時代とも、高級品に位置づけられるものが一定量含まれており、都市民の生活水準の高さを示している。出土遺物の質、量は、遺構密度の変化に対応している。

なお、土壇31から江戸時代前期後半代に比定できる土器、陶磁器類に伴って、一分金が1枚出土している。金製の貨幣の出土例は、京都市域の発掘調査においても少なく、注目される遺物の一つである。出土状況からみると、火災などで出た塵芥を埋設した際、混入したものと考えられる。一分金は、1.75 × 1.00cm、厚さ1.5mmを測る。表に、五三の桐紋、表に「光次」が極印されており、幕府勘定奉行のもとに後藤家が統括した金座で鑄造された正規の貨幣である。一分金は、いままでに京都市域からの出土例はない。時代はやや下るが東京都港区三田濟海寺の長岡藩主牧野家墓所の発掘調査^註で、六代目と七代目の藩主の墓から三枚と二枚の元文一分金がそれぞれ



図23 土壙31出土一分金

出土している例が知られている。

小結 今回の発掘調査によって、平安京成立以前には、当地は、砂礫が堆積する氾濫原であった。平安時代まで流路による窪地地形を残すが、平安時代前期に居住が始まり、窪地が埋められ宅地化が始まる。中期前半代の遺構は残存しておらず様相は明らかでないが、中期後半には全域に整地が行われ、上面に建物や

井戸などの遺構が多数形成され、人々が居住したことが明確となる。平安時代後期までは同様の景観が継続するが、鎌倉時代から室町時代前半代には検出遺構数が少なくなり、様相は大きく変化する。再び、遺構密度が高くなり都市的様相を呈するのは、室町時代後半以降である。その後は近世を通じ発展的に継続している。

遺跡の変遷を遺構、遺物から捉えると、文献史料からとはやや異なる、当地の詳細な変遷が明らかになった。

(小森俊寛・上村憲章)

註 『港区三田濟海寺長岡藩主牧野家墓所発掘調査報告書』 東京都港区教育委員会 1986



図24 全景(西南から)

10 平安京左京六条一坊 (図版1・12)

経過 調査地は五条通北側に面し、櫛筒通から1軒おいて東の地点、平安京左京六条一坊十五町にあたる。当敷地内にビルが新築されることになり、発掘調査を実施することになった。

調査にあたり南北約21.5m、東西約21.0mの調査区を設定した。

調査はまず重機を用いて江戸時代以降の盛土を掘削し、室町時代の整地層上面から人力による調査を開始した。続いて順次鎌倉・平安・古墳時代へと調査を進めた。平安時代の調査では建物の広がりや井戸を確認するために、いくつかの拡張区を設けた。

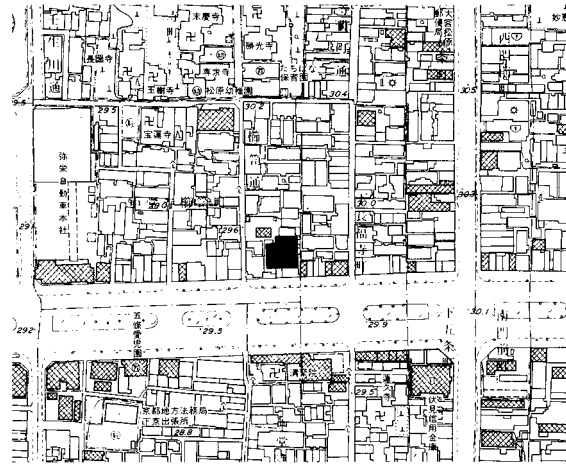


図25 調査位置図 (1:5,000)

遺構 基本層序は上から盛土、室町時代の整地層・遺物包含層、平安時代後期の整地層、地山である。現地表から地山まで約0.8～1.1mある。

古墳時代の遺構は調査区東側に位置する南北方向の流路がある。前期と考えられる土師器片と縄文土器が出土している。

平安時代の主要な遺構は、掘立柱建物5棟、柵3列、井戸2基などで、そのほか柱穴・溝・土壙がある。柱穴の規模などから建物SB1・2、柵SA1を前期、建物SB3～5、柵SA2・3を後期から末期の遺構と考えている。井戸SE235・831は2基とも後者の時期のもので、共に木製の井戸枠をもつ。これらのうちSB3とSA3は柱の位置が対応するため、同一建物である可能性はあるが、若干柱筋がずれるため別々の遺構として取り扱った。なおSA3は四行八門の六門と七門間の推定線上に位置している。

その他主要な遺構としてSD747がある。平安時代前期の遺物を含むL字状の溝である。

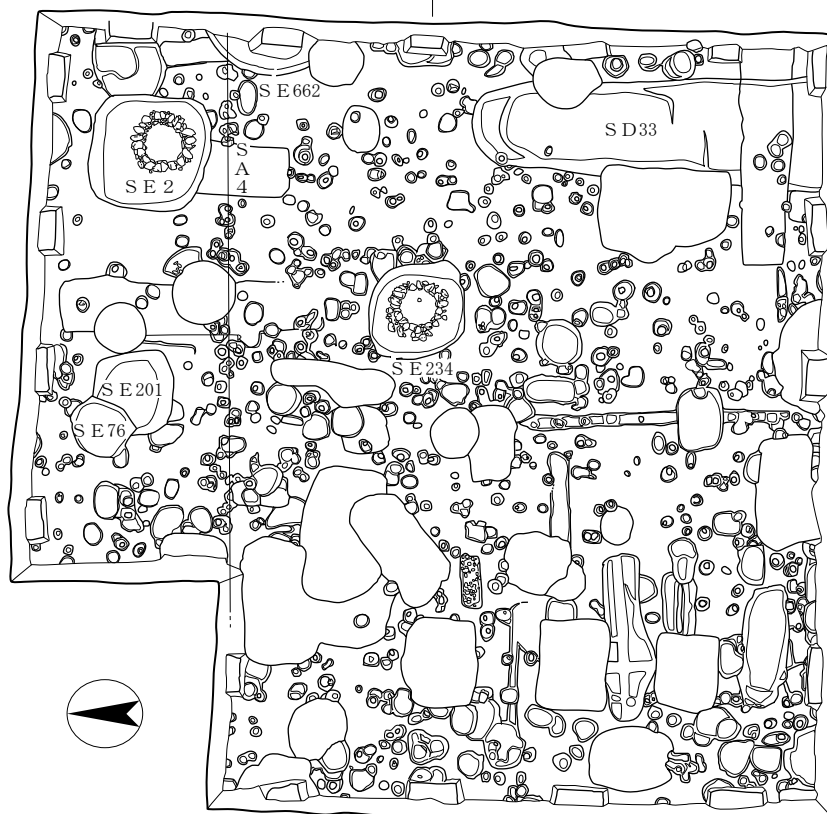
鎌倉時代の遺構は、多くの柱穴を検出したが、建物としてのまとまりは把握できない。この時期の井戸は3基(SE201・234・662)検出した。SE234は石組みであるが、検出面から1.4m下で石組みを確認した。上部は抜き取られ、他に使用されたと考えられる。SE201では井戸枠がみられなかったが、これも同じ理由によるとみられる。

室町時代の遺構も多くの柱穴を検出したものの、多くは建物(あるいは柵)としてのまとまりを把握できていない。その中で柵SA4の柱穴は同じ高さに根石をもち、柵として确实であろう。これは平安時代後期のSA3を踏襲する位置にある。室町時代の井戸は2基(SE2・76)ある。SE2は石組みの井戸枠をもち、SE76はSE201と同じく、井戸枠はみられなかった。その他主要な遺構としてSD33がある。最大幅3.0m、深さ0.9mの大規模な南北溝で調査区外に延びる。

遺物 遺物は整理箱に88箱出土した。平安時代以降の遺物以外では、縄文土器が1点あり、

室町・鎌倉時代

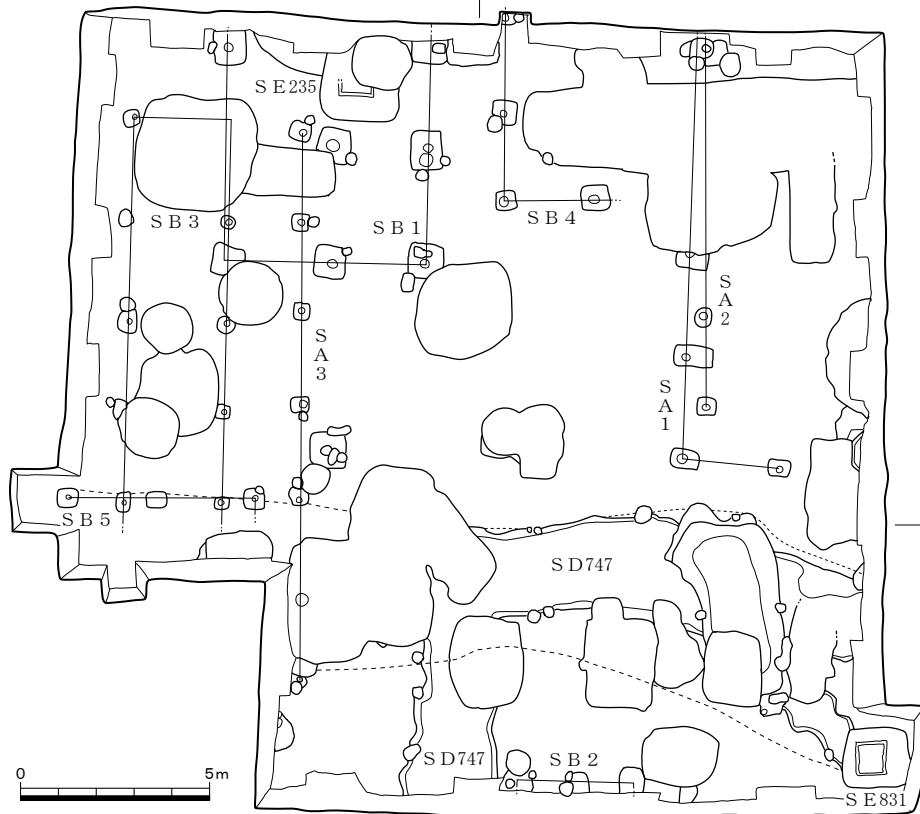
X=-111.624



Y=-22.760

平安時代

X=-111.624



Y=-22.760

流路

図26 遺構平面図 (1:200)

磨消縄文の痕跡が残っている。また古墳時代の遺物としては土師器甕の小片があり、前期の遺物と考えられる。

平安時代の遺物は前期・後期・末期の遺物が主体をなし、中期の遺物は少量である。前期の遺物は比較的多様で、土師器皿・高杯、須恵器甕・円面硯、緑釉陶器唾壺・耳杯、越州窯青磁などが出土している。後・末期の遺物は土師器皿が多くを占めるが、そのほか須恵器椀、白磁瓜形水注などが出土した。またこの時期の軒平瓦も数点出土している。

鎌倉・室町時代の遺物は、井戸を中心として多量に出土している。土師器、瓦器、陶器、輸入陶磁器など、この時期通有の遺物である。

江戸時代の遺物は土師器、瓦器、陶器、染付、瓦などこの時期の遺物の他に、下駄、曲物、箸、漆器椀などの木製品が出土した。

小結 本調査区で最も古い遺物は縄文土器である。これは古墳時代前期の流路から出土したもので遺構は確認していない。この古墳時代の流路から出土した土師器は少量・小片であり、この時期の集落跡はその上流に存在する可能性が考えられる。

調査地に本格的に人が定住しはじめるのは、平安時代に入ってからである。主要な遺構として建物5棟、柵3列、井戸2基などを検出している。しかしながら、建物・柵はいずれも調査区外に広がるもので、規模が明確なものはない。宅地内の建物配置の究明は今後の隣接地の発掘調査に期待される。なおS A 3はほぼ四行八門線上にあり、本宅地を考える上で1つのポイントとなるだろう。柱穴からはまとまった遺物が出土していないので、建物の正確な時期はつかめないが、周辺遺構から出土する遺物からみると平安時代前期、後期・末期がその中心と考えられる。本地域は左京の中でも右京的な様相を示すといわれてきたが、鎌倉時代以降も連綿と人々の営みが続いている。鎌倉・室町時代の多くの柱穴を検出しているが、残念ながら建物としてのまとまりを把握するには至っていない。なお室町時代のS A 4は、平安時代のS A 3を踏襲する位置にあり、注目される。

(高 正龍)

11 平安京左京六条三坊 1 (図版1・13)

経過 今回の調査地は、平安京左京六条三坊六町、烏丸綾小路遺跡にあたる。左京六条三坊六町は、平安時代中期に慶滋保胤が邸宅を営んだ場所である。彼はその邸宅を「池亭」と名付け、内部の詳細を『池亭記』に書き残した。今回の調査地は六町の中央部を南北に縦断する位置にあたっており、「池亭」についての何らかの知見が得られることが期待された。

遺構 江戸時代の遺構には井戸・土壇・柱穴がある。土壇 11 は、幕末の火災の後片付けをした大規模な瓦溜で、調査区を分断していた。また、土壇 27 には備前焼の甕が据えてあった。柱穴については調査区の幅が狭く、大きな遺構に壊されていることもあって、建物を復原することはできていない。

江戸時代の整地層の直下は、次に述べる平安時代後期から鎌倉時代の整地層となっており、その間の室町時代から桃山時代の整地層や遺構の多くは江戸時代に削り取られたと推定できる。この時期の遺構には2基の井戸と少数の柱穴がある。井戸 68 と井戸 82 はいずれも人頭大の川原石を積み上げて作ってあったが、上半部は破壊されている。

平安時代後期から鎌倉時代にかけての整地層は、約 15cmの厚さがあり、調査区南端・中央部・北西隅を中心に広がっていた。遺構には土壇と柱穴がある。江戸時代と同様に柱穴から建物を復原することはできない。土壇は互いに切り合うもの、接するもの、離れるものがある。平面形は様々だが、深さはいずれも 20～50cmと浅い。土壇の多くからは、少量の須恵器・灰釉陶器・磁器・鉄釘と共に、多量の土師器の皿が出土した。土器の型式からは各土壇の間に顕著な時期差を認めることはできない。

平安時代中期の遺構は井戸 151 のみである。土壇 124 により大部分を壊されており、井筒も残っていなかった。残存していた部分で直径約 60cm、深さ約 30cmである。

平安時代前期より古い時期の遺構は検出しなかった。下層の砂礫層中から弥生時代後期から古墳時代後期の土器が少量出土したのみである。

遺物 江戸時代の遺物には土器類・瓦類・金属製品などがある。土器類には土師器・瓦器・焼締陶器・施釉陶器・磁器などがある。瓦類は土壇 11 などからまとまって出土した。金属製品には鉄釘・キセルの吸口がある。

室町時代から桃山時代の遺物は2基の井戸から出土したものがほとんどで量も少ない。土器類・瓦類がある。土器類は土師器・焼締陶器・磁器などで瓦は少ない。

平安時代後期から鎌倉時代の遺物には土器類・瓦類・金属製品があり、大部分を土壇群から出

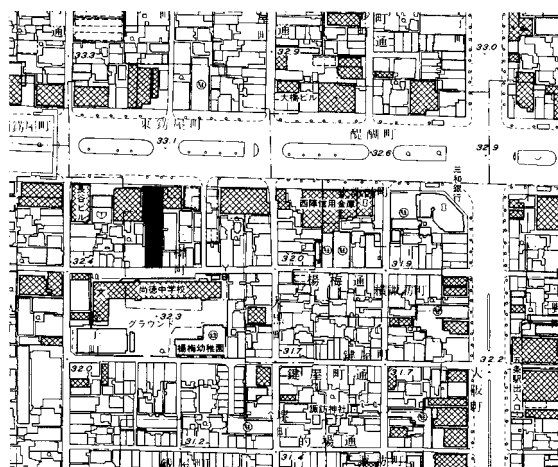


図 27 調査位置図 (1:5,000)

土した土器類が占める。土器類には土師器・須恵器・灰釉陶器・磁器があり、中でも土師器の皿類の量が他を圧倒している。器形は大きく分けて、大皿・小皿・受皿があるが、小皿の割合が多い。胎土は多くが赤褐色の色調を呈するが、白っぽい精良な胎土を用いている一群もある。

平安時代中期の遺物は、井戸 151 から出土した少量の土師器・緑釉陶器のみである。

下層の砂礫層中からは弥生土器・土師器・須恵器が少量出土した。層位的な上下関係は保っていなかった。

小結 調査区内の最も古い遺構は、平安時代中期の井戸 151 である。平安時代後期から鎌倉時代にかけて一気に多数の土壌が掘られている。出土した土器の量からみて土器を廃棄するためのものと考えるのが自然であろう。室町時代から桃山時代にかけての遺構は、少数しか確認できなかった。この時期の整地層が残っていなかったことに関係するともみられる。江戸時代になると、遺構の数は再び増加する。出土する遺物は日常雑器が中心で、この頃には町家が建ち並び、現在と変わらない景観になったとみられる。

慶滋保胤の邸宅については、該当する時期の井戸 151 を検出したのみであり、今回の調査ではその詳細を知ることができなかった。ひとつには調査地が屋敷地のはずれにあたっていたため、遺構が稀薄であったことが考えられる。また、『池亭記』の記事から屋敷の広さが条坊の1町には満たなかったことがわかるので、調査地が邸宅から外れた位置であったとも考えられる。「池亭」の構造については周辺の調査が進むことを待ちたい。

(山本雅和・菅田 薫)

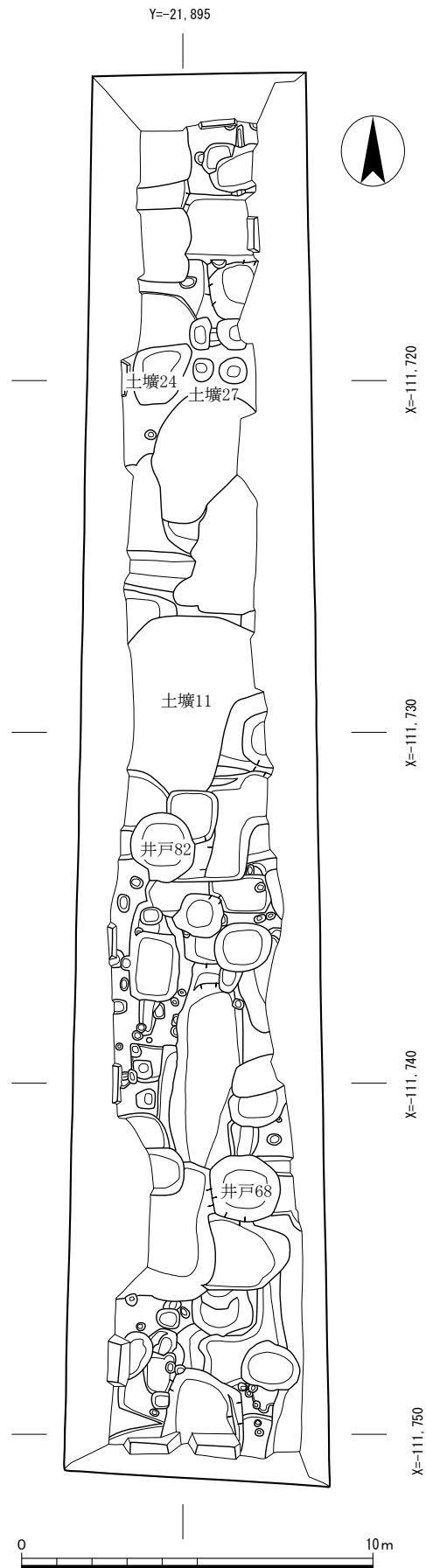


図28 遺構平面図 (平安時代から鎌倉時代)
(1:200)

12 平安京左京六条三坊2 (図版1・14)

経過 調査地は、左京六条三坊七町、「千種殿」推定地の南端に位置し、六条坊門小路に南面する。調査地の南半には、六条坊門小路の路面、北側溝、北築地などの検出が予想された。また、弥生時代から古墳時代の集落遺跡である烏丸綾小路遺跡の範囲内にも含まれている。

事前に行われた試掘調査では、六条坊門小路の路面をはじめとして平安時代から江戸時代におよぶ遺構・整地層などが遺存していることが明らかとなり、本調査を実施することとなった。

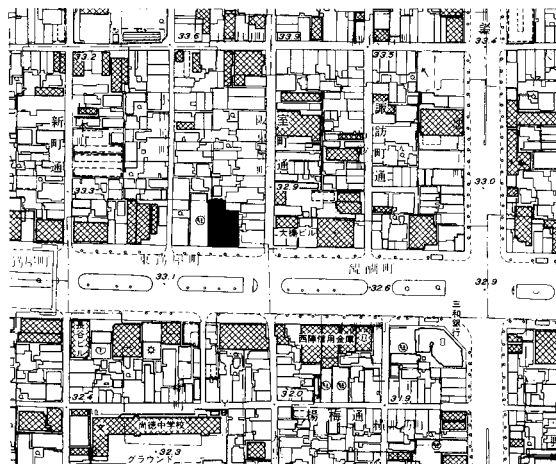


図 29 調査位置図 (1:5,000)

調査区は約 280m²を設定し、地表下約 1 m までの現代盛土層、江戸時代整地層は重機掘削により除去して調査を開始した。

遺構・遺物 層序は、現代盛土が地表下 20 ~ 30cm、その下に厚さ 70 ~ 80cm の江戸時代末から近代の整地層がある。それ以下の層序は、六条坊門小路の路面のほぼ北端となる X=-111,644 m ライン付近以南の路面側と以北の宅地側とでは様相が異なる。路面側では、平安時代から江戸時代の路面層が重層的に厚さ 50cm 程あり砂礫層に達する。一方、宅地側の近・現代の攪乱が及ばなかった箇所では、平安時代の整地層が 20 ~ 50cm の厚さで遺存し、砂礫層に達する。砂礫層は、平安時代以前の流れ堆積と考えられる。

遺構は、江戸時代以降、鎌倉時代から室町時代、平安時代の 3 時期に大別でき、各時期の六条坊門小路の路面と北側溝を検出している。

江戸時代以降の遺構には、井戸・土壙・石室・溝などがある。井戸は調査区北半に多く検出した。土壙は大型で深く、その多くは江戸時代末の火災後の廃棄坑と考えられるものである。また、南半では路面状の礫敷きを検出しているが、これに伴う北側溝は検出できなかった。

鎌倉時代から室町時代の遺構には、柱穴・井戸・土壙・溝・路面、北側溝などがある。柱穴は多数検出したが、特に Y=-21,850 m ライン付近に帯状に重複する南北方向の柱穴列群を検出した。路面は、室町時代と鎌倉時代の 2 面を確認し、これに伴う北側溝をそれぞれ検出している。また、室町時代の北側溝の北側、六条坊門小路の北築地推定ライン付近には、東西方向の布掘りの柱穴列を検出した。

平安時代の遺構には、柱穴・井戸・整地層・路面、北側溝などがある。井戸は 1 基あり、径 1.5 m の円形掘形で、底面では一辺 0.8 m の方形を呈する (井戸 392)。このことから、木質は残存していなかったが、井戸 392 は底面に木枠が施された素掘りの井戸と考えられる。路面は、中期と後期の 2 面とそれぞれに伴う北側溝を検出した。

遺物は、弥生時代から現代に至るものが、整理箱に 168 箱出土した。土器類・瓦類・石製品・

土製品・金属器・銭貨などがあるが、圧倒的に江戸時代以降のものが多い。弥生・古墳時代の遺物は後世の遺構に混入して出土したもので、弥生土器・土師器・須恵器のほか、石包丁未製品も出土した。これらは砂礫層に含まれていた遺物であると考えられる。

小結 本調査では、平安時代中期・後期・鎌倉時代・室町時代それぞれの六条坊門小路の路面、北側溝を検出した。路面の北端、つまり北側溝の位置については、各時期により出入りがあるものの、ほぼ推定ラインを踏襲して設けられていたと考えられる。

宅地側については、平安時代から室町時代の柱穴を検出したが、建物としては確認できなかった。しかし、Y=-21,850 mライン付近で検出した鎌倉時代から室町時代の南北方向の柱穴列群は、東三行の東約1 mにあたる。推定とはややずれるものの、鎌倉時代から室町時代においても平安時代の宅地境がほぼ踏襲されていたものと考えられる。

(高橋 潔・平方幸雄・丸川義広)

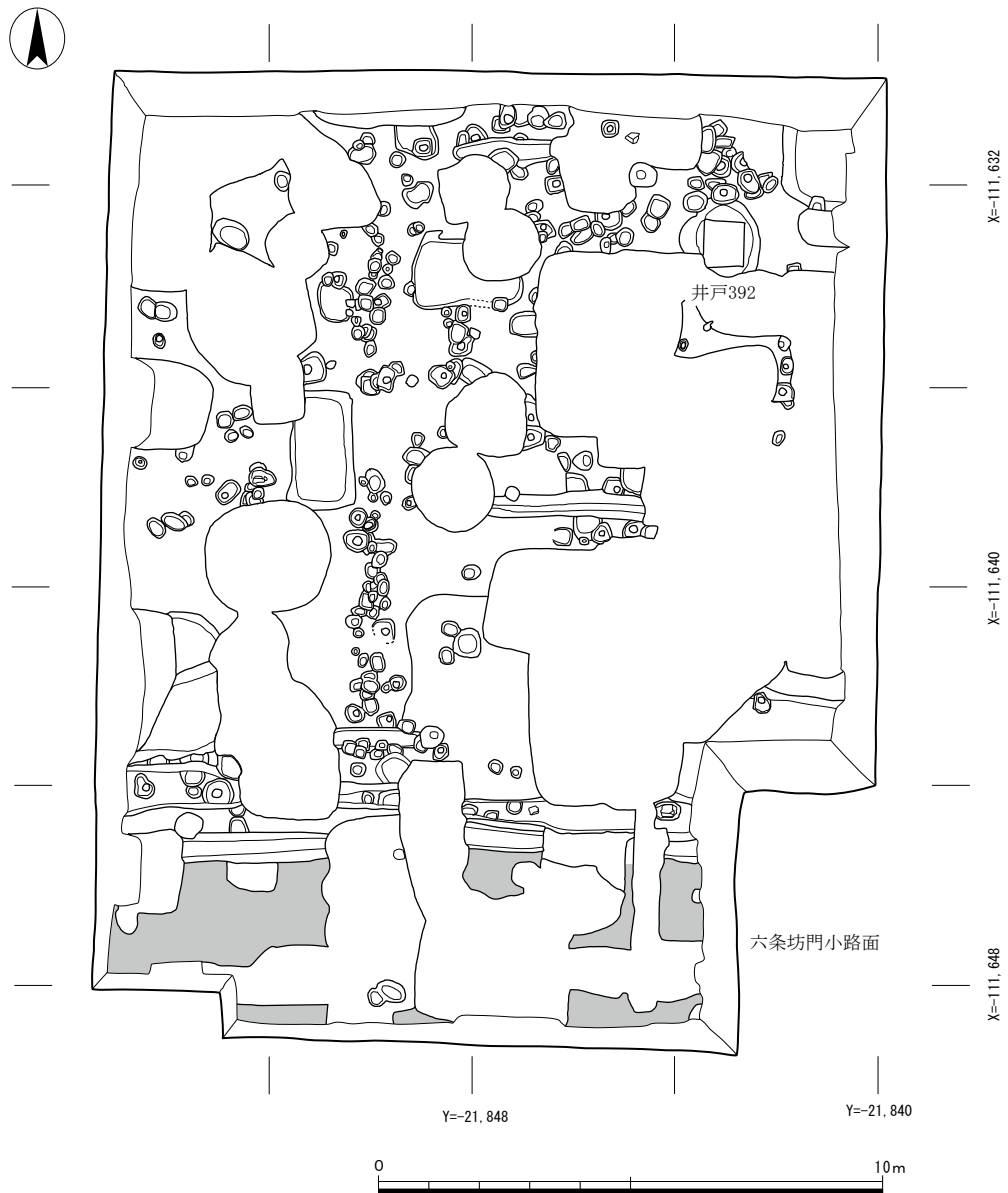


図30 遺構平面図（平安時代から室町時代）(1:150)

13 平安京左京六条三坊3 (図版1・15～17)

経過 調査地は烏丸通五条交差点の北西部で、東は烏丸通、西は諏訪町通、南は五条通に面している。各通りに面して民家やビルが所々に残る不定形な敷地である。敷地は平安京左京六条三坊十町の南東部のほぼ4分の1を占める。当地は、平安時代後期に、たびたび京内御所として利用された「小六条殿」の推定地の北辺にあたり、関連する遺構の検出が期待された。また、敷地の南端に六条坊門小路が、東端に烏丸小路が検出されることも予想された。6箇所の調査区を設定し、調査に着手した順に1～6区とした。

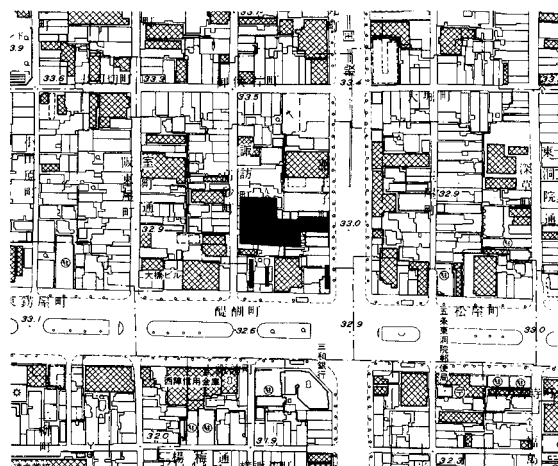


図31 調査位置図 (1:5,000)

平成2年(1990)8月18日には、地元対象の現地説明会を実施し、約30名の参加を得た。1区の遺構平面図は最終面を除いて、写真測量で作成した。

遺構 基本層序は次のとおりである。第1層は、江戸時代の整地層で、厚さは40～80cmある。1区では現地表下1.0～1.2mに及ぶ。層中に焼土層を含む細かな整地層を数面認める。第2層は、室町時代の整地層。暗褐灰色の砂泥層で、厚さ30～50cmある。遺構埋土と区別が付きにくい。部分的に2層以上に細分できる箇所がある。第3層は、平安時代後期から鎌倉時代の整地層。暗灰黄色から暗オリーブ色の砂泥から粗粒砂層で、厚さは約30cmある。6区の南部にのみ認める。第4層は、平安時代後期の整地層。灰黄褐色から灰オリーブ色の砂泥層で、厚さ30～50cmある。調査区全域にわたり厚く堆積する。第5層は、平安時代前期の堆積層。暗灰黄色のシルト層に中粒砂から粗粒砂が混入し、厚さ10～20cmある。人為的な整地層か湿地の自然堆積層かは明らかでない。第6層は、古墳時代の堆積層。暗灰黄色からにぶい黄褐色の砂礫から粗粒砂からなる水成層で、布留式土器を包含する。第7層は、黄褐色の砂礫層。堅く締まり、人工的な遺物を含ま

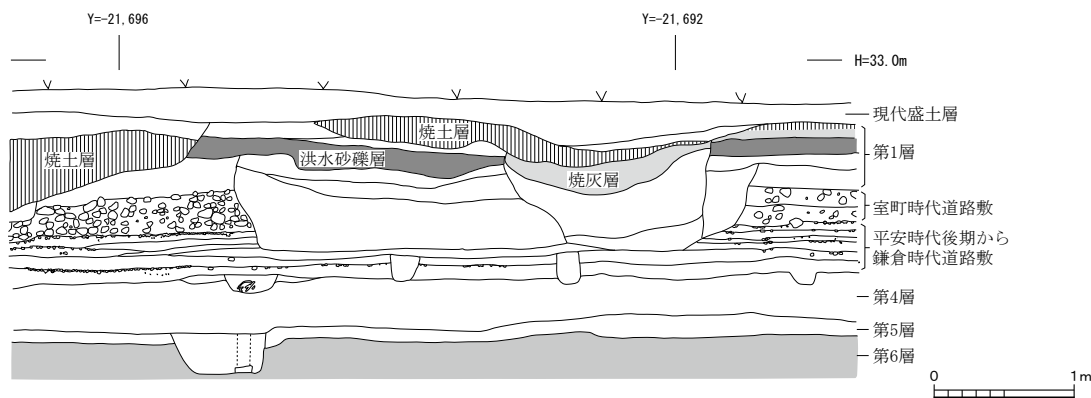


図32 6区断面図 (1:50)

ない。

飛鳥・奈良時代の遺構は第6層の上面で検出した。北東から南西方向に流れる自然流路540は、最下層に7世紀後半から8世紀にかけての須恵器・土師器を包含する。

平安時代前期の遺構も同じく第6層の上面で検出した。6区の東半で小規模な柱穴や、東西溝を検出したが、建物などとして認識できない。また、この時期の烏丸小路、六条坊門小路の路面や側溝は検出していない。自然流路540は飛鳥・奈良時代と同じ位置に存続する。

平安時代中期の遺構は第5層上面で検出した。庭園遺構と考える池500は、拳大の礫を肩部から池底に敷きつめた浅い溝状の遺構である。細長く溝状を呈するものの、1区の西部では緩やかに広がり、全体で高低差がほとんどないことから、遣水の遺構ではなく池の一部と考える。1区西半部では、自然流路540の北肩を整地してその上に築く。池は調査区の更に西方に広がり、1町以上を占地する邸宅の園池と考える。園池に伴う遺構としては、池に架かる橋の橋脚と考える柱列を検出した。景石や、庭園に伴う建物などは検出していない。園池の北東部で東西方向の柱列を検出した。園池と同時に存在した遺構かどうか明らかでない。6区の東部では、小規模な柱穴群や、南北溝を検出した。これらの遺構は平安時代後期の厚い整地層（第4層）で埋められる。この時期の烏丸小路および六条坊門小路の路面や側溝は検出していない。

平安時代後期（11世紀後半）の遺構は第4層の上面で検出した。1区と6区を東西に横切る溝480を検出した。1区では溝480の南肩から、更に南の溝486との間に小礫敷の路面を検出した。築地は検出していないが小路幅で復原でき、これを小六条殿の造営に伴い、南の左京六条三坊十一町が北に拡張された結果移動された六条坊門小路と理解した。6区の東壁脇で烏丸小路の西側溝を検出した。2・3・4区では通常の位置に六条坊門小路の路面と北側溝を検出した。

12世紀には、付け替え道路は北側に拡幅され、路面の幅だけで12m以上に及ぶ。北側溝は6区の北壁を部分的に拡張して検出した。南側溝は溝486が踏襲されているものと思われる。路面の礫敷きは径5cm以下の礫を敷き詰めた堅固なものである。路面上には多数の轍を認めた。2・3・4区で六条坊門小路は検出されない。小六条殿の構造などを直接示す遺構は明確に検出していない。5区では、北側宅地内の東西内溝と素掘りの井戸を検出した。付け替え道路の整地層は暗灰色のシルト質の層とオリーブ灰色の泥砂層の互層で、路面は大きく2時期を認める。新しい時期の道路を鎌倉時代前半（13世紀）のものと認識した。この時期の付け替え道路は路面の南半分が宅地に取り込まれ狭くなる。南側溝を認めず、布掘りの柵列を検出した。

室町時代の遺構は第2層の上面で検出されるべき遺構であるが、多くは第3層上面で検出した。付け替え道路は同様の場所に存続する。道路部分の整地はこぶし大の礫を多量に含むもので、4層に細分できる。しかし、各層の上面が路面として機能していたかどうかは明らかでない。道路の南側には長楕円形の塀の掘形を連続して検出した。道路の北側で、平安時代の北側溝と同じ位置に、室町時代末期の濠を検出した。3区では、烏丸小路の西を区切ると考える柵列を検出した。1区の西部と5区の西部に南北方向の柵列を検出した。柵列の東側を宅地、西側を町の中央を南北に貫く道と考える。柱穴は多く検出した。6区と1区の南西部は柱穴が特に集中しており、同

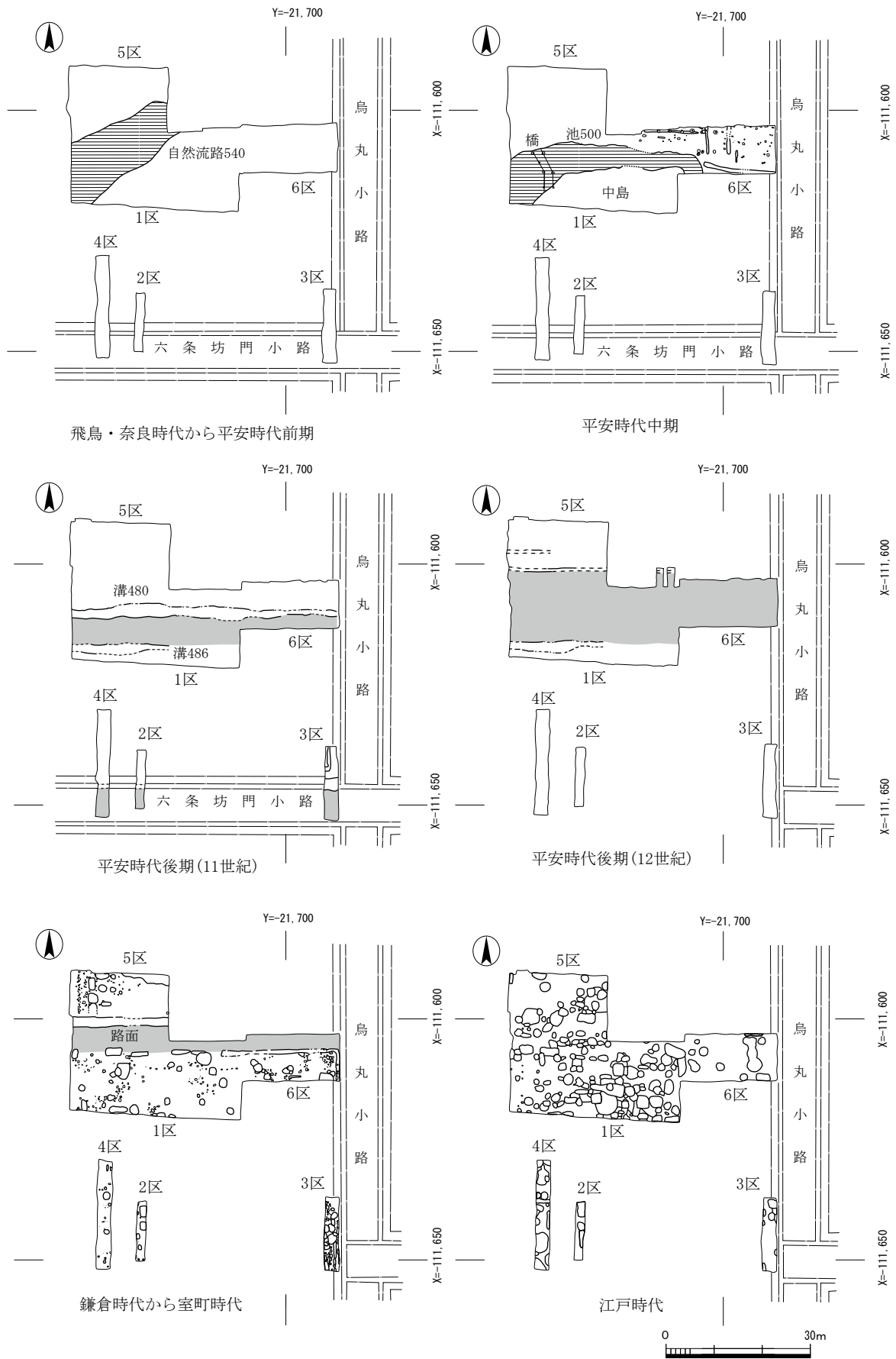


図33 主要遺構の変遷概念図 (1:1,200)

じ場所に継続して掘立柱建物が営まれていたものと思われる。一方、1区の東半は柱穴がまばらで、井戸を集中して検出した。

付け替え道路上に江戸時代前期以降の遺構が存在する。この時期以前に、付け替え道路は通常的位置に戻されたと考える。全調査区で、井戸、土壙などを多く検出した。18世紀以降のものが多く、江戸時代前期の遺構は少ない。

遺物 近世の遺物量が多く、全出土遺物の約50%に及ぶ。江戸時代中期から後期の遺物が主で、桃山時代から江戸時代前期の遺物は少ない。伏見人形と呼ばれる土人形や小型土製品が多く出土している。室町時代の遺物は包含層、路面の整地層、柱穴、井戸、土壙から出土しているが、まとまった資料は少ない。5区の土壙からは青銅器の椀・鉢類の鋳型が出土している。雷文や菱形の文様が刻まれる。平安時代末期から鎌倉時代の遺物は、遺構からまとまった状態で出土していない。6区の柱穴255からは水銀が出土している。液状の細粒が土に混入した状態で出土した。平安時代後期の遺物は、柱穴、土壙、井戸、整地層、溝などから出土した。付け替え道路の北側溝である溝480からは多量の土師器皿が出土している。平安時代中期の遺物は池500から土器類が多く出土している。平安時代前期の遺物は自然流路540の北西方肩口でまとまって出土した。弥生時代から奈良時代の遺物は主に自然流路540や第6層から出土している。

小結 調査地内の景観の変遷を跡付けことによって、まとめとする。

飛鳥・奈良時代に形成された自然流路は確実に平安時代前期まで存続し、平安時代中期に入ると、流路の一部を利用した園池を伴う邸宅が営まれる。11世紀には園池は埋められ、厚い整地層に覆われる。11世紀後半には調査区の南端にあった六条坊門小路が通常的位置より約36m北に移動される。付け替え道路は12世紀には小路を大きく上回る規模に拡幅される。小六条殿が文献記録に初めて登場するのは嘉承二年(1107)で、付け替え道路の拡幅時期に一致している。とすれば、これに先立つ小路幅の付け替え道路は存続時期が短く、小六条殿造営工事に伴う仮設のものとして理解できよう。なお、小六条殿が北の街区に突出して存在していたことは、九条家本『延喜式』「平安京図」の記載と一致する。小六条殿は仁平元年(1151)の焼亡以後、古記録に登場しない。この事実に呼応するかのように、鎌倉時代には付け替え道路の南半分は宅地に組み込まれ、再び小路規模の街路になる。付け替え道路の両側は、室町時代には小規模な建物が集中・継続して営まれ、いわゆる「町」の景観を呈するに至る。付け替え道路は、天正地割りの施工を契機に本来の位置に戻されたと考える。小規模な宅地の集住形態は、江戸時代を経て現在に至っている。

(内田好昭・丸川義広)

14 平安京左京七条三坊

経過 この調査は、下京区新町通正面下る平野町に所在するマンション新築工事に伴って実施した。調査地は、左京七条三坊三町に比定され、その東端中央南寄りに位置する。当該地は、東市の市町の東に接した宇多上皇の御所の一つ亭子院と、西洞院大路を挟んだ東にあたる。周辺には、藤原定家の『明月記』などで知られる七条町があり、また鎌倉時代から室町時代の東本願寺古墓群にもあたる。桃山時代から江戸時代には西本願寺の寺内町、寺内九町組の内良町

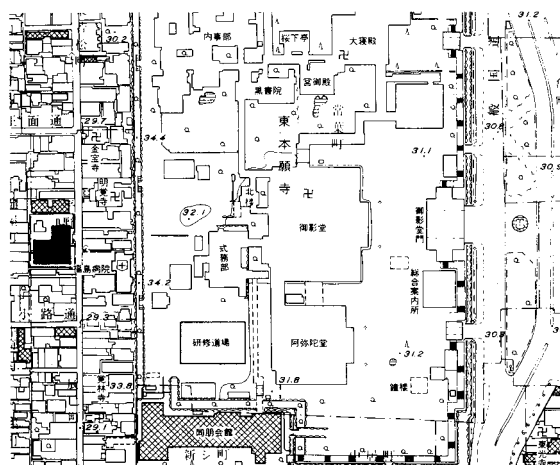


図 34 調査位置図 (1 : 5,000)

に所属していた。調査は、工事範囲を対象とした 620㎡の調査区を設定し、平安時代から江戸時代に至る各時期の遺構、遺物を検出し、その変遷を明らかにすることができた。

遺構 基本層序は、現地表から厚さ 30cm が明治時代以降の整地土、幕末の火災による焼土を含む整地土が厚さ 10cm、江戸時代後期の暗褐色砂泥層が厚さ 20cm、江戸時代中期の 2 度の洪水層が厚さ 20cm、その下は江戸時代前期の灰黄褐色砂泥層が厚さ 15cm で堆積する。これを第 1 層としてその上面から調査を開始した。第 2 層は桃山時代のいぶい黄褐色泥砂層が厚さ 10cm、第 3 層は室町時代前期のいぶい黄褐色砂泥層が厚さ 5cm、第 4 層も室町時代前期の黒褐色砂泥層が厚さ 5cm、第 5 層は南北朝期の黒褐色泥砂層が厚さ 10cm、第 6 層は鎌倉時代前期の黒褐色砂泥層が厚さ 10cm、第 7 層は平安時代後期のいぶい黄褐色砂泥層が厚さ 15cm、その下には部分的ではあるが淡緑色泥砂層が厚さ 10cm ほど認められ、以下は灰黄褐色砂層と砂礫層の互層の流路堆積となる。

検出した遺構群は、総数 1,352 基を数える。これらは連続するものではなく、室町時代後期から戦国期の間は顕著な遺構がなく、空白期であることが判明した。遺構群の在り様から、平安時代後期以前、平安時代後期後半から室町時代前期後半まで、桃山時代から江戸時代の 3 時期に大別することができる。このうち平安時代後期後半以降のものは町家に関連するものと考えられ、室町時代前期後半まで火災層を含む 6 時期にわたる変遷が確認できた。

平安時代以降の遺構群が成立している面は流路の堆積層で、調査区内では方向や肩部を確認できず、古墳時代の磨滅した土器片が出土したに過ぎない。平安時代前期から後期前半のものは、柱穴、井戸、土壇、落込などでその密度は疎らである。井戸は調査区西半中央で 1 基確認し、掘形 1.9 × 1.5 m、深さ 60cm を測り、掘形内には一辺 90cm の方形横棧縦板組みの井戸枠があり、11 世紀中頃の遺物が少量出土した。

平安時代後期後半のものは、調査区全域で密集してあり、その分布から大きく 2 群に分かれる。一つは三町の北五・六門境界と町小路西側溝に接する所で 4 間 × 2 間の小規模な掘立柱建物があ

り、その北側には素掘りの井戸を伴う。もう一つは北六門の範囲内に収まり、町小路西側溝から宅地内に入った所で1棟ないし2棟の掘立柱建物で構成される。西側のもは東西6間以上、南北2間の東西棟で身舎内には甕の据え付け跡と考えられる浅い半球状の穴が東西に2列並ぶ。これらは3回以上の建て替えが認められる。鎌倉時代前期のものは、前代の配置を踏襲するが、建物はやや小規模となり、その内には甕の据え付け跡もみられない。ただ前代より井戸、土壇、土器溜などが目立ち、建物には火災痕跡がみられる。

鎌倉時代後期には、幅4mの東西方向の壇状の高まりがみられ、南肩に小規模な柱穴や川原石が列状に分布することから何らかの構築物と考えられる。また調査地南端でも壇状の高まりがあり、周囲に柱穴と礎石が巡るため建物の縁束と考えられる。2つの壇状の高まり間には埋甕、土器溜、土壇などがあり、その縁には土器溜が集中する傾向にある。南北朝期のものも前代の配置を踏襲するが壇状の高まりは埋められる。高まりがあった所には、一辺4mの方形土壇があり、その北にも一辺4m以上の大規模な土壇が2基あり、収納用の施設と考えられる。

室町時代前期前半は、調査区西南部で4間四方の礎石建物が1棟あり、西に廊が付く。建物の北側には方形・長方形・楕円形などの集石遺構、井戸、埋甕、土器溜、土壇などが集中する。調査区東端で町小路の西側溝と考えられる南北方向の溝がある他、建物の北側にも幅40cmの東西方向の素掘り溝があり、いずれも宅地境界を示すと考えられる。

室町時代前期後半のものには、町小路西側溝沿いに東西5.5m以上、南北6mの範囲を囲むように小規模な溝が巡り、小区画を為す。その奥には南北方向に井戸が1列並ぶことから、小単位の宅地が想定される。溝で囲まれた範囲内

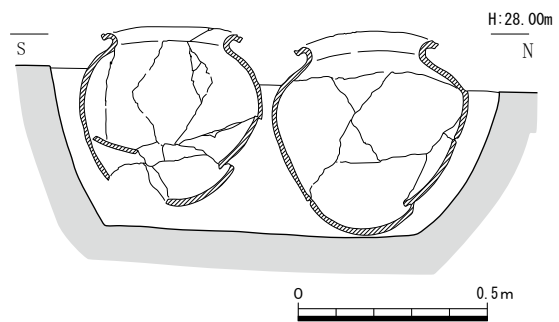


図35 甕821・822断面図 (1:20)

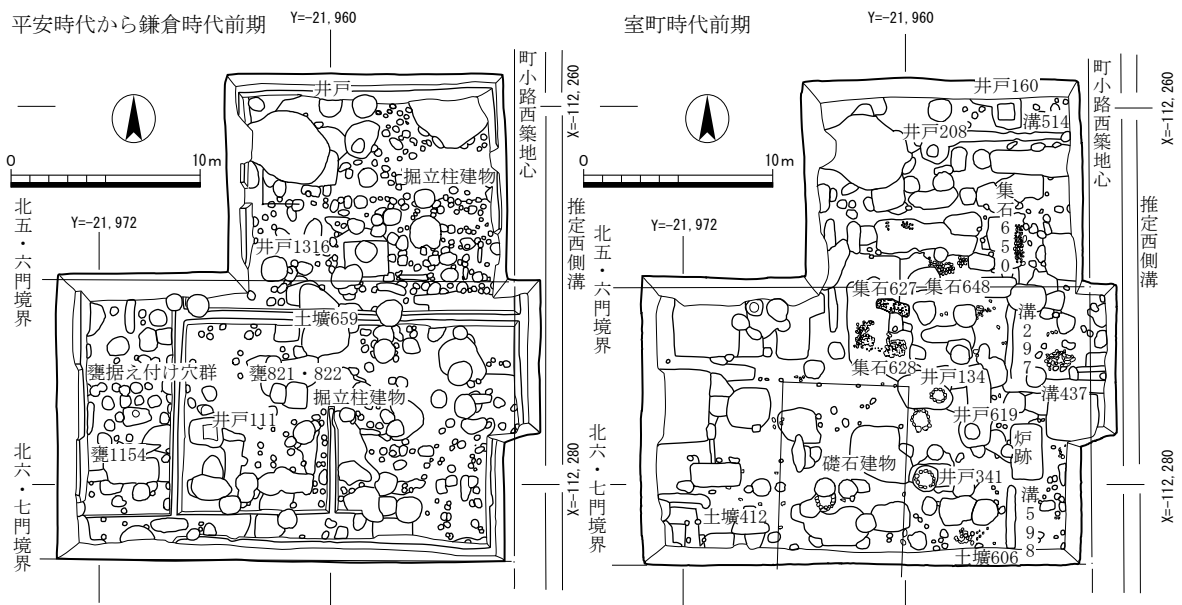


図36 遺構平面図 (1:400)

には常滑の甕の破片が多量に出土し、周辺からは穴のあいた甗、鉢形の土師器、砥石をはじめ多量の鋳型が出土する。またその南には南北2m、東西0.5mの瓢形の炉が1基確認され、工房に関連する施設とみられる。

桃山時代以降のものは、桃山時代の大規模の土壇があるだけで顕著なものはなく、江戸時代初期以降、町小路に沿って方形の土壇が並び、調査区南端で東西方向の通り庭や、井戸、石組、桶据付跡が認められた。宅地の奥には土蔵の基礎、多量の鋳型や灰が詰まった土壇、カマドなどがあることから、当地は、細工師に関わる宅地であったことが判明した。

遺物整理箱で770箱出土し、古墳時代から江戸時代までのものがある。その中でも鎌倉時代から室町時代前期後半までのものが約7割を占める。内訳は土器類が多数を占め、土師器が多い。以下特徴的なことについて概略する。

鎌倉時代前期には土師器皿の出土が急増し、中国宋代の青磁・白磁・青白磁と共に福建省泉州窯の施釉陶器盤がみられる。鎌倉時代後期になるとこの傾向はより顕著となり、しかも土師器皿を多量に廃棄した土器溜がみられる。また調査区西端や町小路寄りでは、内面が磨滅した土師器鉢、長方形の有孔甗、砥石など生産工房に関連する遺物の出土も顕著となる。調査区北部中央で確認した土壇S K 814では、次のような中国陶磁器の割合を示す。総数54点で青磁31(57%、無文鉢3、連弁文17、劃花2、皿9)、白磁16(30%、口禿皿7、口禿鉢1、皿4、鉢1、壺3)、青白磁2(4%、鉢1、合子1)、施釉陶器4(7%、盤2、褐釉壺2)、天目茶鉢1(2%)で、白磁が一定程度を占める。南北朝から室町時代前期には、前代でみた生産工房に関連する遺物に加え、仏具に関連する鋳型が多量に出土する。

小結 平安時代末期以降の遺跡は、多量の中国陶磁器の出土などから「明月記」にみる「土倉」に関連するものと思われる。時期が下るにつれて、生産工房や小規模区画が出現することは、土倉の一郭に零細な職人の町屋が併設され始めたと推定される。(堀内明博)

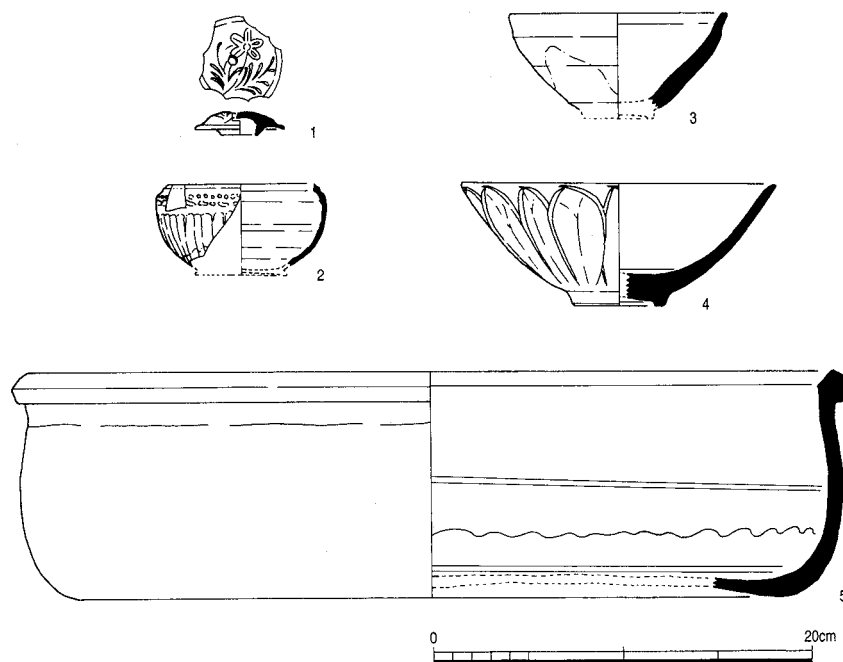


図37 遺物実測図(落込668:1・2青白磁 3天目 4青磁 土壇659:5三彩)(1:4)

15 平安京左京八条三坊1 (図版1・19)

経過 調査地は左京八条三坊十六町の北西部に該当する。八条三坊ではこれまでに多くの調査が実施されているが、十六町内の調査としては、昭和61年度に本調査地の南側で発掘調査が行われ、今年度も東隣で発掘調査が実施された。既往の調査では、平安時代から近世にいたる多数の遺構、遺物が検出されており、周辺が非常に密度の高い遺跡であることが知られている。本調査地の北端付近は七条大路南側溝の推定地にあたるが、東隣の調査においても数時期

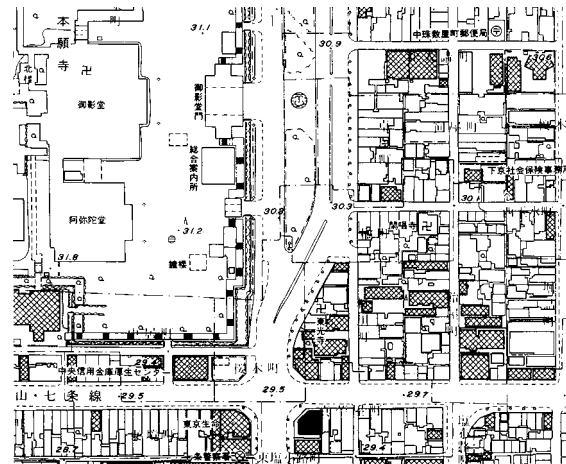


図38 調査位置図 (1:5,000)

の側溝が検出されている。調査対象地の南半は既存建物の地下室によって遺構が完全に破壊されていることが事前に判明していたことから、敷地北部に七条大路南側溝の推定地を含む形で調査区を設定した。調査の結果、井戸、土壇、柱穴、溝など平安時代から江戸時代にわたる多数の遺構、遺物を検出した。特に七条大路に関しては、数時期の南側溝を検出し、それらに伴う路面の一部も確認することができた。

遺構 総数500基の遺構を検出した。主要な遺構のうち、七条大路に関連するものは、南側溝群、路面の一部とみられる礫を敷き固めた整地層群である。南側溝は平安時代前期にさかのぼる1条の他、平安時代後期2条、および鎌倉時代のものを確認している。平安時代前期の溝には南肩部に護岸の施設とみられる小杭列の痕跡が認められた。平安時代後期以降のものは、堆積状況

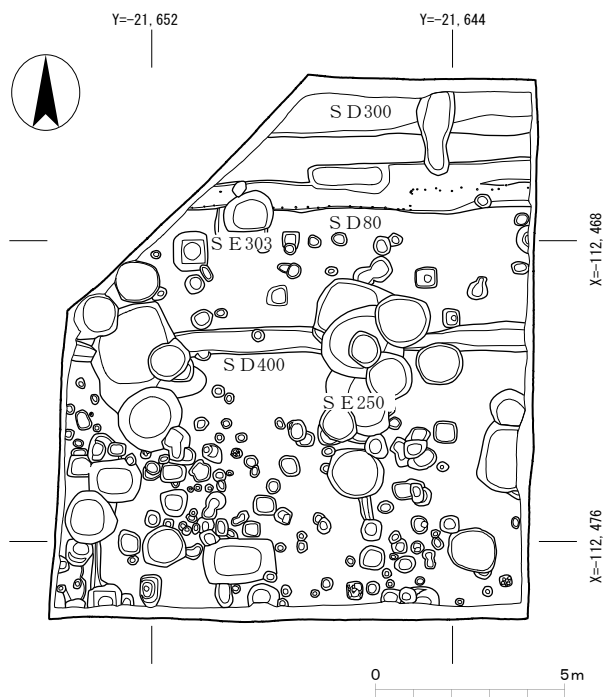


図39 遺構平面図 (1:200)

や路面整地層との関係から更に数時期に分けることができる。また、側溝群の南側には溝に沿って整地層の盛り上がり認められ、柱穴列が数時期にわたり重複して検出された。築地、柵の遺構とみることができる。室町時代以降の側溝については確認できず、平安時代には路面であった部分に室町時代の土壇などが検出されている。この時期には七条大路の路幅が縮小しており、側溝が存在するとしても、調査区の更に北側に位置すると思われる。井戸は平安時代後期から江戸時代のものを合わせて22基検出したが、木枠や石組みなど構造の明らかなものは少ない。この他、各時代を通じて柱穴と思われる小ピットを多

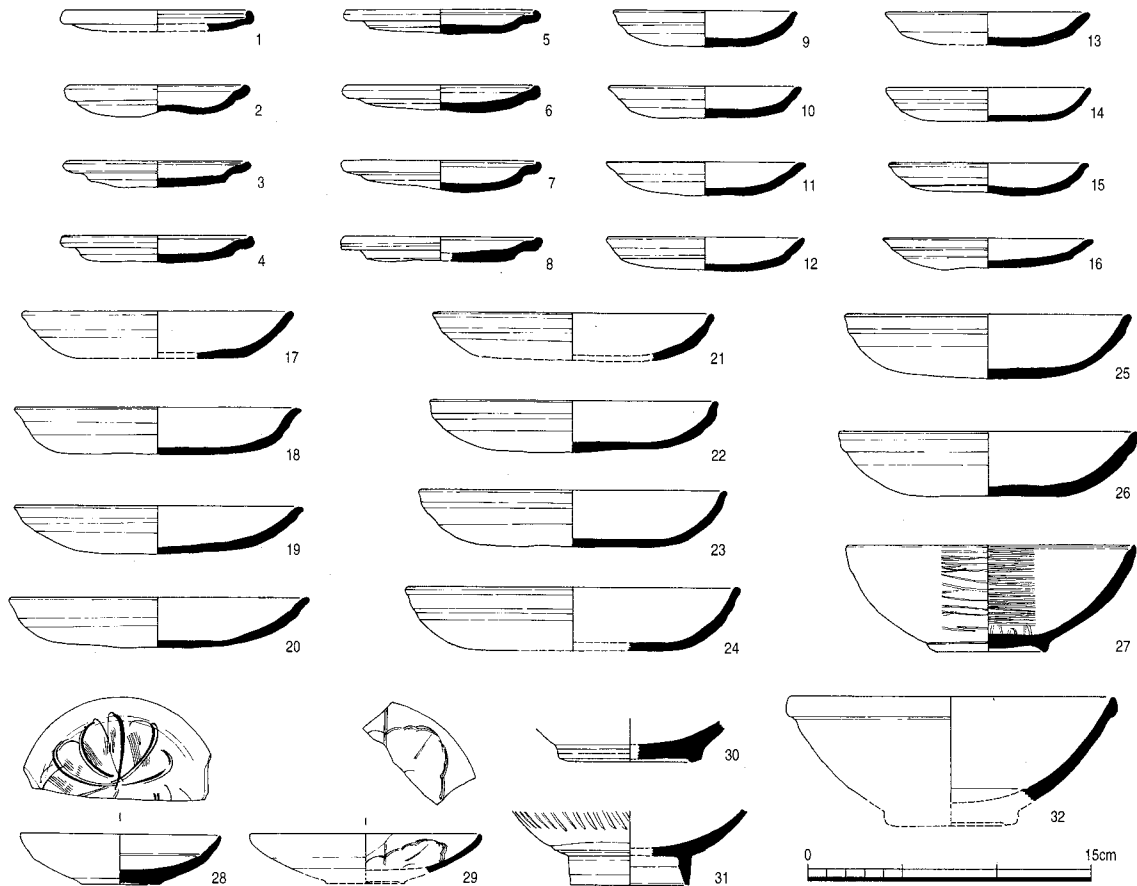


図40 S D 300 出土土器実測図（1～26 土師器、27 瓦器、28～32 白磁）（1：4）

数検出したが、建物としてのまとまりを捉えることはできなかった。

遺物 遺物の大半は土器類である。少量の瓦類や鉄釘、銅銭などの金属製品、木製品があるが、木製品は保存状態が悪く、形態の判明するものはない。土器類はほとんどの遺構から出土している。中でも溝、井戸からの出土量が多い。平安時代後期の七条大路南側溝の堆積土や上部の整地層からは土師器を主体とする土器群が出土している。その内一部整理の進んでいるS D 300のものを図示した。平安時代前期の七条大路南側溝からは土師器、須恵器、黒色土器、緑釉陶器、灰釉陶器、瓦が、室町時代以降の各遺構からは土師器、瓦器、陶磁器類が多量に出土している。

小結 今回の調査では、七条大路に関する路面や側溝などの遺構を、時期的な経過がたどれる良好な状態で検出することができた。調査区は烏丸小路との交差点に近接し、生活密度の高い地域に属している。遺構や遺物の出土状況もそうした歴史的背景を反映したものと捉えられるが、全体を通してみると、鎌倉時代後半から室町時代にかけての遺構、遺物が、前後の時期と比較して少ない。この結果は、この時期に本調査地の北側一帯が墓域化（東本願寺前古墓群）することに関連するものであろうか。同時期の七条大路側溝が未検出であったことも、その関連の中で捉えられる可能性がある。（平尾政幸）

16 平安京左京八条三坊2 (図版1・20)

経過 当地は平安京左京八条三坊十六町にあたる。近隣の調査で平安時代の遺構・遺物が良好に遺存する報告があり、遺構の検出が期待された。試掘調査を実施した結果、七条大路の路面、平安時代の遺物包含層の遺存状況が良好であることを確認したので、発掘調査を実施することになった。調査は、重機により地表下約1.1mまで掘り下げ、以下を手掘りで行った。

遺構 古墳時代の遺構は調査区の南半で検出した自然流路で、古墳時代後期の遺物を含んでいる。この流路の上面を平安時代前期の遺物を含む土層が覆い、これは整地層とみられる。

平安時代の遺構は中期以降のもので七条大路の路面、道路の南側溝、宅地内側溝、木組井戸2基 (S E 310・334)、根石・礎板・柱根を残した柱穴、土塋などを検出した。道路側溝は幅1.8m、深さ0.6mを測り、南側肩の底部に丸太材を置き、それを固定するための杭列を検出した。宅地内の溝は幅0.8m、深さ0.2mを測る。この両側溝の間が築地部分にあたるが、柱穴などの施設

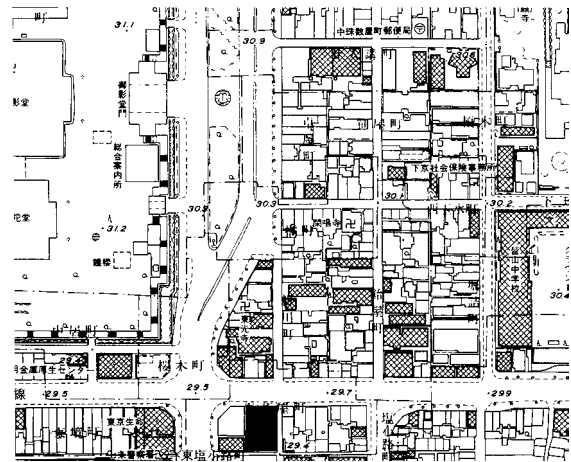
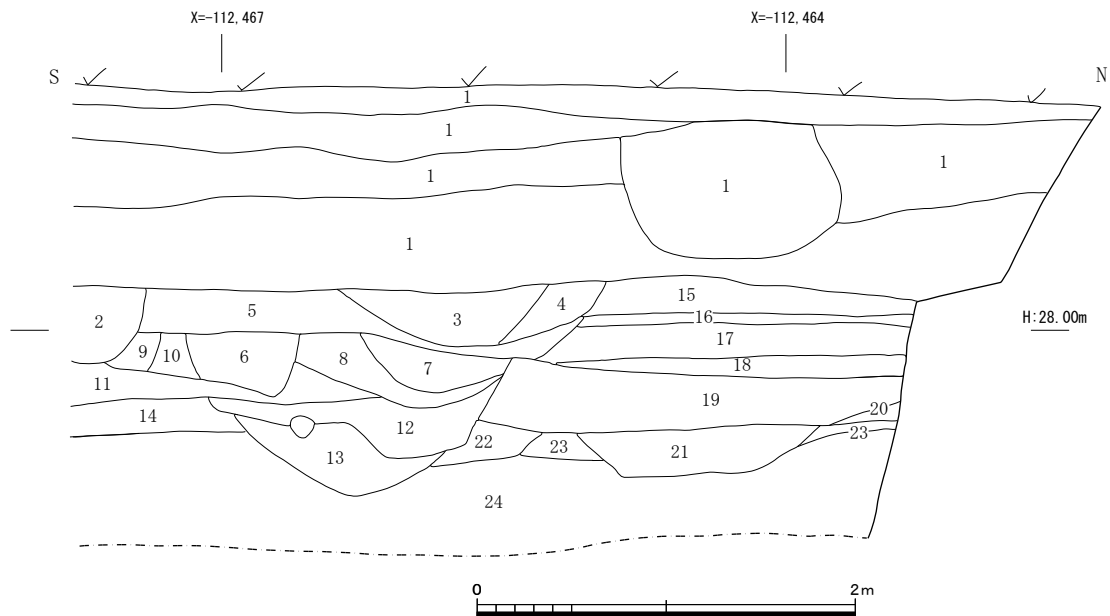


図41 調査位置図 (1:5,000)



- | | | |
|------------------------|-------------------------|-------------------------|
| 1 現代層 | 9 オリーブ褐色泥砂層 (10YR5/3) | 17 にぶい黄褐色層 (10YR5/3) |
| 2 暗灰黄色砂泥層 (10YR4/2) | 10 暗褐色砂泥層 (10YR3/3) | 18 灰黄色泥砂層 (10YR4/2) |
| 3 褐色砂泥層 (10YR4/4) | 11 オリーブ褐色砂泥層 (2.5YR4/3) | 19 オリーブ褐色砂泥層 (2.5YR4/3) |
| 4 にぶい黄褐色礫層 (10YR5/4) | 12 黒褐色泥砂層 (10YR3/4) | 20 黄褐色泥砂層 (2.5YR4/3) |
| 5 暗灰黄色泥砂層 (2.5YR4/2) | 13 褐灰色砂礫層 (10YR5/1) | 21 灰黄褐色泥土層 (10YR5/2) |
| 6 にぶい黄褐色砂泥層 (10YR5/3) | 14 オリーブ褐色層 (2.5YR4/3) | 22 褐色泥砂層 (10YR5/1) |
| 7 オリーブ褐色泥砂層 (2.5YR4/4) | 15 暗灰黄色砂礫層 (2.5YR4/2) | 23 灰黄褐色層 (10YR5/2) |
| 8 オリーブ褐色砂泥層 (2.5YR4/3) | 16 にぶい黄褐色層 (10YR5/4) | 24 黄褐色層 (10YR5/8 地山) |

図42 断面図 (1:40)

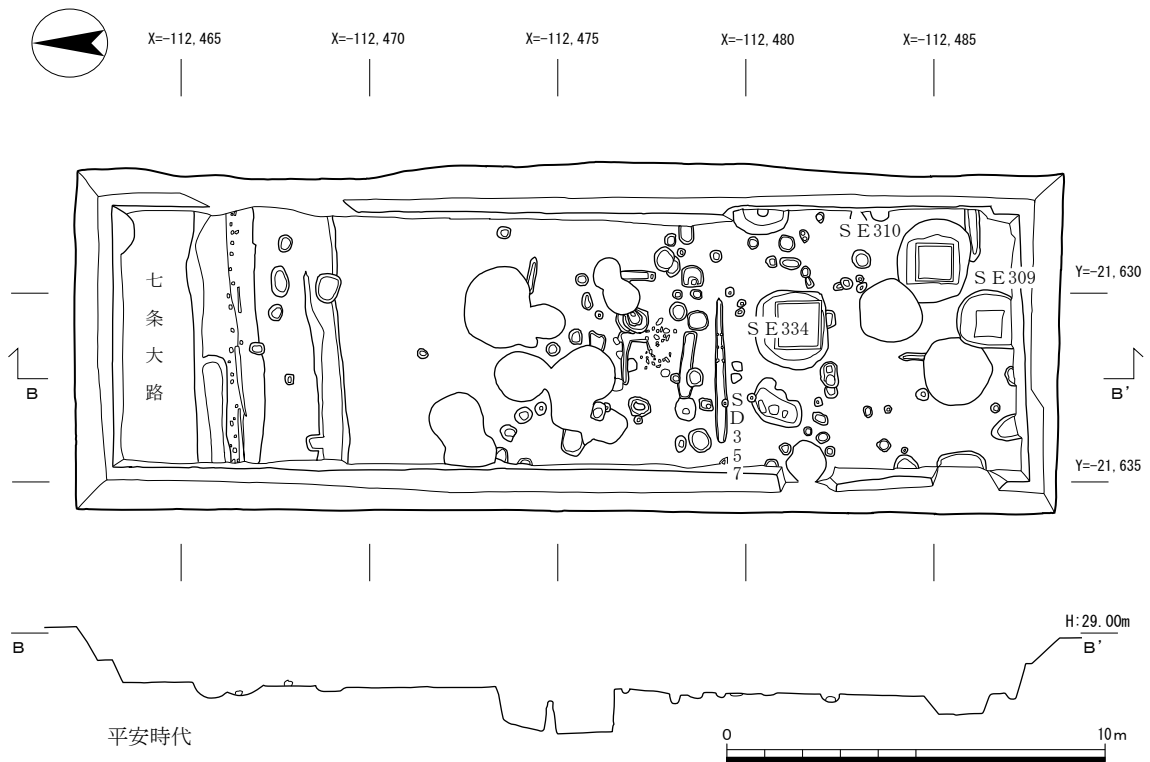
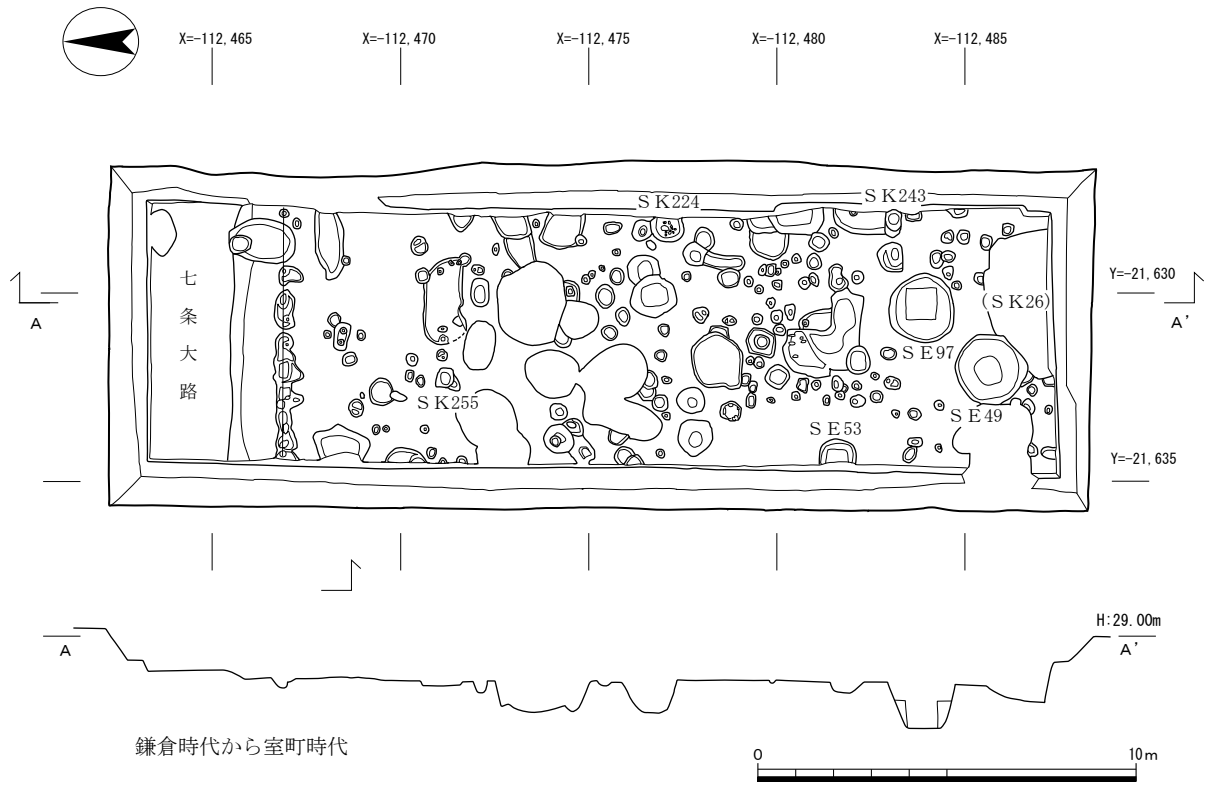


図43 遺構実測図 (1:200)

を検出することはできなかった。柱穴は宅地内溝から約6 mから約15 mの範囲に集中するが、建物には復原できなかった。柱穴が集中するほぼ中央で底板と側板で囲った木樋状の遺構（SD 357）を検出している。

鎌倉時代から室町時代の遺構には、七条大路の路面、路面に沿って底部が凹凸する布掘りの溝、横棧縦板組みの井戸（SE 53・97）、桶を井戸枠として使用した井戸（SE 49）、曲物を底部に据えた井戸状の土壇（SK 224・243・255）、小穴、土壇などがある。曲物を据えた井戸状の土壇は、他の木組み井戸に比べて浅いので湧水層に達しているのか不明である。鑄造関係の遺物が多く出土するので、鑄造に必要な水を溜める施設の可能性も考えられる。炭を多く含む土壇などもみつかっており、関連する遺構と思われる。七条大路路面の南辺で底に凹凸がある布掘り溝は、築地の基礎とみられる。その溝から南へ7～17 mの範囲にピットが集中している。土壇は柱穴群と重なるように営まれているが、井戸は柱穴群の南側で検出されている。また、調査区の南半では黄色の土を貼り付けた跡を確認した。

江戸時代の遺構には井戸、土壇、土蔵の掘り込み基礎などを検出した。土壇（SK 26）からは、鑄型・フイゴの羽口など鑄造に関する遺物が出土しており、付近に関連の遺構の存在が考えられる。

遺物 出土した遺物は整理箱で137箱分である。古墳時代の遺物には土師器、須恵器がある。平安時代前期の遺物は、須恵器、土師器、黒色土器、灰釉陶器、緑釉陶器（香炉）、長沙銅官窯の水注の破片などの輸入陶磁器、皇朝銭（神功開寶・承和昌寶）などである。平安時代後期の遺物は土師器、瓦器、輸入陶磁器、曲物、建築部材を転用した井戸枠などがある。鎌倉時代の遺物には、土師器、瓦器、宋銭、輸入陶磁器、陶器、滑石製の鍋、木製品（下駄・木槌・曲物）、鑄造に関する鑄型、埴埴、砥石なども出土している。その他、室町時代の土師器、陶器、江戸時代の土師器、陶磁器、フイゴの羽口、鑄型、和鏡がある。特記すべき遺物は少ないが、江戸時代の土壇（SK 26）より鑄型、フイゴの羽口、銅片などが出土している。鑄型には羽状の文様が認められる。また、同じ土壇より出土した径8 cmの円形の銅鏡背面には籬の上に飛禽が描かれている。

小結 今回の発掘調査によって、当地は古墳時代には自然流路であり、平安時代の前期から中期の間に宅地として整地され、後期には建物が建てられていたとみられる。鎌倉時代から室町時代にかけては、遺構の密度が高くなり、町屋として発展したと思われる。特に鑄造に関する遺構、遺物が多くみられ、近隣に七条仏所跡が比定されていることなどから、鑄造に携わる職人が住んでいた可能性が高い。江戸時代にも職人の町として発展したと考えられる。

各時代の七条大路路面と側溝を確認しているが、時代による規模の変化はほとんどない。路面の方が宅地より若干高くなるのが観察される。

（木下保明）

17 平安京左京九条二坊 (図版1・21・22)

経過 京都市南区西九条鳥居口町に所在するテニスコート・駐車場に開発計画が持ち上がり、平成元年(1989)試掘調査を実施した。調査は、試掘調査の成果に基づき、敷地北側の遺構の残存状態の良好な地区を中心とし、既存基礎の多い敷地南側の駐車場は、トレンチにより調査を進めることとなった。

調査対象地は20,000㎡を超える敷地を持ち、平安京左京九条二坊十五・十六町にあたる。敷地南に九条坊門小路北築地、東に西洞院大路西

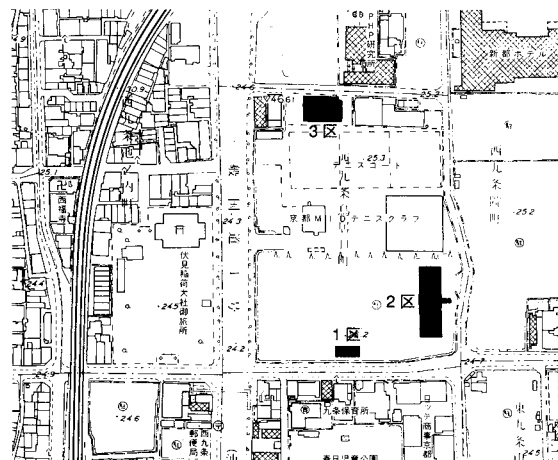


図44 調査位置図(1:5,000)

築地、北側の敷地内に針小路が推定され、また豊臣秀吉が洛中洛外の境に築いた御土居の堀が敷地西側に推定できる。本年度の調査は、営業中のテニスコートを除いた駐車場南側の部分から開始し、3箇所の調査を実施した。

遺構 1区 九条坊門小路北築地と十五町の東西中心部分の交点にトレンチを設定する。約1.5mの現代盛土層直下が砂礫層となる。この砂礫層には古墳時代・弥生時代の土器が少量包含されるが、すべて磨滅している。当調査区では、攪乱により遺構は検出していない。しかし、砂礫層上の一部に堆積が確認できた緑灰色微砂層からは、平安時代後期の土師器片が出土している。

2区 敷地東南にあたり、推定西洞院大路西側築地に沿うように調査区を設定した。調査区北側部分は旧工場基礎掘形が遺構ベースより深いことから基礎部分約200㎡の調査を放棄した。1区同様盛土直下が砂礫層で遺構面となり、いわゆる遺物包含層はない。検出した遺構は、近世の耕作に伴う多数の溝、鎌倉時代の井戸1基、平安時代後期の堀状の溝がある。鎌倉時代の井戸は、上部の削平や井戸枠の腐食が著しく、底部のみを検出している。井戸枠は縦板組みで出土遺物は少ない。平安時代後期の溝は、検出面での幅3.8m、深さ約1.2mを測る。東西方向の断面「U」字を呈する溝である。検出した位置は北五行と六行を区画する位置にあたり、東西約18mにわたって検出した。東側を拡張したが拡張区はベースの砂礫層が東に急激に下がっており、溝は検出できなかった。現在暗渠になっている西洞院川の削平によるとみられる。

3区 敷地北側にあたり左京九条二坊十六町になる。試掘調査では最も遺構・遺物の残存状態が良好とされた地点で、平安時代後期の軒瓦を多量に含む土壌などが確認されていた。調査区の基本層は約100cmの盛土層下に20cmの層厚で灰褐色泥砂層(旧耕作土層)が堆積し、以下、にぶい褐色砂泥層(10cm)、褐灰色砂泥層(15cm)が堆積し、諸遺構のベースである砂礫層となる。褐灰色砂泥層には少量の平安時代後期から鎌倉時代にかけての遺物を包含する。ベースの砂礫層からは、1・2区同様磨滅した古墳時代、弥生時代の土器が出土する。検出した遺構は、近世の耕作に伴う溝・暗渠、鎌倉時代から室町時代にかけての井戸6基・柱穴、平安時代後期の溝4条・

柵列5条・柱穴・不定形土壌がある。溝SD99は東西方向の溝で、ほぼ左京九条二坊十六町北四門・五門を区画する位置にあたる。また溝SD98は南北方向の溝である。溝SD96・91は溝SD99の南側に位置する東西方向の溝で、溝SD91はY=-22,165m付近で南流する。柵列SA97は溝SD99南肩部で検出した。径約20cmの柱痕を残す。また、柵列SA97の北約13.5mの位置に柵列SA92がある。柵列SA92の柱穴掘形は柵列SA97に比べて小さい。調査区西端でも3条の柵列を検出している。この内、柵列SA95は溝SD99・柵列SA97に直交して検出し、交点部分の柱穴は人頭大の川原石を根石としている。

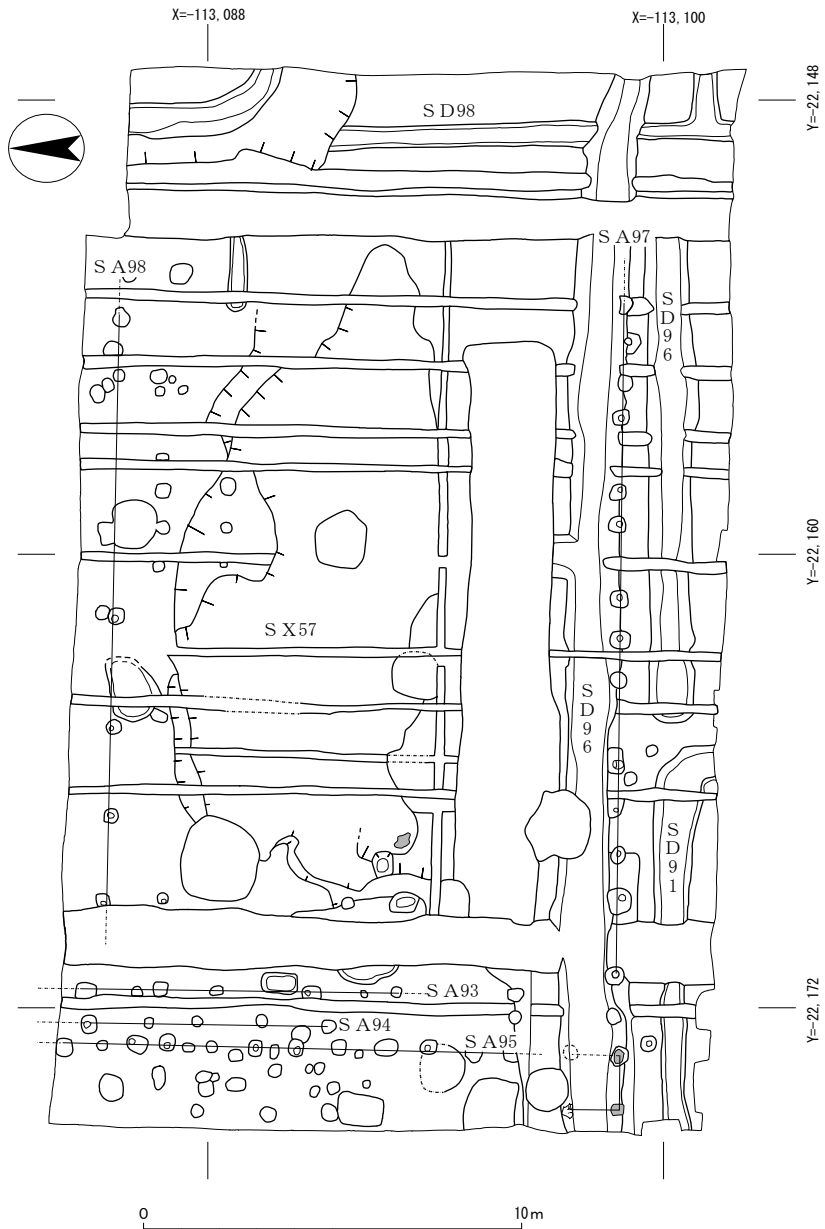


図45 遺構平面図(3区) (1:200)

不定形土壌SX57は埋土に多量の焼土・炭・灰を含み、また拳大の礫が混在している。平安時代後期の瓦が多量に出土した。井戸には石組1基、曲物1基、方形木枠組3基、羽釜の転用1基がある。

遺物 本年度の調査では整理箱に93箱の遺物が出土した。1区から3区を通じ遺構のベースとなる砂礫層から弥生時代後期の土器、古墳時代後期の土師器・須恵器が出土している。これらの土器はすべて磨滅している。2区溝、3区土壌などから平安時代後期の土器類・瓦類が出土している。また、3区の近世溝から「大伴」銘の軒平瓦が出土した。

小結 今回の調査では平安時代後期の遺構を中心に検出することができた。今後、継続的に進めていく近隣の調査の中で、平安京左京九条二坊十五・十六町の様相を明らかにすることができるであろう。

(菅田 薫)

18 平安京右京五条二坊1 (図版1・23)

経過 調査地は平安京右京五条二坊十町の中央に該当する。試掘調査によって対象地西部の大半が既設建物の地下室などで破壊されていることが判明したため、調査区は十町の東二行北三、四門の一部にあたる区域に設定した。調査区の西端部は既存基礎で破壊されていたが、他の部分では平安時代の遺構がよく残っており、掘立柱建物、土塋などを検出した。

遺構 平安時代の遺構は、整地層や旧耕作土を除去した現表土下約0.4～0.5 mに広がる地山の茶褐色砂泥層や暗褐色粘質土層の上面で、掘立柱建物3、柵1、土塋3を検出した。

S B 1 調査区中央やや北寄りの掘立柱建物。南北2間、東西3間以上の東西棟で、柱間は南北2.1 m (7尺)、東西1.8 m (6尺) 柱筋は2度40分西偏する。柱掘形は一辺0.5～0.7 mの方形。S B 2と重複する。

S B 2 調査区中央に位置する掘立柱建物。南北2間、東西3間以上、北と南に庇が付く東西棟で、身舎、庇とも柱間は2.4 m (8尺) 等間。身舎の西第1、2、4列には中央に東柱とみられる小柱穴を検出している。柱筋はほぼ方位に揃う。柱穴掘形は身舎と南庇が一辺0.7～0.9 m、北庇はやや小さく一辺0.5～0.7 mの方形。S B 1・3、S A 4、S K 55と重複している。

S B 3 調査区中央やや南寄りの掘立柱建物。東西いずれも妻柱は確認していないが、南北2間、東西2間以上の東西棟の一部とみられる。柱間は2.4 m (8尺) 等間。柱筋はほぼ方位に揃う。柱穴掘形は一辺0.9～1.0 mの方形。S B 2、S A 4、S K 55と重複している。

S A 4 南北方向の柵とみられる柱列。2.1 m (7尺) 間隔で3間分検出した。柱穴掘形は一辺0.4～0.5 mの方形。S B 2・3と重複している。

S K 47 S B 2、S A 4を切る深さ約0.1 m程の浅い土塋。西側は既存基礎で破壊され、形態は不明。遺物は少ない。

S K 54 調査区南端に検出した径1.1 m、深さ0.2 mの円形の小土塋。土師器、須恵器などが出土したが、量は少ない。

S K 55 調査区南寄りに検出した一辺約2.0 m、深さ0.4 mの土塋。堆積土は上層が茶褐色泥砂層、下層が暗灰褐色粘質土層の2層に分けることができる。土師器、須恵器、緑釉陶器の他、土馬が出土したが、層による遺物の型式差はない。S B 3を切り、S B 2に切られている。

遺物 遺物は整理箱にして19箱出土した。大半が土器類で、少量の瓦、土馬、土錘などの土製品がある。S K 55と暗茶褐色砂泥層からは比較的多量の土器群が出土した。S K 55のものは破片も大きく、形態が明らかになるものが多い。

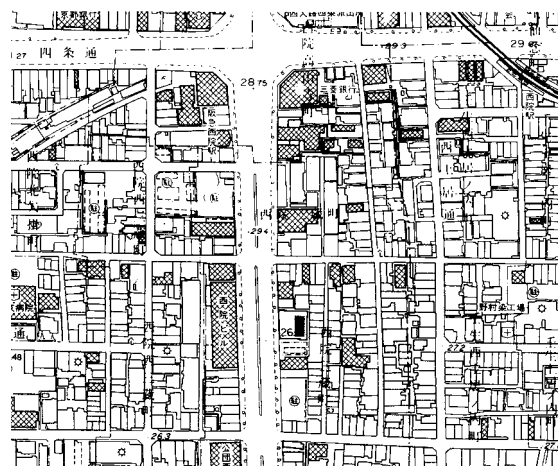


図46 調査位置図 (1:5,000)

S K 55 の土器類は総破片数にして2108片で、種類別の比率は土師器 91.5%、黒色土器 0.3%、須恵器 8.1%である。他に、緑釉単彩陶器の甑が1点ある。機能別の比をみると、供膳形態 88.9%、貯蔵形態 2.8%、煮沸形態 5.5%と椀、杯、皿などの供膳形態が圧倒的に多い。I 期中（9世紀前半）に属する土器群である。

暗茶褐色砂泥層出土土器群は、II期古から中（9世紀半ば～後半）に位置づけられる。総破片数は4540片で、各土器類は土師器 63.1%、黒色土器 6.2%、須恵器 20.7%、緑釉陶器 7.4%、白色土器 0.4%、灰釉陶器 2.4%の比率を占め、他に輸入陶磁器（青磁）が2片ある。機能別の比は、供膳形態 59.1%、貯蔵形態 12.1%、煮沸形態 14.7%となっている。供膳形態の内、土師器を除いた比率を示すと、黒色土器 18.0%、須恵器 22.2%、緑釉陶器 45.5%、灰釉陶器 11.6%、輸入陶磁器 0.3%で、緑釉陶器が高い比率を占めている。

小結 今回の調査によってこの地域には平安時代の遺構が良好に遺存することが確認できた。これら各遺構には重複関係があり同時期に成立したものではないが、出土遺物の年代観から、いずれも平安時代前期に収まるものと考えて良いだろう。調査区は五条二坊十町のほぼ中央部に該当するが、調査面積が狭小なため遺構の全体像が不明確で、宅地割りや建物配置などについて言及することはできない。なお、各遺構出土の土器群の型式や相互関係は表の通りである。

(平尾政幸)

表1 各遺構出土土器群の型式

遺 溝	土器群の型式	備 考
SB 3	I 期中（古相）	SK55 に切られる。
SK55	I 期中	
SB 2（抜き取り）	I 期新	SK55 を切る。
SK54	I 期新	成立面は暗茶褐色砂泥層の下部。
暗茶褐色砂泥層出土土器	II期古～中（古相）	
SB 1	不明	SB 2 と重複。
SK47	不明	SB 2、SA 4 を切る。
SA 4	不明	SB 3 を切る。

時期区分については、『平安京右京三条三坊』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第10冊 1990年報告 による。

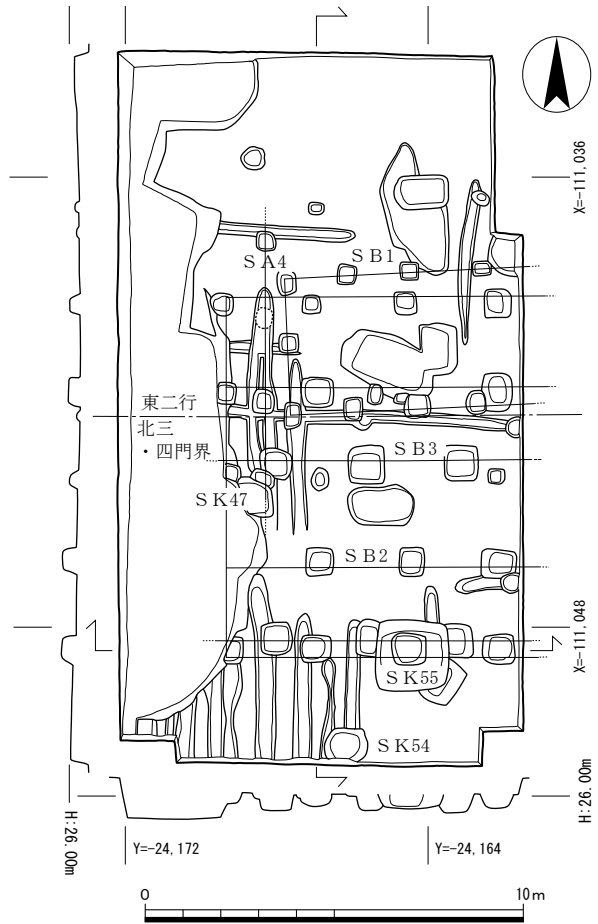


図47 遺構実測図 (1:200)

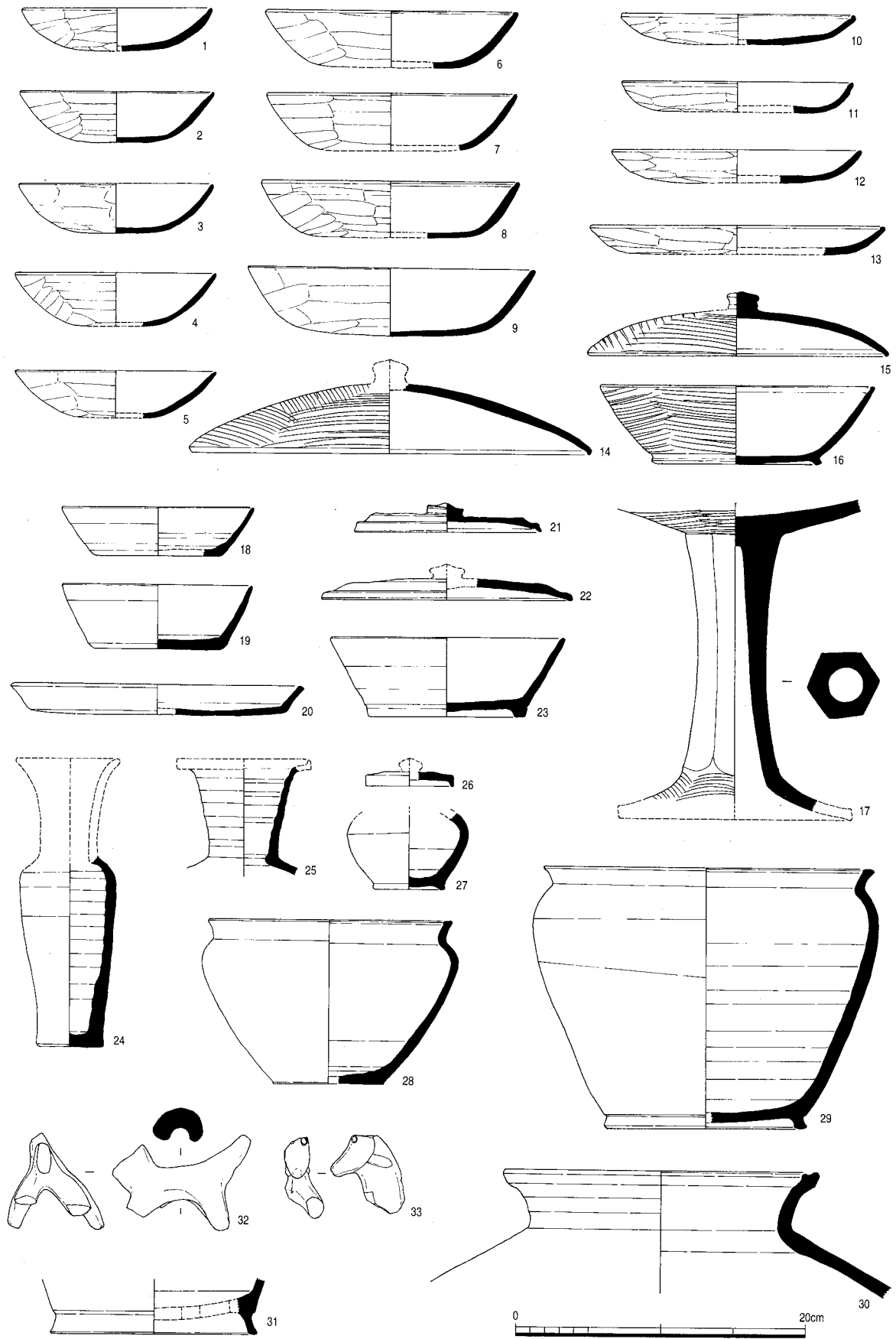


図48 S K 55 出土土器実測図 (1~17 土師器、18~30 須恵器、31 緑釉単彩陶器、32・33 土馬) (1:4)

19 平安京右京五条二坊2 (図版1・24)

経過 調査地は右京五条二坊十一町にあたり、調査区西側には野寺小路東築地の推定線が通る。本調査前の試掘調査で平安時代前期の柱穴を確認し、その資料を基に南北19 m、東西26.5 mの調査区を設定した。その後、建物の規模を確認するため調査区北東側を拡張した。調査は重機によって盛土、旧耕作土を掘削し、調査は人力によった。

調査の結果、平安時代の掘立柱建物2棟、平安時代以降から江戸時代の耕作に関連する溝数十条などを検出した。野寺小路に直接関連する遺構は確認できなかった。

遺構・遺物 基本層序は盛土と旧耕作土が25～35cmあり、次いで調査区東側を中心として厚さ20cmの平安時代の整地層が広がる。その下に地山とみられるにぶい黄褐色から褐色の泥砂・砂礫層がある。遺物は整理箱に10箱出土した。以下、検出した遺構・遺物を時代毎に記述する。

弥生時代は、遺構は検出していないが、石鏃と弥生土器小片が出土した。

平安時代の遺構には、建物2棟、柱穴、溝、土壌などがある。建物はいずれも掘立柱で、建物1は5間(11.2 m)×2間(4.8 m)の東西棟である。建物2は東西2間(3.8 m)で南北1間以上の規模を持ち、調査区外に延びる南北棟と推定される。また建物北側の溝は埋土・遺物などから平安時代のもので、後述する耕作に関連する溝とは切り離して平安時代の遺構図(プラン2)に記録したが、両者は同一面で検出しており、耕作関連の溝という可能性も排除できない。平安時代の遺物は少なく、小片がほとんどであるが、9世紀末から10世紀初の遺物とみられる。

平安時代以降から江戸時代までの遺物を含む耕作に伴う溝がみられる(プラン1)。室町時代以降のものがその主要なものであるが、平安時代までさかのぼる可能性がある溝もある。これらの溝は1条にみえても何条かの溝が重複している場合が多く、時代別の明確な分離は不可能である。また東西方向と南北方向の溝があるが、総じて南北溝が古いようである。南北溝42条以上、東西溝11条以上を数える。

小結 今回の調査では弥生時代の遺物、平安時代の遺構・遺物、鎌倉から江戸時代の遺構・遺物を確認した。当地は平安京右京の一般的なあり方と同じく、平安時代中頃までに宅地としての機能が終わり、耕作地化したようである。野寺小路に関しては、関連する遺構は検出しなかった。野寺小路の推定線まで耕作溝が及ばないことから、野寺小路はかなり後世まで何らかの形で踏襲されてきた可能性が考えられる。

(高 正龍)

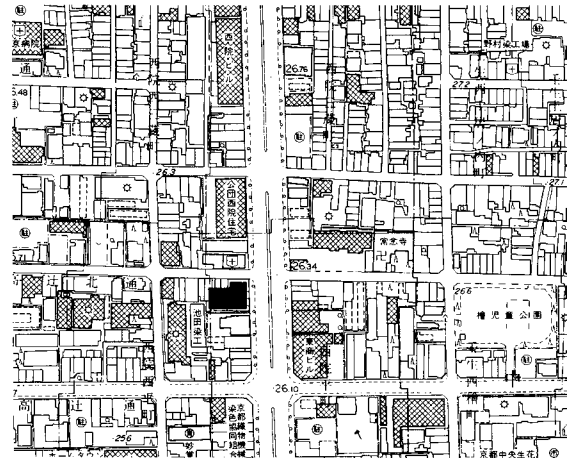


図49 調査位置図(1:5,000)

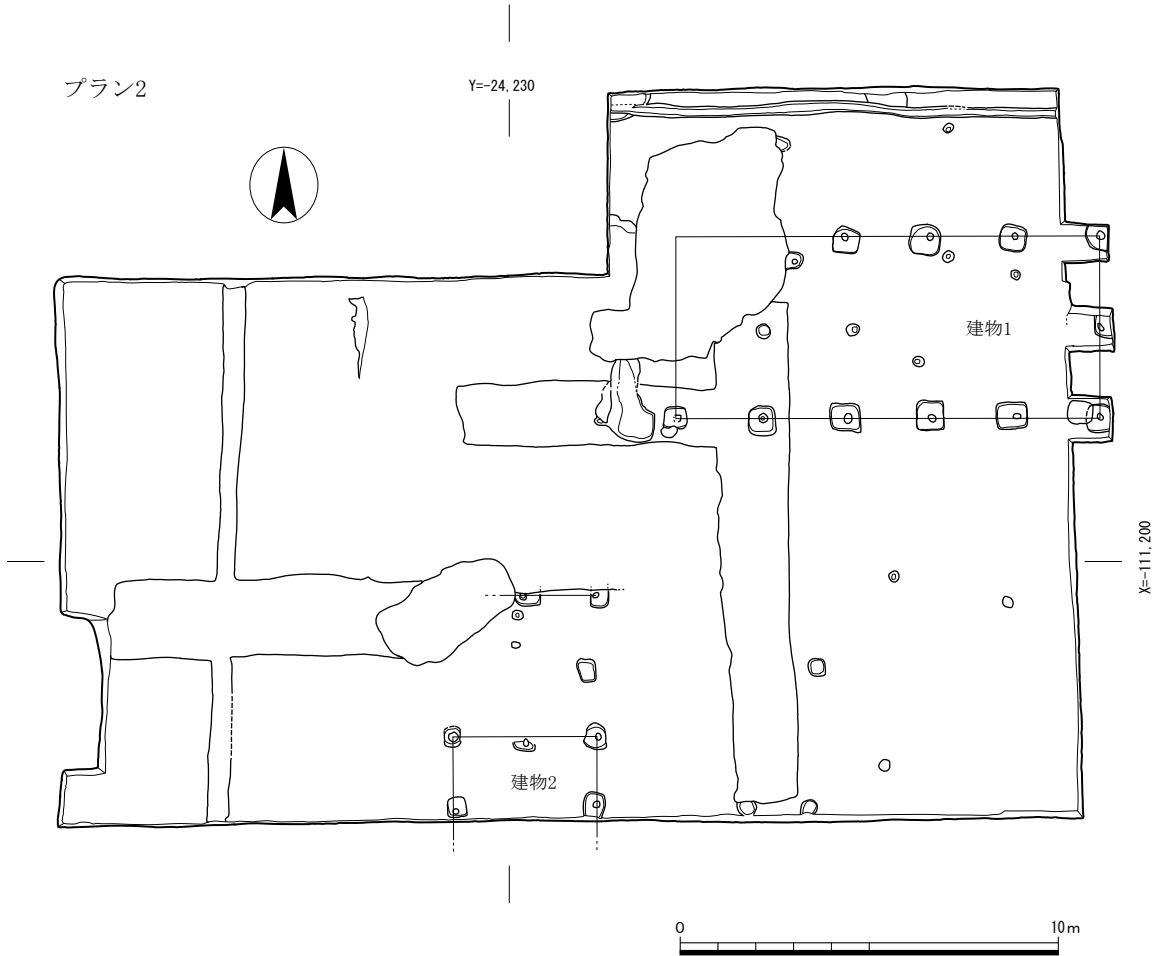
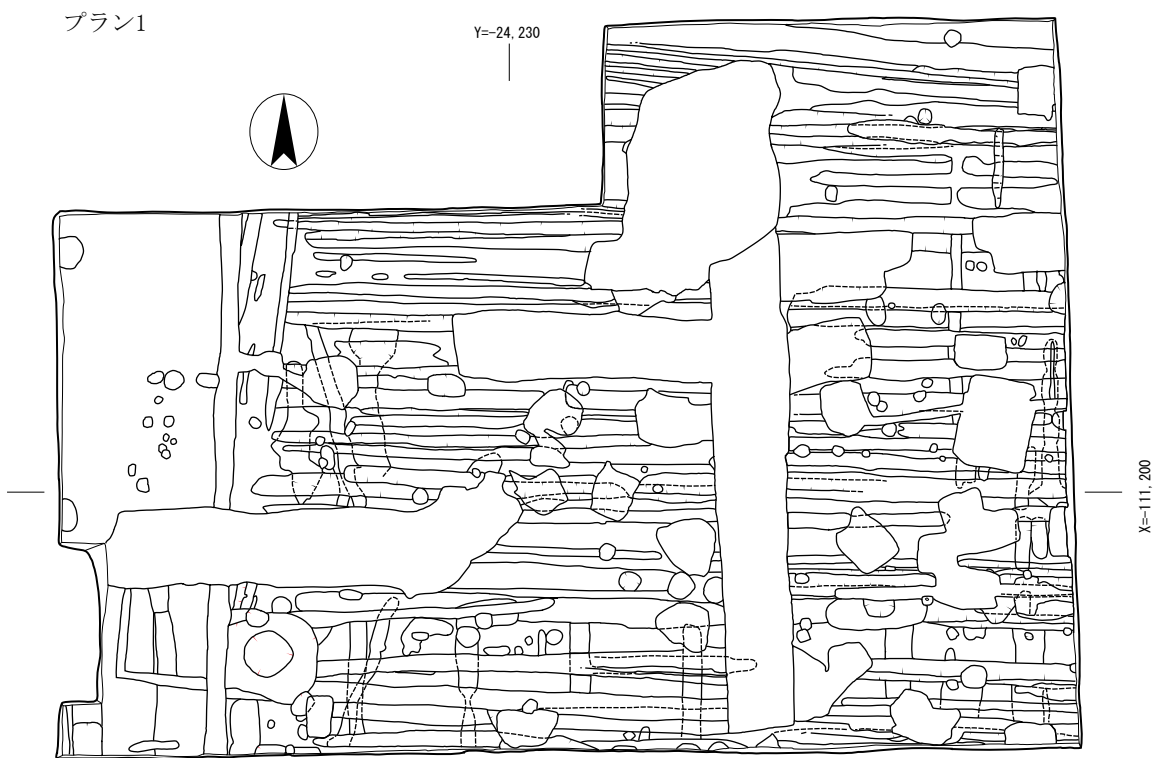


図50 遺構平面図 (1:200)

20 平安京右京六条一坊 (図版1・25)

経過 この調査は京都市リサーチパーク建設に伴う旧大阪ガス京都工場敷地内の第5次調査である。調査地は第4次調査区の北側一帯約8,000㎡が対象となるが、この地域には本調査直前まで球形のガスホルダーが2基設置されており、その基礎や以前の大阪ガス関連施設などによって、かなりの範囲で遺構が破壊されていることが予測された。そのため、これらの既存施設を避け、約6,000㎡の調査区を立案して調査を実施した。調査区のほとんどは右京六条一坊十一

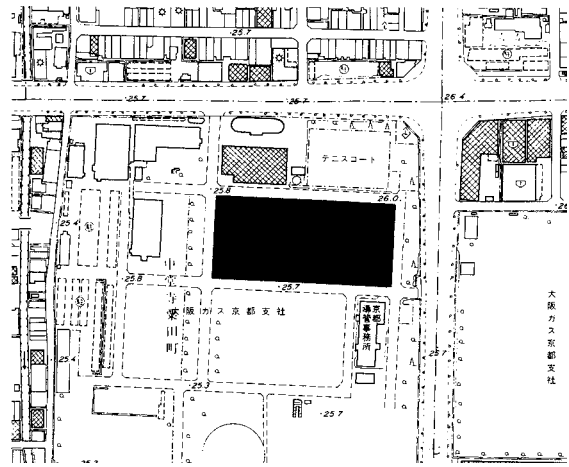


図51 調査位置図 (1:5,000)

町に該当するが、西南部が楊梅小路と西櫛筒小路の交差部の推定地にあたり、十二・十三・十四町の一部も含まれる。残土処理の都合で対象地を東西に二分し、西半終了後に反転し、東半の調査を行った。調査の結果は当初の予測どおり、ガスホルダーや石炭運搬用の軌条敷きクレーン、ガス本管の掘形、既設建物の基礎、地下部分などで遺構面がかなり破壊されており、平安時代の遺構を検出し得たのは全体の調査面積に対してわずかな部分であった。しかし、破壊の及んでいないところでは掘立柱建物、井戸、溝など平安時代の遺構が良好な状態で残存していることが確認できた。

遺構 平安時代の遺構は掘立柱建物、井戸、溝などがある。掘立柱建物とその一部とみられる柱穴群は5棟を検出した。いずれも全体の平面形を知り得るものはないが、北東部のSB2については身舎の柱跡をすべて確認している。井戸は平安時代前期のもの2基 (SE6・13)、後期

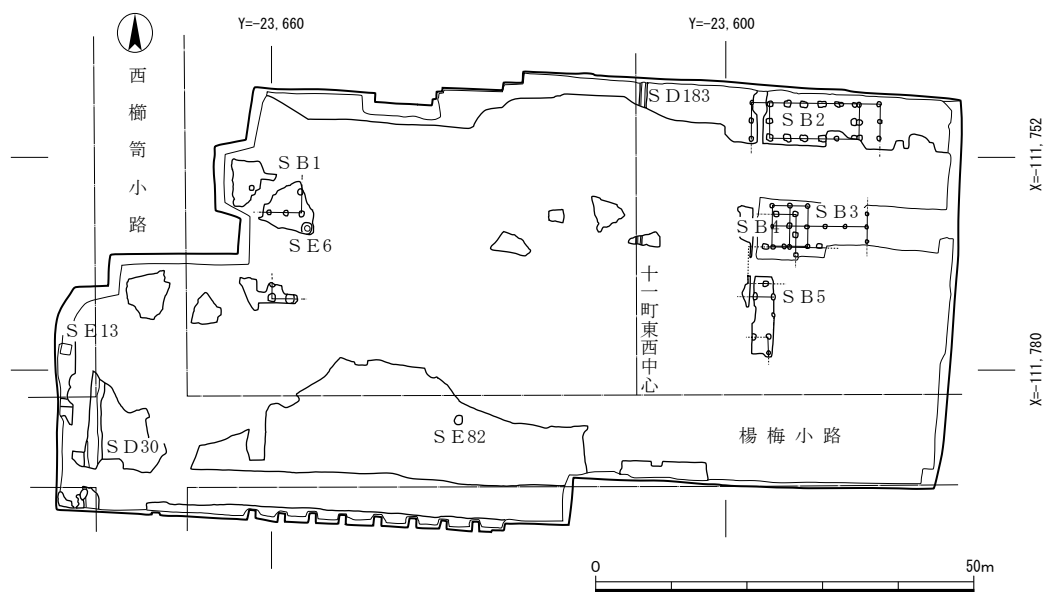


図52 遺構平面図 (1:1,000)



図53 SE13部材刻印

のもの1基（SE82）を検出した。溝は西櫛笥小路西側溝（SD30）とみられるものと十一町の東西中央付近に南北方向のもの（SD183）を検出した。また下層遺構として調査区の北東隅から南西方向に向かう自然流路の一部を検出した。遺物が少なく時期の特定は困難だが、弥生土器の底部とみられる破片があった。

遺物 整理箱30箱の遺物が出土した。内訳は土器、瓦類26箱、木製品などが4箱である。土器類は大半が平安時代のもので、井戸、掘立柱建物の柱穴、溝などから土師器、黒色土器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器など

が出土したが、SE6・13のものを除いてほとんどが小片である。瓦類も平安時代の遺構や包含層から出土しているが、量も少なく、小片が多い。木製品には齋串、曲物の他、SE13の部材がある。部材は保存状態が良く、一部に「太」の刻印が施されているものもある。この他に少量ではあるが、平安時代の遺物包含層に混入して縄文土器片、古墳時代後期の須恵器片が、自然流路から弥生土器片が出土している。

小結 今回の発掘調査区では遺構面のかなりの部分が大阪ガス関連の既存施設で攪乱されており、平安時代のまとまった遺構は検出することができなかった。平安京の条坊に関しては、楊梅小路と西櫛笥小路の交差部と両小路の側溝の推定位置を含めた調査区を設定したが、その大部分がガス管掘形によって破壊されていた。しかし、西櫛笥小路の西側溝は一部を検出し、十一町を東西に二分するとみられる南北溝も検出した。また宅地内の施設も相互の関連は十分に把握できる検出状況ではないが、5棟分の柱穴群や井戸などを検出することができた。4次調査の成果と考え合わせると、大阪ガス敷地内において既存施設の影響のない部分に平安時代の遺構が大変良好な状態で遺存していることがあらためて確認できたといえよう。

（平尾政幸）

21 平安京右京六条三坊 (図版1・26)

経過 今調査は工場の建て替え工事に伴う発掘調査である。当初試掘調査を実施し、建物の柱跡らしき遺構を確認したため、発掘調査に移行した。調査区は試掘調査の成果から、東側の一部を残して工場の建築対象地に設定し、後に調査区外に伸びる建物の延長部分を拡張した。そして最後に東側拡張部を調査した。調査地は旧工場の基礎によって攪乱されている箇所もあるが、遺構の遺存状況は良好である。今調査区は右京六条三坊八町の北辺部にあたり、八町内では初めての調査である。

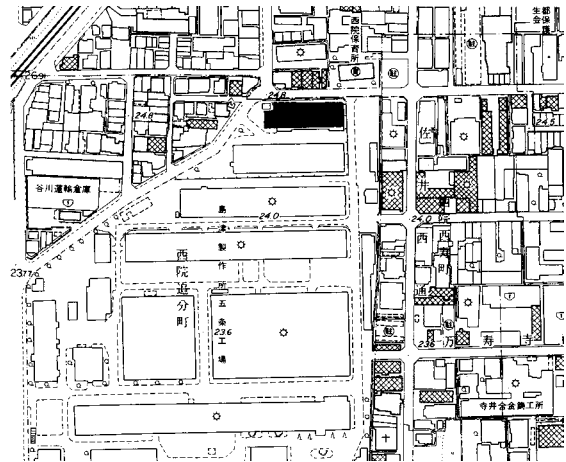


図54 調査位置図 (1:5,000)

遺構 調査区の基本的な層序は地表面から10～30cmが現代盛土層、次に耕作土層の暗灰黄色砂泥層 (2.5Y4/2)、にぶい黄褐色泥砂層 (10YR4/3) で、その直下が黒褐色泥砂層 (10YR2/2) の平安時代遺構検出面となる。遺構は、古墳時代後期から室町時代に及び、平安時代前期の遺構群が最も良好に遺存していた。古墳時代後期の遺構は不整形土壌がみられる程度である。平安時代前期から中期の遺構で重要なものは建物と柵列である。

建物1は南北棟3間×6間の柱間隔がほぼ1.8mの等間で、庇は付かない。柱穴の掘形は一辺が0.7～1.0mの方形を呈し、深さ0.5～0.8mを測る。掘形の深さは他の建物や柵列よりも深い。

建物8は一部しか検出していないが、柱間隔や柱筋の方向からみて、建物1と同様の建物と考える。建物1の東側には南北方向に柵列5がある。

建物2は東西棟2間×5間で北庇が付く。身舎の柱間隔は2.4m等間、庇が2.7mを測る。建物3は建物2とほぼ同規模で、南北棟にしたものである。庇は東側に付く。建物2の身舎の北側

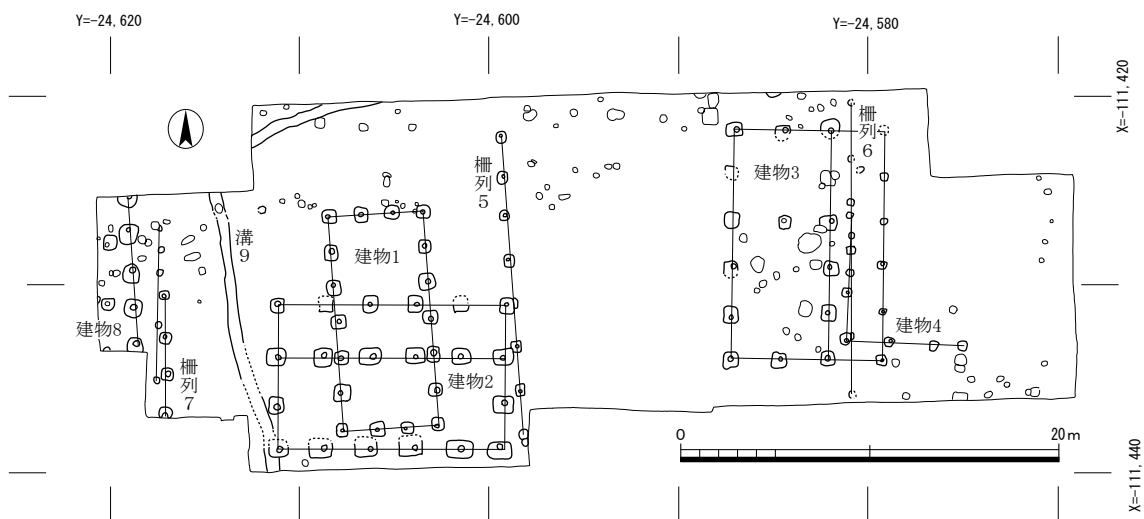


図55 遺構平面図 (1:400)

柱筋が建物3の南側梁間と一致し、建物同士の間隔が桁行の長さに等しい。建物4は前者の建物群に比べ小規模で残存状況は悪い。平安時代の中頃にはこれらの建物群は廃絶している。

その後、耕作地となったと考えられ、湿気抜き用の耕作溝を東西南北に多数検出した。初期の耕作溝は幅と深さが充分あるが、新しくなる程浅く細くなる。

建物の軸線方向と柱穴の切り合いからみて、3期が想定できる。古い方からI期が真北方向より西へ振れる遺構（建物1・8、柵列5）、II期は真北方向に一致する遺構（建物2・3、柵列7）、III期は東へ振れる遺構（建物4）の順である。

遺物 遺物は整理箱で14箱と、調査面積に比べ少ない。いずれも小破片が多く、実測可能なものは少ない。石鏃は縄文時代とみられ、石材はチャートである。古墳時代後期の遺物は土師器甕と須恵器蓋杯・高杯・甕がある。平安時代前期から中期は土師器皿・高杯・甕と須恵器杯・甕、緑釉陶器、灰釉陶器、黒色土器がみられる。平安時代後期から室町時代にかけての遺物は湿気抜き溝から出土し、土師器、瓦器、輸入陶磁器、銭貨「洪武通寶」（1368年）などがある。

小結 調査地は右京六条三坊八町の北西寄りに位置している。建物を軸線の方向から3期に分けたが、II期の建物3は1町の中心に跨って位置するため、II期の段階では1町を占有する邸宅跡が想定できる。また建物2と建物3は計画的に配置されているため、調査区の南方でも、これらと対応して整然と建物が建ち並んでいる可能性がある。ただし柵列6は1町の中心線に近いと

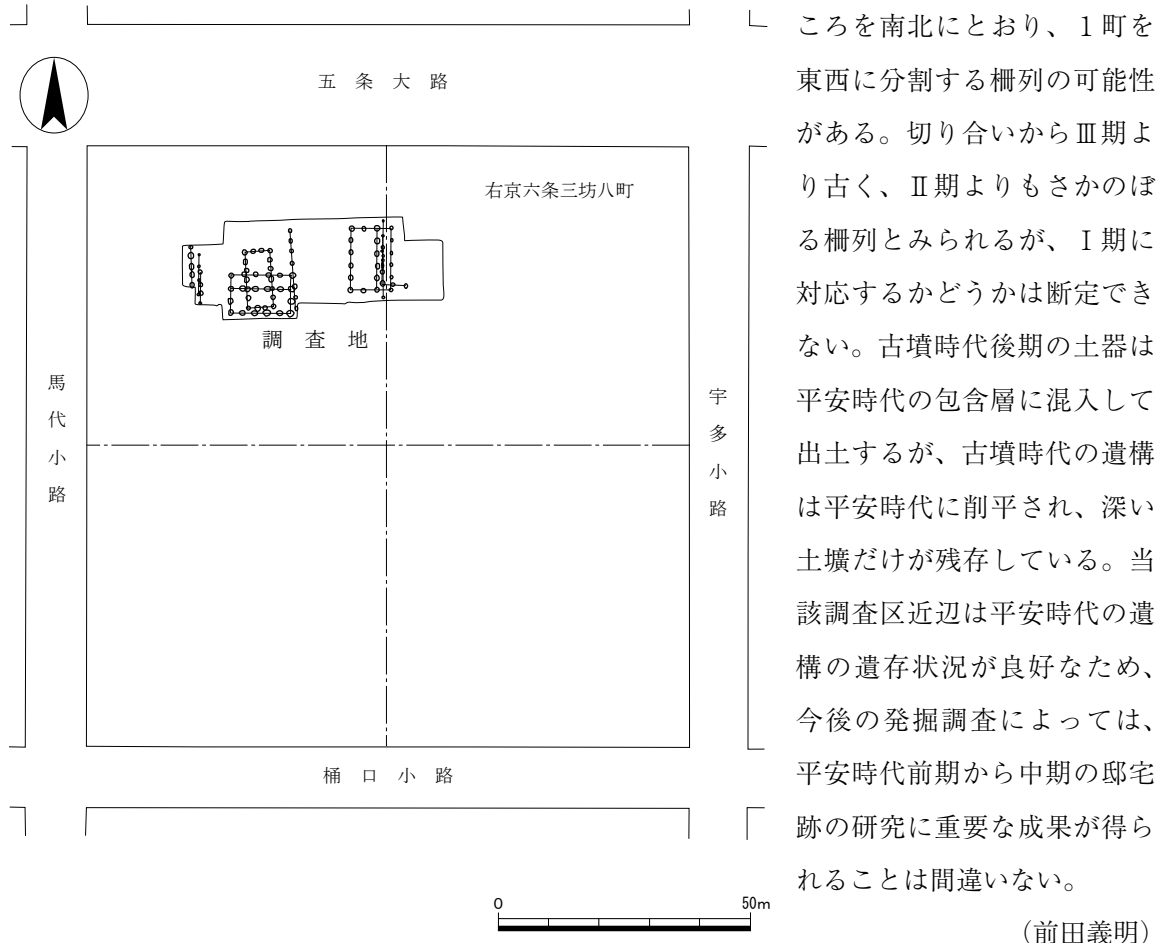


図56 調査区配置図 (1:1,500)

22 平安京右京七条二坊 (図版1・27)

経過 この調査は、下京区西七条比輪田町に所在するマンション新築工事に伴って実施した。調査地は、西市の西北端と接した右京七条二坊十町に相当し、東を西堀川小路、西を野寺小路、北を左女牛小路、南を七条坊門小路に囲まれた1町の中央東寄りに位置する。周辺では昭和58年(1983)に当該地の東、七条二坊七町で調査が行われた。その結果西堀川小路の東築地と側溝、路面の一部が確認され、それより以西は平安時代後期から室町時代の川があった。

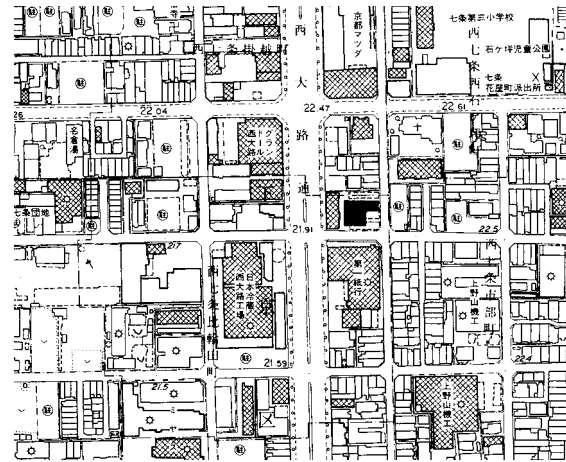


図57 調査位置図 (1:5,000)

その川は西側の宅地内まで氾濫が及び西築地や側溝は確認することができなかった。そのため今回の調査地も川の氾濫が及んでいることが予想された。調査に先立ち試掘調査を実施したところ、川の氾濫は及んでおらず、平安時代前期の柱痕のある柱穴が確認された。以上のことから発掘調査の運びとなった。調査は工事範囲全域を対象としたが、その西端と東南部は既存の建物基礎で破壊されていることから、それを除いて約490㎡の調査区を設定した。調査の結果、平安時代前期の建物、柵列、井戸、土壌などを検出し、この時期に宅地利用されていたことが判明した。

遺構 基本層序は、既存建物建設時の整地層が厚さ40cm、幕末以降の旧耕作土が厚さ10cm、江戸時代中期から後期の耕作土が厚さ10cm、桃山時代から江戸時代初期の耕作土が厚さ5cm、鎌倉時代から室町時代の暗褐色泥砂層が厚さ15cm、その下はにぶい黄褐色砂礫の無遺物層となり、その直上で飛鳥時代から鎌倉時代前期までの遺構群を検出した。

検出した遺構群は、飛鳥時代から奈良時代、平安時代前期、平安時代中期、平安時代後期から鎌倉時代前期、鎌倉時代から室町時代、桃山時代以降の6時期に区分できる。平安時代後期以降のものは、そのほとんどが農耕に関連した小溝群で占められる。以下平安時代中期までの遺構群について概略する。

飛鳥時代から奈良時代の遺構は調査区の西半で確認した流路があり、幅約6m、深さ40cmを測る浅いもので、北東から南西に流れる。流路内の堆積は上部が細砂とシルトの互層で、下部が砂礫で占められる。遺物は土師器、須恵器の破片が出土する。

平安時代前期の遺構には、掘立柱建物、柵列2条、井戸、土壌などがある。掘立柱建物は調査区西端で南北5間分だけ認められ、調査範囲内では南北棟か東西棟であるかは判別できなかった。柱間は2.3m(7尺7寸)等間を測り、柱穴掘形は一辺70~90cmの隅丸方形で、深さは25~30cmを測る。この柱筋から東へ9m(30尺)隔てたところに南北方向の柵列が1条認められる。柱間は7間分確認できたが、その間隔は1.8(6尺)~2.7m(9尺)と不揃いである。柵列の柱穴にはいずれも径25cm前後の柱痕がみられた。柵列の位置は四行八門の宅地割りの東一

行・二行の境界に相当する。この柵列から東に2m隔てて南北方向の柵列が認められた。柱間は1.65（5尺5寸）～1.95m（6尺5寸）と不揃いである。柵列相互の重複関係はなかったが出土遺物から後者の柵列のがやや時期が下がると考えられる。掘立柱建物や柵列の方位は平安京の振れと同じで、真北に対しやや西に傾く。

井戸は掘立柱建物と柵列の間で1基確認した。掘形は東西2.1m、南北2.4mの楕円形を呈し、深さは40cmを測る。掘形の中央西寄りに1.15×1.20mの方形横棧縦板組みの井戸枠があり、横棧は底1段のみを残していた。井戸枠内の底には直径約60cm、深さ20cmの曲物が据えてあり、9世紀中頃の土師器皿・高杯が出土した。井戸の東に60×70cm、深さ40cmの長方形を呈する土壇1基を確認した。土壇の底には27×42cmの範囲で薄い板が敷かれていた。板の上面ないし埋土中には顕著な遺物の出土はなく、遺構の性格を決定するまでには至らなかった。

平安時代中期の遺構は、柱穴や小溝などが疎らに散在するのみで、宅地として利用していたかどうかは不明である。

遺物 遺物は整理箱で90箱を数える。飛鳥時代から江戸時代にわたるものが出土するが、平安時代前期から中期にかけてのものが多数を占める。その内訳は9割が土器類で、次いで瓦類があり、木製品・石製品・金属製品は少量に過ぎない。出土傾向も包含層出土のものが大部分で、井戸・柱穴からまとまって出土したものはなく、いずれも破片で、良好な一括資料は認められなかった。平安時代前期の器種器形には土師器杯・皿・高杯、須恵器杯B・杯蓋・壺・甕、黒色土器杯、緑釉陶器椀・皿・陰刻花文椀、灰釉陶器椀・皿・小壺、軒丸瓦、丸・平瓦、土馬、獣骨、不明木製品などがある。

小結 平安時代前期中頃に十町の東一・二行境界には南北柵列があり、それを境に西側には建物・井戸・土壇などの生活空間がみられるのに対し、東側には明確な遺構群は存在しなかった。このような土地利用のあり方は、西堀川の氾濫を考慮した上でのことか、周辺の調査例の増加を待って更に検討が必要と考えられる。 (堀内明博)

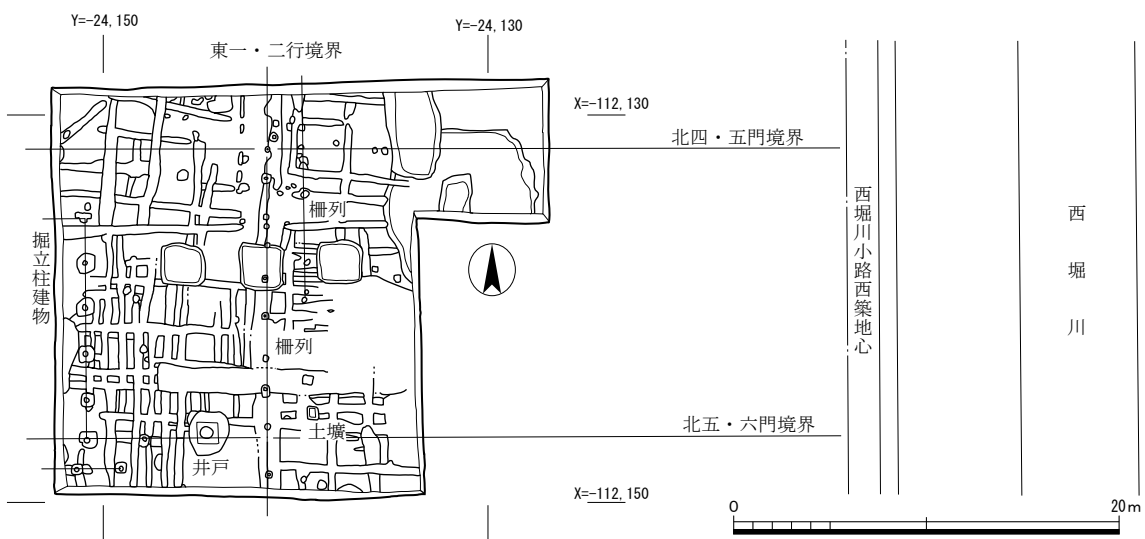


図58 遺構平面図 (1:400)

23 平安京右京九条一坊 (図版1・28)

経過 調査地は右京九条一坊二町の東半部に該当する。対象地は道路によって南北に隔てられており、北側を1区、南側を2区として設定した。1区は二町の北東4分の1、2区は東西中央を含んで東寄りにあたる。調査地は朱雀大路に近接しているが、側溝、築垣などの推定位置は含まない。機械掘削に先立って1区の南東部を試掘したところ、耕作土を約20cm掘り下げた時点で、地山の茶褐色砂礫層が表われ、その面で小規模な土壌を1基検出した。この結果

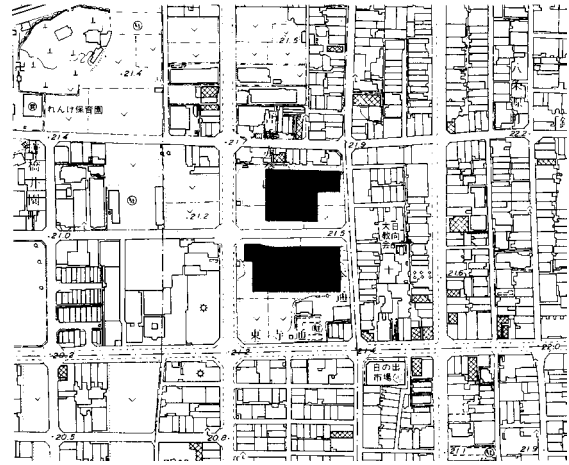


図59 調査位置図 (1:5,000)

を参考にし、耕作土層を重機で除去した後、調査を実施した。その結果、両調査区共に自然流路以外の平安時代の遺構は検出できなかったが、古墳時代の竪穴住居、川を検出した。

遺構 調査地北部では試掘トレンチで土壌を1基検出した。1区では暗渠と南辺に沿って浅い落ち込み状の部分(SX2)があり、平安時代の遺物が少量出土した。2区の北西部に1棟検出した竪穴住居(SB5)は長辺6.25m、短辺5.5mの隅丸長方形で、方位に対して40度東偏する。かなり削平されているらしく、残存状況は良好ではない。南東の隅は平安時代の流路によって削平される。2区の東端部ではこの住居とほぼ同時期の川(SD6)を検出した。東肩は調査区外のため未確認であるが、幅20mを超えるものと思われる。西肩沿いに深い流れの跡が認められた。堆積は砂礫と腐植土の互層で、西肩付近から土師器が多数出土した。2区では北東から南西方向に流れる流路(SD3・4)を検出した。遺物は少量であるが、平安時代前期のものが出土している。

遺物 平安時代の遺物は主にSX2、SD3・4から出土した。土器類が主体であるが、出土状況は散発的で、一箇所からまとまって出土した土器群はなく、量もわずかである。古墳時代の遺物はSB5、SD6から出土しているが、特にSD6のものが多く、遺物総量の7割を超える。最上層部に須恵器が数片含まれるが、他はすべて土師器である。甕がもっとも多く、その他に壺、高杯、器台、小型丸底壺などがある。

小結 調査地は朱雀大路に面した区画であるが今回の発掘調査では、期待された平安時代の顕著な遺構は検出できなかった。これはこの一帯が耕作地化されるにあたり遺構面が広範囲に削平された結果と考えている。2区で検出した古墳時代の竪穴住居SB5の残存状況からみて本来はSD6の右岸に自然堤防が形成され、現在以上の標高を示していたものと思われる。また南北方向に方位を取るSD6に対して、平安時代の流路SD3・4が大きく西側に振れていることから、平安京の造営に際しても整地が行われ、古墳時代に比べるとかなり平坦な地形になっていたと考えられる。その後、中世を経て御土居外縁の耕作地として再整備され、ほぼ現在の状態になった

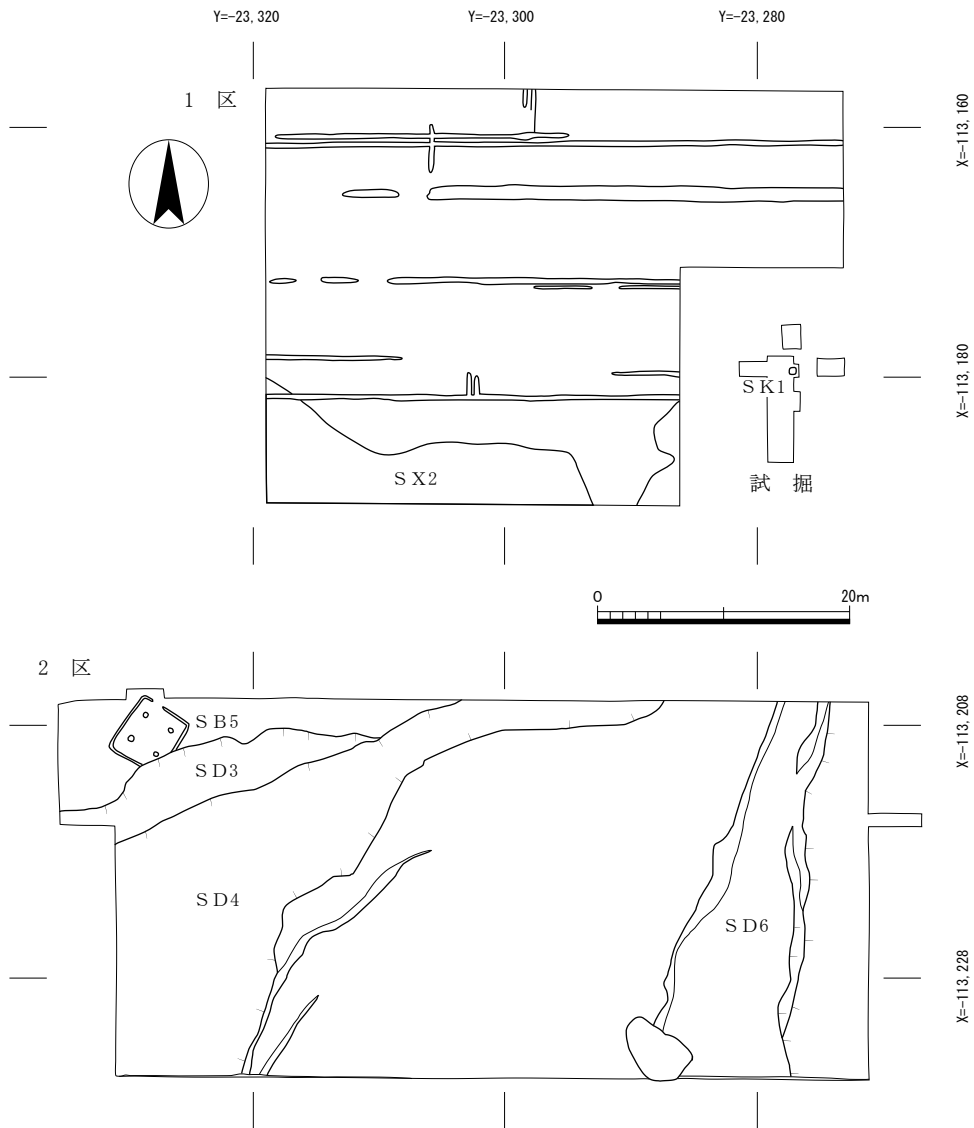


図60 遺構平面図 (1:600)

ものであろう。SB5は古墳時代の集落の一部を構成した竪穴住居と考えているが、SD6の規模からみて、この集落は西あるいは北西に広がるとみられ、調査地はその東側の縁辺部に該当すると理解している。本調査地の南西方向に位置する唐橋遺跡との関連も留意すべき点ではあるが、同遺跡の中心部からは約700mの距離を隔てており、現在のところ直接の関連性を想定することは困難である。この問題については唐橋遺跡北東部と本遺跡との間における今後の調査に基づいて評価されるべきであろう。

(平尾政幸)

Ⅲ 鳥羽離宮跡

24 鳥羽離宮跡第136次調査(図版2-1)

経過 調査地は、京都市伏見区竹田内畑町56-4・62-1・63-2に所在し、鳥羽離宮跡東殿の北西部にあたる。

この地に店舗付き住宅の建設が計画されたため、工事に先立って試掘調査を実施した。その結果、鎌倉時代から江戸時代の遺構が検出され、発掘調査を実施することになった。

調査は現代盛土層、旧耕作土を重機により除去することから開始した。調査の結果、鎌倉時代から江戸時代までの井戸、溝、土壇、柱穴など多数の遺構を検出した。

遺構 調査区の基本層序は現代盛土層、旧耕作土層が約0.9mあり、旧耕作土層下は黄灰色泥土層、暗褐色砂泥層、にぶい褐色砂泥層(第二層)、オリーブ黒色砂泥層、オリーブ黒色砂礫層が堆積する。この内、黄灰色泥土層からにぶい褐色砂泥層までの遺構面で各時期の遺構を検出した。なおオリーブ黒色砂礫層からは磨滅した平安時代前期と考えられる須恵器片が出土し、旧流路の堆積層と考えている。今回の調査区内では無遺物層(地山)は検出していない。

検出した主な遺構には、鎌倉時代から江戸時代までの井戸、溝、土壇、柱穴などがある。

遺物 整理箱で35箱出土した。平安時代から江戸時代までの土器類・瓦類・木製品・銭貨・金属製品・壁土などがある。土器類には土師器・須恵器・瓦器・焼締陶器・国産施釉陶器・輸入陶磁器などがある。瓦類には軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦がある。このうち軒丸瓦は蓮華文・三巴文など23点、軒平瓦は唐草文・宝相華文・剣頭文・雁巴文・巴文など17点出土している。木製品には漆器椀・曲物・箸・しゃもじ・下駄などがある。金属製品にはキセルがある。なお、「祥符元寶」・「皇宋通寶」の北宋銭が2枚出土している。

小結 今回の発掘調査では、鳥羽離宮跡に直接関係すると考えられる遺構は検出できなかった。しかし、中世の各遺構からは多数の平安時代後期の瓦類が出土しており、この瓦類の分布状況から、周辺地域に鳥羽離宮期の建物などの存在する可能性が高いことを示している。

(磯部 勝)

『鳥羽離宮跡発掘調査概報』平成2年度 1991年報告

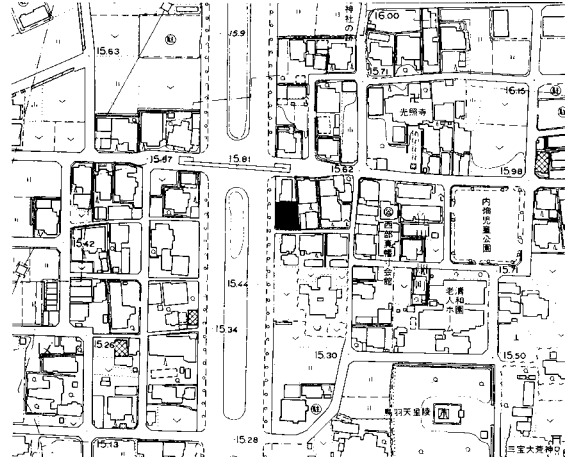


図61 調査位置図(1:5,000)

IV 長岡京跡

25 長岡京左京一条四坊（図版2-2・29）

経過 調査対象地は、長岡京左京一条四坊四町にあたる。また、南半部に一条大路が推定されることから、まず試掘調査を実施した。その結果、長岡京期の土壌、弥生時代から古墳時代の遺物包含層を検出したため発掘調査を実施することとなった。

発掘調査では、南北125m、東西48.0mの細長い調査区を設定した。重機掘削が進むに従って、調査区の東半部は流路か沼状の堆積であることが明らかになった。このため調査の主眼を、

長岡京期から鎌倉時代の遺構が点在する西半部においた。流路部分の調査では湧水が激しく、砂・砂礫層の崩壊などで成果をあげることができなかった。この調査区では目的とした一条大路に関する遺構が認められないため、西端部を北へ9mと南へ20mの長さで幅約3mのトレンチを設け確認調査を行ったが、ここでも一条大路に関する遺構は認めることができなかった。

遺構 西側の標高12.6～13.0mを測る部分が唯一遺構面として認められる。東に向かって緩傾斜をなしており調査区の3分の2以上が自然流路、沼地状湿地であるため、西側部分は高台を形成する様にみえる。

高台は北半が黄褐色から灰色までに色調変化する砂・細砂層からなり、南半は灰褐色の粗砂混じり泥砂層である。周辺の調査でみられた遺構面と比べ、安定した遺構面とは言えない。この面で、中世の流路と思われるSX3、SD7などを検出した。高台も東へ向かって地層が乱れており、湿地の影響を物語っている。湿地側の中世堆積土を取り除いた後、高台を北西端で約40cm、平均20cm掘り下げた。北半が黄褐色砂層、南半が泥砂混じりの黄褐色砂層となり、標高約12.6mで平坦面が得られた。ここで掘立柱建物・柱穴・溝・土壌などの遺構を検出した。掘立柱建物の柱穴はすべて直径50cm前後の円形で、深さ60cmを測るものがある。柱間は南北1.8m、東西4.2mを測るが、SX3や攪乱があるため、全容は不明である。また、南側の拡張トレンチでも柱穴を認めた。この面に対応する自然流路の肩口をY=-25,180mライン付近で認めている。流路に堆積する腐植土・砂層から、長岡京期と平安時代の土器・木器類が出土した。

長岡京以前の遺構は、同一面上で検出した溝2条（SD35・38）と落込SX29がある。弥生時代のものと考えている。

遺物 弥生時代から室町時代にわたって、整理箱22箱の遺物が出土した。大部分が流路・湿地の出土である。

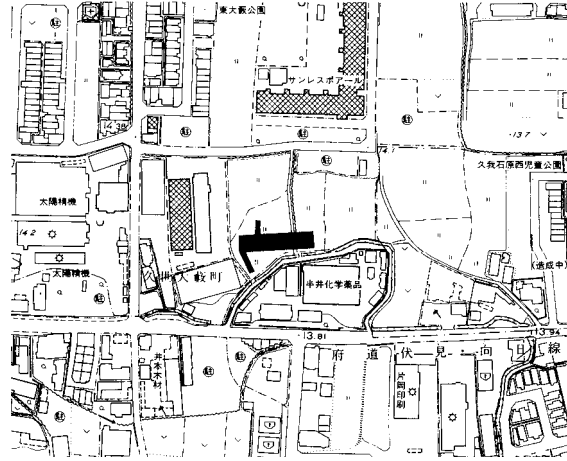


図62 調査位置図（1：5,000）

流路の堆積土は大きく2層に分けられ、上層の砂・腐植土が長岡京期から平安時代、下層の砂礫が弥生時代から古墳時代の遺物が主体となる。

下層出土の弥生土器は畿内第Ⅲ様式から第Ⅴ様式に比定される。壺・甕・高杯・器台の他、脚台を持つ壺なども出土している。土器類以外には石包丁も出土した。古墳時代は須恵器の杯身・蓋は6世紀前半代の特徴を持つ。他に壺・甕の破片などがあるが、下層全体に占める須恵器の出土量は少ない。

上層は土師器、須恵器の食器類が主として出土した。奈良時代後半代のもものとみられる。また土師器の人面墨描土器、「太宰府宰□□三斗」と記された木簡などの木器類が出土したのも上層である。

小結 調査地は、長岡京左京一条四坊にあたり一条大路側溝の検出が比定される地点であるが、路面・側溝共に認められなかった。流路が存在したためとみられる。

掘立柱建物は、柱穴からの出土遺物が少なく、成立年代を決める根拠に乏しい。

流路は中久世遺跡から、大藪遺跡の久世中学校検出の護岸杭列を経て当調査地の東土川遺跡に至る旧流路の支流とみられる。

なお、上層の遺物は流れ堆積による磨滅が少なく、荷札木簡の出土があることなどから、近隣に長岡京期の遺跡が期待できる。(鈴木廣司)

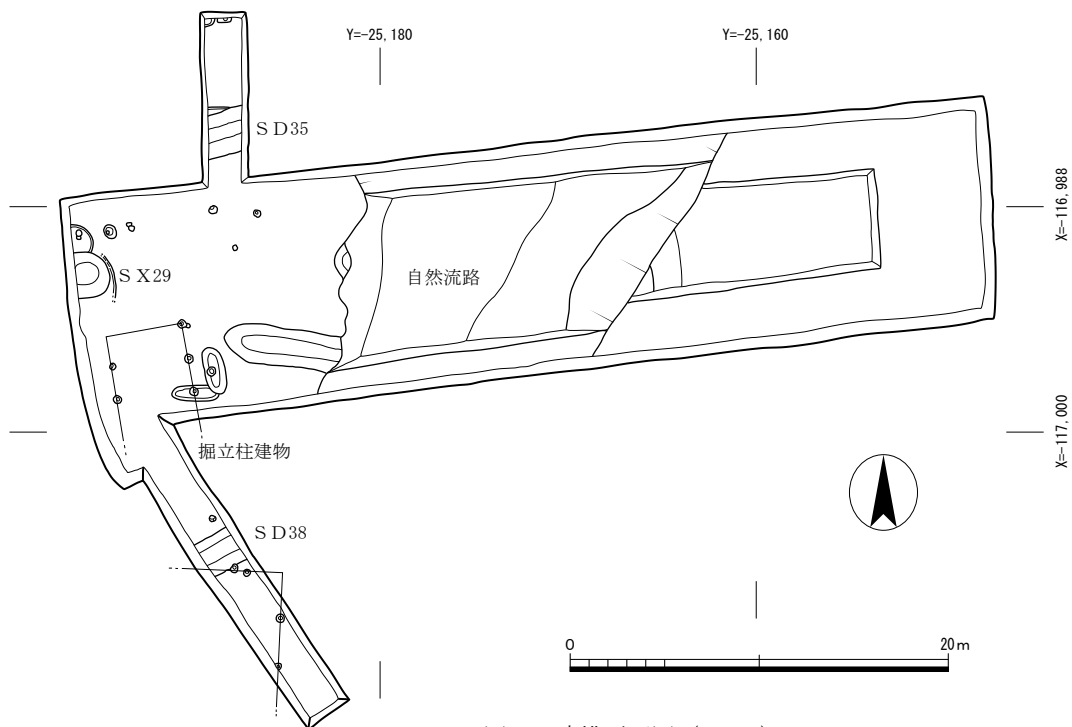


図63 遺構平面図 (1:400)

26 長岡京左京六条二・三坊、七条二・三坊、水垂遺跡（図版2-2・30～32）

経過 京都市伏見区淀水垂町、樋爪町一帯に京都市清掃局の埋立処分地拡張工事が計画された。当地は長岡京の東南部、左京六条二・三坊、七条二・三坊にあたり、乙訓郡の条里制が施行されたところでもある。また、近接して縄文から古墳時代の雲ノ宮遺跡があり、関連した遺構が検出される可能性があった。このため調査の必要性が生じたが、工事予定地が13ヘクタールと広大な面積に及ぶため、まず試掘調査を実施して遺構の状況を把握することにした。

試掘調査は平成2年（1990）4～5月に約1箇月間かけて実施した。調査は工事予定地全体に一定間隔に試掘トレンチを設定し、遺構・遺物の有無と土層の観察を行う方法を用いた。その結果、広範囲に長岡京期と古墳時代の遺構が分布することが確認でき、工事予定地全域にわたる発掘調査が必要であることが明らかになった。これを受けて古墳時代、長岡京期の遺構を主な対象とし、調査地全体をA～G、7ブロックに分け、順次継続して調査を実施する計画を立案した。

今年度は最初の工事が予定されているGブロックの調査を実施した。実際には敷地の都合上、ブロック内をさらに1～3区に分割し、北東部に位置するG1区から開始した。これとは別に、

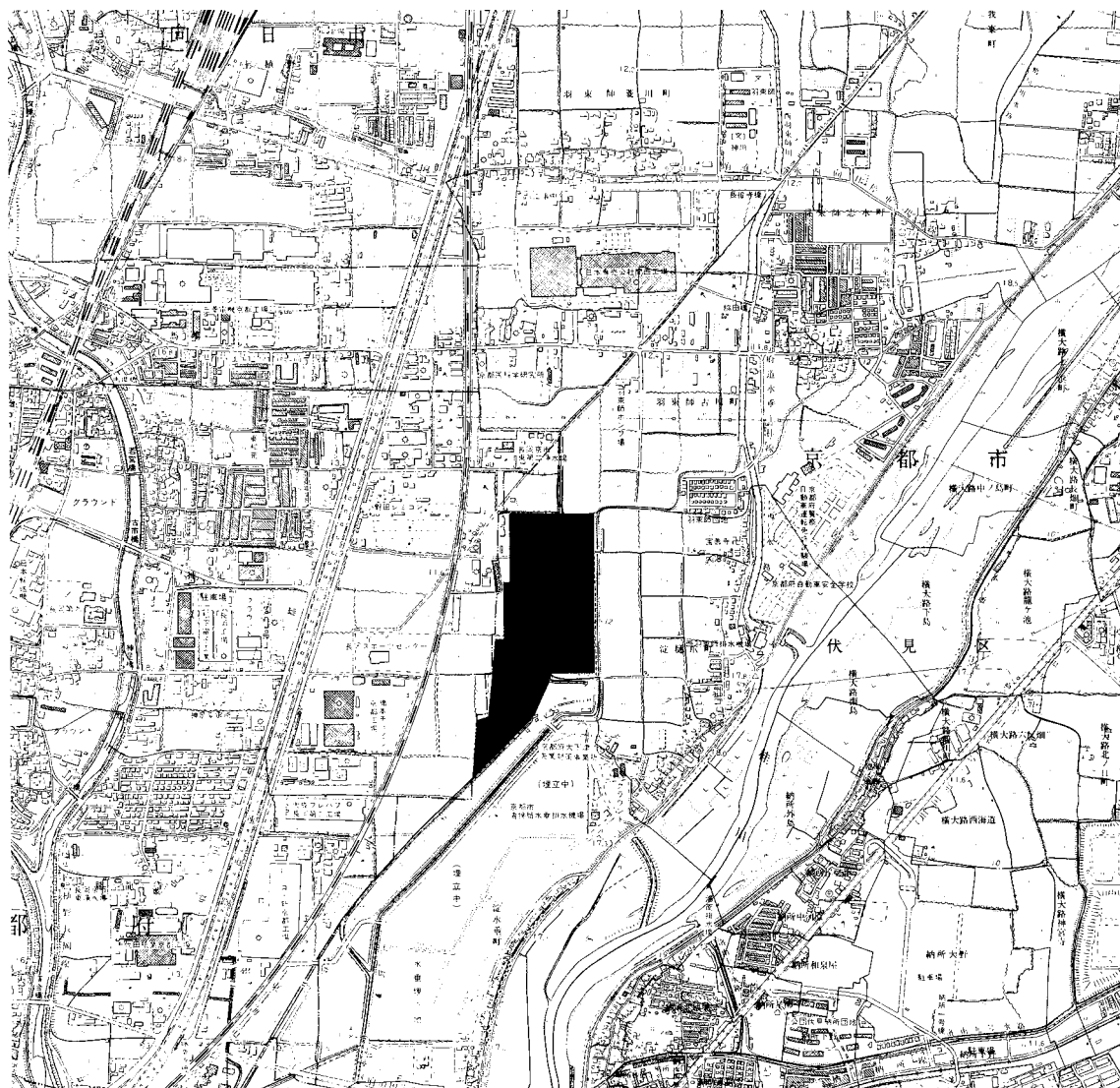


図64 調査位置図（1：20,000）

平成3年度調査予定のF区において、条里に関する遺構を確認するためと、現状で塚状に盛り上がりのある部分の正体を探るために、3箇所の調査区（1～3トレンチ）を設定し、調査を行った。

なお、長岡京の条坊は近年の研究で2町分北へずれていることが明らかになり、条坊の呼称も新しいものになりつつあるが、この調査では混乱を避けるために終了時まで旧呼称を用いることとした。

遺構 調査地の基本層序は上から第1層現代耕作土・床土（厚さ60cm）、第2層暗灰黄色泥砂層（平安時代以降の堆積土・厚さ25cm）、第3層灰黄色泥砂層（平安時代以降の堆積土・厚さ35cm）、第4層褐色砂泥層（平安時代水田耕作土①・厚さ10cm）、第5層灰色砂泥層（平安時代水田耕作土②・厚さ10cm）、第6層黄褐色砂泥層（古墳時代堆積土・厚さ30cm）、第7層黄褐色砂泥層（古墳時代水田耕作土・厚さ10cm）、第8層灰色粘土層（無遺物層）、第9層黒色粘土層（無遺物層）、第10層緑灰色粘土層（無遺物層）である。第4層上面

で平安時代、第6層上面で長岡京期、第7・8層上面で古墳時代、第10層上面で縄文時代の遺構を検出した。これらの遺構が成立する地形は各時代を通して、北西部が高く南東部へ緩く傾斜している。長岡京期の遺構面では、約10cmの比高差があり、中央部の標高は8.50mである。

縄文時代の遺構は3区で河川を検出した。河川は、幅約45m、深さ2.5mで腐植土層・灰色砂層が堆積している。腐植土層には直径30cmをこえる流木が多数含まれている。

古墳時代の遺構は、全域において水田、北西から南東方向に流れる大小の溝を検出した。水田は、一枚の面積が30～60㎡の小区画水田である。これらはまず、地形の傾斜に沿った北西から南東方向の畦を3～8m毎に設定し、これに直交する方向の畦で区画して作られている。畦は残存状況の良好なところで幅0.4m、高さ0.1m程度である。3区には南西から南東方向の畦に規模の大きいものが認められる。1・2区で検出した溝（溝13・17）は、地形に沿った北西から南東方向に流れる。いずれも幅4～5m、深さ0.7～1.0mで断面逆台形である。溝内には、溝13に2箇所、溝17に1箇所の堰を設けている。埋土は上層が灰色粘土、下層が灰色砂泥（砂の

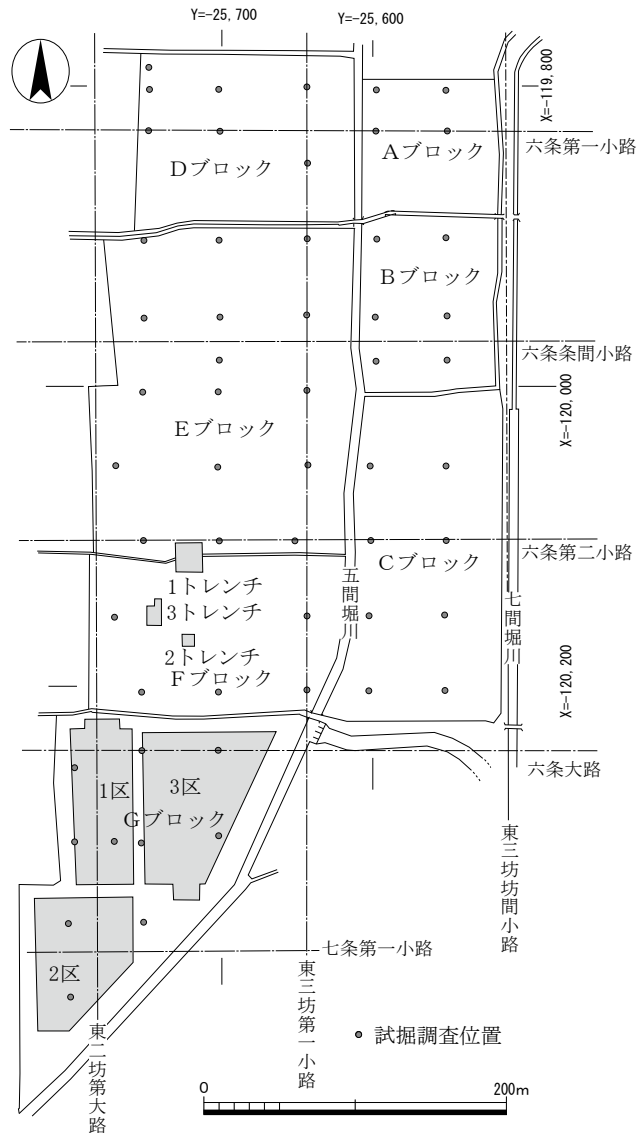


図65 調査区配置図 (1:5,000)

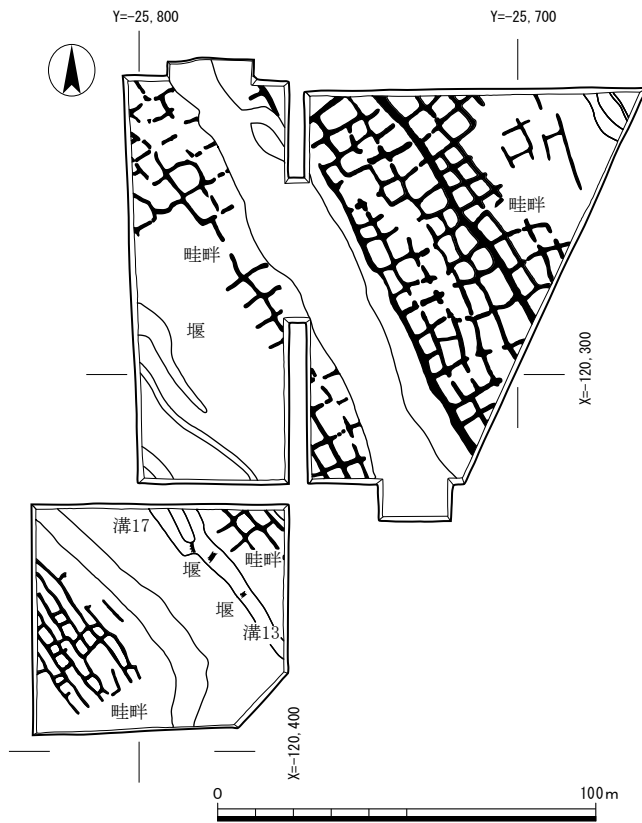


図66 古墳時代遺構配置図 (1:2,000)

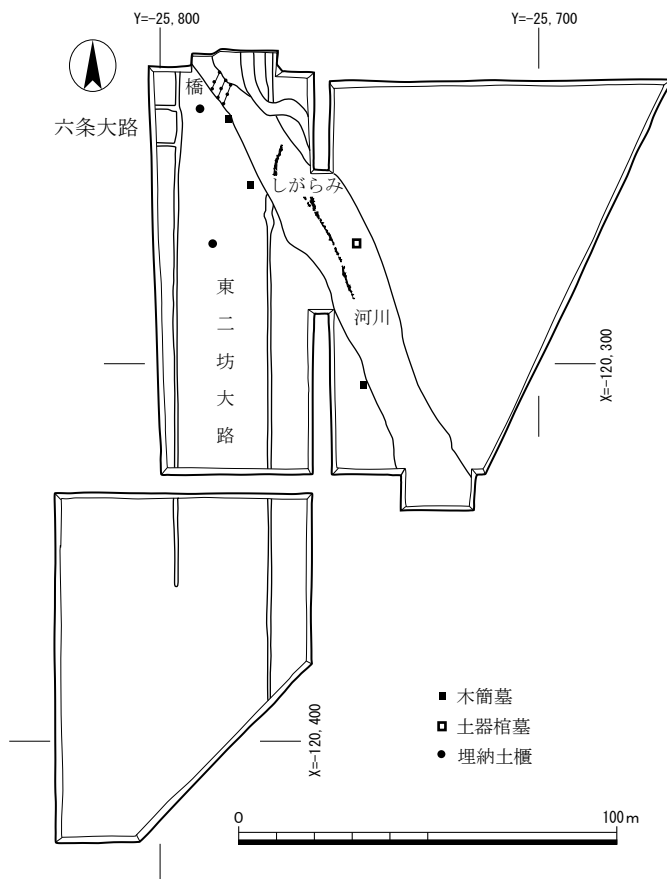


図67 長岡京期遺構配置図 (1:2,000)

間層を含む)である。埋土中からは土器類や、木製品などが出土している。堰は、いずれも溝に直行する方向に設けた木材を核とし、これを両側から斜めに打ち込んだ杭で固定し、木の枝・草などを絡み合わせて作られている。木材には丸太の他、加工した棒・板材なども含まれるが、残存状況は良くない。

長岡京期の遺構は長岡京の東二坊大路と六条大路、その交差点、それを横切る河川などを検出した。東二坊大路は東西両側溝を確認し、溝心々間の幅約25mの大路規模である。これに対し六条大路は南北両側溝間の幅約10mの小路規模であった。各道路の両側溝は断面U字形で幅0.6m、深さ0.2m前後である。埋土は茶灰色粘土で須恵器・土師器片を少量含んでいる。路面には砂礫層の広がる部分があり、あるいは舗装とも考えられる。河川は、交差点のほぼ中央を北西から南東方向に斜めに横切る。規模は時期によって多少変化しているが、幅約10m、深さ0.7~1.0mである。埋土からは大きく4層に分かれ、1・2層は粘土、3・4層は砂泥と砂の互層となる。埋土中からは多量の土器類・土製品・木製品が出土し、特に3・4層に多い。河川内には水量調節と考えられるしがらみ、護岸の杭などが設けられている。また、河川内において、土師器甕3個を合わせた土器棺墓も検出した。道路の交差点付近では河川にかかる橋を検出した。橋は東二坊大路の中央に作られ、橋脚と材の一部が残存している。規模は桁行2間(長さ5.4m)、梁間2間(幅5.0m)である。この

ほか河川右岸では小児を埋葬したと考えられる小型の木棺墓3基、土師器の甕を埋納した土壇2基を検出した。このうち六条大路北側溝を延長した位置にある東二坊大路路面上のものは、土師器の甕内に小型の曲物を据え、中に銭貨と櫛を納めている。なお、今回の調査では七条第一小路は推定位置に存在せず、六条大路も東二坊大路以東に延びないことが確認できた。また、周辺の宅地内にも居住関係の遺構は全く検出できなかった。

平安時代の遺構は条里制の水田、それに伴う畦・溝を検出した。これとは別に1・3区では北西から南東に流れる河川を検出した。1区で検出した南北溝（溝1）は、坪の中央に位置する溝で、幅2.5～1.0m、深さ0.4mの断面U字形である。埋土は褐色砂礫で、土師器・須恵器小片を含む。これは1・2区の境で東に曲がり、ここが次の坪境に相当する。溝に沿って、南側に幅1.5m、高さ0.1mの畦を検出した。3区で検出した南北溝（溝2）は同じ坪の坪境に位置する溝で、規模・埋土の状況は同じである。Fブロックの2トレンチでは延長線上に同様な溝と畦が続くことを確認している。1トレンチでも坪の交点に沿って東西および南北方向の畦畔を検出した。

なお、Fブロック3トレンチの塚と考えられる土盛は、東西7.5m、南北8.7mの歪んだ方形で、高さ0.6mの規模であった。しかし、これには墓壇などの施設はなく、単に洪水によって形成された平安時代の水田を覆う砂礫層の上に、盛土を行って成形されたものであることが明らかになった。

遺物 縄文時代・古墳時代・長岡京期・平安時代の時期のものがあるが、大半は長岡京期のもので他は少ない。

縄文時代の遺物は河川で、後期から晩期の土器が少量出土した。

古墳時代の遺物は溝（溝13・17）から多く出土した。土器には土師器壺・甕・高杯・器台・

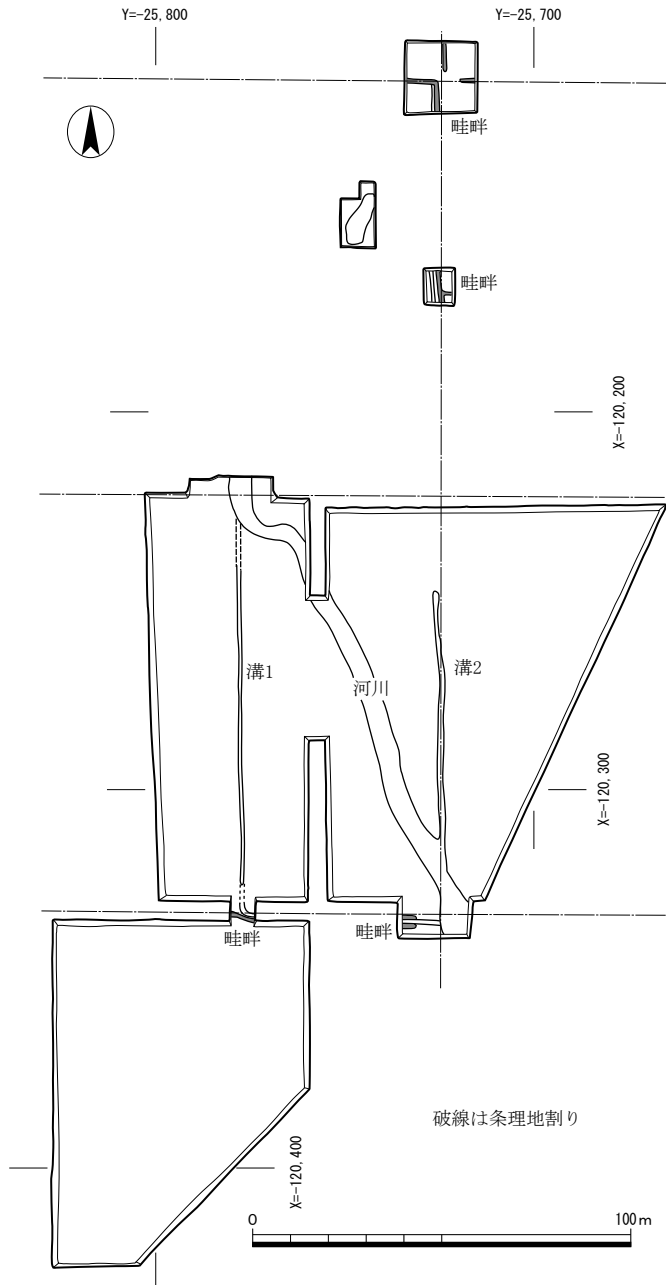


図68 平安時代遺構配置図 (1:2,000)

小型丸底壺・小型器台があり、残存状況は良好である。時期は庄内式から布留式併行期にいたるもので、主体は布留式併行期と考えられる。木製品には盤・案・ナスビ型鋤・竪杵・木錘・縦櫛などがある。

長岡京期の遺物は主に河川から土器類と木製品が多量に出土した。河川出土遺物には土師器碗・皿・杯・高杯・壺・甕、須恵器杯・蓋・壺・甕・平瓶、土製品土馬、小型模造土器のミニチュア竈・甑、木製品木簡・人形・斎串・馬形・刀子形・舟形・木沓・扇・曲物・折敷・抄網・横櫛・組合わせ箱・櫃・糸巻・挽物皿、漆器皿・椀、金属製品鎌・銭貨、骨類馬骨・馬歯・人骨などがある。特に人面土器、土馬、ミニチュア竈、人形など祭祀に用いられた遺物が多く認められ、特徴的である。人面墨描土器は400個体程度が確認でき、保存状態も良く墨描も明瞭である。

平安時代の遺物は土器類が溝などから出土しているが、少量で保存状態も良くない。

小結 今回の調査で明らかになった成果を時代別にまとめる。

縄文時代 河川を検出することができた。出土した土器は少量であるが、当地の西側に近接する縄文時代から古墳時代の雲ノ宮遺跡との関連で興味深い。

古墳時代 小区画水田を検出することができた。水田は遺物が少なく、時期が確定できないが、水田を覆う砂礫層に含まれた遺物からみて、6世紀後半以前のもと考えられる。この水田は、当地周辺で確認できる平安時代以降の条里制の水田と比較すると、一枚の面積や畦の方向がまったく異っており、この間の農業技術の差や、土地利用の変遷を知る上で大きな資料となった。なお、古墳時代の遺構は当地では初めての検出であり、遺跡名が付されていない。そこで当地の小字名を用いて、これを「水垂遺跡」と命名することとした。

長岡京期 条坊関係では東二坊大路、六条大路をほぼ推定どおりに検出できた。さらに、交差点を横切る河川やこれに架かる橋、あるいはしがらみなどの附属施設も確認できた。しかも、七条第一小路並びに六条大路の東二坊大路より東側については存在しないことが明らかになり、周辺の宅地も利用されていないことが確認できた。低湿地帯である長岡京東南部の様子を具体的に知ることができたといえよう。加えて、河川からは人面土器をはじめとする祭祀遺物が多量にみつかったが、こうした遺物が京域内の遺構と密接に関連して発見できた例はきわめてまれであり、当時の祭祀の実体を知る貴重な手がかりとなった。

平安時代 条里遺構・水田を良好な状態で検出できた。特に坪境に相当するところでは推定どおりに畦畔や溝が検出でき、平安時代から現在に至るまで条里制の区画がほぼそのまま踏襲されていることが確認できた。こうした成果は乙訓の条里制を研究する上で恰好の資料となった。

以上の成果に加えて、各時期の遺構が、標高8.5m以下という低地で検出できたことも大きな成果である。かつて当地の南部には「巨椋池」と呼ばれる巨大な湖が広がっており、昭和初期の干拓で消滅する以前、その水位は海拔約10mであった。したがって、これ以下の標高には遺構が存在しないと考えられていた。しかし、今回の発見はこれまでの常識を覆し、京都盆地南部の遺跡の立地を再考する契機となるものであろう。

(吉崎 伸・上村和直・木下保明・南 孝雄)

V その他の遺跡

27 植物園北遺跡 (図版1・33・34)

経過 水田、畑地であった当地にビル建築が計画され、事前に行った試掘調査で古墳時代の竪穴住居が良好に遺存していることが判明し、発掘調査を実施することとなった。植物園北遺跡の7次調査にあたる。

遺構 耕作土・床土を排除した地表下20cm前後で遺構面の地山に達する。地山は、比較的安定した黄褐色泥砂層で、部分的に礫の露出がみられる。

検出した遺構には、古墳時代前期の竪穴住居・土壇・流路、平安時代後期から鎌倉時代の掘立柱建物・柱穴などがある。

古墳時代前期の竪穴住居は、9棟検出した。ほぼ全容が検出できたものは6棟あり、3棟は大半が調査区外であるため、規模は明らかにできなかった。いずれも平面形は隅丸方形で、一辺の長さが3.0m前後の小型のもの(SB7・10・12)と4.5m以上の大型のもの(SB8・9・13)に大別できる。小型の住居では、いずれも支柱穴は検出できず、SB7・10は住居南辺に貯蔵穴を検出した。また、SB10ではほぼ中央に中央ピットと考えられる浅い不定形の土壇を検出した。大型の住居では、いずれも支柱穴は4箇所にてけ、貯蔵穴はSB13が住居南辺と東辺の2箇所、SB8・9が東辺に1箇所設けている。また、中央ピットはSB8・9では住居のほぼ中央で検出したが、SB13については検出できなかった。これら9棟の住居のうち、床面に炭化木材などが散乱して明らかに焼失住居と考えられるのは、SB7・18の2棟であった。土壇は2基(SK3・29)ある。SK3は、楕円形を呈し、長軸1.9m、短軸1.1m、深さは検出面から0.1mであった。SK29は、長方形を呈し、長軸2.4m、短軸0.8m、深さは0.15mであった。また、調査区の北端で北西から南東へ流れていたと考えられる流路の一部を検出している。最大幅で1.3mある。

平安時代後期から鎌倉時代の遺構は、柱穴を多数検出した。それらのなかで、掘立柱建物として認識できたのは4棟で、柱配列の全容を把握できたのはSB22のみである。その他のSB20・24・31に関しては柱配列の一部を確認したにとどまり、建物の大半は調査区外へ延びる。

遺物 遺物は、整理箱に32箱出土した。縄文時代の石器、古墳時代前期の土師器、平安時代後期から鎌倉時代の土師器・須恵器・緑釉陶器などである。

縄文時代の石器は、石斧・石匙各1点で、いずれも耕作土に混入して出土したものである。

古墳時代前期の土師器は、いわゆる布留式土器で、各住居の覆土から出土したものが多く、

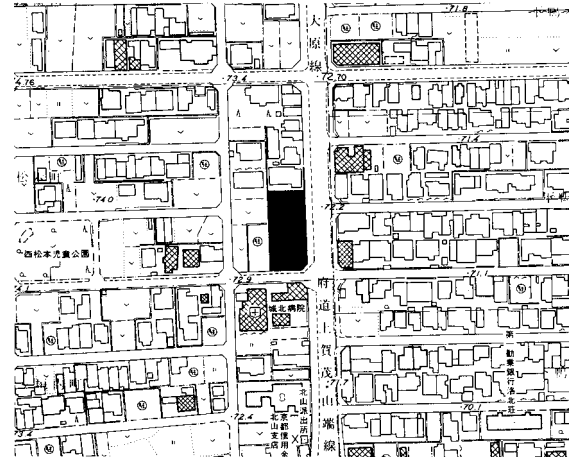


図69 調査位置図 (1:5,000)

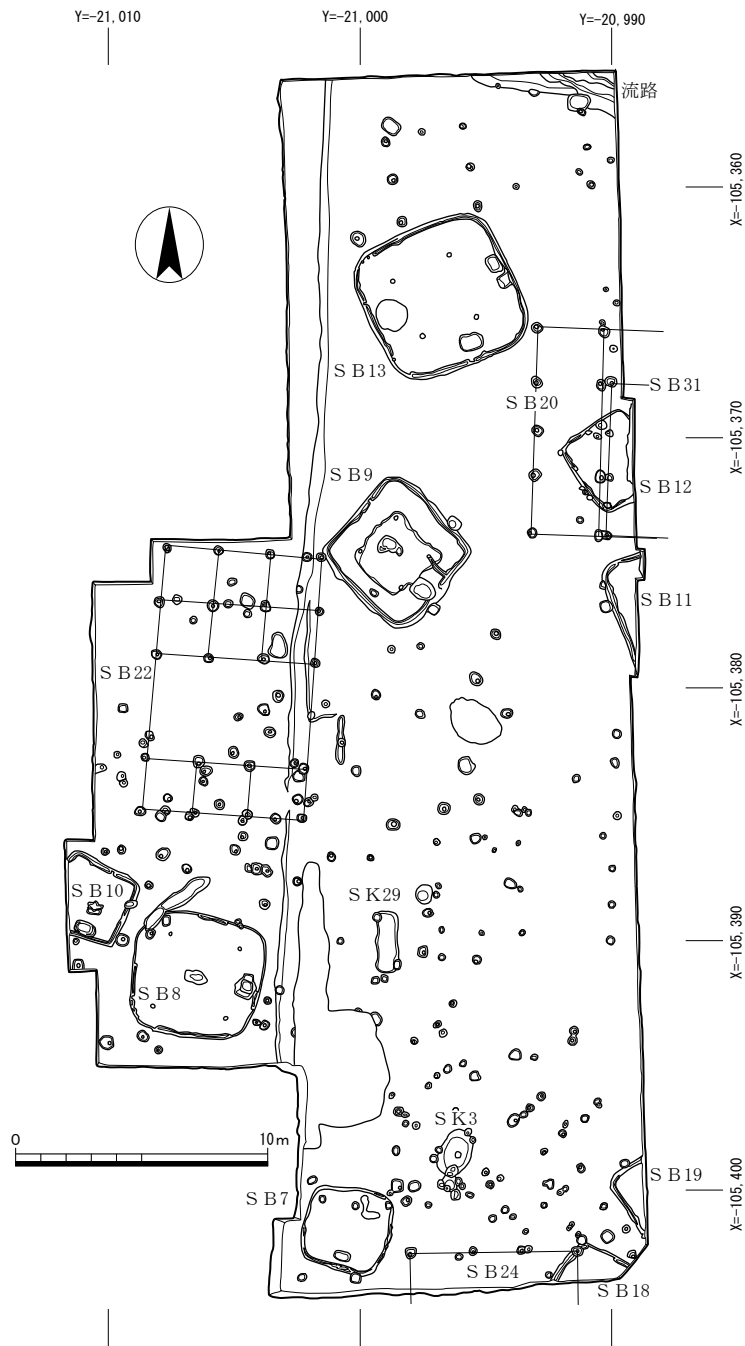


図70 遺構平面図 (1:300)

古墳時代前期の比較的古い段階に営まれていたと考えられる。本調査では、植物園北遺跡における一時期の単位集落の一面を明らかにしたものと考えている。

(高橋 潔)

床面で検出した一括性の高い土器群が各住居から出土している。図71には、SB 9・13から出土した土器群を図示した。SB 9からは、甕(1~10)、壺(11・12)、小型器台(13・14)などが出土している。SB 13には、甕(15~20)、壺(25・26)、高杯(21・22)、小型鉢(23)、鉢(24)などがあり、図示できなかったが小型器台も出土している。図示した遺物のうち、3・6・16・17などは典型的な布留式甕であり、いずれも布留式土器の古相に位置付けられる土器群と言えるものである。これらは、当該期の山城地方の土器群の一樣相を示す良好な資料と言えよう。

平安時代後期から鎌倉時代の遺物は、大半が柱穴から出土しており、小片のものが多。

小結 本調査では、良好に遺存する古墳時代前期の集落跡を検出した。これらは、竪穴住居9棟からなっており、いずれも重複していない。出土土器から、

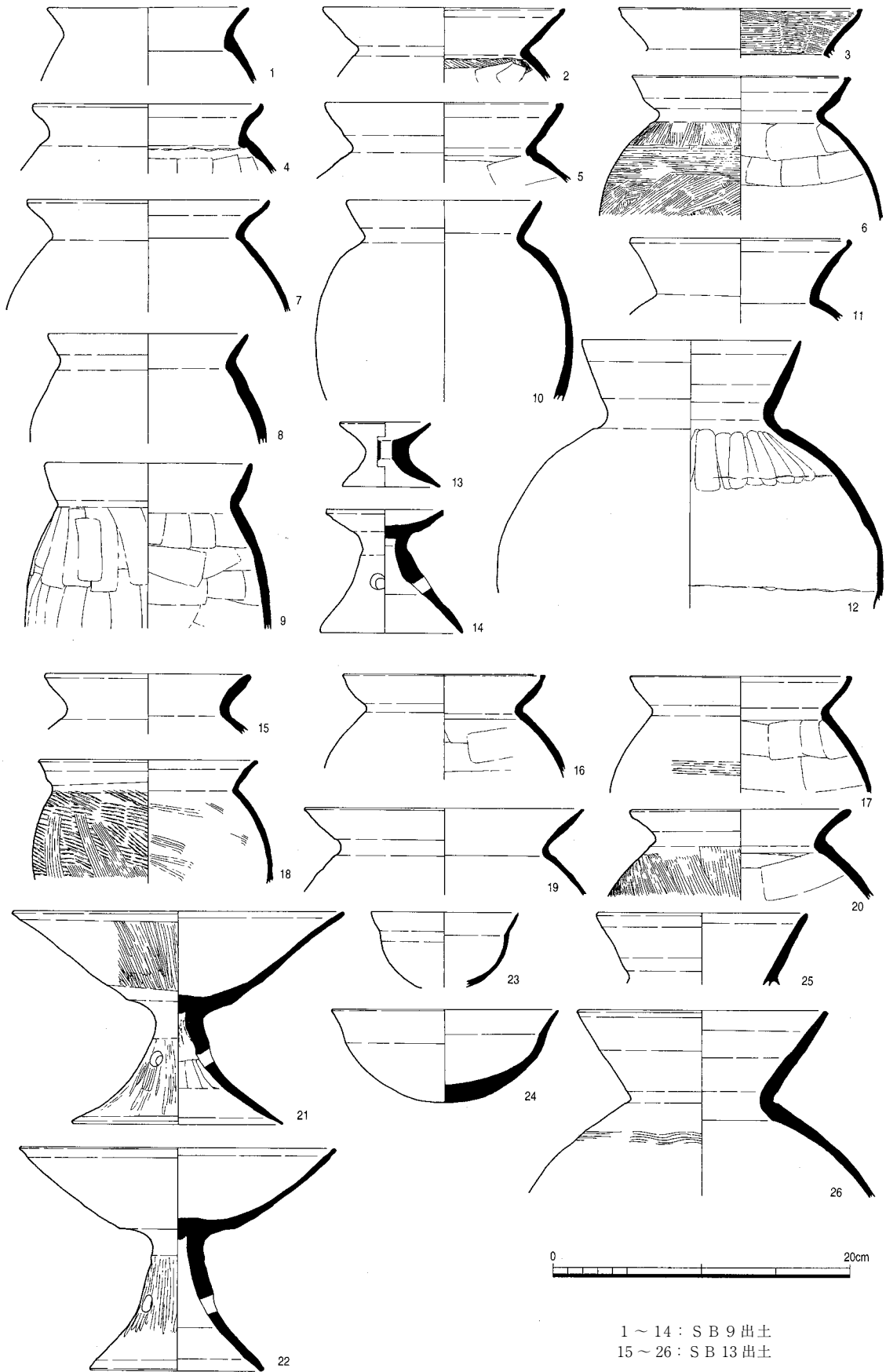


図71 S B 9・13 出土土器実測図 (1:4)

28 特別史跡特別名勝鹿苑寺庭園 (図版1・35)

経過 今調査は、共同溝（本管）からバス駐車場へ向かって延びる消火栓送水管と防犯設備電線の埋設工事に先だって実施した第3次発掘調査である。埋設管類の工事幅のみを調査対象としたため、調査区の幅が狭く、延長距離の長い調査となった。調査は西側の共同溝に近いところから初めて、W1区からW5区までの5箇所の調査区を設定した。

遺構 検出した遺構は、平安時代中期から室町時代に及ぶが、調査トレンチの幅が狭いため、

遺構の規模や性格を明らかにし得なかったものも多い。W1区では土壙とピットを検出した。土壙は一辺1.2mの正方形を呈し、10cmから30cmの石が入っている。柱穴の根石のようであるが、調査区内では建物として対応する柱穴はみられない。W2区では調査区東半で、池状遺構を検出した。池の西岸にあたると思われる、西から東へゆるやかに落ちる肩部に、玉石が敷かれ洲浜を形成している。玉石は石英の磨滅した白色の石を用いていた。池の底部には白色の粘土を張っているが、池の堆積を示すような腐植土層はみられなかった。W2区から続く池状遺構の東岸は、堆積状況からみてW4区の西半部に推定できるが、肩部を現代溝で攪乱され確認できなかった。W2区の東端部とW3区・W4区の西部では、池の下層で平安時代中期から後期のピットと遺物包含層を検出した。W4区の東半でも池状遺構を検出した。幅9.5mを測る小規模なもので、池の中から多量の瓦が出土した。その東側ではトレンチの南壁に沿って、東西方向に2.1m間隔で4間分の柱列を検出したが、南北方向の柱列を確認できず、建物か柵列かは判断できない。W5区の東側は、近・現代の湿地である。

遺物 遺物は、整理箱で53箱を数える。平安時代の中期・後期の遺物は少量ではあるが、土師器・須恵器・緑釉陶器・灰釉陶器・黒色土器がみられる。出土遺物の中では室町時代の瓦が大半を占めている。第1次調査・第2次調査と同様な瓦当文様（巴文軒丸瓦・菊花唐草文軒平瓦）の瓦が出土している。これまでは小型瓦（薨棟瓦）がほとんどであったが、今回W4区の池状遺構から一般的なサイズの瓦が出土し、丸瓦・平瓦も多い。

小結 幅の狭いトレンチ調査のため、遺構の性格を明らかにできなかった点があるものの、鹿苑寺境内の東部側でも遺構の遺存状態が良好であることが判明した。W4区の池は多量の瓦で埋められており、瓦はこれまで出土した小型の薨棟瓦と違い、瓦葺用の瓦であるため、近辺に瓦葺建物があると推定される。第1次と第2次で平安時代中期の遺物はわずかながら出土していたが、今回ピットと遺物包含層を検出し、遺跡が平安時代中期までさかのぼることが明らかとなった。

(前田義明)

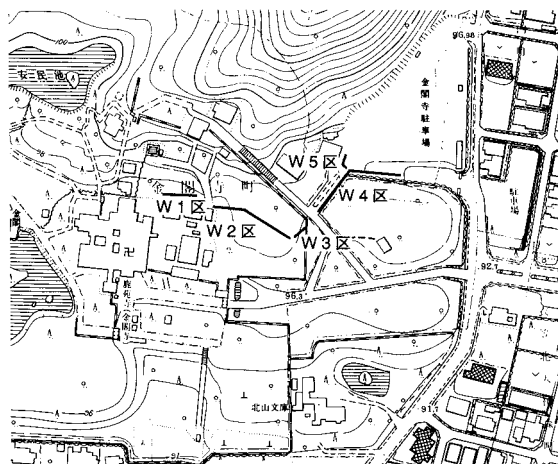


図72 調査位置図 (1:5,000)

29 北白川廃寺1 (図版1)

経過 京都盆地の北東部、瓜生山の南西麓に広がる白川の扇状台地上には、平安京遷都前に建立された古代寺院の存在が知られていた。数次にわたる発掘調査では、東方基壇と呼ばれる瓦積基壇建物とそれを囲む回廊（西方基壇）と溝、そして瓦積基壇を一部乱石積に改築した塔などを検出している。今回、西方基壇の隣接地で建物新築工事が計画され、試掘調査を行った結果、遺構が良好に残っていることが判明したため、発掘調査を実施することとなった。

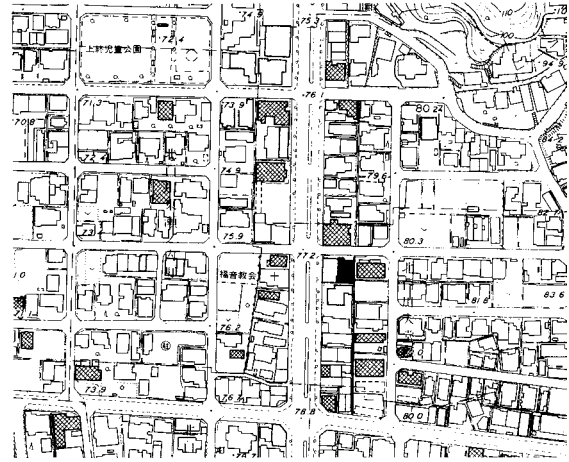


図73 調査位置図 (1:5,000)

遺構・遺物 周辺の地形は段丘が東から張り出しており、過去の調査ではこの段丘上で東方基壇や西方基壇が検出されている。今回の調査地は段丘から西へ下がった部分にあたり、建物を区画する施設の存在が予測できた。北白川廃寺に関連する遺構は、調査区東寄りで西方基壇の西側を区画する南北溝（SD2）を検出した。溝内には東方から流れ込んだ多量の瓦類を包含しており、東方基壇あるいは西方基壇で使用されていた瓦の状況を知ることができる。この溝の東には基壇状の高まりがみられ、花崗岩の切石が裾部に並べられていた（SX1）。

また、調査区中央では幅0.8m程のやや湾曲した東西溝（SD4）を検出し、埋土には多量の炭やフイゴの羽口・鉄滓を包含していた。この溝の南には、SD2によって東半分を壊された竪穴状遺構（SK5）を検出した。この遺構の大きさは南北2.5m、深さ0.3mである。西壁際に長軸0.6m弱の花崗岩が上面を平らにして据えられ、周囲の床面直上から多量の鉄滓が出土した。炉は検出できなかったが、埋土から鍛錬時に飛散した鉄片が多量に検出できることから小鍛冶工房である可能性が高い。これらの小鍛冶関連遺構はSD2によって切られ、廃寺に先行するが、瓦を埋土に包含していることから時期差は考えられず、寺院造営に伴うものと推定できる。

北白川廃寺下層の調査は、縄文時代晩期の遺物包含層を確認したにとどまるが、大規模な噴砂の痕跡を検出したことは重要である。噴砂は調査区の北西から南東にかけて幅約1.5mで認められ、縄文時代の遺物包含層や上層の無遺物層まで貫き、北白川廃寺の造営によって削平を受けている。古墳時代後期以前に発生した大地震によって引き起こされた噴砂と考えられる。

小結 北白川廃寺の具体的な伽藍については不明な点が多いが、今回の調査で西方基壇の西に南北方向の区画溝の存在が明らかになった。また、東方基壇を中心とする伽藍が活断層によって成立した段丘上に造営されたことも推測できる。今後、周辺の調査によってさらに具体的な伽藍を復原することが可能となろう。

(網 伸也)

『北野廃寺・北白川廃寺発掘調査概報』平成2年度 1991年報告

30 北白川廃寺2 (図版1・36～38)

経過 今回の調査地は北白川廃寺塔跡の北側に相当し、塔の北を区切る施設か建物の検出が十分に予測できた。この地にビル建設が計画され、工事に先立って試掘調査を行った結果、北白川廃寺の遺構面が良好に遺存していることが判明したため、発掘調査を行うこととなった。

遺構 今回の調査では、北白川廃寺の遺構面と縄文時代後期と早期の遺構面が確認できた。廃寺の遺構は、高いところでは地表下約0.2m、一番低い南西隅部で約1mの深さで検出した。

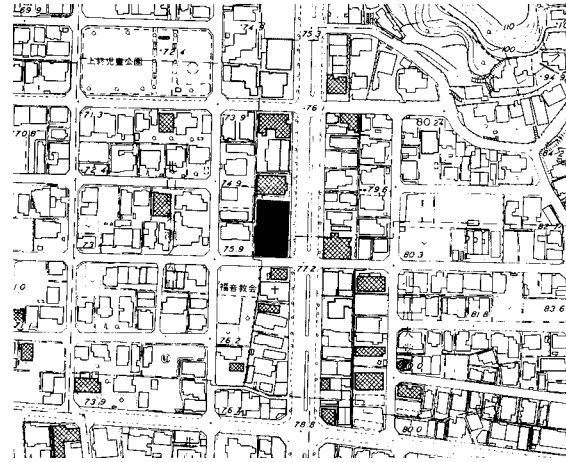


図74 調査位置図 (1:5,000)

縄文時代後期の遺構面は、廃寺遺構面の下0.1～0.2mの厚さで堆積した黒褐色砂泥層を除去した段階で確認した。検出した遺構は土器片と粘土塊を多く包含する浅い土壌である。また、後期の遺構面の下層に白川の氾濫によって形成された黄褐色泥砂と礫の無遺物層が0.6～1.2mの厚さで堆積しており、縄文時代早期の遺構面をこの下層で検出した。現地表面からでは東の浅い部分で約1.2m、北西隅では深さ3mを越える。以下、検出した各遺構について概略を述べる。

北白川廃寺関係の遺構は、掘立柱建物2棟 (SB 11・13)、掘立柱塀2列 (SA 9・10)、東西溝2条 (SD 7・8)、土壌1基 (SK 23) などである。SB 11は、調査区南東隅で北半を検出した掘立柱建物である。真北に対してかなり西に振れた南北棟で、桁行3間以上 (柱間約1.8m)、梁間4間 (柱間約1.8m) を確認している。切り合い関係では他の遺構より古く、北白川廃寺の方位とまったく合わないことから、寺院造営以前に建てられていた建物と考えている。SB 13は、調査区北東で検出した南北棟の掘立柱建物である。身舎は5間 (柱間約1.8m) × 2間 (柱間約2.4m) で東に関しては不明であるが、少なくとも西と北に庇が取り付く。方位はほぼ真北で、身舎北西隅柱の抜取穴に多量の焼土を包含しており、火災による建物の倒壊が考えられる。調査区南部では塔の北を区切る掘立柱塀SA 10を検出している。真北に対してやや東に振れており、7間分 (柱間約3m) を確認した。SA 10の北と南には東西溝SD 7・SD 8が平行して伴う。SD 7はSA 10の北溝で幅約2m、深さ約0.5m、SA 10の心からSD 7の南肩まで約4mである。北肩付近には小ピットがあり、そのうちの1個には緑釉陶器碗が据えられていた。SD 8はSA 10の南溝である。幅は不明だが深さはSD 7と同じく約0.5mで、SA 10の心から北肩までの距離も約4mと等しい。埋土から塔で使用されていたと考えられる多量の瓦が出土した。また、SA 10とSD 8との間の空閑地では土器を多量に包含した土壌SK 23を検出した。SA 9はSA 10の南を走る東西塀で、SB 13と同じく真北にほぼ合う。柱間は2.1～3.0mと不揃いである。遺構の切り合い関係があまり明確でなかったが、SA 10に先行する簡単な塀であったと考えられる。

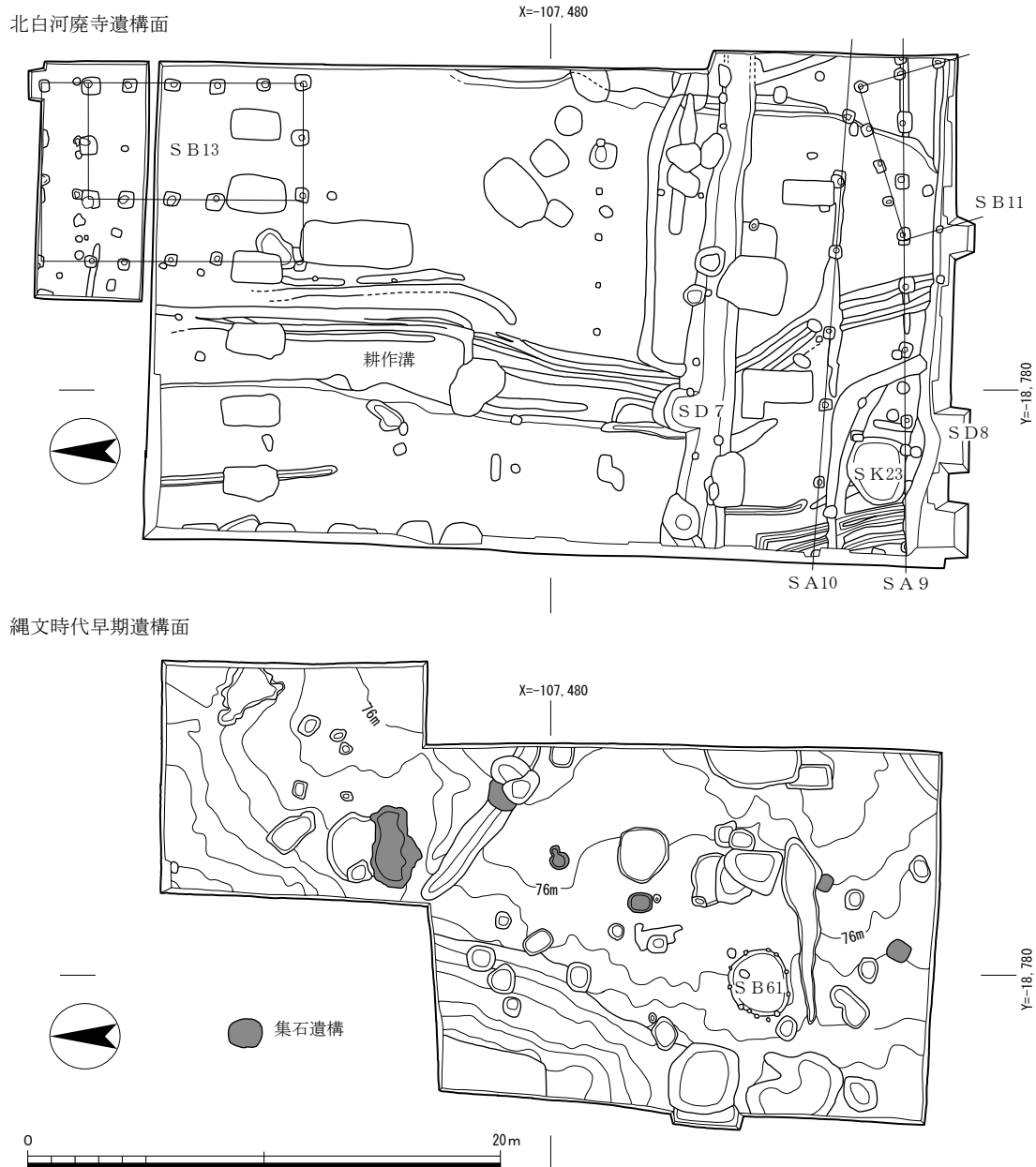


図75 遺構平面図 (1:300)

縄文時代早期の遺構は、竪穴住居1棟（SB61）と集石群を検出した。遺構の立地は、北西方向の深い谷筋から南東に向かって上った平坦地への移行部付近で、生活環境としては絶好の立地条件を備えている。SB61は長径約2.7m、短径約2.4mの楕円形の浅い窪みで、肩部に小ピットが12個めぐる。深さは、南側で0.1m、北東部が最も深くて約0.2mである。周囲を廻る小ピットは南側があまり明確でなく、深さも北側ほど深くなっていることから、南面して入り口が開けられていたと推定できる。また、東隅には約0.2mの石が上面を平らにして据えられていた。集石群は、0.6～1.2mの浅い窪みに拳大の石を不規則に入れたものである。石の中には、明らかに焼石と考えられるものや、叩石や擦石などの石器が含まれていた。この遺構面は白川の氾濫砂層によって完全に密閉されており、遺物包含層はこの遺構面の下層に1m以上の深さで広がる。

遺物 遺物は整理箱にして88箱分である。そのほとんどが溝や包含層からの瓦類であるが、

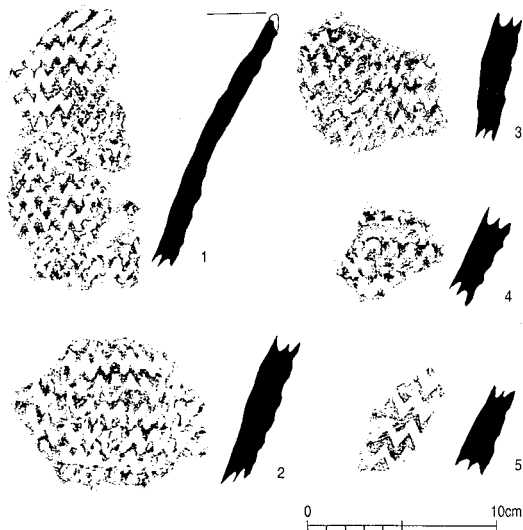


図76 S B 61 出土土器実測図拓影 (1:4)

S K 23 から奈良時代末～平安時代初めの良好な一括の土器資料が出土したことや、多量の縄文時代早期の押型文土器が出土したことは大きな成果と言える。

縄文時代早期の遺物は、山形文を中心に、少量の楕円文などの押型文土器、撚糸文土器が出土した。市内でこれだけ多量の早期の一括土器が出土したのは初めてで注目できる。竪穴住居から出土した土器は少量・小破片であるが黄島式併行と考えている。包含層出土の押型文土器は、横位、縦位の山形文、山形文と重層菱形文、山形文と斜格子文、山形文と沈線文などを組合

わせて密接施文する文様構成を中心としている。他に少量の帯状施文を施す山形押型文もある。これらの包含層出土の押型文土器は、いわゆる葛籠尾崎併行期の段階にあてられる。土器の他、スクレーパー（サヌカイト）、石鏃（サヌカイト）、擦石、石皿、叩石などの石器類や剥片（サヌカイト・チャート）が出土している。

北白川廃寺に係る遺物としては、S K 23 から出土した一括資料がある。c手法を施した土師器杯・皿、須恵器の仏鉢などと共に灰釉陶器浄瓶や緑釉陶器椀が出土し、奈良時代末期から平安時代初めにかけての年代が与えられる好資料となっている。緑釉陶器椀はS D 7 内小ピットからも出土し、奈良時代の鉛釉陶器の系統を受け継ぐ特殊な土器として注目できよう。なお、土師器杯の底部に「寺坏」と墨書された土器が出土している。同時期の資料は、S D 7 やS A 10 整地層からも出土しており、一時期の画期を想定できよう。

瓦類ではS D 8 から出土した多量の瓦の分析結果がとても興味深い。S D 8 は前述したように、塔の北を区切る掘立柱塀の内溝と考えられ、その埋土から出土した瓦は塔で主に使用されたと考えて間違いはない。ここから出土した平瓦の破片数を調べたところ、半分以上が格子叩き平瓦で北

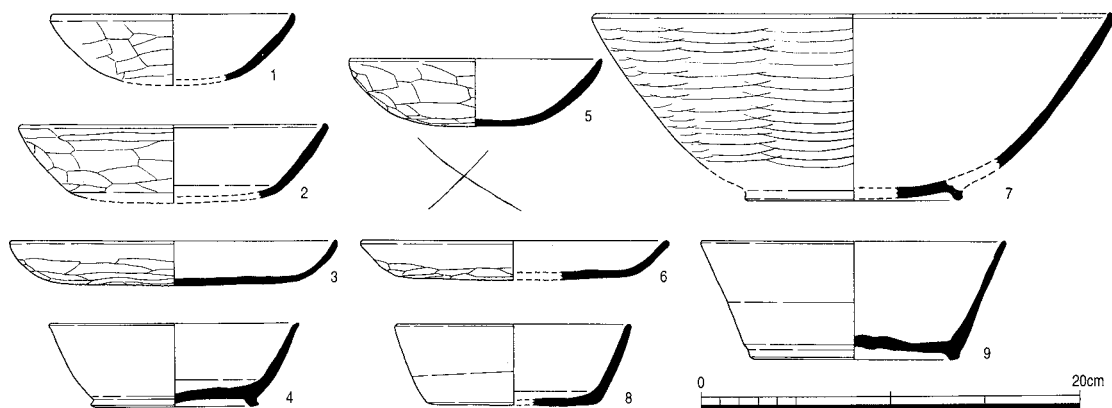


図77 出土土器実測図 (S A 10 整地層: 1~3 土師器、4 須恵器 S D 7 : 5~7 土師器、8・9 須恵器) (1:4)

白川廃寺特有な特殊叩き平瓦は10%弱、縄叩き平瓦は全体の6%弱しかなかった。東方基壇周辺の調査ではそのほとんどが縄叩きで、格子叩きや特殊叩きは全体の3%にも満たなかったのと対照的である。また、塔では東方基壇周辺ではほとんど出土をみない特殊な文様の軒丸瓦が多く出土している。東方基壇建物と塔では中心となる瓦の生産地が異なっており、建立時期に差があるものとみられる。

この他、寺院廃絶後に営まれた耕作溝から土師器皿などの遺物が出土し、寺院が廃絶した時期を知る手がかりとなっている。特に、最下層の耕作溝から出土する土師器皿は、口縁端部を一段ヨコナデ調整した平安時代末期のものであり、この頃には寺院は廃絶し、一面が田畑となっていたと推測できる。

小結 北白川廃寺の調査も今回で第6次調査となり、伽藍配置についての見通しが可能になっている。以下、伽藍配置についての見解を述べる。

今回の調査で掘立柱塀を検出し、北側に掘立柱建物S B 13が存在することなどから、寺域が更に北に広がることは明らかである。掘立柱塀の内、やや東に振れるS A 10は、東方基壇周辺の回廊や溝と方位が一致しており、東方基壇周辺と塔周辺が同じ計画の下に造営が進められたことを示している。この北塀の性格であるが、塔基壇の北辺から約25m、塔中心からでは約32m離れている。中心伽藍の北塀にしては塔に近接し過ぎており、塔を囲む塔院の塀と考えるほうが自然である。この場合、塔を中心として方形に塀が囲むならば、塔院の規模は塀の心々距離にして60mを越え、非常に大規模なものになり問題点も残る。しかし現時点では、北白川廃寺の伽藍配置は、一段高い扇状台地上に東方基壇を回廊で囲む金堂院があり、その西のやや下がったところに塔院が並んでいたと推測する。

北白川廃寺下層遺跡として、縄文時代早期の遺構を検出した。今回検出した竪穴住居は、浅い窪みの周囲に小ピットを廻らしており、小規模ながら旧石器時代の住居と類似した構造を持つ。このような縄文時代早期の住居は、京都周辺では奈良県大川遺跡、三重県大鼻遺跡、兵庫県西岡本遺跡、福井県岩の鼻遺跡・上の山遺跡などで発見されているに過ぎず、どれも3~4m程の小規模なものである。集石群と共に京都の縄文時代を考える上で重要な成果であったといえる。

(網 伸也)



図78 S K 23 出土灰釉陶器浄瓶

31 南春日町遺跡第 20・21 次調査 (図版 2 - 2・39・40)

第 20 次調査 (下西代古墳群)

経過 平成元年 (1989) 10 月に下西代地区を中心に古墳確認のための試掘調査 (18 次) を行った。その結果、下西代古墳群 1 号墳から東 50 m の水田直下で、古墳の石室の一部と考えられる石材を検出した。石材の検出により当地点に新たな古墳の存在が予測されたため、発掘調査を実施した。

調査は次年度の平成 2 年 (1990) の 7 月から開始した。調査の結果、古墳時代後期の古墳を検出した。古墳は、石室、墳丘の上半部を近世の水田耕作によって削平されていたが、石室基底部、墳丘裾部は良好な状態で残存していた。更に当古墳は石室玄室部に小石室を付設した特殊な古墳であることも判明した。なお、当古墳を西に接する 1 号墳と一体のものと判断し、下西代古墳群 2 号墳とした。

遺構 古墳の墳丘形状は円形で、その規模は調査区外に東接する現水田の畦が墳丘裾部を踏襲していると判断し、直径 20 m と推定した。墳丘を構成する封土は近世以降の耕作による整地のため削平されていた。主体部は両袖式の横穴式石室である。規模は全長が 13 m 以上で、玄室は長さ 3.9 m、幅は 1.6 ~ 1.8 m、羨道は長さ 8.2 m 以上、幅は 1.2 ~ 1.4 m である。石室の主軸方向は真北に対して西へ 28 度振れている。掘形の幅は 2.4 ~ 2.6 m、深さは地山面から 0.9 ~ 1.0 m である。胴張り状を呈する玄室内奥には小石室が構築されている。小石室の規模は長さ 2.6 m、

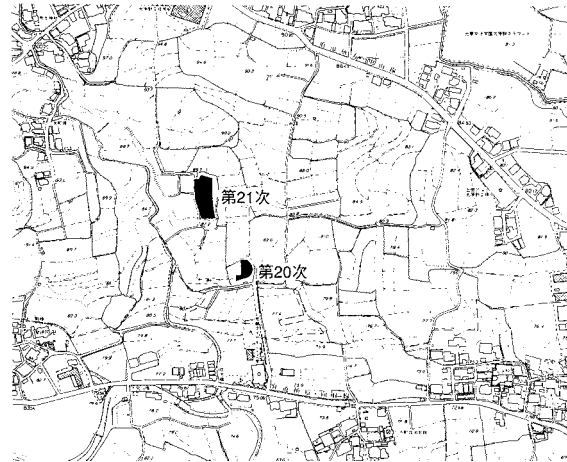


図 79 調査位置図 (1 : 10,000)

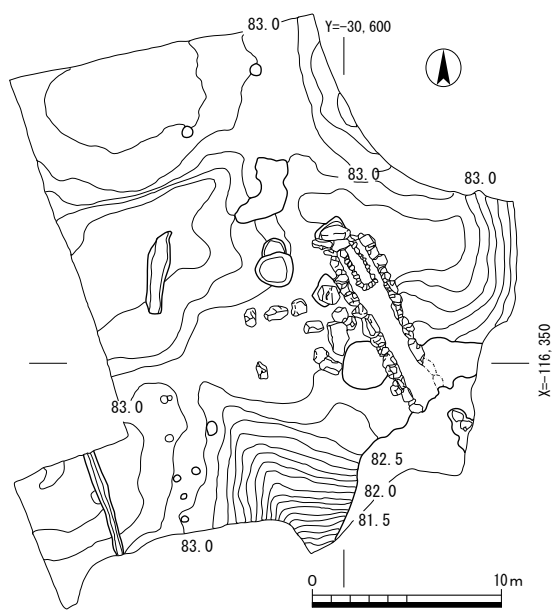


図 80 墳丘測量図 (1 : 400)

幅 0.5 m、高さ 0.5 m。奥壁は横穴式石室と共有している。西壁は 3 段積み、東壁は 2 段積みであるが、南側は平石 2 枚で閉塞されている。奥壁を除く周囲は礫混じりの粘土で固められ平坦面が形成されているが、南側はなだらかな傾斜を持つ。小石室床面には、横穴式石室同様に隙間なく石が敷かれている。更に主軸方向も横穴式石室と同一である。なお、調査区内では墳丘外にあたる北・西側で中世のピット、土壙、溝をいずれも地山面で検出している。

遺物 石室内から出土した遺物には土器類と金属製品がある。大半は土器類である。遺物の出土状況をみると、床面からはわずかで、ほとんど

が埋土下層から出土している。

玄室：須恵器杯身・蓋・短頸壺・
高杯・埴瓶・土師器壺

小石室：金環、鉄製品

羨道：須恵器杯身・蓋・短頸壺・
金環・銀環・鉄製品刀子

図示した遺物は須恵器杯蓋（1・2）、
杯身（3・4）、高杯（5）、短頸壺（6）
である。2・4～6は玄室から、1・
3は羨道から出土した。

古墳時代の遺物とは別に、羨道から
土師器皿、須恵器蓋、灰釉陶器平瓶、
瓦器椀が出土している。

小結 今回の調査は大原野地域の古
墳としては、西接する下西代古墳群1
号墳に次ぐ本格的な調査である。その
結果、当古墳は主体部である横穴式石
室の玄室部に小石室を構築した特殊な
古墳時代後期の円墳であることが判明
した。本例はこの時期の石室の形態と
葬送儀礼を検討する上での貴重な資料
となろう。

小石室の構築については、本体であ
る横穴式石室との时期的な前後関係が
問題になるが、小石室内から時代を確
定できる遺物の出土がないため、確証
は得られなかった。横穴式石室を採用
する後期古墳は、多くが親族の追葬を
前提としての構造を持っている。その
ための時期を置いた二次的施設に位置
付けるのは容易だが、小石室の構造、
石室内の出土遺物の位置などから、横
穴式石室造営と一連の工程の中で構築

された単葬墓の可能性もある。後期古墳の横穴式石室内に小石室を伴う例として奈良県新庄町寺
口忍海古墳、^{註1} 東大阪市大薮古墳、^{註2} 兵庫県西脇市妙見山麓古墳群がある。^{註3} いずれも玄室内に扁平

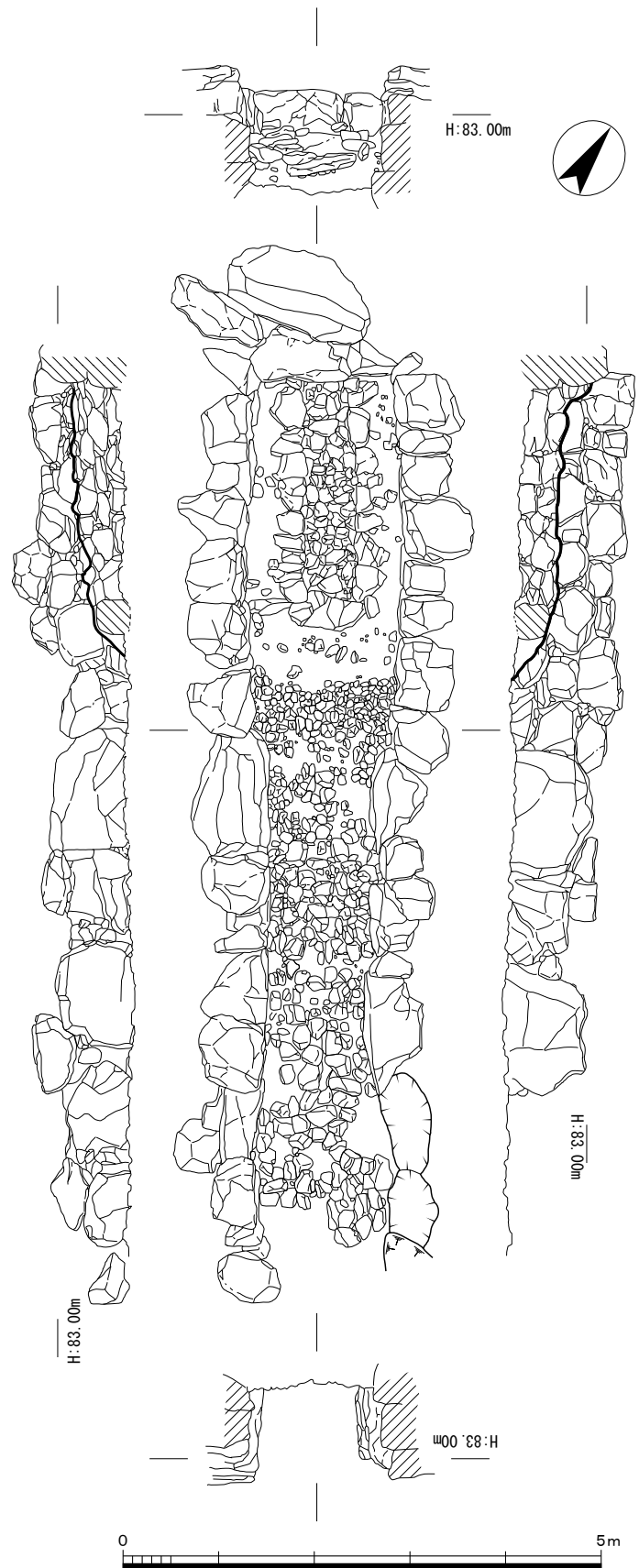


図81 石室実測図 (1:80)

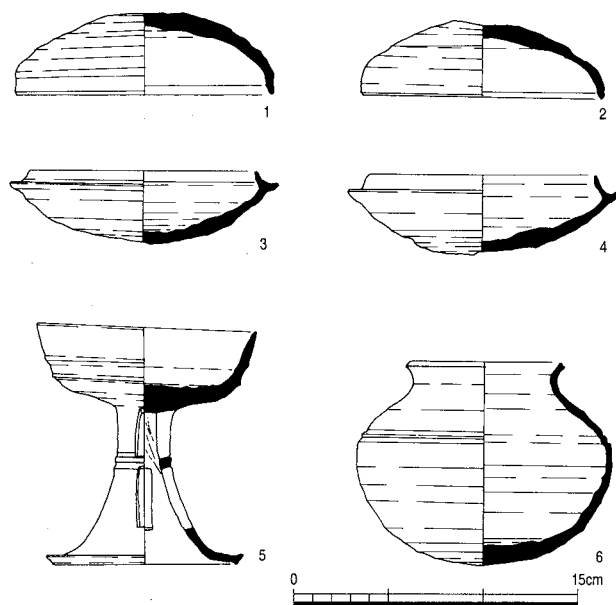


図 82 石室出土須恵器実測図 (1:4)

註 1 『寺口忍海古墳群』新庄町文化財調査報告第 1 冊 新庄町教育委員会 1988

註 2 『横穴式石室を考える 近畿の横穴式石室とその系譜』帝塚山考古学研究所 1990

註 3 『加古川流域の古代史 (上・中流編)』妙見山麓遺跡調査会 1989

な自然石、割り石を組み合わせた小規模なもので、用途は追葬時の棺としてとらえられている。しかし本例のように奥壁を除く小石室周囲に小礫混じりの粘土で固められた堅固なものは例がない。

以上のことから、今回出土した小石室の機能については上述した類例が示すように棺として考えられるが、横穴式石室との前後関係、追葬の可能性については課題が残る。

(加納敬二・永田宗秀・小檜山一良)

第 21 次調査

経過 調査地は水田で、小字名は「下西代」と呼称されている。現地形をみると北西から南東にかけて緩やかに傾斜する台地の中位にあたり、西側の崖下には社家川が南流する。平安時代に創建された藤原氏の氏神の大原野神社からは南東 700 m に位置している。

平成元年 (1989) 10 月、当調査地の西接地で 19 次調査を行い鎌倉時代から室町時代の建物、堀などの遺構群を検出した^註。今回の調査地にあたる調査区東外に遺構が広がる状況が濃厚であったため、当該期の遺構を確認する目的で調査を実施した。

調査の結果、鎌倉時代から室町時代の建物、井戸、堀などを検出したことで、19 次調査の遺構群とは一体のものであることが判明した。

遺構 検出した遺構の総数は 444 基であった。遺構は鎌倉時代から江戸時代までであるが、主体は鎌倉時代から室町時代である。調査区の高所にあたる北半部において多数の遺構を重複した状態で検出したが、東側を除く南半部は後世の削平のためか希薄であった。以下主要な遺構について概述する。

調査区の北半部では鎌倉時代から室町時代の建物を 4 棟検出した。4 棟の建物は重複しており、前後関係が認められる。

建物 1 南北 2 間×東西 3 間で南に庇が付く東西棟である。柱間は南北 2.2～2.3 m、東西 2.3～3.0 m、庇の出が 1.5 m。柱穴の径は 0.5 m、いずれも底部に根石を据えている。

建物 2 南北 3 間×東西 3 間の南北棟である。柱間は南北 2.6～3.0 m、東西 2.2～2.6 m。柱

穴の径は0.3～0.5 m、底部に根石を据えているものもある。

建物3 南北2間×東西6間で南に庇が付く東西棟である。柱間は南北2.0～2.7 m、東西2.2～2.7 m、庇の出が1.5 m。柱穴は0.3～0.6 m、底部に根石を据えているものもある。

建物4 南北2間×東西4間の東西棟。柱間は南北2.6～3.3 m、東西1.8～2.5 m。柱穴の径は0.3～0.7 m、底部に根石を据えているものもある。

井戸は4基検出した。北半部で検出した井戸1以外はいずれも南半部東に位置している。

井戸1 円形の石組井戸。

径2.0 m、深さ3.3 m。

井戸2 円形の素掘井戸。

径1.8 m、深さ3.0 m。

井戸3 円形の素掘井戸。

径2.5 m、深さ4.5 m。

井戸4 円形の素掘井戸。

径2.2 m、深さ3.5 m。

北半部の北端と南半部の東端では同一の堀を検出し、堀1とした。堀の幅は4 m以上、深さは1.9 mである。

また南半部東では南北方向の柵列1を検出している。北半部で検出した溝1は幅0.5 m、深さ0.4～0.5 mの東西方向の溝で、東西21 mにわたって検出した。

遺物 出土遺物は、整理箱に57箱あり、平安時代から江戸時代の遺物が出土した。遺物の主体は鎌倉時代から室町時代で、土器類、瓦類、木製品、石製品、鉄製品がある。土器類には土師器、須恵器、瓦器、陶器、輸入陶磁器がある。瓦類は軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦である。木製品は建築部材が多くを占めるが、曲物、箸、下駄、剣型木製品、丸い小球に目鼻を彫り込んだ人面木製品もみられる。いずれも井戸4内から出土している。石製品は鍋、硯、砥石、臼である。鉄製品には釘がある。

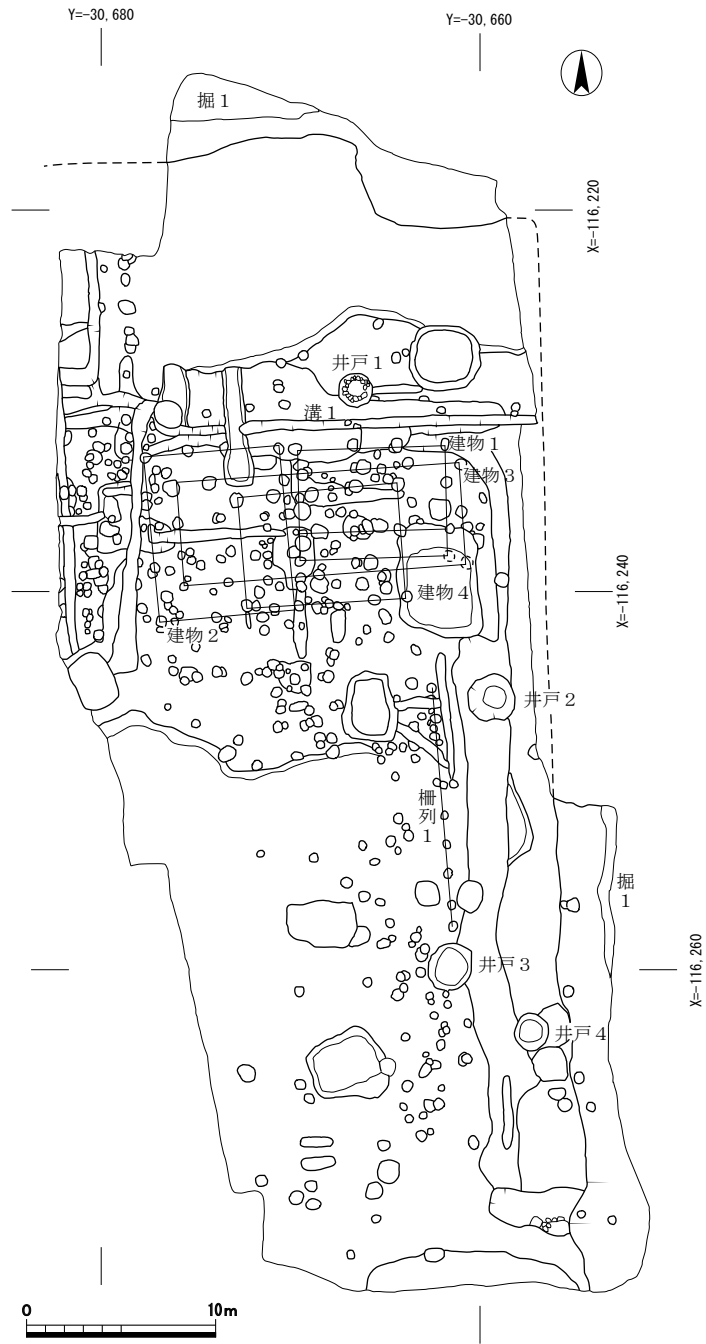


図83 遺構平面図 (1:200)

井戸1からは土師器皿（いわゆるヘソ皿）の完形品が多数出土した。また、それに伴い高台付きの土師器の完形が数点、美濃系産とみられる完形の椀が2個体出土している。井戸4から土師器皿、瓦器椀、焼締陶器甕と共に木製品が多数出土した。木製品の内容は前述したとおりである。溝1からは土師器皿、瓦器椀、皿、鍋、釜、青磁椀、白磁皿が多数出土し、完形のものも多く含まれる。

小結 調査の結果、鎌倉時代から室町時代の建物、溝、井戸、堀を検出した。調査地を含む下西代地区ではこれまでに5回の調査を実施している。その結果、古墳時代後期の下西代古墳群、平安時代から室町時代の建物、溝、井戸、堀などを検出している。特に平安時代から室町時代の遺構については、小字名である下西代地区が、地元では下社家と伝承されてきたことなどから大原野神社に関係する人々の居住地区、すなわち社家跡と考えている。

今回検出した鎌倉時代から室町時代の遺構群は同地区内では比較的まとまりのあるものといえるだろう。北半部に建物群、その北に東西溝と井戸、南半部東の井戸群、南北柵列、そして幅4m以上の堀が周囲を画する。

堀については西に隣接する19次調査地でも検出している。同調査地では、堀は西側で南北方向に、西北端では東へ曲折し、当調査地北半部で繋がり、同一の堀であることが判明した。そのことから両調査での検出遺構は一体のものとの確証も得られた。両調査で判明した堀の東西長は45m、南北長は60mである。

19次調査と一体のものである堀に区画された遺構群の性格については、同地区内での他の居住地とは違い、堀により隔絶されていることから、なんらかの規制を伴う施設の可能性が考えられる。また両調査を合わせた井戸の検出数が従来の調査例よりはるかに多く、また同時期に南半部に多くが集中していることも性格を考える上で見逃せない事実である。更に北西から南東に緩やかに傾斜する丘陵上に位置する建物群の方向は地形に合わせず、やや西に振れているものもあるが、真北に近い。同一方向を意識していることがうかがえる。現存する大原野神社社殿の建物方向は真北である。平安時代に創建された社殿が、建て替えがあったにせよ現在までその位置、建物方向を踏襲しているとするならば、検出した建物群と同一方向であることは興味深い。

今回の調査結果は、神社と社家遺構の在り方を考察する上で、重要な資料になるといえよう。

（加納敬二・永田宗秀）

註 加納敬二「南春日町遺跡第17・19次調査」『平成元年度京都市埋蔵文化財調査概要』
（財）京都市埋蔵文化財研究所 1994

32 六波羅政庁跡 (図版1・41)

経過 調査地は、法住寺殿跡北西部、六波羅政庁跡にあたる。周辺の既往調査では、昭和58年(1983)調査地南部(当研究所)で建物3棟、昭和53年(1978)南西部(古代学協会)で溝・土壇・墓など、昭和52年(1977)北部(六波羅政庁発掘調査団)で井戸・土壇・溝などが検出されている。試掘調査で、溝・石敷などの遺構を確認したため、発掘調査を実施した。調査の目的は、平安時代、鎌倉時代の遺構の確認と当地域の地割りの解明である。

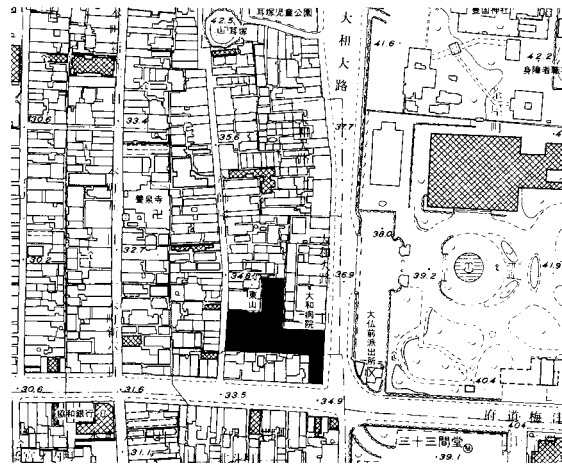


図84 調査位置図 (1:5,000)

遺構 調査地周辺の地形は西へ傾斜する。遺構面も緩やかに傾斜し、東端と西端では約70cmの比高差がある。調査地の基本層序は上から黒色土層(近代盛土・厚さ30~100cm)、暗褐色灰色砂泥層(近世盛土・厚さ30cm)、暗褐色砂泥層(中世包含層・厚さ30~50cm)、黄灰色砂泥層(無遺物層)である。暗褐色砂泥層上面で室町時代の遺構、黄灰色砂泥層上面で古墳時代から鎌倉時代の遺構を検出した。鎌倉時代遺構面は、調査区中央で標高33.6mである。

検出した遺構は、古墳時代・平安時代・鎌倉時代、室町時代以後の4時期に分けられる。

古墳時代の遺構は、調査区中央部で土壇2基を検出した。

平安時代の遺構は、調査区南東部で井戸を、調査地全域で柱穴・土壇を検出したが、いずれも残存状況は悪い。S E 211は、方形の掘形(1.8×2.0m)で、井戸側は方形縦板組み(一辺0.9m)で最下部の横棧が残存する。井筒は、曲物(径0.4m)である。埋土は暗褐色泥土層で、下層で土師器・須恵器・緑釉陶器・桃の種などが出土した。時期は平安時代後期(12世紀後半)である。

鎌倉時代の遺構は、調査区西部で建物・柱列とその両側で溝2本を検出した。溝東側では、土壇・井戸の他、多数の柱穴を検出したが建物としてはまとまらなかった。S B 157は南北棟建物で、桁行3間(1.75m、3.20m、1.75m)・梁間2間(1.5m、1.5m)である。柱穴は円形(径0.5m前後)で、底に礎石を入れるものが多い。北脇間には石敷きが一部残存する。建物東側柱列と揃えて、北・南に柱列S A 150がある。北側で4間(柱間寸法1.60~1.65m)、南側で3間(1.40~1.75m)検出した。柱穴は円形(径0.4m前後)で、底に礎石を据えるものもある。方位は、N 2°50' Eである。柱列の両側0.5mを離して南北溝(幅0.2m、深さ0.1m)がある。これらの遺構は、削平されているために上部構造は不明であるが、S B 157は門、S A 150はそれに取り付く塀と推定できる。柱穴からは、遺物がほとんど出土せず、時期は限定できないが、石敷部の遺物には土師器・陶器・瓦器などがある。西側の溝S D 1(幅2.0m、深さ0.6m)は、断面U字形で底部はかなり凹凸がある。南端では幅が狭くなり、西へ曲がる。西肩は直線的であるが、東肩はS B 157の西側で幅8mにわたり約1m突出する。S D 1の南延長上には、同規模のS D 8がある。

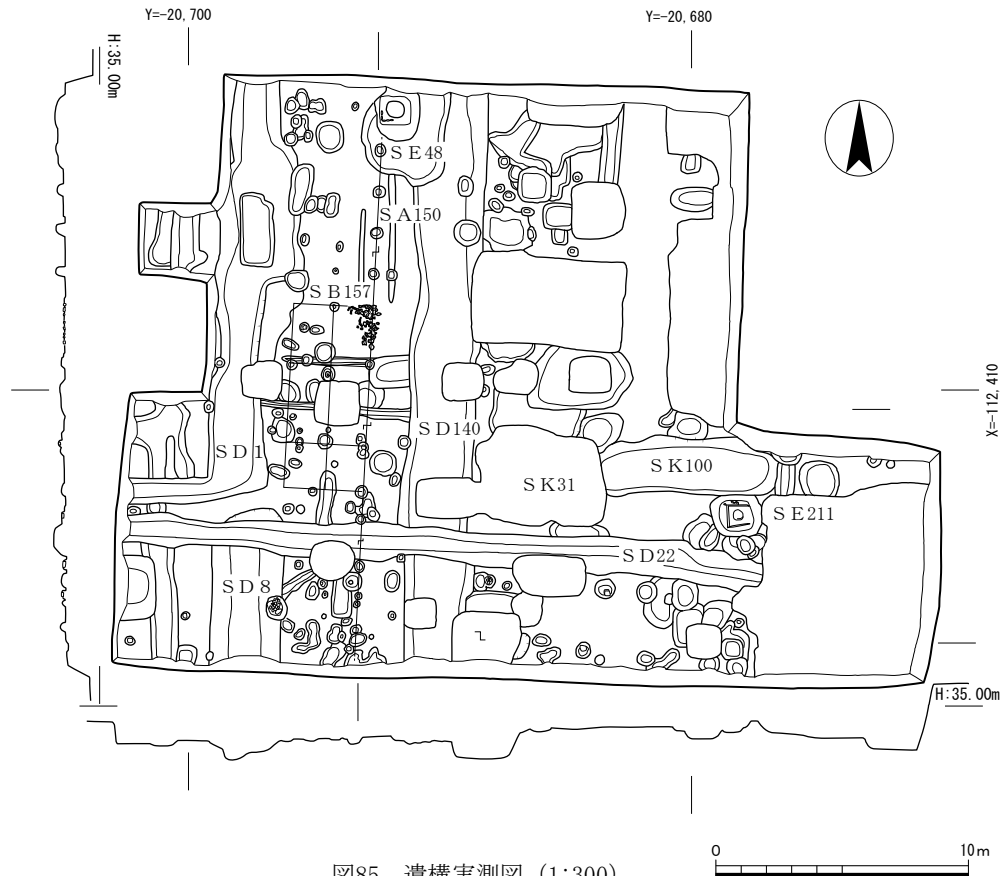


図85 遺構実測図 (1:300)

東側の溝 S D 140 (幅 2.7 m、深さ 0.4 m) は、両側 2・3 段に落ち、凹凸がある。西肩と S D 1 東肩までの間隔は約 5 m である。これらの溝は、方向が建物・堀と一致し、門西側が突出することから、建物に伴う溝と推定できる。溝埋土はいずれも黄褐色砂泥層で、遺物は主に下層より出土した。遺物は、土師器・須恵器・陶器・白磁・瓦・瓦器などが出土した。時期は、鎌倉時代から室町時代 (14～15 世紀前半) である。土壙 S K 100 は、長方形 (5.2 × 2.0 m、深さ 0.4 m) で底部は平坦である。埋土は大きく 2 層に分かれ、上層は茶灰色砂泥層、下層は黒灰色砂泥層である。上・下層共に土器が多量に出土し、下層では木製品や種子、ムシロなどが出土した。時期は 13 世紀後半である。

室町時代以降の遺構は、調査区南部で東西溝 1 本を検出し、全域で井戸や土壙、柱穴を検出したが、建物としてはまとまらなかった。溝 S D 22 は、東西溝 (幅 1.3 m、深さ 1.0 m) で断面逆台形である。方位は E 3°31' S である。埋土は暗灰色砂泥で、遺物は土師器・陶器などがある。時期は 15 世紀である。S E 48 は、方形の掘形 (一辺 1.6 m) を呈し、井戸側は方形縦板組みで最下部の縦板が残存する。埋土は茶灰色砂泥層で遺物は少ない。時期は 14 世紀である。

遺物 遺物は整理箱で 144 箱出土した。内容は、大半が土器類で、瓦類は少ない。時期は、古墳時代から江戸時代であるが、大半は鎌倉時代から室町時代である。

古墳時代の土器は、土壙から出土した他、後世の遺構から出土した。土師器・須恵器がある。平安時代の土器は、井戸 S E 211 や後世の遺構などから出土したが、量は少ない。土師器皿・緑釉陶器・灰釉陶器・須恵器・瓦器などがある。鎌倉時代の土器は、溝・土壙・柱穴などから出土

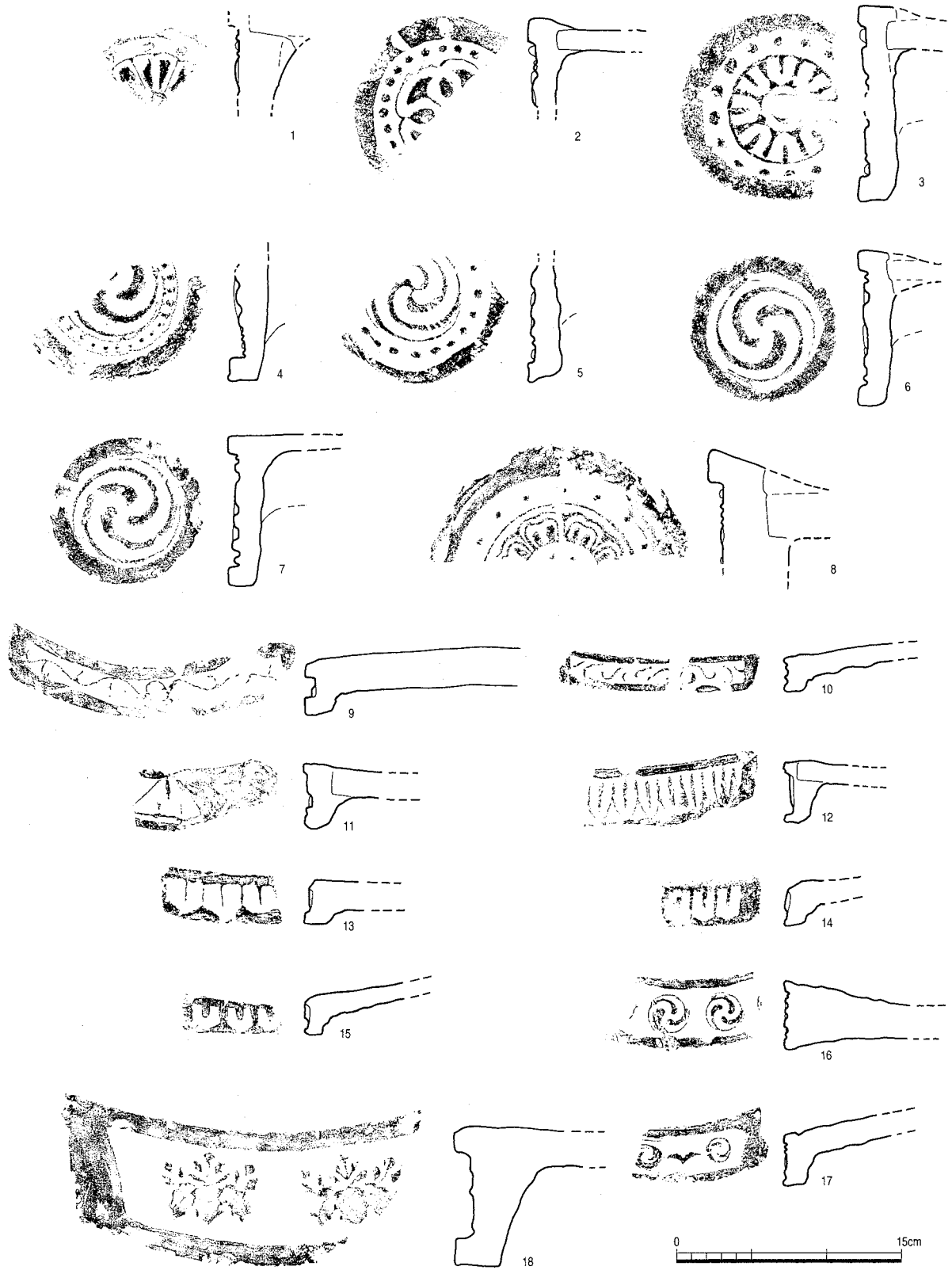


图86 軒瓦実測图 (1:4)

した。全体で70箱分出土し、大半は土師器皿であるが、土師器碗・鉢・壺・鍋・釜、瓦器碗・杯・鍋、陶器碗・壺・甕・播鉢、青磁碗・壺・鉄絵盤、白磁碗、青白磁合子・皿、緑釉陶器鉢・壺、石製硯などが出土した。室町時代の土器は、各土壙・柱穴などから出土した。

瓦類は、各遺構や包含層から出土し、周辺の調査区に比べ全体の量は少ない。軒丸瓦は14種34点、軒平瓦は14種25点出土した。時期的には、法住寺殿に関連した平安時代後期のものが多く、六波羅政庁に関連した鎌倉時代から室町時代、方広寺所用瓦である桃山時代のものは少ない。6・7・10・15は小型瓦である。1・3～5・11～14・17・18類は各1点、2・10・16類は各2点、6・8類は各3点、9類は4点、15類は6点、7類は10点出土した。

小結 今回の調査では、当地域における古墳時代から近世の変遷をたどることができた。

平安時代の遺構は、井戸を除いて顕著ではないが、遺物は多数出土し、調査地に法住寺殿に関連する遺構の存在が推定できる。

鎌倉時代から室町時代の遺構として、門・堀と南北溝を検出した。規模が大きいことなどから、地区を区画した施設と推定できる。位置関係から考え、S B 157は西門、それに取り付くS A 150の東側が区画内と推定できよう。造営時期は、鎌倉時代と推定できるが、両溝は数度の造り替えがあり、最終的に埋没するのは15世紀前半である。方位は北で約3°東に振れ、現三十三間堂(N 1°41'56" E)や、前調査地(1983年)検出の建物・溝(平安時代後期、N 0°41' E前後)とは異なり、現三十三間堂西側築地・方広寺西側の石垣(約3°東に振れる)に近いことが指摘できる。

当該地は、承久三年(1221)に六波羅北方(北殿)・南方(南殿)2箇所^註の正庁が設置されている。範囲は明確ではないが、北方は五条末(現松原通)から六条坊門末(現五条通)、南方は六条坊門末から七条末の地を占めたと推定されている。今回検出した遺構は、南方内部の一區画にあたるものと推定できよう。またこれらの施設は、当該期における洛東地域の地割り復原の定点となるろう。

(上村和直・西大條哲)

註 六波羅政庁発掘調査団『六波羅政庁跡 東山郵便局新築敷地埋蔵文化財発掘調査報告』1977

33 史跡醍醐寺境内 (図版2-1・42)

経過 調査地は醍醐寺旧境内にある醍醐小学校のグラウンドである。東西25m、南北43mの調査区を設定し、表土・盛土を重機で掘削、その後人力による調査を行った。調査の結果、鎌倉時代から室町時代の井戸・柱穴・集石土壌、江戸時代の井戸・柵・溝・柱穴・土壌などを検出した。旧校舎の基礎や暗渠などの攪乱により遺構の遺存状況は良くなかった。

遺構 基本層序はグラウンドの盛土が20～30cmあり、その下層が褐色泥砂層（地山）になる。

調査区の南西側には、盛土下に鎌倉時代から室町時代の包含層（10～20cm）がある。

中世の遺構では井戸・柱穴・集石土壌などを検出した。井戸は2基（SE 29・34）あるが、井戸枠は検出していない。柱穴は調査区の南西側で複数検出しているが、建物としてのまとまりは把握できなかった。SK 10・43などの土壌は埋土上方に多数の石が落ち込んだ集石土壌で、その深さは1.1～1.3mと比較的深い。

江戸時代の遺構では井戸・柵・溝・柱穴・土壌などを検出した。井戸は2基（SE 2・11）あるが、共に石組みである。柵は調査区北側のほぼ同じ位置に2列並ぶ。北側が掘立柱で、南側が礎石を用いており、両者は新旧関係にあると考えられる。これらは東・西端とも調査区外に延びる。SD 1はクランク状に屈曲する大溝で、幅1.8～3.5m、深さ0.6～0.9m、検出長31.6mの規模をもち、西側は調査区外に延びる。また南側屈曲部には護岸石積みがある。

遺物 遺物は整理箱に28箱出土した。古墳時代の遺物は5世紀代とみられる円筒埴輪片が出土した。平安時代の遺物は土器と瓦で、後代の遺構から平安時代中期以降の遺物が散発的に出土した。鎌倉時代から室町時代の遺物は、室町時代前期のものが大部分を占める。SK 10から出土した遺物は、まとめて出土しており、多量の土師器皿、東播系鉢、瓦器皿・羽釜・鍋、陶器甕、青磁合子蓋、石鍋などがある。江戸時代の遺物の多くはSD 1から出土している。その多くは溝を埋める時に投棄したものである。土器の他に瓦が多く出土し、軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦・道具瓦がみられる。またSD 1の護岸石積みには石造物（蓮弁台座）が使われている。

小結 古墳時代の遺構は検出していないが、円筒埴輪1点が出土したことが注目される。他地域から持ち込まれたか、山側から流れ込んだかは不明である。近隣に未確認の古墳が存在した可能性がある。

平安時代は遺物が少量出土しているものの確実な遺構は検出できなかった。参道を隔てた北東側、霊宝館宝聚院の昭和50年（1975）の発掘調査では、平安時代末期の建物が確認されている。平安時代の主要な伽藍はここまで及んでいなかったとみられよう。

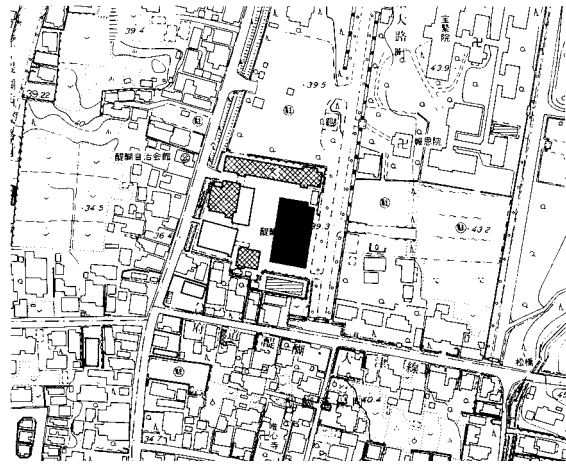


図 87 調査位置図 (1:5,000)

鎌倉時代から室町時代の主要な遺構としては井戸・集石土壇・柱穴がある。この時期の明確な建物は検出していないが、調査区の南西側にはこの時期の幾つかの柱穴が存在する。

江戸時代の主要な遺構は、柵・溝・井戸である。中世と同様にこの時代の建物は検出しなかった。柵は新旧とも江戸時代後期のもので、塔頭を画する施設と考えられる。SD1は部分的に護岸施設をもつ大規模な溝であるが、その性格は不明である。 (高 正龍)

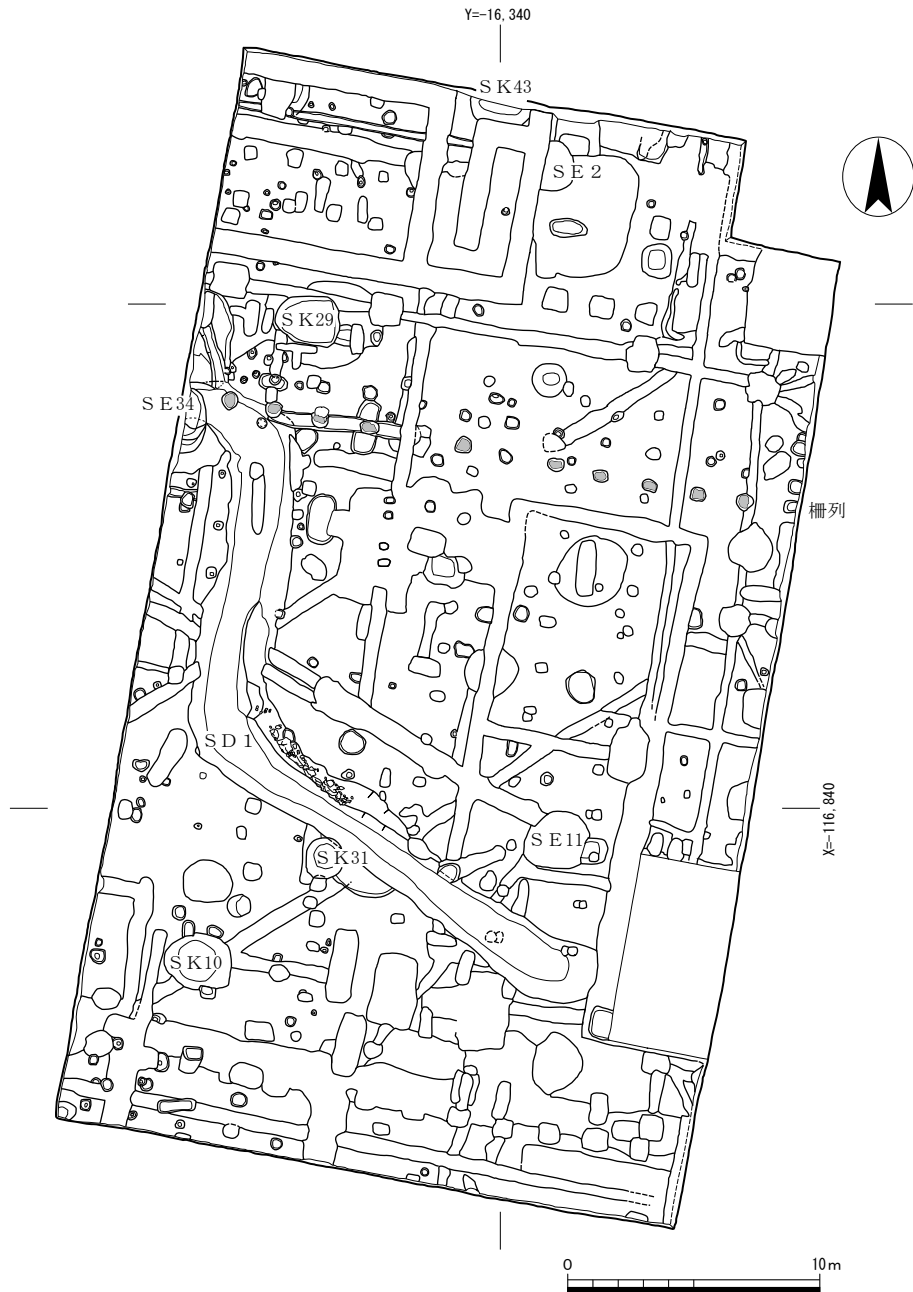


図88 遺構平面図 (1:300)

第2章 試掘・立会調査

I 平成2年度の試掘・立会調査概要

本年度の試掘・立会調査は、24件を実施している。このうち、試掘調査は11件、立会調査10件、試掘立会調査2件、他にボーリング調査1件がある。本年度中に発掘調査に移行したものが1件、次年度以降に発掘調査したものが1件である。なお、地下鉄東西線建設（京都市交通局）に伴う調査については発掘調査（第1章）で扱った。表4-22は文化庁国庫補助事業として継続しているもので、本年度も585件実施している。これに関しては、『京都市内遺跡試掘立会調査概報』平成2年度、『京都市内遺跡立会調査概報』平成3年度として報告しており、本書では省略している。従って本報告書で扱っているのは原因者負担によるものである。

平安宮・京跡 JR西日本嵯峨野線の高架工事に関連して行った調査が6件ある。平安宮朝堂院・豊楽殿跡（1）、平安京右京一条三・四坊（3）、平安京右京三条一坊（4）である。平安宮朝堂院・豊楽院跡（1）では江戸時代以降の攪乱が激しく、明確な平安時代の遺構を検出することができなかった。平安京右京一条三・四坊（3）では木辻大路、恵止利小路の一部を検出している。平安京右京三条一坊（4）では平安時代前期の遺物包含層を検出した。その他、平安京左京六・七条二坊（2）の調査があり、西本願寺を取り巻く濠の堆積土を確認している。

その他の遺跡 中臣遺跡第70-3次調査（6）では旧安祥寺川の堆積土を確認したにとどまり、長岡京左京南一条四坊、東土川遺跡（7）では、長岡京に関連する遺構は検出できなかったが、弥生時代中期から後期にかけての集落跡を検出した。植物園北遺跡（8）では古墳時代から鎌倉・室町時代の遺構が見つかり、平成3年度以降に大規模な発掘調査に移行することになった。京都大学構内遺跡（5）はボーリング調査である。調査対象地が現今出川通であり、交通繁雑な通りであることから現実に試掘のトレンチを設定することは不可能と考え、コア採取が可能なボーリング調査法をとった。コア採取のボーリングの口径は、約5cm四方の土器片が採集できるようなものであった。各地点で遺物採集が行われ、トレンチによる試掘が不可能な場所では、このようなボーリング調査も有効な調査法である。（永田信一）



図89 ボーリング調査風景



図90 コア採取

II 平安宮・京跡

1 平安宮朝堂院・豊楽院跡 (図版1・43)

経過 調査は中京区聚楽廻南町・西町に所在するJR西日本嵯峨野線軌道敷内仮線布設地区に対して実施した試掘調査である。南町の調査区(3区)は平安宮朝堂院朝集堂に位置し、西町の調査区(6区)は平安宮豊楽院永観堂に位置する。調査面積はそれぞれ南北32m、東西2mの64㎡、東西28m、南北2m弱の46㎡を測る。

遺構 3区北側では江戸時代に属する大規模な粘土の採掘土壌を検出し、南側では時期の確定できない小土壌を地山面で検出した。6区西端では、平安時代中期の瓦を包含した西方への落ちを持つ大規模な土壌を検出し、中央では細かく破碎された瓦、凝灰岩と少量の土師器を含む土壌3基を検出した。また調査区全域で粘土採掘土壌を検出している。

遺物 3区では古墳時代後期の土師器甕、須恵器坏身・甕が出土した。7世紀前半の時期に比定できるが、江戸時代以降の粘土採掘土壌から出土した混入遺物である。平安時代前期から後期の土師器皿、瓦、加工凝灰岩が出土した。瓦は瓦当が4点出土している。また室町時代の五輪塔の水輪と考えられる石製品が出土した。6区では平安時代前期から中期の瓦、加工凝灰岩、平安時代後期の土師器皿、瓦が出土した。他に江戸時代に属した緑釉のかかる陶器が出土した。

小結 3区北側は粘土採掘土壌などの江戸時代以降の攪乱により、朝堂院朝集堂関係の遺構は検出できなかった。ただ南側は黄色粘土に砂礫を含む遺構ベースとなり、破壊は進んでいないが遺構の検出はない。6区の豊楽院永観堂は粘土採掘土壌による攪乱を受けるが、調査区中央に黄色粘土層が一部残る部分があり、礎石据付痕跡と考えられる土壌を3基検出した。永観堂に関係した根石土壌である可能性がある。西端地区に検出した土壌は時期的に平安時代中期に比定できる。豊楽院西限の位置にあるが遺構の性格は不明である。

(平田 泰)



図91 調査位置図 (1:5,000)

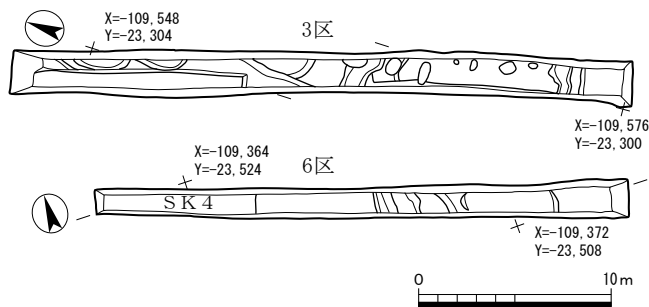


図92 遺構平面図 (1:400)

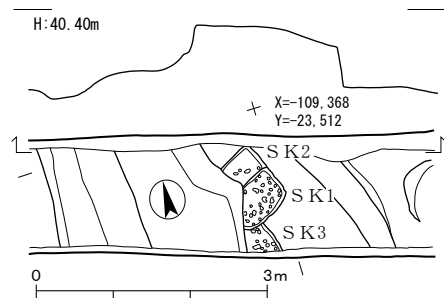


図93 遺構実測図(6区) (1:100)

2 平安京左京六・七条二坊 (図版1)

経過 今回の調査は、花屋町通、猪熊通を中心とした上水道敷設に伴う立会調査である。調査地は西本願寺の北辺に位置している。平安京では左京六条二坊に該当し、六条大路、猪隈小路、左女牛小路などの条坊に関連する遺構の検出が期待される。また、中世の寺院「本圀寺」の寺域内にも比定される。

遺構・遺物 No.9地点は、平安時代の遺物を含む落ち込み状の遺構である。位置関係から大宮大路の東側溝の可能性もあるが、明確ではない。

No.15地点は、室町時代の土器が少量と、軒瓦も含む瓦類が多量に出土する土壌である。この遺構は本圀寺に関連するものと推測できる。

花屋町通で現代盛土直下から、東西溝を確認している。これは西本願寺の旧境内を画する溝と考えられる。

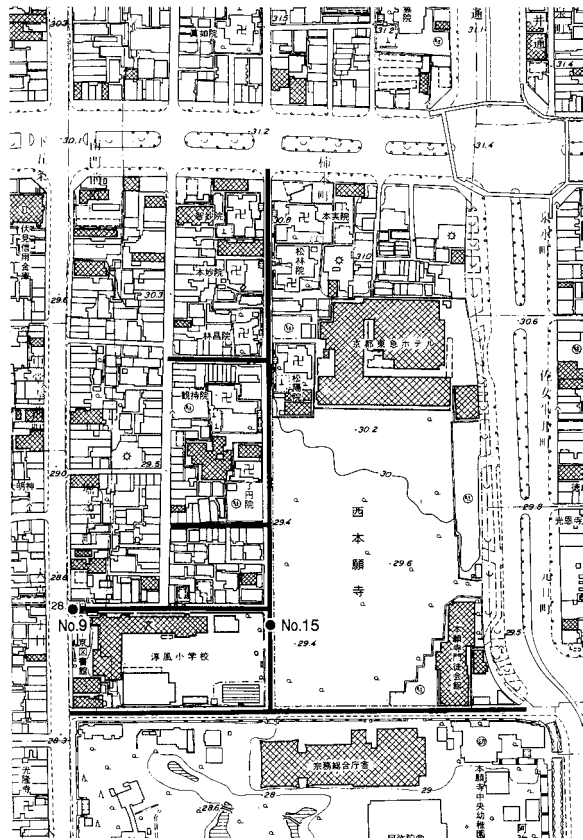


図94 調査位置図 (1:5,000)

猪熊通では、一部路面状の堆積層を認めることができたが、遺物が出土していないため時期を決定することはできなかった。

出土した遺物は整理箱で1箱分であった。その内訳は、土師器、須恵器、陶器、瓦類である。

平安時代の遺物はNo.9地点で検出した落ち込み状遺構からのみで、埋土内の遺物は平安時代の特徴を示しているが、磨滅している。

中世の遺物は遺物包含層、土壌などから出土し、路面状整地層からも土師器の細片が出土している。

江戸時代の遺物は西本願寺北の濠内のもので、少量出土する。

小結 調査地では、平安時代から江戸時代の遺構を確認した。ベースとなる黄褐色砂泥層は比較的浅いところで確認でき、この面で遺構を検出できた。

また現花屋町通では、西本願寺を取り巻く濠の堆積土を確認し、同時期に調査した七条大宮での立会調査^註では、石垣を検出している。『京都の歴史』付図によれば、堀川と接続し、西本願寺の周囲を巡った濠とされる。

(久世康博)

註 90BB-HL30 『京都市内遺跡試掘立会調査概報』平成2年度 京都市文化観光局 1991

3 平安京右京一条三・四坊 (図版1・44・45)

経過 右京区花園藪ノ下町、中御門町所在のJR西日本嵯峨野線軌道敷内仮線布設地区に対して試掘調査を実施した。藪ノ下町調査区(4区)は、平安京右京一条三坊十三町で、中御門町調査区(1・2区)は、平安京右京一条四坊四町に該当している。

4区ではこの東西端に恵止利小路西側溝、木辻大路東側溝が、2区は木辻大路西側溝が比定される位置である。4区は東西128m、南北2mの約256㎡、1区は東西64m、南北2mの128㎡、2区は東西52m、南北2mの104㎡を測った。

遺構 1区・2区・4区の各調査では平安時代前期、平安時代中期、戦国時代、江戸時代、その他の時期の遺構を検出した。

1・2区の平安時代前期に属する遺構には溝4条、土壇2基、柱穴20基以上、遺物包含層がある。平安時代中期の遺構には土壇1基、井戸1基を検出した。江戸時代に属する遺構には溝4条がある。その他時期不明の溝1条、土壇1基がある。平安時代前期の溝は木辻大路西側溝と築地内溝(SD3・20)を2区で検出した。土壇はSD3直近の西側に2基を検出した。柱穴は3基が並び、南北棟のいずれかの梁間と考えられる。柱間は約2.5mを測る。同じく平安時代前期の溝(SD3・5)を1区で検出した。宅地内を区画する地割り溝と考えられる。その他、11世紀代の遺物を含む井戸(SE8)を1区で検出したが、面積狭小なため完掘できていない。江戸時代の遺構は耕作用と考えられる溝4条を1区で検出している。

4区の平安時代前期の遺構は、恵止利小路西側溝(SD5)、土壇、柱穴などを検出した。平安時代中期の遺構は、恵止利小路西側築地に伴う内溝(SD4)、木辻大路東側溝と築地内溝(SD11・12)、築地基底部盛土(SA13)、土壇、柱穴がある。戦国時代の遺構は、溝2条が検出されている。

遺物 各調査区で検出された遺物の時期には、弥生時代、平安時代前期・中期・後期、桃山時代、戦国時代、江戸時代、近代以降に属するものがある。

1・2区出土の平安時代前期の遺物には、土師器、須恵器、二彩陶器、緑釉陶器、灰釉陶器、黒色土器、輸入陶磁器、銭貨、瓦などがある。平安時代中期の遺物には、土師器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、黒色土器、輸入陶磁器、瓦がある。平安時代後期の遺物には、土師器、須恵器、瓦器、瓦が出土している。桃山時代と江戸時代の遺物には、土師器、陶磁器、瓦などがある。また近代以降の陶器、磁器類も出土している。平安時代前期から中期の遺物は1区西側の包含層、2区SD3・20、SK4からまとまって出土した。特殊な遺物として、1区西側で唐三彩陶枕、



図95 調査位置図(1:5,000)

二彩陶器小壺、貞観元年（859）初鑄の饒益神寶などが出土している。これらは平安時代前期の遺物包含層から出土したものである。他に、弥生時代に属する石鏃が同じ1区西側から出土している。

4区出土の平安時代前期の遺物には、土師器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、黒色土器、瓦がある。中期の遺物には、土師器、須恵器、黒色土器、緑釉陶器、灰釉陶器、瓦が出土している。戦国時代の遺物には、土師器、陶器、瓦がある。近代以降の遺物には、陶器、磁器、瓦、銭貨がある。平安時代前期の遺物は、SD5を中心に出土し、中期の遺物は、SD4、SD11・12、SA13などから出土した。

小結 1・2区調査地は、右京一条四坊四町のほぼ中央を東西に横断調査したことになる。1区では西端で平安時代前期から中期の遺物包含層の堆積を確認した。西方100mを離して宇多川が南流しており、低地の始まりを示すものと考えられる。東側では平安時代前期（9世紀後半）に属するSD3・5などの一町地内の地割り溝と考えられる溝の検出があり、宅地利用の痕跡が認められる。2区では東端に木辻大路西側溝と築地内溝を検出した。内溝がやや狭く浅い。この内溝に接した西側では同時期の土壌、建物、柱穴などが密集している。これらの遺構群は木辻大路西側溝・内溝を含めて9世紀前半代に埋没廃棄されている。

4区の調査は右京一条三坊十三町やや南寄り

を東西に横断調査した。調査地西端では、2区調査で検出した木辻大路西側溝と対になる東側溝、築地内溝を検出し、一条三坊地区における木辻大路の位置と幅の定点を押さえたことになる。また東側では恵止利小路西側溝、築地内溝、築地基底部盛土を検出しており、この地域の遺

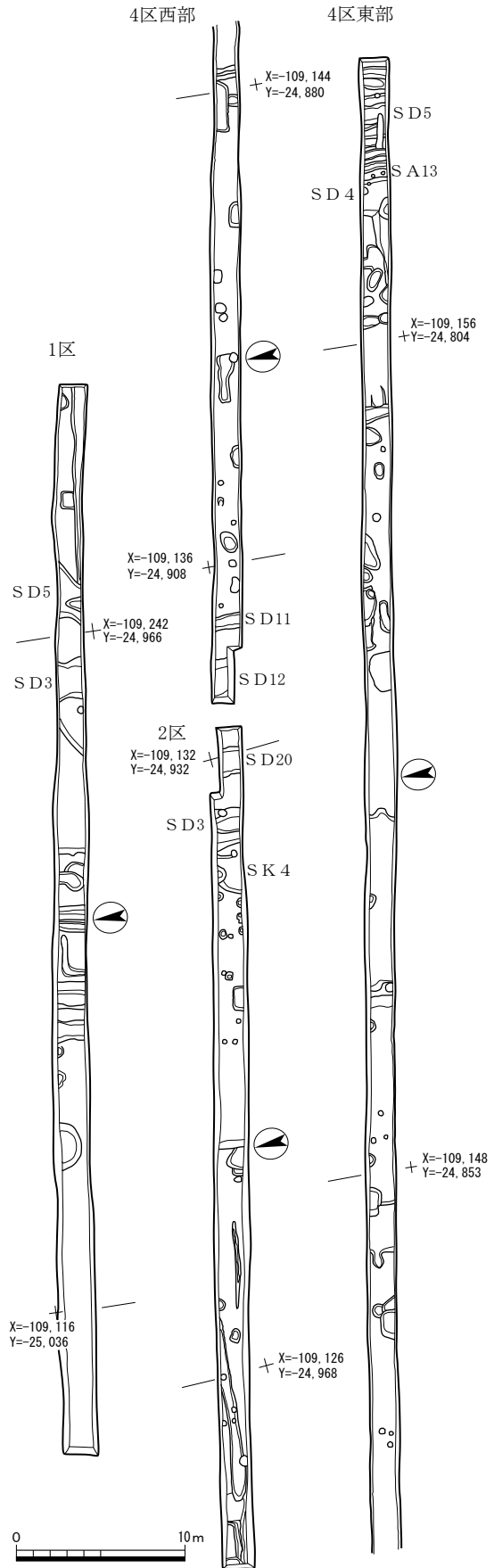


図96 遺構平面図 (1:400)

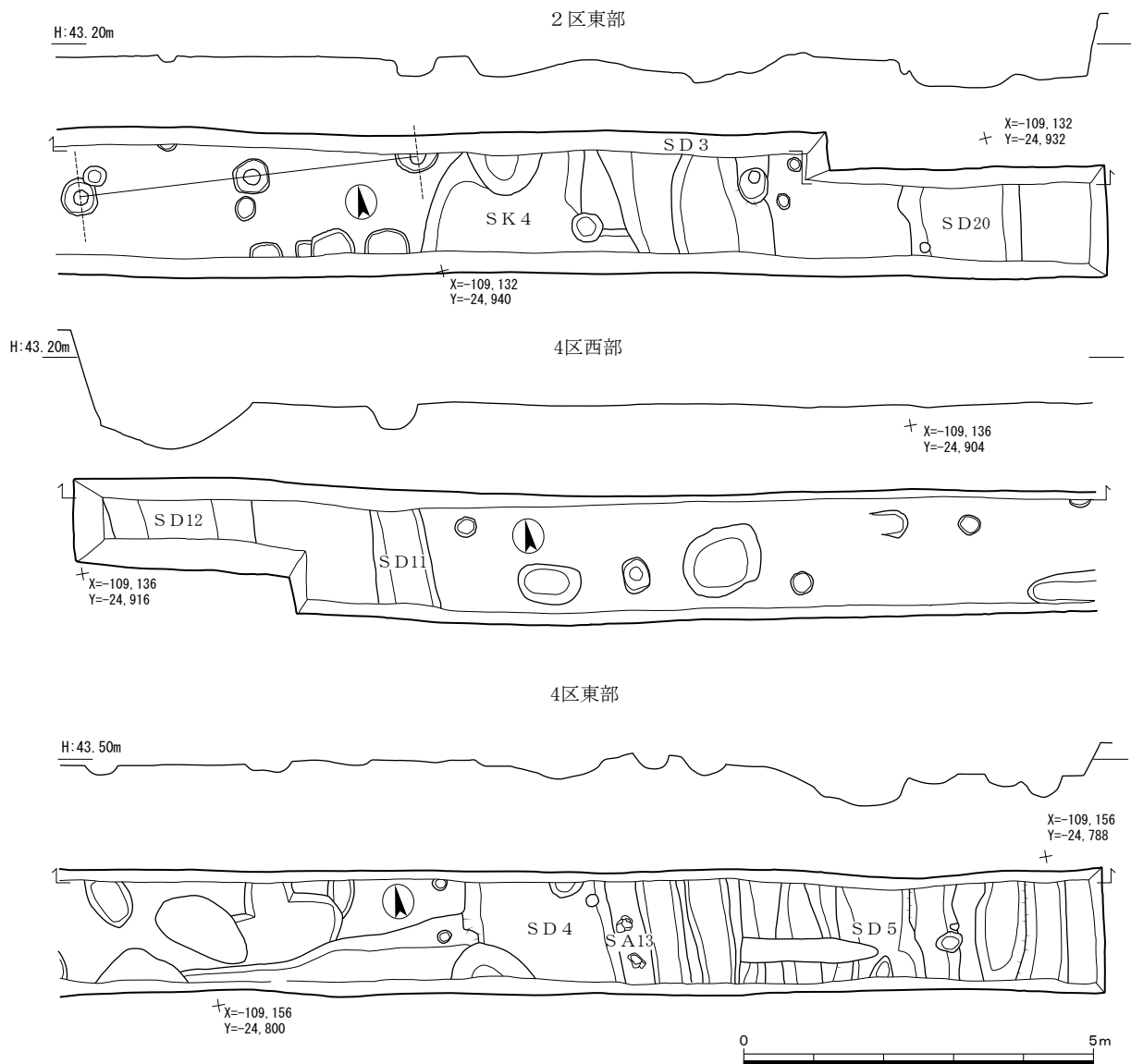


図97 遺構実測図 (1:100)

構遺存度が良好であることを明らかにした。

調査の結果、一条四坊四町の西側地区で9世紀前半から10世紀前半の土器類が出土し、10世紀代にも宅地として利用されていた事が考えられる。しかし、東側地区では9世紀前半代に宅地としての利用が終息する。この四町では同一の町内でも東西で土地利用の様相が異なることが判る。

一方、一条三坊十三町では9世紀代と10世紀代の遺構が切り合う柱穴も認められ、木辻大路東側溝・内溝は10世紀中葉に埋没する。しかし2区で検出した木辻大路西側溝・内溝は9世紀前半代で確実に埋没するなど、東西20数mを隔てて廃絶に時期差が存在し、各町内の宅地の変遷に複雑な問題を残した。同様なことは恵止利小路西についてもいえる。西側溝は、9世紀前半に埋没廃棄されるが、内溝は10世紀中葉に埋没する。なお築地基底部盛土は10世紀前半の土器を伴い、10世紀前半代に築地の修築が行われた形跡を示している。

このことから、十三町地内の宅地利用の様相は9世紀前半に利用が始まって10世紀中葉まで継続し、以後宅地としての機能を失った地区といえる。(平田 泰)

4 平安京右京三条一坊 (図版1・46)

経過 中京区西ノ京梅尾町に所在するJR西日本二条駅構内仮線布設地区を対象に試掘調査を実施した。5区は平安京右京三条一坊二町、朱雀大路西側溝に近接している。7区は平安京右京三条一坊一町、押小路北側溝の推定線上に調査区を設定した。それぞれ南北22m、東西2mの44㎡、南北13m、東西2mの26㎡を測った。

遺構 5区全域で平安時代前期から中期にかけての遺物包含層(淡灰色粘土層)と江戸時代に属する遺物包含層(灰色砂泥層)を検出した。7区でも同様な平安時代前期(灰オリーブ混礫泥砂層)、中期(黒褐色微砂層)の遺物包含層を検出している。5区の江戸時代の遺物包含層は耕作土の堆積と考えられ、地山である淡黄色砂礫層・淡黄色微砂層の直上の平安時代包含層はこの床土の可能性がある。7区は南半に平安時代前期・中期の遺物包含層が堆積するが、北半は地山の淡黄色砂礫層が直接確認できる。

遺物 出土遺物には、平安時代前期・中期・後期、江戸時代のものがある。5区では平安時代前期の土師器、須恵器、輸入陶磁器、瓦、凝灰岩が出土している。平安時代中期から後期の遺物には、土師器、瓦器、瓦がある。江戸時代の遺物は陶器、磁器が出土している。平安時代前期の土器類は、地山である淡黄色砂礫層直上に多く認められる。7区は平安時代前期の土師器、須恵器、輸入陶磁器、瓦、中期では土師器、須恵器、瓦が出土した。江戸時代の遺物は、陶器、磁器、瓦などが出土した。

小結 5区は右京三条一坊二町東北辺、7区が一坊一町東南辺・押小路北溝が検出される位置で調査を実施した。結果的には平安時代に属する遺構と押小路北溝の検出は果たせなかった。しかし、両調査区共に湿地状の堆積土層が検出され、平安時代前期の遺物を包含することを確認した。このことから、一坊一・二町の東辺一帯は浅い湿地が平安時代の前期からすでに広がっていた可能性があること、この付近の押小路の設定はなかったことなどの景観復原が可能であろう。

(平田 泰)

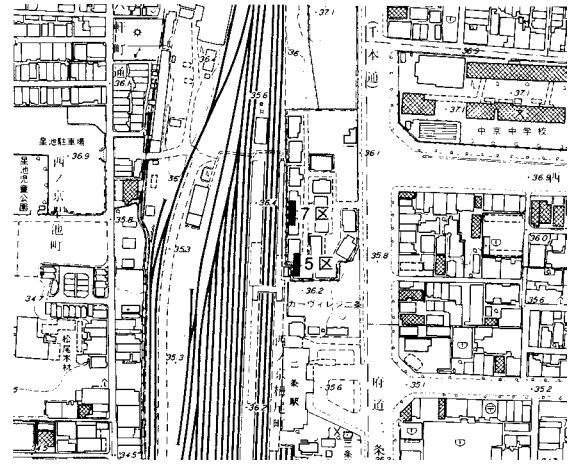


図98 調査位置図 (1:5,000)

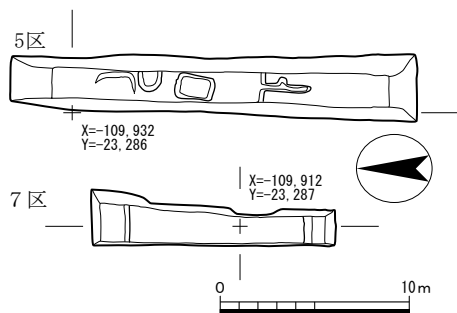


図99 遺構平面図 (1:400)

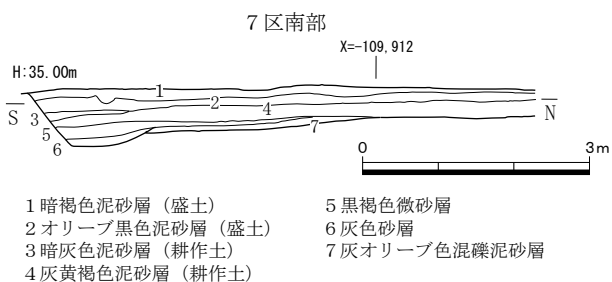


図100 断面図 (1:100)

Ⅲ その他の遺跡

5 京都大学構内遺跡（図版1）

経過 今出川通と白川通の交差点付近から百万遍にかけて、今出川通に暗渠構造の白川分水路を通す計画が立てられた。この計画を契機として今出川通の遺跡の状態を確認する調査を行った。その調査方法として、今出川通の交通事情などを勘案し、コア採取が可能なボーリング調査法を採用した。調査は、中央分離帯の15地点で行った。調査箇所は、50 m間隔を一応の目安としたが、交差点を避けるなどの理由で必ずしも50 m間隔で実施していない。調査手順

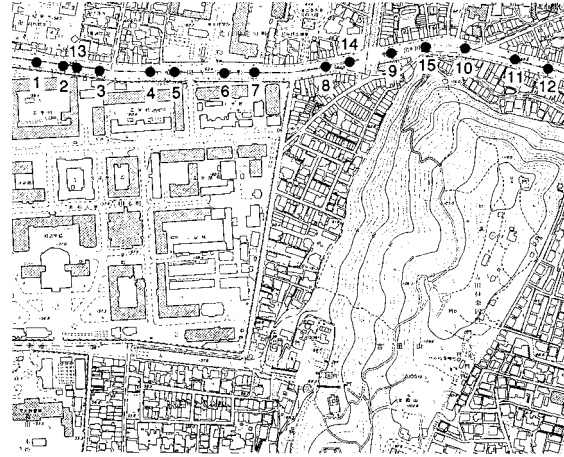


図101 調査位置図（1：5,000）

は、中央分離帯植栽の伐採、旧市電軌道敷きの撤去、ボーリング機械設置、掘進作業、採取コアの土層観察と記録、遺物採取とした。

遺構・遺物 ボーリング調査は、ピンポイントに対しての調査であるため、採取したコアに遺物を包含する層があっても、それが遺構に堆積している層であるか、包含層であるかの判別はきわめて困難といえる。ここでは遺物が出土した地点についてのみ簡単にふれる。縄文時代の遺物が出土した地点は、No.7・8・15、平安時代はNo.2・4・13、室町時代はNo.5～9・14である。遺物はすべて土器類のみが採取できた。縄文土器は、口縁部辺が3点で、刻み目を施すものと施さないものがある。体部片には、大部分に貝殻条痕をほどこしている。平安時代の土器片は、10世紀後半から11世紀前半頃の土師器皿のみを採取した。室町時代の土器類は、14世紀から15世紀にかけての時期が主体であり、最も多くの破片を採取している。

小結 ボーリング調査に関して気付いた点を列記する。今回採用した方法は、一地点から得られたコアの土層観察と、コア中に包含される遺物の採取という限られた方法である。このため、間隔を狭めれば、包含層などはある程度の線的な繋がりとして把握できると考えられる。コアから採取できた遺物は、今回のケースでは最大で約5 cm四方であった。口縁部付近、あるいは文様、調整の特徴などから当該土器片を含む層の時期比定を推測することは可能である。通常の調査法が採用できないようなケースでの、遺跡の範囲確認を主眼とした試掘調査に変わる方法としては、このコア採取を前提としたボーリング調査法は、ある程度の有効性を発揮すると考えられる。しかし、面的な観察ができないことから、遺構の有無、遺構密度などの推定には困難であり、重層した遺跡の状態を確認するにはおのずから限界がある。（平方幸雄）

6 中臣遺跡第70 - 3次調査 (図版2 - 1・47 - 1)

経過 本調査は、都市計画街路西野山大宅線道路改良工事に伴う、昭和63年度からの継続調査である中臣遺跡70次調査の一環として実施した試掘調査である。調査地は、中臣遺跡の最西端に位置し、平成元年度に古墳石室を調査したⅧ - b区から西の旧安祥寺川までの間にあたり、70次調査のⅧ区と称した。これまでの調査の成果などから、旧安祥寺川の旧流路が現流路よりも東に遷移した時期のあることがわかっており、どの程度まで旧流路が及んだか、また遺構が残存しているかを確認することが今回の調査の目的である。

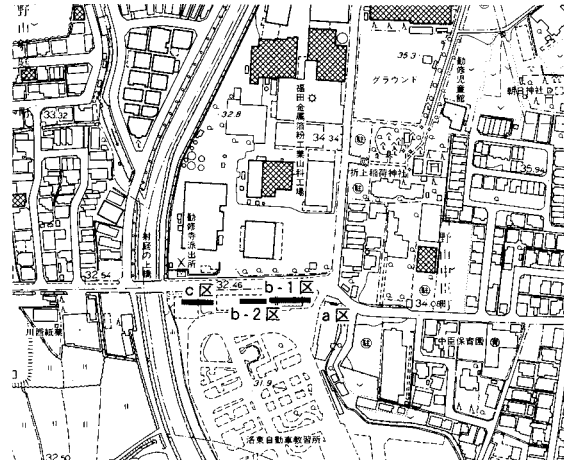


図102 調査位置図 (1:5,000)

遺構・遺物 幅3mの東西に長いトレンチを4つ設け、東からa区・b-1区・b-2区・c区とした。調査は、重機による掘削で開始した。

a区の層序は、地表下約2.0mまでが現代盛土、以下約0.2mの厚さの旧耕作土層があり、泥土に砂礫の混ざった地山に達する。b-1・b-2区の層序は、地表下約1.8mまでが現代盛土、その下に約0.5mの厚さで近世以降の旧耕作土層があり、以下旧流路の堆積土と考えられる泥土層や砂礫層になる。c区の層序は、地表下約1.8mまでが現代盛土、以下旧流路の堆積土と考えられる泥土層や砂礫層になる。b区やc区では地表下約2.5mまで重機により掘り下げたが、地山には達しなかった。

遺物は、ごく少量であるが、旧流路の堆積土中から弥生土器や古墳時代の土師器・須恵器の細片が出土している。

小結 本調査では、東端のa区で地山を確認したものの、以西では地表下2m前後以下は旧流路の堆積土となる。したがって、旧安祥寺川の旧流路の東岸はa区とb区の間には存在するものと推定でき、現流路より約100m東まで及んだ時期があったことが判明した。

また、昨年度調査した古墳石室の床面の標高は34.1mで、約15m西の今年度a区で検出した地山の標高は30.5m前後を測り、比高差は約3.5mある。このことから、旧流路によって形成された段丘崖に近い箇所に、この古墳が立地していたことが明らかとなった。 (高橋 潔)

7 長岡京左京南一条四坊・東土川遺跡 (図版2-2)

経過 広域下水道工事に伴う立会調査である。昨年度実施した区域の南西にあたる京都南工業団地内で実施した。今年度の対象区域は、長岡京左京南一条四坊跡の推定地、および弥生時代から古墳時代の東土川遺跡の推定範囲にあたる。付近の発掘調査は、北方に2箇所、東方に2箇所、南西に西羽東師川河川改修に伴う調査などがある。いずれも東土川遺跡に伴う竪穴住居の検出はなく、当遺跡の集落本体に関する遺構は検出できていなかった。

今回の立会調査では、対象区間ほぼ全域に微高地を確認し、竪穴住居や溝などを検出することができ、東土川遺跡の集落跡を初めて確認することができた。

遺構 竪穴住居の遺構面は、旧耕土・床土直下に堆積する非常に安定した黄褐色泥土層上面で検出した。No.9～10地点付近が最も高い位置となる。住居は、南北方向の立会区間の中で5棟を検出した。最も明確に検出したのは、No.13地点のもので、南北方向に6mにわたって断面を確認した。北半部に柱穴を1基、中央部には直径60cm、深さ70cmの土壙を検出し、底部には焼灰・焼土層が10cmの厚さで堆積していた。これと同じような土壙をNo.10地点でも検出した。また、深さ60cmの南東方向に伸びる溝をNo.6・7地点で検出した。

遺物 弥生土器の破片とサヌカイトの石製未製品の破片が出土した。量的には少なく1箱分が出土したのみである。時期的には弥生時代中期後半のものと思われる。土器には壺・高坏・甕の破片がある。

小結 今回の立会調査では長岡京期に関する遺構は検出できなかったが、弥生時代の良好な微高地を確認し、弥生時代中期から後期にかけての集落跡を検出した。この集落跡は、遺構の分

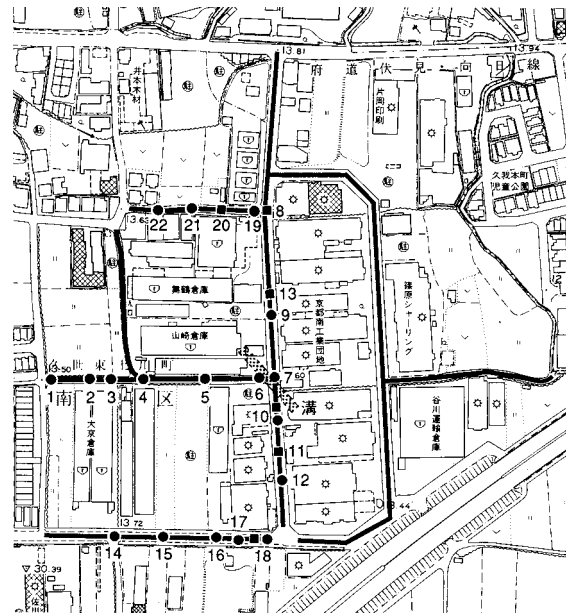
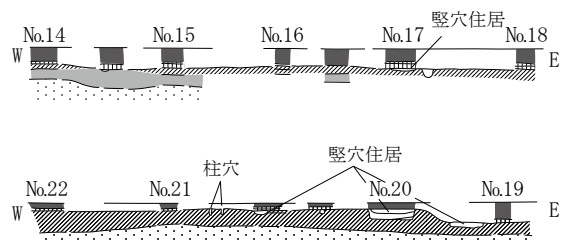
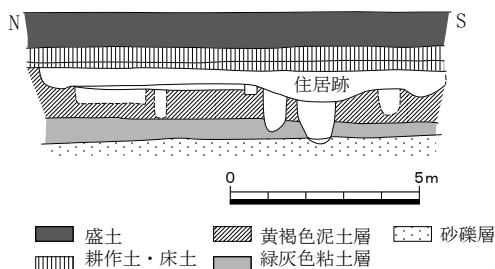


図104 調査位置図 (1:5,000)

No.13断面図



No.14～18・19～22層位概念図 (深さは1:200)

図104 断面図 (1:200)

布範囲からして東西 150 m、南北 200 m前後を測る大規模なものである。この遺跡は、従来から実施してきた北方の立会調査や発掘調査成果で明らかとなっている河川（図 105 参照）の右岸に立地しているものと推定できる。この河川の両岸微高地上には弥生時代から古墳時代にかけての集落跡が点在していることがわかってきた。（長宗繁一）

図 105 記入調査地参考文献

1 地点 弥生時代後期の竪穴住居を 1 棟検出。鈴木廣司『大藪遺跡発掘調査概報』昭和 62 年度京都市文化観光局 1988

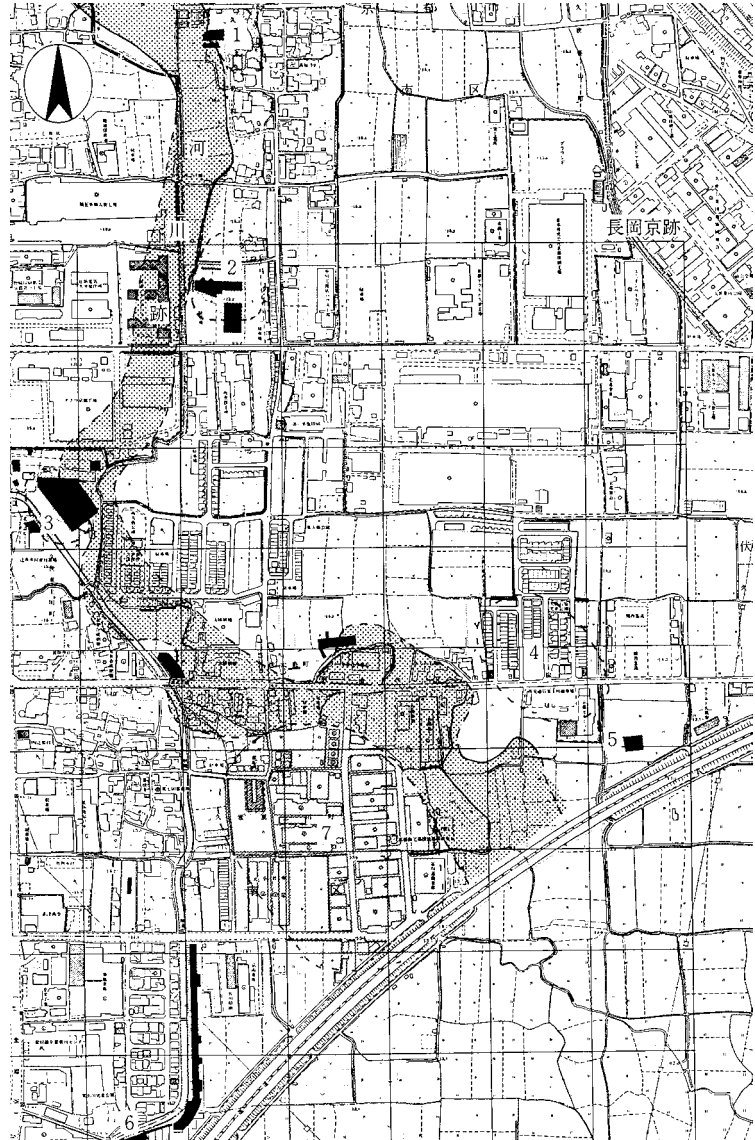
2 地点 弥生時代から古墳時代の竪穴住居を 20 棟以上検出。上村和直「長岡京左京一条三坊跡」『長岡京跡・大藪遺跡発掘調査概報』昭和 63 年度京都市文化観光局 1989

鈴木廣司「長岡京左京一条三坊・大藪遺跡」『平成元年度京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1994

3 地点 古墳時代の竪穴住居を 2 棟検出。河川跡より多量の土器を出土。百瀬正恒「長岡京左京一条三坊・戊亥遺跡」『昭和 63 年度京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1993

5 地点 弥生時代の方形周溝墓を 1 基検出。北田栄造「長岡京左京南一条四坊跡」『長岡京跡・大藪遺跡発掘調査概報』昭和 63 年度京都市文化観光局 1989

6 地点 弥生時代中期の方形周溝墓 1 基を検出。百瀬正恒「長岡京左京二条三坊」『昭和 62 年度京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1993



- | | |
|----------------|-------------------------------|
| 1 住居跡検出（大藪遺跡A） | 5 方形周溝墓跡検出 |
| 2 集落跡検出（大藪遺跡B） | 6 “ |
| 3 “（戊亥遺跡） | 7 東土川遺跡集落跡推定範囲
（今年度立会調査区域） |
| 4 微高地確認 | |

図 105 遺跡分布図（1：10,000）

8 植物園北遺跡

経過 建都1200年記念事業の一環として、当地にコンサートホールの建設が計画された。当地は、京都府立大学農学部の演習農地であったが、農地移転に伴って植えられていた果樹の移植、水田耕作土の搬出が実施された。したがって、遺構が攪乱や削平を受けたと考えられたため、遺構の残存および分布の状況を確認することに主眼を置いて試掘調査を行った。

調査対象地全体の状況を掴むため、図のように8箇所を試掘トレンチを設け、重機によって

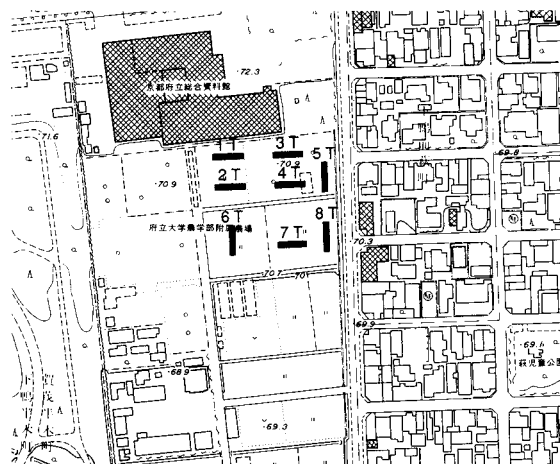


図106 調査位置図 (1:5,000)

遺構面まで掘下げて開始した。層序は、表土・耕作土・床土が厚さ20～30cmあり、それらを除去すると遺構面の地山に達した。なお、調査の目的を遺構の残存状況の確認に置いたため、調査は大型の攪乱の掘削と遺構の検出に留めた。遺構は掘り下げず、平面形の確認と攪乱の壁面での断面観察を行った。

遺構・遺物 予想したように農地に伴う湿気抜きの溝や果樹の移植による大型の攪乱などが各トレンチ共に多くみられたが、遺構は比較的良好に遺存していた。

遺構は、第5トレンチを除く、各トレンチで確認できた。竪穴住居・土塋・溝・柱穴などがあるが、前述のように遺構は基本的に掘り下げなかったため、明確な時期は与えることができなかった。

遺物は、整理箱に6箱分出土した。古墳時代から鎌倉・室町時代の土器類である。その多くは重機掘削中や攪乱埋土から出土したものである。

小結 調査の結果、攪乱により部分的に遺構面が破壊されているものの、対象地全面に遺構が分布していることが判明した。時期は古墳時代から鎌倉・室町時代に及ぶと考えられ、竪穴住居を始めとして土塋や柱穴・溝など多岐にわたる遺構を確認している。

当地は植物園北遺跡推定範囲内の東西のほぼ中央南端に位置している。これまで、当地周辺では下水道管理設工事に伴う立会調査などが行われており、奈良時代や平安時代の柱穴が確認されていた。しかし、今回の調査では鎌倉・室町時代までの長期間にわたり、遺構が高い密度で分布していることが明らかとなった。

(高橋 潔)

第3章 資料整理

1 遺跡測量

本年度における遺跡測量作業は、50 調査現場 70 件の調査基準点測量および 12 調査現場 22 件の写真測量用標定点測量、撮影作業を行った。内訳は発掘調査 63 件、試掘・立会調査 7 件である。

従来、遺跡基準点測量作業を公共測量 3・4 級の作業基準を設定し、トータルステーションで作業を行った。このトータルステーションは 2 級トランシットおよび光波測距儀により構成されている。光波測距儀は 1 プリズムで平均 1,000 m までを測定できるものである。ところが、近年の再開発の増加で高層建築が多くなり、遺跡測量基準点からの視野が狭くなってきた。そのために、より標高が高く見通しの良い基準点からの測量観測が多くなり、より長い距離を測定する必要に迫られてきた。このため、今年度後半に新たにウイルド社のトータルステーションに変更し、三脚をすべて木製のものとした。このトータルステーションは、1 級トランシットおよび 1 プリズムで 2,000 m 程度の距離計測ができる。このように、長距離の測定を行い、その測定精度をあげるため、遺跡基準点測量作業基準を 2 級作業基準に変更した。ただし、機械精度が良好であることから、従来よりも測定速度が向上し、時間的な省力化を達成した。

次に、京都市内は平安京として成立してから約 1200 年間、都城から都市京都へ変貌しながら今日にいたっている。その間には人々の生活痕跡が重層し遺構面として遺存している。このために一調査に対する調査面が多いことが特色である。また、中世を中心に石敷き遺構が多く、この記録作業に膨大な時間を費やすことになる。近年では、この記録作業を写真測量で賄うことが多くなっており、写真測量の利用は年々増加する傾向にある。ただし、写真測量は撮影から図化までの時間が長いという欠点がある。10 日程度で図面ができるならば今以上に活用されることであろう。また、35mm カメラによる簡易の空中撮影装置があれば現場サイドでの撮影作業ができ便利であろう。しかし、35mm カメラを利用することを前提とするならレンズのキャリブレーションなどの測定を行い、標定点を比較的密にまんべんなく配し、図化機は解析図化機を用いる必要がある。このような配慮をすれば考古学的に十分な精度が保証された図面が仕上げられる。

(辻 純一)

2 コンピュータ

前年度に引き続き、調査概要データ・写真データ・遺物管理データ・保存処理データ・調査図面データなどを作成している。現時点で調査カードは 11,500 件、写真データは 22,000 件を超えるものになっている。

研究所が設立されて 14 年が経過し、写真資料は膨大な枚数となっている。その保存には専用の部屋を設けているが、35mm ポジフィルムを中心に色退色が進行している。この色退色を止め永久的に保存できないかが問われてきている。また現在、写真データは文字情報の集積であるために、検索をして得られたものが実際にはどんなものかわからないという欠点をかかえている。このために写真そのものの画像を入力できないものか検討課題として浮かび上がってきた。

これらの問題解決には二通りの方法が考えられる。1 つは画像をアナログとして保存する方法である。これは、レーザーディスクなどに画像を焼き付けてしまうものである。2 つ目は画像をデジタルとして保存する方法である。これは画像をスキャナなどの装置でデジタルデータに変換してコンピュータ上に磁気媒体として保存する方法である。現在ではこれらの方法に長所と短所がある。

1 では長所としてアナログの技術は完成されておりテレビなどで簡単に見ることができることや、データ量の心配がいらぬ。欠点としてはデータの入出力が難しく、入力費が比較的高価である。

2 では長所として複製が簡単にでき、入出力・色補正が比較的簡単である。そしてデータベースとして比較的簡単に扱える。欠点としては精度をあげればあげるほどデータ量が膨大になり、データの入出力機器が高価である。

現状ではデジタルデータを一般的に扱うには、まだまだ制限があるため、京都市考古資料館からの依頼で簡単な画像データベースを構築したものに関しては、マッキントッシュを用いてレーザーディスク上の画像を検索し、モニターに表示させるもので、画像は基本的にアナログを用い、文字データベースをパソコン上に作り、インターフェースとしているアナログとデジタルの併用システムである。画像は約 700 枚がレーザーディスクに焼き付けられているが、最大では 108,000 枚を焼き付けることができる。焼き付け、その他の経費を含めて 1 枚の画像に対し 1,000 ～ 1,500 円程度の入力費が必要である。

ただし、長期的な展望にたてばデジタル技術の進歩は目覚ましく、デジタルデータとしての画像が進歩するものと考えられる。 (辻 純一)

3 保存処理

木簡ならびに削り屑の保存処理

昭和63年（1988）に行われた長岡京跡左京一条三坊の調査で、多量の木簡と削り屑が出土した。この木簡と削り屑の保存処理を行ったので報告する。

木簡の点数は250点以上。削り屑は3000点以上になる。

保存処理の工程

木簡・削り屑の点数が多いため、従来のPEG法では効率が悪く、かつ、削り屑のように薄い木片を処理できないことから高級アルコール法を採用した。工程は以下の通り。

①梱包 → ②脱水 → ③含浸 → ④凍結乾燥 → ⑤表面処理 → ⑥保管

① 梱包

木簡と削り屑について、墨書が落ちないように配慮して必要な梱包を行う。

1) 木簡の梱包

従来行っていた不織布で包む方法をやめ、ポリエチレンチューブを利用した。まず、市販のポリエチレンチューブ（幅30cmのロールで、厚さ0.1mm）にドリルで等間隔に穴（径6mm）を開ける。ついで木簡の大きさに合わせてポリエチレンチューブを切放して袋にし、1点ずつ木簡を入れてシーラーで端部をシールする。

2) 削り屑の梱包

厚さ0.05mmのポリエチレン袋を準備し、小さな穴を袋の全面に開ける。その袋のなかに整理された単位ごとに削り屑を入れる。1袋に入れる削り屑の点数は約10点、全部で300枚ほどの袋を準備した。

② 脱水

梱包の終了した木簡・削り屑を市販のやや大きめのタッパーウェアにいれ、メタノールに漬けて常温下で脱水する。メタノールの交換を通常3回ないし4回行い、脱水を完了させる。脱水完了の確認にはキシレンを用いる。

③ 含浸

t-ブチルアルコールにセチルアルコールを加温溶解し、木簡・削り屑を含浸する。含浸期間は木簡で2週間、削り屑は3日間。保温にはPEG含浸層の棚を利用する。

④ 凍結乾燥

含浸終了後、取り出して凍結乾燥機で真空凍結乾燥する。木簡の乾燥期間を3日間、削り屑を1日とする。

⑤ 表面処理

凍結乾燥終了後、必要に応じて木簡の表面をメチルアルコールないしエチルアルコールで軽く洗淨する。削屑についても同様にする。

⑥ 保管

木簡・削屑はすべて積層フィルムのチューブにいれ、減圧シーラーで抜気して保管する。削屑は薄いのでアクリル板を台として準備し、その台の上に整理時の配列通りに並べ、減圧シーラーで抜気して保管する。

以上の工程により、木簡と削屑すべてを約半年間で保存処理終了した。 (岡田文男)

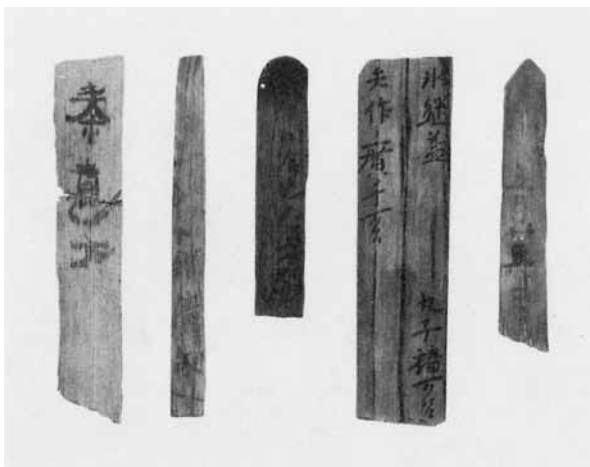


図 107 保存処理終了した木簡

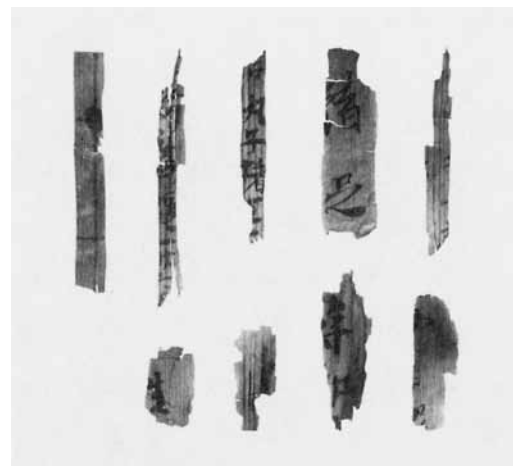


図 108 保存処理終了した削屑

4 復原

－北白川縄文時代竪穴住居の型取り－

本年度、通常の遺物復原業務の他に、市内の発掘調査で検出した縄文時代住居の型取りを行なった。調査地は左京区北白川山田町で北白川縄文遺跡群にあたる。過去にも縄文時代の遺構が検出しているが、縄文早期の住居がほぼ完全な形で検出されたのは今回が初めてである（第1章V－30北白川廃寺2）。そこで復原保存する運びとなった。

この住居を復原保存するにあたり、復原模型作成のために現地で雌型を取り、それをもとに樹脂で雄型を取ることにした。作業は資料係を中心に平成2年（1990）3月21日から4月11日まで実施した。作業内容は以下のとおりである。

型取りの準備

型取りする範囲（3.2 × 3.6 m）にあわせて木製の外枠を作り、標高を合わせて水平に埋め込み固定する。

遺構面の表土を固定するために、膠溶液（膠1 kg、水7ℓを煮溶かす）を噴霧する。気温が低かったため膠が固まらないように使用直前まで湯せんした。

シリコン樹脂の塗布

シリコン樹脂は基剤に規定量の硬化剤と硬化促進剤を順に加えるとゲル化する。攪拌に斑があると部分によって硬化の速度が異なるので十分に混ぜなければならない。また、外気温によっても変わってくるので寒暖期は硬化促進剤の量を調節する必要がある。

シリコン樹脂液はガラスクロスを間に挟んで2層塗布する。いずれも高→低、外→内の順に塗布してなるべく厚さを均一にする。

1層目のシリコン樹脂が硬化後、2層目は補強の為にガラスクロス（10 × 20cm程度に切ったもの）を貼りながら塗布する。柱穴など凹凸のある部分は破れ易いのでガラスクロスは重ねて貼ると良い。以上の作業でシリコン樹脂型は完成する。



図109 外枠を固定

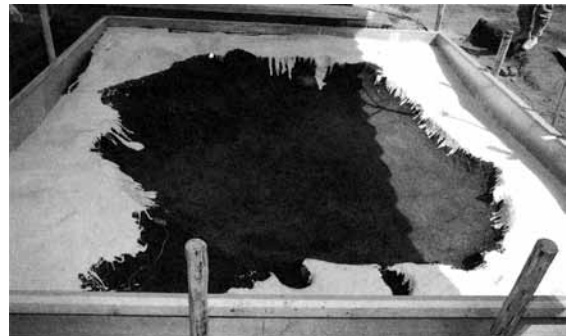


図110 シリコン樹脂を流す



図111 シリコン樹脂を塗布



図 112 ウレタン樹脂を柱に充填



図 113 木組みを入れて充填



図 114 樹脂型をはずす



図 115 反転したシリコン樹脂型

発泡ウレタン樹脂の充填

発泡ウレタン樹脂は2液性で、規定量を攪拌すると発泡を始め、約30倍の体積になり硬化する。発泡速度は非常に早いので、混合攪拌後はすみやかに注入しなければならない。シリコン樹脂型には離型剤として油性ワックスを塗布する。発泡ウレタン樹脂型は板(ビニールを貼って離型処理をしたもの)で2分割し、取り上げ時の為に番線を掛けた木枠を組んで埋め込む。

容器(厚手ビニール袋)で攪拌した発泡ウレタン樹脂は低→高へと充填する。柱穴部分は本体と分けるために先に入れて離型処理を施し、順次充填する。充填時は空洞ができるのを避けて上面が水平になるように配慮し、硬化後、はみ出した部分を切除し整える。以上で発泡ウレタン樹脂型の充填作業は終了する。

使用材料

[シリコン樹脂]

東芝シリコン T S K 350 / 東芝シリコーン
シリコン硬化剤 C E 60 / 東芝シリコーン

[発泡ウレタン樹脂]

ハイプロックス S P - 299 / 大日本インキ化学工業

ソフラーン R 原液 / 東洋ゴム工業

樹脂の取扱いに当たって作業員は専用マスクと手袋を着用し、発生するガスを吸入しないように留意した。

シリコン樹脂型は洗浄と破損等の補修の後、FRP樹脂で型を起こし彩色復原する計画である。
(出水みゆき)

第4章 普及啓発事業等報告

1 普及啓発および技術者養成事業

(1) 文化財講演会（第2回生涯学習フェスティバル協賛）の開催

日 時 平成2年11月18日（日） 午後2時～4時30分
 会 場 京都会館会議場
 講 演 「平安京の東・西寺」 京都市埋蔵文化財研究所長 杉 山 信 三
 「平安京の誕生」 京都大学教授 上 田 正 昭
 参加者 約500名

(2) 「'90 発掘調査成果写真展」の開催

日 時 平成3年1月15日～1月20日（6日間）
 会 場 京都市考古資料館 3階
 入 場 者 378名

(3) 現地説明会の開催

ア 平成2年7月15日 「植物園北遺跡」 (参加者 約100名)
 イ 平成2年9月15日 「下西代古墳群」 (参加者 約150名)
 ウ 平成2年9月29日 「長岡京左京七条二・三坊」 (参加者 約100名)
 エ 平成3年3月16日 「北白川廃寺」 (参加者 約70名)

(4) 「リーフレット京都」の発行

No.9 都市・農村2 「天徳四年・内裏炎上」
 No.10 信仰・祭祀2 「平安京と『まじない』 - 人形^{ひとがた}」
 No.11 都市・農村3 「山科盆地の大集落 - 中臣遺跡」
 No.12 考古アラカルト2 「(財)京都市埋蔵文化財研究所設立と京都市考古資料館の発足」
 No.13 生産・技術1 「鳥羽離宮の瓦窯」
 No.14 仏教・寺院1 「三つの三十三間堂」
 No.15 考古アラカルト3 「出土漆製品を顕微鏡で観察する」
 No.16 考古ニュース4 「長岡京出土の樽木簡^{くれば}」
 No.17 都市・農村4 「平安京の測量技術」
 No.18 信仰・祭祀3 「東山の終末期古墳 - 旭山古墳群 -」
 No.19 土器・瓦2 「日野の土偶」
 No.20 土器・瓦3 「六古窯の隆盛」
 No.21 考古アラカルト4 「下水道工事でわかった植物園北遺跡」
 No.22 信仰・祭祀4 「姿を見せた下西代古墳群」

No.23 土器・瓦4 「太閤さんの城と瓦」

No.24 土器・瓦5 「緑色だけでない『緑釉陶器』」

(5) 研究会等への派遣

- ア 平成2年4月～平成3年3月（毎月開催） 京都府埋蔵文化財調査研究センター
「長岡京連絡協議会」 調査第4係長 長 宗 繁 一
調査部調査課 主任 木 下 保 明
〃 上 村 和 直
〃 吉 崎 伸
- イ 平成2年4月21・22日 東京都（明治大学）
「日本文化財科学会第7回大会」 調査部資料課 岡 田 文 男
- ウ 平成2年5月11日 奈良市（奈良国立文化財研究所）
「全国データベースワーキンググループ集会」 調査部資料課 辻 純 一
- エ 平成2年5月12・13日 東京都（東京大学）
「日本考古学協会第56回総会」 調査部調査課 吉 村 正 親
〃 上 村 和 直
- オ 平成2年6月5～7日 千葉県佐倉市（国立歴史民俗博物館）
「第5回歴史民俗博物館・博物館資料調査委員会議並びに共同研究による研究会」 調査部調査課 主任 百 瀬 正 恒
- カ 平成2年6月6・7日 千葉県佐倉市（国立歴史民俗博物館）
「歴史系研究支援情報処理の研究～カタチの情報のデータ形成・索引法～」 調査部資料課 辻 純 一
〃 宮 原 健 吾
- キ 平成2年6月14・15日 千葉県佐倉市（国立歴史民俗博物館）
「国立歴史民俗博物館共同研究による研究会」 調査部調査課 堀 内 明 博
- ク 平成2年8月28・29日 千葉県佐倉市（国立歴史民俗博物館）
「第6回歴史民俗博物館・博物館資料調査委員会議」 調査部調査課 主任 百 瀬 正 恒
- ケ 平成2年9月6・7日 千葉県佐倉市（国立歴史民俗博物館）
「国立歴史民俗博物館共同研究による研究会」 調査部調査課 堀 内 明 博
- コ 平成2年9月18～20日 福島県会津若松市（丸峰観光ホテル）
「全国埋蔵文化財法人連絡協議会研修会平成2年度研修会」 調査部資料課 辻 純 一
- サ 平成2年9月19～21日 千葉県佐倉市（国立歴史民俗博物館）
「国立歴史民俗博物館共同研究による研究会」 調査部調査課 主任 百 瀬 正 恒
- シ 平成2年10月11～13日 東京都（国立教育会館）
「第14回文化財の保存及び修復に関する国際

研究集会」	調査部資料課	岡田文男
ス 平成2年11月10・11日	福岡市（九州大学）	
「日本考古学協会1990年度大会」	調査部調査課	伊藤 潔
セ 平成2年12月20・21日	千葉県佐倉市（国立歴史民俗博物館）	
「国立歴史民俗博物館共同研究による研究会」	調査部調査課	堀内明博
ソ 平成3年2月18・19日	千葉県佐倉市（国立歴史民俗博物館）	
「第7回歴史民俗博物館・博物館資料調査委員会会議」	調査部調査課 主任	百瀬正恒
タ 平成3年3月8・9日	福岡市、太宰府市	
「国立歴史民俗博物館共同研究による現地調査」	調査部調査課	堀内明博
チ 平成3年3月22～24日	千葉県佐倉市（国立歴史民俗博物館）	
「国立歴史民俗博物館共同研究による研究会」	調査部調査課	堀内明博

2 京都市考古資料館状況

(1) 展示替えの実施

特別展示「古人（いにしえびと）のいのり」平成3年3月26日

長岡京跡出土の人面墨描土器、土馬、小型カマドを中心に長岡、平安両京および鳥羽離宮跡出土の祭祀関連資料を展示。

(2) 「第11回京都市考古資料館小・中学生夏期教室」の開催

期 間 平成2年8月7～10日

ア 「小学生親子教室」 8月7・8日

第1日目 資料館見学、古瓦の拓本の実習、その他。（児童のみ）

第2日目 遺跡や遺物の時代の決め方、古墳の保存などについての学習。史跡蛇塚古墳見学。
（親子参加）

参加者 親子34組

イ 「中学生サマースクール」 8月9・10日

第1日目 資料館見学、瓦の拓本の実習、その他。

第2日目 長岡京左京七条二・三坊調査現場（伏見区淀水垂町）で発掘調査の体験および遺物水洗いの実習。

参加者 33名

(3) 「夏期教室拓本展並びに写真展」の開催

期 間 平成2年8月21日～9月2日

会 場 京都市考古資料館（夏期教室で作った拓本およびスナップ写真を展示）

(4) 京都市考古資料館文化財講座の開催

- ア 第36回 平成2年4月28日
「平成元年度京都市内の遺跡調査の概要」 調査課長 永田 信一
「遺跡から見た京都の歴史」講座1 調査部調査課 菅田 薫
－旧石器・縄文時代の京都－ (受講者 95名)
- イ 第37回 平成2年5月26日
「旧石器時代の動物の足跡発見」 調査部調査課 内田 好昭
「遺跡から見た京都の歴史」講座2 調査第2係長 平方 幸雄
－弥生時代の京都－ (受講者 95名)
- ウ 第38回 平成2年6月23日
「天皇の杜古墳の調査」 調査部調査課 丸川 義広
「遺跡から見た京都の歴史」講座3 京都市文化財保護課 北田 栄造
－古墳時代の京都－ (受講者 119名)
- エ 第39回 平成2年7月28日
「大原野における古墳群の調査」 調査部調査課 加納 敬二
「遺跡から見た京都の歴史」講座4 〃 高橋 潔
－飛鳥・奈良時代の京都－ (受講者 87名)
- オ 第40回 平成2年9月29日
現地講座「長岡京左京七条二・三坊」 考古資料館 主任 峰 巍
(受講者 49名)
- カ 第41回 平成2年10月27日
「高陽院の調査」 調査部調査課 山本 雅和
「遺跡から見た京都の歴史」講座5 調査第4係長 長宗 繁一
－長岡・平安時代前期の京都－ (受講者 85名)
- キ 第42回 平成3年1月26日
「花の御所の調査」 調査部調査課 堀内 明博
「遺跡から見た京都の歴史」講座6 〃 辻 裕司
－平安時代中期・後期の京都－ (受講者 97名)
- ク 第43回 平成3年2月23日
「羽束師志水町発見の墓跡」 調査部調査課 主任 鈴木 廣司
「遺跡から見た京都の歴史」講座7 調査部調査課 吉崎 伸
－鎌倉・室町時代の京都－ (受講者 87名)
- ケ 第44回 平成3年3月23日
「三条柳馬場東入中之町出土の桃山陶器」 調査部調査課 主任 久世 康博
「遺跡から見た京都の歴史」講座8 平安京調査会 小森 俊寛
－桃山時代以降の京都－ (受講者 77名)

(5) 印刷物の発行

- ア 京都市考古資料館文化財講座資料No.36～No.44
- イ 小・中学生のための見学のしおり
- ウ 夏期教室テキスト

(6) 普及啓発、資料収集等

- ア 「情報コーナー」においてコンピューター、レーザー・ディスクおよびビデオによる市内遺跡、展示資料などの紹介。考古学、日本歴史などの図書、発掘調査現地説明会資料および市内発掘調査関連新聞記事スクラップなどの閲覧並びに情報提供。
- イ 京都府下、近隣の博物館、美術館などのパンフレット、リーフレットの収集および情報提供の実施。
- ウ 入館案内用ビデオ「考古資料館への誘い」の制作。
- エ リーフレット京都の配布

(7) 考古資料の貸出し

継続貸出分 27件 691点 新規貸出分 23件 854点

(8) 博物館実習生の受入

京都橘女子大学 10名 京都芸術短期大学 15名 立命館大学文学部 15名

(9) 入館者の状況

表2 平成2年度月別観覧者一覧表

月	開館日	一 般		団 体		合 計	一日平均
		12才以上	12才未満	12才以上	12才未満		
4	26	1,299	318	95	73	1,785	68.7
5	26	1,263	351	160	183	1,957	75.3
6	26	1,427	273	173	80	1,953	75.1
7	26	1,356	689	203	34	2,282	87.8
8	27	1,537	542	196	53	2,328	86.2
9	26	1,253	287	89	0	1,629	62.7
10	26	1,406	197	328	0	1,931	74.3
11	26	1,522	321	40	125	2,008	77.2
12	23	1,227	316	150	25	1,718	74.7
1	24	1,155	224	189	0	1,568	65.3
2	24	1,242	192	123	0	1,557	64.9
3	27	1,413	279	127	0	1,819	67.4
合計	307	16,100	3,989	1,873	573	22,535	73.4

3 役職員名簿

(1) 役員名簿

役員名	氏名	職名
理事長	増田 駿	京都市文化観光局長
専務理事	吉田 泰夫	京都市文化観光局文化部参事
理事	稲津 国男	京都市文化観光局文化部長
	上田 正昭	京都大学教授
	木村 捷三郎	財団法人京都市埋蔵文化財研究所嘱託
	杉山 信三	財団法人京都市埋蔵文化財研究所所長
	田中 琢	奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター長
	田辺 昭三	京都芸術短期大学教授
	角田 文衛	財団法人古代学協会理事長・古代学研究所所長
	西川 幸治	京都大学教授
	福山 敏男	財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター理事長
監事	西岡 信之	京都市会計室長
	堀 道夫	財団法人京都市文化観光資源保護財団専務理事

(2) 職員名簿

	氏名	職名		氏名	職名
	杉山 信三	研究所長(理事)	調査部	永田 信一	調査課長
	木村 捷三郎	嘱託(理事)		家崎 孝治	調査第1係長(7.16退職)
	田辺 昭三	嘱託(理事)		本 弥八郎	調査第1係長
総務部 総務課	伊藤 哲夫	総務部長(京都市出向)	調査課	平方 幸雄	調査第2係長
	宮崎 高	総務課長		鈴木 久男	調査第3係長
	菅田 悦子	事務職員		長宗 繁一	調査第4係長
	上村 京子	〃		平田 泰	主任
	村木 節也	〃		木下 保明	〃
	本田 憲三	〃		鈴木 廣司	〃
	金島 恵一	〃		百瀬 正恒	〃
	小松 佳子	〃		磯部 勝	〃
夏原 美智代	〃	梅川 光隆	〃		
			久世 康博	〃	

	氏名	職名		氏名	職名	
調査部 調査課	吉村正親	研究職員	調査部 調査課	小檜山一良	調査補佐員	
	菅田薫	〃		近藤章子	〃	
	堀内明博	〃		西大條哲	〃	
	加納敬二	〃		布川豊治	〃	
	平尾政幸	〃		永田宗秀	〃	
	辻裕司	〃		東洋一	〃	
	前田義明	〃		宮下則子	〃	
	上村和直	〃		吉本健吾	〃	
	丸川義広	〃		端美和子	〃	
	吉崎伸	〃		藤村雅美	〃	
	網伸也	〃		北川和子	〃	
	内田好昭	〃		北原四男	〃	
	高正龍	〃		小谷裕	〃	
	高橋潔	〃		尾藤徳行	〃	
	山本雅和	〃		大立目道代	〃	
	南孝雄	〃				
	真喜志悦子	調査補佐員		調査部 資料課	中村敦	研究職員
	能芝勉	〃		辻純一	〃	〃
	能芝妙子	〃		岡田文男	〃	〃
	法邑真理子	〃		出水みゆき	調査補佐員	〃
	鎌田泰知	〃		児玉光世	〃	〃
	松尾武彦	〃	角村ひろみ	〃	〃	
	竜子正彦	〃	田中利津子	〃	〃	
	本田次男	〃	小倉万里子	〃	〃	
	桜井みどり	〃	伊藤潔	〃	〃	
	清藤玲子	〃	ト田健司	〃	〃	
	出口勲	〃	宮原健吾	〃	〃	
藤村敏之	〃	村井伸也	〃	〃		
山口真	〃	幸明綾子	〃	〃		
津々池惣一	〃	村上勉	〃	〃		
南出俊彦	〃	多田清治	〃	〃		
上田栄治	〃	モンベティ恭代	〃	〃		
太田吉男	〃	大槻明義	〃	〃		
堀内寛昭	〃					
大立目一	〃	考古資料館	塩崎英雄	館長		
角村幹雄	〃		浪貝毅	副館長(京都市埋蔵文化財調査センター所長兼任)		
川村雅章	〃		峰巍	主任		
			中島松夫	〃		

(村木節也)

表3 平成2年度発掘調査一覧表

No.	契約No.・遺跡名・記号	所在地	調査期間	面積	委託者	担当	備考	
平安宮	01	H 2 - 024 朝堂院跡 90 HK - D P	上京区丸太町通千本東 入下る中務町 491 - 44	90.08.06 ～ 90.09.14	263㎡	畑中昭二 (京都市長)	百瀬	一部国庫補助
	02	H 2 - 041 中務省跡1 90 HK - D R	上京区下立売通千本東 入中務町 490 - 37	91.01.29 ～ 01.02.18	44㎡	京都市長 (高田吉泰)	前田	国庫補助
	03	H 2 - 008 中務省跡2 91 HK - D L	上京区下立売通千本東 入下る中務町 491 - 28	90.05.14 ～ 90.06.20	62㎡	京都市長 (竹中完)	網	国庫補助
	04	H 2 - 016 西限跡1 90 HK - D M	上京区御前通上長者町 上る西上之町 251	90.06.18 ～ 90.07.31	101㎡	京都市長 (村山秀男)	辻裕	国庫補助
	05	H 2 - 023 西限跡2 93 HK - D Q	上京区御前通下立売上 る三丁目西上之町 255	90.08.17 ～ 90.08.31	36㎡	京都市長 (田尻耕三)	辻裕	国庫補助
平安京	06	H 2 - 007 左京三条一～四坊 94 HK - F R 004	中京区西ノ京梅尾町・ 北聖町、二条城町 (御池通)	90.08.21 ～ 91.06.13	1,096㎡	京都市公営企 業管理者交通 局長	小森 原山 長門 上村憲	平安京調査会
	07	H 2 - 006 左京四条四坊 90 HK - F W 002	中京区東洞院通六角下 る御射山町 272	90.10.19 ～ 91.04.26	703㎡	京都市長	山本	
	08	H 2 - 032 左京五条三坊 90 HK - P M	下京区室町通四条下る 鶏鉦町 483、485、486	91.01.07 ～ 91.06.07	596㎡	(株)大同建設	辻裕南 百瀬	
	09	H 2 - 012 左京五条四坊 90 HK - P K	下京区四条通柳馬場東 入立売東町 7	90.05.14 ～ 90.08.18	376㎡	京都信用金庫	小森 上村憲	平安京調査会
	10	H 2 - 027 左京六条一坊 90 HK - V F	下京区中堂寺御箭町 21 - 4 ほか	90.08.27 ～ 90.12.10	460㎡	(株)アイフル	高	
	11	H 2 - 013 左京六条三坊 1 90 HK - W G	下京区楊梅通新町東入 上柳町 222、222 - 6、 222 - 7	90.05.21 ～ 90.07.21	269㎡	(株)エムエンド エイチ	山本 菅田	
	12	H 2 - 034 左京六条三坊 2 90 HK - P L	下京区五条通室町西入 東鋸屋町 186	90.09.25 ～ 90.12.21	277㎡	澤田嘉衛	平方 丸川 高橋	
	13	H 1 - 067 左京六条三坊 3 89 HK - P J	下京区烏丸通五条上る 悪王子町 426 ほか	90.02.27 ～ 91.06.12	1364㎡	京阪奈都市開 発事業共同組 合	丸川 内田	
	14	H 2 - 028 左京七条三坊 90 HK - W H	下京区新町通正面下る 平野町 772 ほか	90.12.10 ～ 91.05.21	620㎡	(株)京神倉庫	堀内	
	15	H 2 - 025 左京八条三坊 1 90 HK - B K	下京区七条通烏丸東入 真亭屋町 195	90.08.27 ～ 90.10.29	157㎡	(株)福井弥右衛 門商店	平尾	
	16	H 2 - 014 左京八条三坊 2 90 HK - B J	下京区七条通烏丸東入 真亭屋町 195、201、203	90.06.31 ～ 90.08.17	235㎡	(株)高山物産	木下	
	17	H 2 - 029 左京九条二坊 90 HK - B H 002	南区西九条烏居口町 1	90.09.01 ～ 90.03.16	1629㎡	(株)松下興産	菅田	

	No.	契約No.・遺跡名・記号	所在地	調査期間	面積	委託者	担当	備考
平安宮	18	H 2 - 015 右京五条二坊 1 90 H K - Q L	右京区西院三蔵町 32	90.05.28 ～ 90.06.27	205㎡	㈱ニチモ	平尾	
	19	H 2 - 001 右京五条二坊 2 90 H K - Q K	右京区西院平町 8	90.04.16 ～ 90.06.30	441㎡	㈱尾植住宅	高	
	20	H 2 - 047 右京六条一坊 90 H K - X F 005	下京区中堂寺栗田町	91.02.12 ～ 91.06.19	6,050㎡	京都リサーチ パーク	平尾	
	21	H 2 - 030 右京六条三坊 90 H K - Q M	右京区西院追分町 25 - 2	90.09.10 ～ 90.12.01	818㎡	㈱洛陽油圧機器	前田	
	22	H 2 - 018 右京七条二坊 90 H K - O H	下京区西七条比輪田町 5 - 1、5 - 2、5 - 3	90.07.06 ～ 90.09.20	490㎡	福岡榮	堀内	
	23	H 2 - 026 右京九条一坊 90 H K - Z H	南区唐橋赤金町 60 ほか	90.10.29 ～ 90.12.28	3,091㎡	㈱長谷工 都市開発	平尾	
鳥羽離宮	24	H 2 - 022 鳥羽離宮跡第 136 次調査 90TB - TB136	伏見区竹田内畑町 56 - 4、 62 - 1、63 - 2	90.08.21 ～ 90.10.06	100㎡	京都市長	磯部 鈴木久	国庫補助
長岡京	25	H 2 - 002 左京一条四坊 90 N G - A G	南区久世大藪町 554 - 4 ほか	90.06.25 ～ 90.08.14	682㎡	㈱富創建設	鈴木広	
	26	H 2 - 0005 左京六条二・三坊・七条二・ 三坊・水垂遺跡 90 N G - M I 001	伏見区淀水垂町ほか	90.07.09 ～ 91.03.31	16,335㎡	京都市長	吉崎 上村和	
その他の遺跡	27	H 2 - 003 植物園北遺跡 90 R H - F M	北区上賀茂松本町 98	90.05.07 ～ 90.07.30	919㎡	㈱嘉門	平方 高橋	
	28	H 2 - 035 特別史跡特別名勝鹿苑寺庭園 90 R H - K K 003	北区金閣寺町 1	90.05.24 ～ 90.07.31	148㎡	宗教法人 鹿苑寺	前田	
	29	H 2 - 021 北白川廃寺 1 90 K S - K E	左京区北白川大堂町 56	90.07.16 ～ 90.08.17	107㎡	京都市長	網	国庫補助
	30	H 2 - 038 北白川廃寺 2 90 K S - K F	左京区北白川山田町 1 ほか	90.12.03 ～ 91.04.09	730㎡	㈱宝建設工業	網	
	31	H 2 - 033 南春日町遺跡第 20・21 次調査 90 M K - H O 020・021	西京区大原野南春日町 ほか	90.07.02 ～ 90.10.09 90.11.08 ～ 91.02.28	500㎡ 1500㎡	京都府知事	加納	
	32	H 2 - 004 六波羅政庁跡 90 R T - Y B	東山区大和大路通正面 下る大和大路二丁目 543	90.06.02 ～ 90.08.23	662㎡	医療法人和松会 大和第二病院	上村和	
33	H 2 - 042 史跡醍醐寺境内 90 F D - D G 003	伏見区醍醐東大路町 31 - 1 (醍醐小学校)	91.02.18 ～ 91.05.16	1,055㎡	京都市長	高		

表4 平成2年度試掘・立会調査一覧表

	No.	契約No・遺跡名・記号	所在地	調査期間	面積	委託者	担当	備考
平安宮	01	H 1 - 071 - 2 朝堂院跡 90 HK - I T 002 - 3	中京区聚楽廻南町 J R 西日本山陰本線	90.07.23 ～ 90.08.04	試掘 64㎡	京都市長	平田	2章Ⅱ - I
	02	H 1 - 071 - 4 豊楽院跡 90 HK - I T 002 - 6	中京区聚楽廻西町 J R 西日本山陰本線	90.12.05 ～ 90.12.14	試掘 46㎡	京都市長	平田	2章Ⅱ - I
平安京	03	H 2 - 031 左京北辺二坊 90 HK - G A	上京区中立売通油小路 東入甲斐守町 100	90.08.27 ～ 91.05.14	試掘 立会 437㎡	京都市長	鈴木久	
	04	H 2 - 007 左京三条一坊 90 HK - F R 004	中京区西ノ京梅尾町	91.03.15 ～ 91.04.10	試掘 立会 200㎡	京都市公営企 業管理者交通 局長	小森 原山 長戸 上村憲	二条駅前 1章Ⅱ - 6 平安京調査会
		H 2 - 007 左京三条一・二坊 90 HK - F R 004	中京区西ノ京北聖町、 二条城町押小路通 (二条駅～堀川通)	90.04.01 ～ 91.06.13	立会 3,750㎡	京都市公営企 業管理者交通 局長	小森 原山 長戸 上村憲	布掘り 1章Ⅱ - 6 平安京調査会
		H 2 - 007 左京三条三・四坊 90 HK - F R 004	御池通(間町通～鴨川)	91.02.05 ～ 91.03.20	立会 1,975㎡	京都市公営企 業管理者交通 局長	小森 原山 長戸 上村憲	ケヤキ移植 1章Ⅱ - 6 平安京調査会
		H 2 - 007 左京三条四坊隣接地 90 HK - F R 004	中京区下本能寺町、下丸 屋町、上樵木町御池通(寺 町通～鴨川)	91.02.18 ～ 91.03.18	試掘 73㎡	京都市公営企 業管理者交通 局長	小森 原山 長戸 上村憲	市役所前 1章Ⅱ - 6 平安京調査会
	05	H 2 - 010 (2) 左京六条二坊・七条二坊 90 HK - U W 002	下京区猪熊通、五条通 ～花屋町通ほか地内	90.04.23 ～ 90.05.23	立会 1,069㎡	京都市上下水 道事業管理者	久世	2章Ⅱ - 2
	06	H 1 - 071 - 3 右京一条三坊 90 HK - I T 002 - 4	右京区花園藪ノ下町 J R 西日本山陰本線	90.08.28 ～ 90.09.22	試掘 256㎡	京都市長	平田	2章Ⅱ - 3
	07	H 1 - 071 - 1 右京一条四坊 90 HK - I T 002 - 1・2	右京区花園中御門町 J R 西日本山陰本線	90.06.07 ～ 90.07.20	試掘 232㎡	京都市長	平田	2章Ⅱ - 3
	08	H 1 - 066 - 2 右京三条一坊 90 HK - I T 002 - 7	右京区西ノ京梅尾町 J R 西日本山陰本線	91.02.12 ～ 91.02.13	試掘 26㎡	京都市長	平田	2章Ⅱ - 4
09	H 1 - 066 - 1 右京三条一坊 90 HK - I T 002 - 5	右京区西ノ京梅尾町 J R 西日本山陰本線	90.10.27 ～ 90.11.02	試掘 44㎡	京都市長	平田	2章Ⅱ - 4	
白河街区	10	H 2 - 037 白河街区跡 90 K S - U W 007	左京区聖護院河原町地内	90.10.31 ～ 90.11.05	立会 142㎡	京都市上下水 道事業管理者	久世	
	11	H 2 - 040 京都大学構内遺跡 90 K S - B A	左京区北白川追分町 ほか地内(今出川通)	90.11.05 ～ 91.02.01	ボーリング	京都市長	平方 高橋	2章Ⅲ - 5
中臣遺跡	12	H 2 - 044 中臣遺跡 90 R T - N K 070 - 3	山科区西野山中臣町地内 (中臣街路)	91.01.08 ～ 91.03.18	試掘 206㎡	京都市長	平方 高橋	2章Ⅲ - 6
長岡京	13	H 2 - 011 長岡京跡 90 N G - S W 011	南区久世東土川町	90.04.09 ～ 90.05.14	立会 630m	京都市上下水 道事業管理者	長宗 木下	2章Ⅲ - 7

No.	契約No.・遺跡名・記号	所在地	調査期間	面積	委託者	担当	備考	
その他の遺跡	14	H 2 - 019 岩倉忠在地遺跡 90 R H - I T 004	左京区岩倉忠在地町 309 (洛北中学校)	90.07.16 ～ 90.07.23	試掘 113㎡	京都市長	高	
	15	H 2 - 048 植物園北遺跡 90 R H - C H 001	左京区下鴨半木町地内	91.03.25 ～ 91.04.30	試掘 592㎡	京都市長	高橋	2章Ⅲ-8 発掘調査 に移行
	16	H 2 - 010 (1) 相国寺旧境内 90 R H - U W 001	上京区室町通・上御霊前通 ～寺ノ内通ほか	90.04.10 ～ 90.04.25	立会 1,556㎡	京都市上下水道事業管理者	家崎	
	17	H 2 - 010 (4) 六波羅政庁跡、法性寺跡 90 R T - U W 004	東山区桃山町五条通 ～渋谷通、大和大路通 ～東大路通ほか	90.08.21 ～ 90.10.11	立会 777㎡	京都市上下水道事業管理者	久世	
	18	H 2 - 045 六波羅政庁跡、法住寺殿跡 90 R T - U W 045	東山区東大路通 (馬町～J R)	91.02.27 ～ 91.07.24	立会 730㎡	京都市上下水道事業管理者	久世 本 伊藤	
	19	H 2 - 010 おうせんだう廃寺 90 F D - U W 006	伏見区深草鞍ヶ谷町地内	90.07.19 ～ 90.07.26	立会 167㎡	京都市上下水道事業管理者	久世	
	20	H 2 - 010 (3) 伏見城跡 90 F D - U W 003	伏見区桃山町三河 ほか地内	90.09.28	立会 708㎡	京都市上下水道事業管理者	久世	
	21	H 2 - 020 史跡醍醐寺境内 90 F D - D G 002	伏見区醍醐東大路町 31 - 1 (醍醐小学校)	90.08.21 ～ 90.08.24	試掘 92㎡	京都市長	平方 高橋	発掘調査に 移行
22	H 2 - 009 京都市内遺跡 90 B B -	京都市内一円	90.04.01 ～ 91.03.31	立会	京都市長	本	国庫補助	